深良の民俗

箱根西麓に広がる深良（南堀・町田・和市・震橋附近）

深良用水・新川（上須）

広がる水田（上須）

上丹祖始堂 おてんとうさん念仏

車返道場おむし干し会のうちわ太鼓（上原）

ＪＲ御殿場線を走るあさぎり号（上須）

旧国鉄御殿場線を走るＳＬ（上須）＝近藤敏雄氏提供＝

調査の概要・例言

一　調査の目的

裾野市史民俗編は平成七年度の刊行を予定しており、現在はこれをまとめるための基礎資料収集のため、市域各地での民俗調査を行っている。特に市域を旧村単位で五地区に分け、民俗編の執筆までの五年間に地域を限定した集中調査を実施することにした。五地区とは、旧小泉村、旧泉村、旧深良村、旧富岡村、旧須山村で、これらは明治の町村制で誕生した村々であるが、裾野市として合併後も西地区、東地区、深良地区、富岡地区、須山地区としてそれぞれに特色ある発展をしてきた。地区ごとに地理的環境や産業構造などが異なっていることから、裾野市域の全体像を得るための準備段階として、これら各地区のうち、伝統的なまとまりを持った地域を順次調査対象としてとりあげ、集中的に資料の収集にあたる予定である。

深良はその第二回の調査地として選定したものである。深良を対象とするにあたっては、この地が中世、近世、近代を通じて一村としての行政的なまとまりがあったこと、箱根西麓の山裾に位置し、箱根山との深い関わりをもちながら特徴ある生活が伝承されてきたことなどが選定の理由にあげられる。また、江戸時代初期には、水利の悪い深良をはじめ、黄瀬川流域耕地を潤すため箱根山の芦ノ湖の湖水を引く大工事が行われ、これに深良とその村民が深く関わったという歴史的な大事件もあるなど、特筆すべき重要な歴史性を含んでいる村であることも忘れてはならない。本民俗調査は、以上のような点を考慮しつつ、集中的に行うことにしたものである。

深良は内部が町震（町田・震橋）、南堀、和市（和田・市場）、遠藤原、切久保、上原、上須（上丹・須釜）、深良新田の八つの旧集落と、上原団地、柳畑団地、舞台団地などの新興住宅地などで構成されている非常に広い地域であるため、本調査はこれを大きく二分（天田上、天田下）し、それぞれの旧集落の社会的、地理的な条件を考慮に入れながら行ったものである。しかし、一村の民俗調査地としては広域すぎる点もあって、調査が細部まで行き届かなかったことは否めないが、深良の伝統的な生活と現在に生きる民俗事象を把握し、統一した世界としての深良の生活文化を描くように努めたつもりである。

二　調査期間

調査は、平成二年七月二五日から二八日の四日間を第一次調査とし、平成三年二月九日から一一日の三日間を第二次合同調査とした。第一次調査では調査拠点を天田上と天田下の二地点に分け、前半を天田上、後半を天田下としてそれぞれに内包されている旧集落をもれなく回ることが出来るようにした。第二次調査は拠点を一地点（市役所深良支所）とし、第一次調査を補う形で、深良全域を調査対象にした。第一次・第二次とも共同調査で、第一次調査は一五人（うち臨時調査員七人）、第二次調査では九人（内臨時調査員三人）が参加した。なお共同調査日程以外も、調査員はそれぞれ必要に応じて数日間の補充調査を個別に実施した。

三　調査関係者

調査にあたったのは、市史編さん民俗担当の福田アジオ専門委員をはじめ八人の調査委員と七人の臨時調査員、それに市史編さん室職員である。調査委員は、民俗担当のみでなく近代担当など他担当からも参加した。調査者の氏名と調査及び執筆分担は次のとおりである。

役職	氏名	調査及び執筆分担 （　）は調査時の所属
専門委員	福田アジオ	序章
調査委員	岩田　重則	第一章
	斎藤　弘美	第二章
	杉村　　斉	第三章
	松田香代子	〃
	新谷　尚紀	第四章
	岩崎　信夫	
	湯川　郁子	
	坂本　紀子	
臨時調査員	宮村田鶴子	社会と生活 （武蔵大学卒業生）
臨時調査員	和田　啄哉	生活環境の民俗 （早稲田大学学生）
	井上　　淳	社会と生活 （明治大学大学院生）
	田村　美奈	社会と生活 （東京女子大学学生）
	服部　　武	時間と生活 （武蔵大学大学院生）
	佐藤　智美	時間と生活 （早稲田大学学生）
	黒坂　智子	心意と生活 （立教大学学生）

四　調査方法と調査経過

深良各地区の各区長さんにご尽力いただき、話者のリストアップをしていただくと共に、各地区では公民館をお借りして、そこを拠点に話者を訪ねて回り、個別面接調査をさせていただいた。

調査地区全体が極めて広域のため、調査は深良を天田上と天田下に二分し、それぞれに一か所の拠点を置き、そこから調査員が個別面接調査に出掛け聞き取りを行う形で進めた。調査員は各々の調査分担テーマに基づき聞き取りを行ったので、話者には何人もの調査員が入れ替わり訪ねる場合もあるなど、ご迷惑を掛けたことも少なからずあったであろう。また念仏講、初午、節句、氏神社祭礼等の特別な日程の民俗行事については、その都度担当者が深良を訪れ、観察・聞き取りによる調査を行った。なお、調査員が行かれない場合は、編さん室職員及び地元写真家の永島愛治氏に行事、そのほかの写真撮影をお願いした。

調査期間中は裾野市内に合宿し、毎日三時間余りのミーティングをして調査上の課題や問題点を話し合った。調査終了後は、各自の調査結果をカード化して提出し、共通の資料として分類し、関連項目を執筆者に分配した。以上のような経過で本書が作製された。

五　編集上の留意点

編集は、福田アジオ専門委員の指導のもとに、第二集を担当した調査委員の杉村斉と市史編さん室の浜田明が行った。提出された原稿は編集段階で記述上の統一をはかり、民俗語彙と考えられるものはカタカナ表記としたが、一般に通用するものや漢字を当てたほうが理解しやすいものは例外とした。数字表記については、民俗語彙としての十五夜、二十三夜講などは十を入れ、一般には十をぬかした表記とした。図表は執筆担当者が原図を作成し、写真は調査員や編さん室で撮影したもののほか、地元の方々からお借りした貴重なものも使用させていただいた。

六　調査協力者

調査に話者として協力してくださった方々、あるいは貴重な資料を提供してくださったり、お宅の中を拝見させていただいたりと、お忙しいところをさまざまな形でご協力いただいた皆様には心から感謝申し上げる。報告書の完成をもってお礼の言葉にかえさせていただきたい。

話者名簿（順不動・敬称略）

〈上　須〉

小林秀年（昭和一二年生）
勝又きわ（大正一五年生）
勝又百枝（大正一三年生）
勝又金作（明治四四年生）
藤井みさ（大正五年生）
小林ちよ（大正六年生）
勝又幹枝（明治四三年生）
小林利作（明治四一年生）
勝又正義（大正六年生）
勝又よし（大正八年生）
勝又秀子（大正六年生）
山中きよ（明治三八年生）
小林久作（大正九年生）
勝又秀明（大正六年生）
小林金次（大正五年生）
勝又登代子（大正一三年生）
勝又とめ子（大正二年生）
勝又きわ子（大正一五年生）
小林匡子（大正八年生）

〈原〉

高橋あい（明治四三年生）
高橋花ゑ（明治三八年生）
高橋よね（明治四〇年生）
高橋政雄（大正八年生）
高橋とみ（大正一一年生）
勝又盛一（大正一四年生）
勝又清衛（大正五年生）
勝又くま子（大正九年生）
勝又正之（大正一二年生）
廣瀬のぶ（明治四二年生）
廣瀬貞顯（大正八年生）
高橋利治（昭和四年生）
高橋きみ（大正一四年生）

〈南　堀〉

大庭敬一（大正三年生）
興禅寺
大庭三郎（大正一四年生）
大庭とみ江（大正一四年生）
大庭林太郎（明治四二年生）
野際榮一（大正一三年生）
大庭一（大正一一年生）
大庭良（昭和一年生）

〈和　市〉

林一（明治三五年生）
大庭静江（大正一一年生）
大庭よね（大正四年生）
西山はな（大正三年生）
高藤俊雄（大正三年生）
松井眞逸（大正七年生）
大庭景申（明治四一年生）
林はる（明治三五年生）

〈上　原〉

藤森進（明治三七年生）
藤森幸子（昭和五年生）
渡辺勉（明治四三年生）
志村正夫（大正七年生）
小林秋子（明治四五年生）
小林えつ子（昭和一七年生）
志村操（大正一一年生）

〈遠　藤　原〉

羽田勲（大正九年生）
羽田やゑ子（大正一一年生）
勝又義雄（明治三九年生）
勝又さと（明治四一年生）
杉本忠雄（明治四一年生）

〈切久保〉

廣瀬　浩（大正七年生）
加藤もん（明治三五年生）
勝又チカ（明治三六年生）
一之瀬和雄（昭和二年生）

〈町震〉

神戸ちか（明治三八年生）
植松貞夫（大正三年生）
小澤すみ（大正四年生）
大庭　満（大正一三年生）
鈴木スエ（大正八年生）
岩本初次郎（明治三四年生）
大庭唯市（大正六年生）
芹澤和雄（明治三九年生）
倉澤よし子
小澤さく（大正四年生）
藤井盛男（明治四四年生）
長尾光雲（昭和七年生）
大庭喜和（明治四四年生）
松井謙一（明治四〇年生）
松井たへ（明治四五年生）
渡辺峰雄（大正一一年生）
岩本ちよ（明治三八年生）
大庭幸一（大正六年生）
大庭りつ子（昭和五年生）
高島よしこ（昭和三年生）
小沢ひでこ（昭和三年生）
松井圭子（昭和一五年生）

〈新田〉

土屋栄子（大正一二年生）
小林　完（明治四一年生）
小林なほ（大正三年生）
廣瀬　實（大正一四年生）
長田　稔（大正一三年生）
川口一太（大正一〇年生）
勝又武雄（明治三八年生）
小林慶一（大正五年生）
小林きよ（大正一二年生）
小林　且（大正二年生）

〈岩波〉

井上丹令（大正六年生）

〈佐野〉

大庭妙心

〈長泉〉

島田はるゑ

目次

口　絵
調査の概要・例言

序　章　深良の歴史と民俗 …… 1
第一節　市史編さんのなかの民俗誌 …… 1
市史と民俗／民俗と民俗誌／深良調査の意義
第二節　深良の村落と集落 …… 2
広大な大字深良／天田上・天田下とモヨリ
第三節　民俗の特色 …… 3
深良の民俗／深良用水／箱根山／屋敷と家／モヨリの堂／注目すべき生業／失われた年中行事／親念仏と位牌分け／ムラを超えた吉田さん

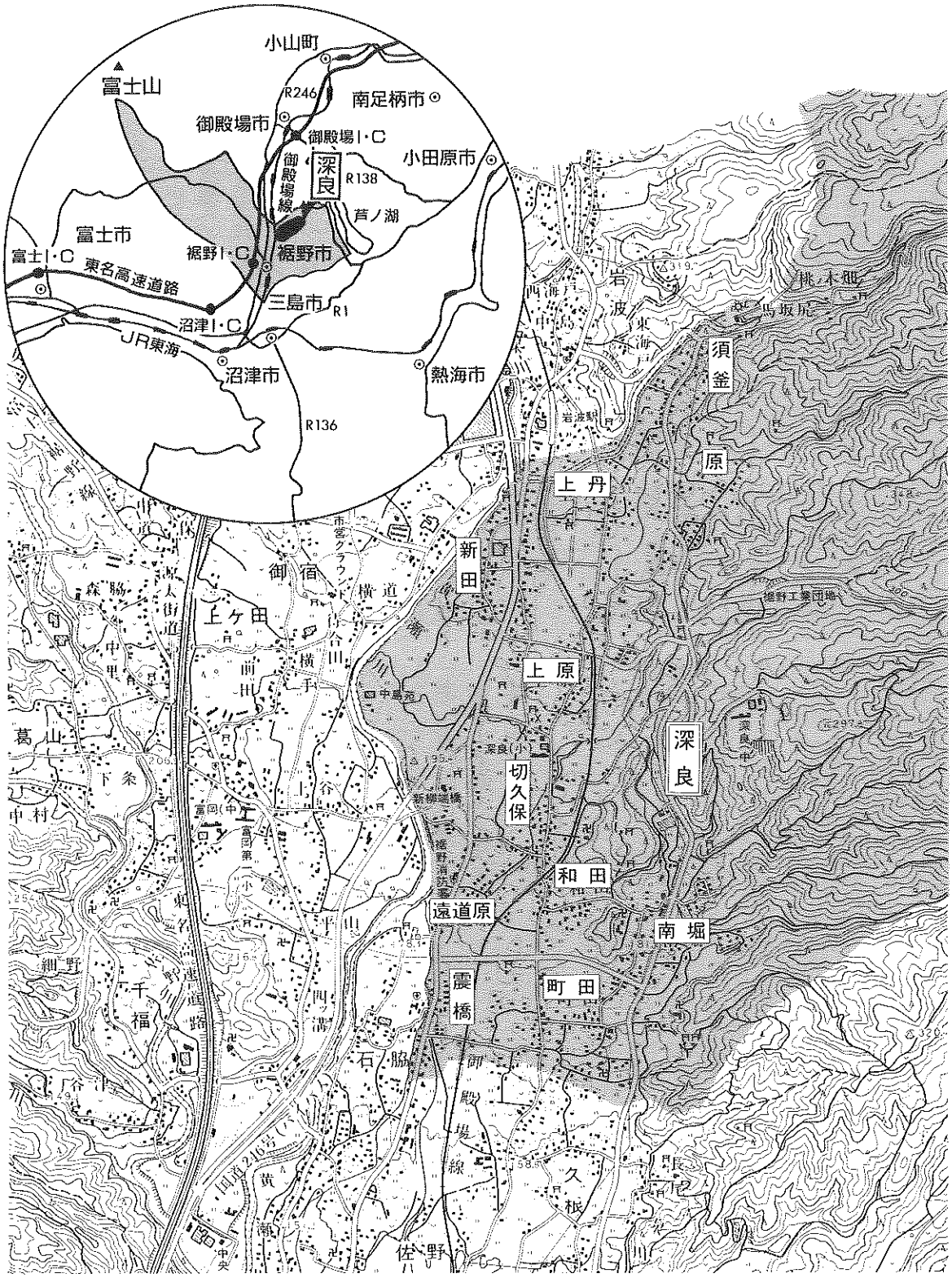
第一章　生活環境の民俗 …… 7
第一節　開発と土地利用 …… 7
(一)　イエ(家)の立場 …… 7
イエと水
(二)　水田とジンダイ …… 8
湿田とジンダイ／泥がイツク／アカマサ
第二節　水と生活 …… 9
(一)　深良用水 …… 10
静岡県芦湖水利組合／上郷・中郷・下郷／水配人／水配人の仕事／水配人の堰管理／水配人の権限／水番／芦湖水利組合と箱根神社／箱根神社講社祭と水配人／芦ノ湖水神社祭典／甲羅伏／下郷／下郷の箱根用水御裁許虫干会／下郷・竹原の状況／下郷・イッスイとニスイ／ジスイ
(二)　カワバタ・井戸・湧き水 …… 15
須釜／原／上原／震橋／遠道原／町田／南堀
(三)　水車 …… 17
第三節　箱根山と生活 …… 18
(一)　深良財産区 …… 18
深良財産区とモヨリ／上丹・須釜・新田／原／上原／切久保・遠道原／震橋・町田／南堀／和市
(二)　カヤバ …… 19
草刈り／ヤマヤキ(山焼き)／厩肥／屋根替え／トタン屋根／杉皮屋根／瓦屋根／ワラヤネの消滅／ワラヤネと火事
(三)　ザツボクリン(雑木林) …… 21
「枯葉をかく」／炭焼き／モシキ(燃し木)
(四)　アラクオコシ(荒く起こし)とカイコン(開墾) …… 22
ヤキバタ(焼畑)／アラクオコシ(荒く起こし)／シシ(猪)／カイコン(開墾)
第四節　四季の変化と動植物 …… 23
(一)　風と気象 …… 23
富士のカサグモ(笠雲)／箱根山からの風／ナライ／朝の地震／山の天気

(二) 自然暦 …… 24
コブシの花／芦ノ湖のワカサギ／ワラビ／冷害
(三) 動植物と魚 …… 24
漁業／ズガニ／ウナギ・ウグイ／シシ(猪)／ハクビシン／猿／ムジナ／烏／キツネ／バッタ／センブリ／ドクダミ・ゲンノショウコ
第五節　災害と大事件 …… 25
(一) 関東大地震 …… 25
〈事例1〉／〈事例2〉／〈事例3〉／〈事例4〉
(二) 水害と台風 …… 26
水害／アイオン台風／狩野川台風／富士川台風
第六節　御殿場線と生活 …… 26
(一) 御殿場線と生活の変化 …… 26
御殿場線／複線から単線へ／岩波駅／御殿場線と世間／汽車と時刻／線路の草刈り
(二) 御殿場線の事件 …… 27
脱線転覆事故／轢死／事件
第二章　社会と生活 …… 28
第一節　家と屋敷 …… 28
(一) 屋敷構えと付属屋 …… 28
隣の境はのづら石／付属屋いろいろ／屋敷墓
(二) 間取りと部屋の使い方 …… 29
間取りと各部屋の名称／上須のK家間取り／広いニワは便利空間／日常生活の中心コマ／人寄りととっておきにはザシキとヒロマ／眠る部屋、お産部屋のナンド
(三) 家の手入れと生活環境 …… 33
屋根替えは冬の仕事／炊事の水と風呂の水／大そうじに便利なダイミョウダケ／屋根と家の移り変わり
(四) 新築と家うつり …… 35
大正一二年の新築の記憶／昭和四五年の新築／家うつりと古い神さまたち
(五) 町田・松井謙一家の間取りと屋敷構え …… 36
間取り／部屋の使い方／屋敷構え／家・屋敷に関する禁忌
第二節　家族と親族 …… 39
嫁と里／オヤネンブツと位牌分け／タイマツナギと初子相続／ハイケ(廃家)の再興／カネオヤとコブン
第三節　村落の形と組織 …… 41
(一) 村の範囲と地域区分 …… 41
語り継がれた歴史／村内区分と行政区／クミとモヨリ
(二) ムラの施設と道・境 …… 46
新しい道／ムラの境／ムラの集会所
(三) 村の構成員 …… 49
旧戸と新戸／地主と小作／ムラの役職／ムラの寄合
第四節　共有と共同 …… 53
(一) 山をめぐる共有と共同 …… 53
深良財産区／山の利用／山の管理／カヤ刈りと草刈り

(二) 水をめぐる共有と共同 ……55
用水とセギ当番／生活用水としての川と井戸／チフスの流行と水道の敷設／水げんか
(三) 農作業のための共有と共同 ……56
イイ（ユイ）とヒトデ／共同作業所と水車小屋
(四) 神社と墓地をめぐる共有と共同 ……57
ムラと氏神／モヨリと氏神／神社の維持・管理／墓地と火葬場
第五節 ムラの集団構成 ……61
(一) 近隣集団 ……61
葬式組／講集団
(二) 年齢集団 ……62
若衆と青年団／若衆への仲間入り／若衆のヤド／祭りと若衆／青年団の資金集め／戦中から現在の青年会／姑の念仏・嫁の淡島・子供の天神／姑の念仏講／嫁の淡島講／子どもの天神講／サイノカミと子ども
第六節 世間との交流 ……68
(一) 交通手段 ……69
御殿場線と深良の人々／自動車の利用
(二) 世間の広がり ……70
買い物／活動写真／祭り／露店商／お題目講
第三章 時間と民俗 ……73
第一節 生活の時間・生産の時間 ……73
(一) 深良の生業 ……73
(二) 稲作 ……74
五反百姓／ネヤアシロ（苗しろ）／田植／田の草取りとミズカケ／稲刈り／ホシモノ／カラウス
(三) 柿渋（カキシブ）の生産 ……75
深良で一軒の「シブヤ（渋屋）」／時季／柿の種類
柿渋作りの技術
1 柿を取る
2 柿をつぶす
3 樽に入れて一晩置く
4 絞る
5 出荷用の樽に詰める
6 出荷
柿渋の利用
(四) 生業と衣服 ……77
女の仕事着／男の仕事着
第二節 一日の生活 ……79
(一) 仕事の一日 ……79
1 ときを知る ……79
夜明け／夕方／一日の挨拶／御殿場線の通過時刻
2 仕事の一日 ……80
田植えの一日／草刈り／土用干し／アラクの一日／夜なべ仕事
3 食事と生活 ……82
一日の献立／米と麦／蕎麦／調味料／川の恩恵／山菜と薬草採り

第三節　一年の生活　……83
(一)　年中行事　……83
ススハライ／オカザリ（お飾り）／モチツキ（餅つき）／大晦日／正月三が日／元旦／二日／初山／ゴカンニチ正月／七草／ウナイゾメ／二番正月／山の神祭／ハツカショウガツ（二十日正月）／ジロウツイタチ（次郎朔日）／マメマキ（豆撒き、節分）／目一つ小僧／初午／彼岸／オヒナサマ（雛節句）／花祭り／端午の節句／マンガアライ（馬鍬洗い）／オテントウサン念仏／七夕／盆の行事／地蔵さんの念仏／ヨシダサン（吉田さん）／風祭り（二百十日）／十五夜と十三夜／オヒマチ（深良神社祭典天田下）／エベス講（恵比寿講）／山の神講／高尾さん／オハタシ念仏
第四節　一生の生活　……95
(一)　産育　……95
1　妊娠と出産前　……95
妊娠／オビイワイ／妊婦の禁忌／安産祈願と淡島講／産前／トリアゲバアサン
2　出産　……96
出産／ウブツナさんの御飯／後産と産湯の始末／乳付けと産婦の食事／産後と産の忌／子育て祈願／オシチヤと名付け／ヒャクヒトエとオクイゾメ／子どもの生まれ年
3　成長過程　……98
初節句／七五三／ハツキャク／虫封じ／ホウソウ／子守唄／子どもの行事／子どもの遊び／若い衆入り／一人前
(二)　婚姻　……101
1　縁談の成立　……101
通婚圏／クチキキ／カネオヤと仲人／アシイレ／嫁入り道具
2　祝言　……102
ムコイリ／嫁入り行列／サカズキゴト／オフルマイ／オチツキボタモチ／カオミセ／ミツメ／新婚への泥投げ
(三)　厄年と年祝い　……104
厄年／年祝い
(四)　葬送と墓　……105
1　臨終から葬式準備まで　……105
死の予兆／北枕と枕団子／葬式組／装具の準備／アナホリとロクシャク
2　トムライの儀礼　……108
お通夜／湯灌／納棺／トムライ／野辺送り／埋葬／ハマオリ／キチュウ／深良村のヤキバ／火葬
3　供養と先祖祭祀　……111
墓参り／オヤネンブツと位牌分け／四十九日／ヒャッカンチ／ニイボン／年忌／盆の送り／原の地蔵
4　墓制　……113

墓地／天田上／天田下／水子の墓
第五節　元小学校教員が見た大正・昭和時代の深良　……114
1　ライフヒストリー　……114
須山から深良へ／夜学で教える／村会議員は損
会議員／まもなく九〇の祝い
2　須山と深良の生活　……116
深良の生活／須山での食べもの／飲み水の苦労
3　教員時代の経験　……117
学校での思い出／神代杉のこと／移民のこと
第四章　信仰　……119
第一節　神社と小祠　……119
(一)　氏神　……119
氏神と氏子総代／当番区／吉田神社の祭礼／神社合祀／赤子神社の祭礼／神明社の祭礼／駒形神社の祭礼
(二)　山の神その他の小祠　……121
町田の山の神／南堀の山の神／上原の山の神／和市の山の神／新田の山の神／原の山の神／秋葉神社／高雄山／耳石神社／八幡宮
第二節　寺院と堂　……122
松寿院／興禅寺／原の地蔵さま
第三節　講その他　……123
町田／遠道原／和市／南堀／上原／上丹／須釜／新田／原
第四節　路傍の神仏　……128
町田／南堀／上原／上須／原
第五節　家ごとの神々　……130
町田の松井家の例／上丹の勝又家の例
附録一　『駿河記』駿東郡深良村　……133
附録二　松井謙一家文書　1　伊賀婚礼ニ付諸入用覚帳（文久二年四月）　……135
松井謙一家文書　2　いよ婚礼ニ付献立書並雑費入用覚（元治元年十一月）　……135
あとがき
裾野市史編さん関係者
索引


小山町
富士山
R246
南足柄市
御殿場市
御殿場I・C
小田原市
御殿場線
深良
R138
芦ノ湖
富士市
富士I・C
裾野I・C
裾野市
東名高速道路
三島市
R1
沼津I・C
JR東海
沼津市
熱海市
R136
岩波
須釜
原
上丹
新田
御宿
上ケ田
横道
上原
深良
切久保
和田
遠道原
南堀
町田
震橋
石脇
久根
佐野
葛山
千福
細野
中村
下条
森脇
中里
前田
横手
谷
平山
黄潮
国道246号
御殿場線

序章　深良の歴史と民俗

第一節　市史編さんのなかの民俗誌

市史と民俗　裾野市史の編さん計画の中に民俗編が一巻加えられたことは、編さん計画を立てた関係者の優れた見識であった。文字資料と考古資料によって歴史を記述するのが多くの市町村史であり、民俗と呼ばれる現在生きて暮らしている人々の行為や知識を記述することがあっても、それは付録的に簡単に書かれたものが大部分であった。ところが、近年の市町村史、あるいは県史は民俗を重視し、それに一定の巻数を当てることが一般化してきている。裾野市史もその動向を担うものであり、静岡県内では先駆的な存在といってよいであろう。

もっとも静岡県では裾野市史の編さんより一足早く始まった県史が、国別の三冊の民俗編の編さんを計画し、現在すでにそのうちの伊豆、遠江の二冊までを刊行している。また、北隣の御殿場市は市史編さんを終えているが、やはりそのなかに民俗を位置付け、一冊に独立していないが、非常に工夫された内容豊かな民俗編をすでに刊行しているし、さらに小山町でもユニークな民俗編の作成を目指して努力が重ねられ、近く刊行されるということである。裾野市史もそれら先行する編さん事業に学ぶところが大きいが、またそれらとは異なる独自の記述方式も採用し、市域の民俗の詳細を明らかにしようとしている。

民俗と民俗誌　民俗はごく日常的な生活のなかに形成され、維持されてきた文化である。人々の生産技術とそれを活用した生産活動、衣食住という消費生活、正月から大晦日までの数多くの年中行事、人の生まれてから死にいたるまでのさまざまな儀礼等が民俗である。民俗学の研究は、それらを個別の問題として取り上げ、調査研究をしてきた。たとえば、婚姻方式の歴史的変化を各地の婚礼のあり方を調査して考えるとか、人々の内外区別の観念の歴史を各地の村境をめぐる行事や装置を明らかにすることで考察するというような研究である。

しかし、民俗は個々別々に存在するのではない。ある民俗は他の民俗と関連して存在する。地域の生活文化として相互に関連し、その全体が人々の生活を形成しているのである。したがって、個別の問題関心から個別の民俗事象を調査研究するものとは別に、特定の地域における民俗の全体像を把握し、そのなかでの相互の関連を明らかにする調査研究も必要である。特に、地域の歴史との関連で民俗を理解しようとすれば、それは不可欠な作業である。このような民俗の全体像を地域を限定することで調査し記述するものを民俗誌と呼ぶ。

近年の多くの県史・市町村史は特定の地域を対象に先ず民俗誌を作成し、その基礎の上に総合的な民俗編を編さんするという方式を採用している。裾野市史の編さんも、市域の各地域単位の民俗誌を作成した上で、市域全体の民俗を総合的に考察し、民俗編として刊行しようと計画した。

深良調査の意義　民俗編編さんのための基礎資料を獲得し、ま

た市域の民俗の特質を解明するために、毎年一か所集中調査を実施し、限定した地域における民俗を総合的に把握し、相互関連に注意しつつ記述する民俗誌の作成をすることとした。その初年度には葛山について調査を行い、すでに報告書を刊行している。その計画の二年目に集中調査を行ったのが深良である。この報告書はしたがって、市史民俗編編さんのための二冊目の民俗誌ということになる。調査は地元深良の各地区の役職者の皆さんはじめ、多くの方々、特に伝承者として民俗を集約して知っておられる故老の方々にお世話になった。そのご協力の賜物がこの報告書と言える。

二年目に深良で調査を実施したのは、初年度が富士・愛鷹山麓に属する葛山であったので、箱根山麓に展開していてそれと対照的な位置にある村落を取り上げて、同じ市域でも民俗の伝承に相違があるのかどうかを確認しようとしたためである。そして、また深良は歴史的には近世前期における大規模な用水工事が行われたところとして知られ、市史としてもその資料集の編さんを配本第一回（第六巻資料編深良用水）として計画していたので、それに参考となる史料や情報が得られる可能性も期待した。

第二節　深良の村落と集落

広大な大字深良　深良は、裾野市域の他の地区と同様に、広く大きい。深良は大字であり、それは近世の深良村の範域である。駿東では、概ね近世の支配制度の村は大きい。近畿地方の標準的な村は一つの集落とその周辺に展開する耕地と山で村となっていた。したがって、新幹線その他の鉄道の車窓から見ることができる集落が、すなわち近世の村だったと予想しても、ほとんど間違いがない。ところが静岡県から東の地方では、原則として近世の村は一つの集落ではない。多くの集落が一つの村の中に含まれている。深良はその典型的な姿と言えよう。深良には多くの集落があり、その集落を基礎にそれぞれがモヨリ（最寄り）と呼ばれる村落組織を形成してきた。

深良の開発あるいは村落形成については何時ごろとか、誰によってであるとかは皆目分からない。文書等の文字資料の残存から推定して、恐らくは中世に遡るであろうし、その系譜の連続性を考えなければ、古く縄文・弥生期にまでたどりつくであろう。しかし、直接的には中世以降の歴史が現在の深良を大きく規定しているものと思われる。深良地域内の各所に屋敷を構え、周辺を開発して農業経営を行っていたのが、今の個別モヨリの始まりであろう。今も様式的には、土豪屋敷を思わせる壮大な屋敷構えを各モヨリのなかに一つ二つ見ることができる。そして、それらの土豪を配下に組織し、この地方を支配したのが大森氏であった。深良という単位は中世の大森氏の支配領域と深く関連しているものと思われる。

モヨリが独立した近世の支配制度の村として認定されず、深良という大きな単位の中に組み込まれたのは、近世初頭の検地当時各モヨリの完結性が弱く、中世的な郷という地域編成が未だ強力だったためと思われる。各モヨリを拠点にした有力百姓の連合としての深良という面が検地役人によって認められ、近世の支配単位としての村になったのであろう。このような推測による深良の歴史性は、現実の民俗の伝承とどのように関わっているか注意してみなければな

らない。

天田上・天田下とモヨリ　深良全体として一つの歴史を形成展開してきたことは近世の入会を継承する深良財産区の存在によっても分かることである。深良としていろいろな面で一つの社会を形成していることは間違いない。しかし、それでは深良が一つの村落として完結しているかというと、そうではない。むしろ村落としてのあり方は示していないと言ったほうがよい。それを端的に表現するのが氏神である。深良全体として統一して氏神を祭祀していない。深良神社は名称から言えば深良全体の氏神のように理解されるが、実際は天田下と呼ばれる深良の南半分の地域の氏神であり、これも明治の神社合祀によって天田下の各モヨリの氏神が合祀されて成立したものであるという。深良の北半分を示すのは天田上であるが、ここには統一された氏神はなく、各モヨリ毎に氏神がある。

現在の市役所支所（元の深良村役場）や深良小学校の場所を境にして南北に二区分する、天田上と天田下という区分はいつごろからできたものかは必ずしも明らかでないが、この区分意識は強い。小学校のすぐ下にある天田橋が上下の境であり、天田上、天田下という名称になっているのであるが、この橋を境界とする考えは恐らく近世にすでに存在したものと思われる。名主以下の村役人も南北二つの区分で組織されていたといい、何事につけても競争や対抗関係にあったという。役場や学校がその境界領域に設けられた。上下の区分の存在を前提に、公的施設がここに設置されたと理解される。天田上、天田下という二分観念は具体的な民俗にどのように表れているか注目される点である。

しかし、民俗の形成され、伝承されてきた単位としては明らかにモヨリが基本である。各モヨリ毎に組織があり、秩序と統制があり、各種の行事が行われている。より広域の地域単位の組織や行事も、当番制によって各モヨリが順番に、あるいは交替に担当しているのが大部分である。モヨリ内に人々の社会関係は凝縮しており、そこにさまざまな民俗が形成されている。したがって、深良の民俗といっても、深良が一つとして行っていないので、同種の民俗についてモヨリ単位の多くの事例が集積されることになるし、そのなかにはもちろん共通性、類似性も大きいが、また多様性にも富むということになる。各モヨリ毎の民俗を個別に確認しなければ、深良の民俗は理解できない。

第三節　民俗の特色

深良の民俗　深良で伝承されてきた民俗は、多くがこの地方一帯で行われ、伝えられてきたものと共通しており、深良の民俗として特に限定して把握できるものは必ずしも多くない。報告書の第一集の『葛山の民俗』と記述内容を比較していただければ判明するが、黄瀬川の反対側の村落とも大きな違いはない。しかし、すでに述べたように、深良は多くのモヨリで構成されているので、そのモヨリ毎に差異があり、同じ民俗でも多様な姿を示している。そこに豊かな民俗の伝承を見ることができる。以下では、深良の民俗としての特色を教えてくれる幾つかの点について紹介しておこう。

深良用水　深良の特色としては深良用水と箱根山があげられよう。この二つに関連する民俗は、深良の立地や歴史性を如実に示し

ている。深良用水は、深良の北端部に芦ノ湖の水が出てくる。そして、新川という人工河川によって深良の地籍内で黄瀬川に流し込まれる。そのような用水の基点となる地域であり、この用水の計画が深良村名主大庭源之丞によって考えられたことも重要な点である。

深良用水の水利組織としては上郷、中郷、下郷に三区分されているが、深良は当然ながら上郷に入っている。その上郷の特色は中郷、下郷より上流にある地域ということだけではない。用水との関係が違うのである。中郷、下郷は、原則としてそれぞれ黄瀬川から一つの堰によって取水し、それを各所で分水して利用している地域である。中郷は佐野堰によって取水した水を利用する地域、下郷は大堰から取水した水を利用する地域である。言い換えれば、中郷は佐野堰を共通の堰とする組織、下郷は大堰を共通の堰としている組織ということになる。

それに対して、上郷はそのような統一的な堰は存在しない。多くの個別の堰によって取水している地域の組織なのである。その取水地点は黄瀬川に合流するまでの間に新川あるいはその上流になる深良川から取水するもの、また黄瀬川から取水するものなど様々である。いずれも堰の規模、あるいはその水掛かりの面積は小さいものであり、中郷の基点となる佐野堰、下郷の取水口となる大堰とは大きく異なる。今回の調査では、深良用水全体について調査を行ったので、その全体像も明らかにでき、しかもそのなかでの深良内の比較的小規模な用水についての利用をめぐる民俗についても記述することができた。

深良の各集落を春から夏にかけて歩いていると、道路脇や屋敷の裏手などをきれいな水が勢いよく流れているのに気付く。そして、屋敷の脇には石垣やコンクリートで数段の階段が作られ、流れ際までおりられるようにしてあり、また物を置くことができるような形にしてある。さらにその前で流れをゆるめて、水をよどませるような堰板のようなものが流れに入れられている場合もある。これが普通カワバタと呼ばれる設備である。深良の生活の中でカワバタの果たしてきた役割は大きい。さまざまなものがカワバタで洗われてきた。かつては飲料水もカワバタから汲んでいた家がある。カワバタをめぐる民俗には興味深いものがあることが今回の調査で分かった。

箱根山　近世以来の入会地は現在も深良の人々にとって大きな存在である。入会地・共有地としての性格を現在は深良財産区として存続させている。財産区は、町村合併によって深良村が裾野町に合併する際に、深良の人々の近世以来の財産を地元の人々のものとして残すために設立されたものである。箱根の外輪山の西側斜面が財産区のものである。ここの利用について各種の方式が実施されており、そのなかに入会山としての性格がよく示されている。また深良全体の組織としての財産区と各モヨリとの関係も興味深いものがある。各モヨリは財産区から土地を借りる形式で自分たちの利用する共有地を確保している。この多様な利用方法を明らかにできたことは、今後他の地域の同様の歴史性を帯びた山林の調査に際して参考となるし、箱根山と愛鷹山の共通性と相違を考察する手がかりを与えてくれたといえよう。

屋敷と家　深良の民俗のなかで今後の調査研究にとって重要な内容を提起していると思われる幾つかの事項を紹介しておこう。

深良では大きな屋敷を構えている家が多い。屋敷の周囲には屋敷林がある。こんもりとした森のように見えるほど大きな樹木が生い

茂っている屋敷さえ少なくない。ただ、一様に同じ景観ではなく、比較的東部のモヨリの家々に屋敷林は発達しており、西部では少ない。たとえば西北部の深良新田では道路に沿って家が並び、屋敷林は必ずしも存在しない。しかし、そこでも屋敷の個別性を示している。家々は垣根、塀あるいは建物で囲まれ、隣との境界は明確である。そして、屋敷の裏手や脇に墓地があることも大きな特徴である。最近の墓は寺院境内や共同墓地に移っているが、それでも旧来の家の墓をそこには移転させず、屋敷や母屋の整備に伴って、墓も立派にしている例が目立つ。家と先祖祭祀の問題を考える際には、この屋敷墓は大きな素材になる。裾野の市域全体に見られる傾向であるが、特に深良で顕著に観察できる。

伊豆の北部ではかつて姉家督相続、すなわち最初に生まれた子供が男女に関係なく家を相続することが行われていた。これは明治初年の『民事慣例類集』にも記載され、また民俗調査でも明らかになっている。姉家督は、長子が男子の場合は普通の長男相続であり、特別なものではない。初生子が女子の場合に、その女子が婿養子を貰って家を相続するので、特別な相続形態となるのである。この姉家督の民俗が果たして駿東の地域でも行われていたかどうかは興味深い問題である。その点で、この報告書に記述されているタイマツナギと呼ばれる、普通に言う中継ぎ相続は大いに注目される。一時的にも姉が婿養子を貰って家を相続するのであり、姉家督との関連性がうかがえるからである。

モヨリの堂　各モヨリには現在立派な集会施設がある。そこを訪れると、その建物内に仏像が安置されていたり、あるいは施設敷地内に石塔石仏が並んでいたりする。そこがかつては仏堂であったことを今に示しているのである。深良のモヨリには必ずのようにお堂があった。その姿や機能を現在なおしっかりと示しているものもある。この堂を拠点とした活動としては、女性たちのオテントサンや月並の題目や念仏の講・日待ちがある。またかつての青年団・若者組がヤド(宿)としても使用していた。毎晩堂に集まって談笑し、作業をし、また訓練をした。モヨリにおける堂の機能は、この地方の村落組織を考える場合に重要な材料となるであろう。

注目すべき生業　深良は基本的には水田稲作農村である。深良用水の開通以前から水田の開発は進んでいたものと思われる。今は古川と呼ばれる深良川の水や泉川の水を利用しての水田が先ず深良の生業の基礎となったものであろう。そして、用水の完成が新川からの取水を可能にして、新たな水田開発がすすめられたものと思われる。この開発の相違が水利はじめさまざまな農耕技術に関連していると思われるが、その点での詳細な調査は今回できなかったが、たとえばジスイ(地水)と用水の水では水温が異なるため、その水を田にかける方法が異なったという点などにヒントは示されている。今後、さらに調査を続けていきたい。

この報告書のなかで注目すべき生業として記述できたのは、戸数としてはわずかであったが、柿渋生産の技術である。現在では忘れ去られつつあるが、かつては貴重な加工用の材料であった。今後もこのようなたとえ数量的には少なくとも、重要な役割をもっていた種々の職人的な生産、あるいは副業的農業生産にも注意していかなければならないであろう。

失われた年中行事　今では多忙な日々を過ごしているため、年中行事等の多くも廃れてしまい、ただ話のみが聞かれるというのが

現状であるが、その伝承としての年中行事のなかには民俗学の教科書に掲載されているような典型的な、あるいは代表的な行事が少なくない。深良ではかつて小正月の呪術的行事が盛んであった。特に一五日早朝に行われるナリモッソは興味深い。この行事自体は成木責めと呼ばれるもので、各地で行われているもので、珍しくはない。しかし、そのとなえごとの長いことを含めて一つの典型を示していると言えよう。同様に、二月八日の目一つ小僧の伝承も注意されよう。

親念仏と位牌分け　葬送儀礼に関して、駿東地方の新たな研究課題として近年急速に注目されるようになったのが位牌分けである。位牌分けは長野県から群馬県にかけて行われているものが最初注目されたが、その後同様の民俗が栃木県、埼玉県、山梨県などにおいても見られることが判明し、さらにこの静岡県の駿東にも行われていることが明らかになった。ある死者について、跡取りである施主の家にのみ位牌がまつられるのではなく、家を出た兄弟姉妹に施主から親の位牌が分配され、それを貰って帰って、自分の家でもまつるというものである。この民俗は、嫁に行った娘たちが、両親の位牌を嫁ぎ先でまつるところに特色があり、一般に考えられているような家の先祖代々すなわち父方・夫方の先祖のみを子孫がまつるのではなく、母方・妻方の親・先祖をもまつるという点で、日本の家と先祖祭祀について再考を促すことになる。駿東での位牌分けの様相は未だ必ずしも充分に事例が集積されていないので、明らかでない点も多い。しかし、前回の報告書に記載した葛山でのキャクボトケ（客仏）の伝承は大いに注意された点である。それに対して、深良では明確な位牌分けではないようであるが、オヤネンブツ（親念仏）という方式で、子供たちが全員順次親の供養を自分の家で行う。これも駿東での特色であるが、明らかにそこには子供全員がそれぞれ親の霊をまつるという観念が表れており、位牌分けと関連する。今後さらに一層注意深い調査が必要であろう。

ムラを超えた吉田さん　すでに述べたように、深良として統一した氏神は存在しない。原則として各モヨリ単位で氏神祭祀は行われてきた。したがって、深良には多くの神社が存在する。氏神という立派な姿をした神社も多いが、その他にも多くの小祠がある。そして、講集団も多い。それらの多くは各モヨリの堂を拠点に現在も盛んに行われている。これらの信仰に関する民俗のなかで殊更注目されるのは、ヨシダサン（吉田神社）の祭りであろう。これは一つのムラで完結する祭りではない。深良の二区分である天田上と天田下が交替してまつる。その祭祀対象となる固定した神社がないことも特色である。吉田神社の祭祀は、深良以外ではより広域で多くのムラの連合として行われており、この地方の信仰行事の特色となっている。勧請されたのは近世末と推測され、それほど古いものではないが、地域の民俗として重要な存在となっている。

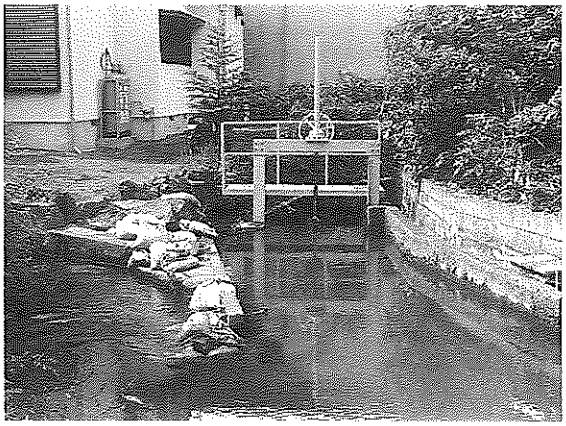
（福田アジオ）

第一章　生活環境の民俗

深良の生活環境は、三つの大きな特徴を持っている。

第一。水利用に関して、深良は芦ノ湖から引く深良用水（箱根用水）の最上流に位置するムラであること。そして、深良用水を単に農業用水のみならず、生活用水・産業用水としても利用してきた。

「深良用水」の呼称に関しては、一般的にはこの用水は「箱根用水」の呼称で知られ、且つ、用水流域村々でも「箱根用水」（あるいは、「芦ノ湖水」・「箱根湖水」など）が用いられてきた。「深良用水」を使用しているのはごく近年のことであり、それも主として裾野市域に限られ、下郷（長泉町・清水町）では現在も「箱根用水」を使用している。しかし、近年、この用水の使用権を継承する芦湖水利組合が「深良用水」を使用しているので、暫定的にここでは、この用水の呼称に関して「深良用水」を使用する。



市場の御殿場線脇の水門

第二。山利用に関して、深良はそのすぐ東側に箱根山をひかえていること。そして、深良は箱根山に深良財産区が管理する共有地を持っている。現在では、植林をしてあるところが多い。近年は箱根山を生産・生活のために利用することは少なくなってきているが、かつて深良の人々は深良財産区をはじめとする箱根山に、萱刈り場を持ち、また薪を拾い、雑木で炭焼きを行うなどして、箱根山を利用してきた。

第三。深良の中を御殿場線が通っていること。一九三四（昭和九）年熱海駅と函南駅の間に丹那トンネルが開通し、そこが東海道本線になるまでは、御殿場線は東海道本線であった。そのため、御殿場線（旧東海道本線）にまつわる伝承が多く存在する。

第一節　開発と土地利用

㈠　イエの立地

イエと水　深良の多くのイエは、イエの地所の中にカワバタ（川端）を持ち、生活用水として利用している。たとえば、南堀の大庭一家の場合、ちょうどイエの裏手に用水路が通り、勝手場から屋根をのばして、勝手場の横にカワバタを作っている。このカワバタの水は深良用水の水ではなく、泉川の水である。カワバタの水は増えたり、減ったりすることはほとんどないという。

須釜でもカワバタを利用している。須釜のあたりでは井戸はほとんどない。須釜では井戸を掘ろうとすると、たいてい泥の赤土のよ

うな土で、しかもジンダイ（神代）が出るので、井戸を掘れないのである。それで、イエを川のそばに作り、カワバタで水を利用したのである。水道が出来た現在でも、カワバタの水を利用している。須釜ではカワバタの水は深良用水の水である。須釜のあたりでは深良用水のいちばん上流にあたるので、水位が減ることもなく水も綺麗である。

勝平場横のカワバタ（南堀）

深良では広大な屋敷を持つイエの場合、屋敷の中に川が流れ、そこにカワバタを作っている事例もある。町田の松井謙一家の場合は、ほぼ正方形に区画された広大な屋敷を持つが、松井家ではちょうどその屋敷の真ん中を用水路が通り、その屋敷の真ん中にカワバタを持っている。また、松井家の場合、現在では使っていないが、その水の流れと土地の高低による落差を利用して、かつては米を搗くための水車を廻していた。水車小屋はちょうど屋敷の東隅に位置している（カワバタと水の利用に関しては後述）。

(二) 水田とジンダイ

湿田とジンダイ　深良一帯で頻繁に聞かれる話に、ジンダイ（神代）の話がある。たとえば、上原では次のような話が聞かれた。上原では湿田で黄色の腐ったような水が出て、くしゃくしゃしたような田んぼがあった。土は赤土である。このようなところでは、ジンダイ杉がよく出た。普通の水田では米が一反七、八俵くらいはとれたが、ジンダイ杉が出るようなところでは、米が一反五、六俵もとれればよいほうだった。現在では、このようなところでも、肥料があるので収穫高もよくなったという。なお、ジンダイはアカマサ（赤まさ）から出ることはない。

須釜の東電の発電所の近くは、じめじめした田んぼで泥が深かった。ここからも、ジンダイがよく出た。ここでは、特に湿地帯がひどいところは、潜らないように田んぼへ木の枝を入れてから、田植えをした。木の枝はあとでそのまま肥料にもなるのでちょうどよかったという。また、ここでは箱根山にいる猪とか鹿を、この須釜の田んぼへ追い詰めて動けないようにして、捕まえたという。

現存する人で、ジンダイ掘りを経験している人は少なくなっているが、戦前昭和一〇年ごろまでは行われていた。明治時代には、ジンダイ掘りをして、ジンダイを売りお金を儲ける人がずいぶんいたという。ジンダイ杉を掘るのは冬で、水を張って上げた。ジンダイ杉はジンダイ下駄とかいって下駄になったり、板台になっていったようであった。

南堀でもジンダイに関して次のような話が聞かれた。南堀のホラ（洞）は大昔はもっと深かったが、山津波でこのホラがイカッテ

（埋かって）、現在のようなホラが出来たという。そのとき、山津波で木が埋まってしまったので、その木がジンダイとして出るのであると、説明する人もいる。南堀では、ジンダイは杉と檜と両方があったという。

「泥がイツク」　深良では田植えのときに代をかいて、ジキニ（すぐに）植えないと泥がイツイテ植えにくくなる。土が粘土質であるため、苗を手で植えたとき、土がかぶらず苗が浮いてしまうという。大庭喜和さん（一九一一年生）は、御殿場から深良へ嫁に来たが、実家の御殿場ではこのようなことはなかったという。

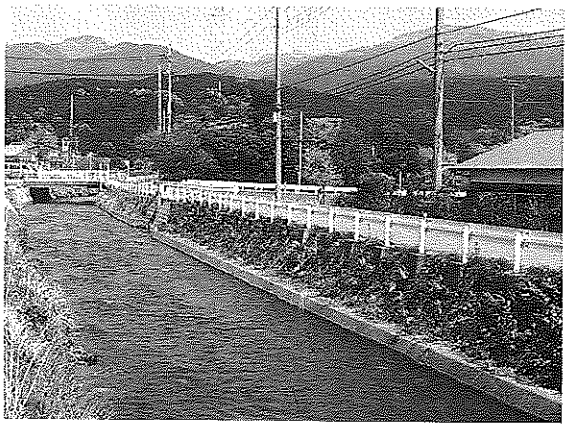
アカマサ　赤土の中でも硬い固まりの土をアカマサといっている。深良ではアカマサは少なく、赤土は粘土質のところが多い。谷になっているところにアカマサが出ているところがあるくらいである。

第二節　水と生活

ここでは、深良の〝水〟をめぐる環境の全体像を、深良用水を軸に記述する。

深良用水は農業用水のみならず、生活用水・産業用水としても幅広く利用されている。既に裾野市史編さん委員会では、約一〇〇〇頁もの大部に及ぶ『裾野市史　第六巻　資料編　深良用水』（一九九一年）を刊行しているので、文書に遺された資料に関してはそれを参考にされたい。ここで記述するのは、過去の記録ではなく、現行の深良用水の組織とその利用のされ方である。また、深良用水はかならずしも深良のみを対象とする用水ではないので、深良のみに限定せず、その全体を記述する。

深良用水は近世初期、友野与右衛門など元締の江戸町人と発企人深良村名主大庭源之丞による新田開発事業として、芦ノ湖の深良水門から箱根山に約一二八〇メートル余りに及ぶ隧道を掘り抜くことにより作られた。隧道は一六六六（寛文六）年七月末～八月初頭に工事を着工、一六七〇（寛文一〇）年竣工、新川普請の完成により、翌一六七一（寛文一一）年から利用され、現在に至る。この深良用水は芦ノ湖深良水門から取り入れた用水を、隧道を通して自然河川である深良川に落とし、深良川からは人工河川である新川を通して黄瀬川に水を通し、主として黄瀬川から流域のムラに分水を行う。



新川（上須）

深良における深良用水の利用は、深良川から黄瀬川に水が落とされる前に古川堰から取水する古川と、新川に設置された豊後堰・太郎右衛門堰・利平埋・五反田水門・弥平治埋・橋場堰、黄瀬川の大洞堰からの分水が農業用水として利用され、また生活用水として家々のカワバタ（川端）などで利用されて

いる。

ほかに、深良にはそのもっとも東側、箱根山に面して自然河川である泉川がほぼ北から南へ流れている。泉川は深良の中では南堀から、久根・公文名を経て茶畑で境川に合流している。泉川も主として南堀を中心に、農業用水や家々のカワバタの水として利用されている。

(一) 深良用水

静岡県芦湖水利組合　現在、深良用水は、その全体を芦湖水利組合が管理している。芦湖水利組合の管理者は、現在は裾野市長である。裾野町（裾野市）への合併前は、泉、長泉、深良村長が管理者をやることが多かった。

芦湖水利組合の副管理者はこの三〇年間長泉町長がなっている。御殿場市長と清水町長も役員になることになっている。

上郷・中郷・下郷　芦湖水利組合の中には、深良用水の水を管理・運営するために、用水水掛かり村々による、上郷・中郷・下郷（井組三郷）と呼ばれるムラ連合がある。

上郷・中郷・下郷は一六八八（貞享五）年用水開削の元締引き揚げののち成立する。最初、上郷（深良村・岩波村・神山村・上ケ田村・金沢村・葛山村・御宿村・千福村・定輪寺村・富沢村・一色村、一一ケ村）、中郷（石脇村・佐野村・二ツ屋新田・久根村・公文名村・稲荷新田・茶畑村・平松新田・麦塚村、九ケ村）、下郷（伊豆島田村・水窪村・納米里村・上土狩村・中土狩村・下土狩村・竹原村・本宿村・伏見村・新宿村、一〇ケ村）は、合計三〇ケ村で成立するが、一七〇七（宝永四）年本宿村が脱退し、それ以後近世を通じて二九ケ村で存続する。一八七〇（明治三）年麦塚村が脱退し、二八ケ村となる。

現在、上郷・中郷・下郷を組織するムラは、それぞれ上郷（深良・岩波・御殿場市神山・上ケ田・金沢・葛山・御宿・千福・桃園・富沢・長泉町南一色、一一ケ区）・中郷（石脇・佐野・二ツ屋・久根・公文名・稲荷・茶畑・平松、八ケ区）・下郷（伊豆島田・水窪・納米里・上土狩・中土狩・下土狩・竹原・伏見・新宿、九ケ区）、合計二八ケ区である。

水配人　上郷・中郷・下郷では、用水管理・運営のために水配人（すいはいにん）を選出している。水配人は合計六人で、任期は一期三年である。連続して水配人を務めることも多い。上郷・中郷・下郷とも各二名ずつ水配人を選出し、それぞれ一名が正、もう一名が副となる。全体の水配長はこれら六人の水配人のうち、上郷・中郷・下郷の正の三人のうちから選ぶことになっている。水配長を選ぶときには、六人全員が相談して、正の三人のうちから選ぶ。現在の水配長は下郷の下土狩から出ている諏訪部勉さんである。

水配人の選出には次のような慣例がある。

上郷の場合は、水配人は深良から一名と、黄瀬川の西側の上ケ田・御宿・千福・富沢のうちから一名が出ることになっている。岩波は上郷に属しているが、用水の水掛かりが少ないので、岩波から水配人が出ることはない。この二名の水配人のうち、普通は任期の長い方が正になるが、同じ任期の場合には、深良からの水配人が正になる。上郷の水配人のうち、上ケ田・御宿・千福・富沢から出る水配人は、最近ではずっと上ケ田の人が出ている。これは、上ケ田がいちばん水が掛からなくて困るので、上ケ田から出るのである。

深良から水配人を出すときには、深良のうちでも上原と新田から交替で出すことになっている。上原と新田から出すのは、上原は深良の中心に位置するからであり、新田は大洞堰があるからである。現在、深良選出の水配人である広瀬義一さん（昭和二年生）は新田からの選出である。前任者が上原から出ていたので、広瀬さんを選ぶときには次は新田だということで選ばれ、深良の区長会で承認されて決定した。

中郷の場合は、水配人は佐野から一名と、東の方で久根・公文名・茶畑のうちから一名が出ることになっている。この二名の水配人のうち、慣例では原則として佐野から出た水配人が正になる。

下郷の場合は、水配人は下土狩から一名と、上土狩・納米里のうちから交替で一名が出ることになっている。この二名の水配人のうち、下土狩から出た水配人が正になるのが普通である。

水配人の仕事　水配人の主な仕事として、正月の初登山、春の隧道点検、六月一日「鍵の受け渡し」、そのあとの「戸抜きの行事」九月の秋の隧道点検がある。

正月の初登山。水配人は正月の初登山をする。一月下旬に行くことが多い。正月に行うが、決まった日取りがあるわけではない。このとき、深良水門からうまく水が出ているか、逆川への排水がうまくいっているかを確認しているという。

春の隧道点検。たいてい四月中に春の隧道点検を行っている。五月に入ると田植えの準備があるので、四月中にやることが多い。春の隧道点検は水配人・東京発電・裾野市役所庶務課がかならず出席することになっている。裾野市役所庶務課が出席するのは、芦湖水利組合の事務局が庶務課に置かれているからである。日取りは水配長・東京発電・裾野市役所庶務課が相談して決定する。このときの点検の結果は日誌に記し、水配長が芦湖水利組合管理者（裾野市長）へ提出する。点検のあとは裾野に下って、簡単にいっぱいやることになっている。

今年（一九九一年）の春の隧道点検は四月二三日であった。深良水門を閉め、深良水門から隧道を下へ下って行く。水配人・東京発電・裾野市役所庶務課が中へ入るが、このときいちばん先頭と最後は水配人が歩くことになっている。所要時間は二時間弱である。そして、隧道の中で壁が崩れているところなどを点検して行く。

「鍵の受け渡し」。六月一日に「鍵の受け渡し」がある。これは、芦湖水利組合管理者（裾野市長）が直接出て、東京発電から深良水門の鍵を受け渡される。もっとも、この鍵は昔使ったという鍵にすぎないのであって、現在の水門は電動で動くものであり、この鍵を実際に使用することはない。このときには水配人も立ち合う。この「鍵の受け渡し」のあとは、一〇月一日まで深良水門の操作を直接管理することになっている。

「戸抜きの行事」。本当は、六月一日「鍵の受け渡し」のあと、「戸抜きの行事」があった。田植えの代掻きがはじまる直前にこれをやった。これは、深良水門の水門を、水番に立ち合ってもらって上げるのである。現在は、電動の水門であるが、以前は戸を上げていた。しかし、今では田植えが五月になり以前より早くなっているため、六月一日「鍵の受け渡し」のあとで「戸抜きの行事」があるのが本当であるが、今では「戸抜きの行事」の方が先になっている。「戸抜きの行事」は現在五月中旬にやっている。

秋の隧道点検。九月に秋の隧道点検がある。これも春の隧道点検

と同じで、日取りは毎年そのときどきで決定する。やり方も、春の隧道点検と同じである。秋の隧道点検のときには、夏、水を下し、しかも台風などがあったあとになるので、それらにより痛んだ箇所を点検し、痛んだ箇所があったときには、水をあまり使わない冬の間に修理するために、この秋の隧道点検を行うのである。

ほかに、水配人の仕事として、芦湖水利組合の懇親会や研修会がある。研修会は視察である。あちらこちらのダムや用水路を見学に行っている。毎年一回はやっている。

水配人の堰管理　水配人は正月の初登山のときと、「戸抜きの行事」のときに、深良川（新川）と黄瀬川の堰を見回る。深良川と黄瀬川から取水する水門は水配人直轄の水門なので、水配人が見回る。水配人がそれ以外の水門を見回ることはない。

なお、深良用水の堰のうち主要な堰に関しては、水利組合が組織されている。上郷の大洞堰に関しては、大洞堰水利組合が管理・運営している。大洞堰水利組合の事務局は深良財産区にある。大洞堰水利組合と水配人は別であり、水配人は関係していない。ただし、上郷の水配人が大洞堰の鍵だけは預かっている。中郷の佐野堰に関しては、中郷水利組合が管理・運営している。場所は中郷にあるが、下郷の村々を灌漑する大堰に関しては、大堰土地改良区が管理・運営している。

水配人の権限　現在では、水配人が水門（堰）の調節をすることはなくなっているが、現在上郷の水配人である広瀬義一さん（昭和二年生）が子供のころは、水配人が水門の調節をするのを見たことがあるという。田植えのころ、下郷で水がうんと不足すると、上郷でも田植えで水が欲しくても、下郷に水を廻すために水配人が上郷の水門を閉めることがあった。水配人は黄瀬川に添って下から上って来て、順番に水門を閉めて行った。しかし、水配人は上るときには、水門を閉めることが出来ても、帰りに下るときには、たとえ水配人でも水門を閉めることは出来なかったという。

このようなとき、上郷では、水門を閉められると、水を田んぼに廻してもらえなくなる。特に、下郷で水が欲しいのは、田の草取りの時期で、上郷では、「水配が来た。水が田んぼへ入らないから駄目だ。それじゃあ、休みだ。」ということになって、田の草取りをやめざるを得なかった。

水番　水配人のほかに、深良水門を調節する役目として、水番（みずばん）がいる。水番は、現在手塚さんという箱根の人がやっている。手塚さんは、箱根の人であるが長年水番をやっていて、水の按配もよくわかるので、芦湖水利組合で長年お願いしている。

芦湖水利組合と箱根神社　深良用水は芦ノ湖水を引水しているため、箱根神社と大きくかかわっている。

夏八月一日箱根神社講社祭に、芦湖水利組合では、初穂料を献納し、参列する。組合の副管理者（長泉町長）以下、組合事務局のある市役所庶務課が参列する。初穂料は、深良用水関係区の各戸二〇〇円以上ずつ奉納する（長泉町は各戸七〇〇円）。また、毎年講社祭の約一週間前には、献饌米として、うるち一五〇kg・もち九〇kg・小豆一三kg・玉葱二〇kg・馬鈴薯二〇kgを献納している。一九九〇年度の場合、献饌米の献納は七月二六日であった。

また、芦湖水利組合では秋にも箱根神社に献饌米を献納している。献饌米は稲藁三〇束・稲穂付五束・もみ一升である。また、このときには、水掛り農家から一反につき一〇〇円ずつ集め、箱根神

社に奉納している。一九九〇年度は一一月一五日であった。

冬一月三日箱根神社講社祭にも、芦湖水利組合は初穂料を献納し参列する。管理者(裾野市長)以下、組合事務局が参列する。初穂料は、夏同様各戸二〇〇円以上ずつ奉納する。また、夏同様冬の講社祭の約一週間前には、献饌米として、うるち二一〇kg・もち九〇kg・小豆一三kg・玉葱二〇kg・馬鈴薯二〇kgを献納している。一九九〇年度の場合、献饌米の奉納は一二月一九日であった。

箱根神社講社祭と水配人　八月一日箱根神社講社祭には、かならず水配人は行くことになっている。水配長はご祝儀(玉串料)を持って行く。ほかに、上郷の大洞堰水利組合(事務局が深良財産区にあるので財産区から)、中郷の中郷水利組合、下郷の大堰土地改良区でもご祝儀を持って行くことになっている。

芦ノ湖水神社祭典　ほかに、下郷のみで行っている祭りとして芦ノ湖水神社の祭典がある。毎年八月一日に行われる。当番は上土狩がやっている。この祭典のときには下郷の区長は全員集まることになっている。また、水神社には、この日芦湖水利組合からうるち米六〇kg(一俵分)が献納されている。

甲羅伏　芦ノ湖から流れ出る逆川の入り口には、芦ノ湖の水が逆川から流出しないように、現在では、水門が設置されている。ここには、以前は水門はなく、甲羅伏(こうらぶせ)があった。

逆川の甲羅伏は、石を伏せて堰を作り、その上に土俵を積んで、逆川から芦ノ湖の水が流れでないようになっていた。この石の伏せた形が甲羅に似ているので、甲羅伏といわれた。土俵は三段積みであった。そして、普段はその上を人や馬が歩くことが出来るようになっていた。甲羅伏の管理は芦湖水利組合で行っていたが、深良で人夫を出してくれということで、深良では「逆川の土俵伏せ」といって、甲羅伏の改修に行くことがあった。現在の水門の前の水門は、甲羅伏ではしょうがないということで作った。現在の新しい水門は、神奈川県側で作ったものである。逆川に関する静岡県側(裾野市)と神奈川県側の申し合せによって、水門の二m三〇cm以上の水は神奈川県側が放水してよいということになっている。それ以下は、静岡県側が取水する権利を持っている。

戦後、しばらくの間カイコンや供出で、肥料が必要なときには、秋・冬になると大野原や箱根山の草を刈り尽くしてしまい、馬を連れて甲羅伏を通り仙石原まで草を刈りに行くこともあった。本当は仙石原の土地であるが、向こうでも刈りに行かないので、刈りに行っていたのだという。

下郷　現在、上郷・中郷・下郷の中で、下郷はもっとも独立性を保持し、独自のムラ連合を形成している。それは下郷が上郷・中郷に対して下流に位置するため、もっとも水の便が悪く、用水に対する重要性が非常に強いためである。たとえば、昭和五九年穴堰を改修するときに、下郷が上郷・中郷に対して用水利用に関して念書をとっている。

下郷独自の活動として、毎年八月一日芦ノ湖水神社の祭典を下郷独自で行っており、毎年八月初旬にはかならず下郷で「箱根用水御裁許書類虫干会」を行っている。

下郷の箱根用水御裁許虫干会　下郷では、近世以来の用水利用に関する文書(以下、下郷文書と呼ぶ)を所有している。普段は、下土狩連合区で保管しており、一年に一回毎年八月初旬日取りを設定し、下郷文書の虫干会が開催される。一九九一年は八月三日に竹

原公民館で開催された。

下郷では、下郷文書の虫干会を毎年当番で廻している。当番の順番は、下土狩連合区→竹原→清水町のうち新宿区と伏見区が交替→中土狩区、の順番で廻している。一九九一年は竹原区が当番なので、一九九二年は清水町のうち新宿区が当番である。このほかに、上土狩区も下郷であるが、上土狩区は毎年八月一日水神社の祭典を行っているので、虫干会の当番をやらないことになっている。

虫干会に招待されるのは、裾野市長・御殿場市長・長泉町長・大堰土地改良区理事長・下郷選出の水配人二名（一名は水配長）・長泉町役場農林商工課である。長泉町役場農林商工課が招待されるのは、ここに農業委員会の事務局があり、ここで下郷関係の事務を取り扱っているからである。

一九九一年八月三日竹原公民館における下郷文書の虫干会は、公民館二階の広間の上段に「箱根用水御裁許書類虫干会　式次第」が掲げられ、次のような順序で行われた。

■　午前九時。集合。当番の竹原区から挨拶。「今年も無事に申し送りが出来ますように」という内容の挨拶をする。今日の段取りが説明される。

下土狩連合区で下郷文書を保管しているので、下土狩連合区が文書を持って来る。

■　午前九時二五分。当番の竹原区長から虫干会開催の挨拶が行われる。

■　午前九時三〇分。下郷文書の開封。

関係区長（上土狩・中土狩・下土狩・竹原・新宿・伏見、六区長）立ち会いのもとで、箱に納められた文書を囲み、開封する。封印を切り、今年も元通り文書があったことを確認する。

文書を広げる。文書には一号から順番に番号が付いており、一号から順番に並べる。

■　午前九時四五分。文書を広げ終わる。閲覧。

■　午前九時五五分。長泉町長の挨拶。あとの懇親会の席上で挨拶が行われる予定であったが、町長の所用のためここで挨拶が行われる。

■　午前一〇時。裾野市史調査委員関根省二氏（静岡県立沼津東高等学校教諭）の講演。午前一一時まで。文書を広げたまま、関係者はその周りに座り、関根氏の講演を聞く。

一九九一年五月『裾野市史　第六巻　資料編　深良用水』が発刊されたため、下郷が裾野市史編さん室へ講演の依頼をし、特別に関根氏が用水開削時の村々の状況について、講演を行う。

■　午前一一時。講演終了。

虫干会も終了となり、番号を確認しながら、文書を箱にしまう。

■　午前一一時二〇分。関係区長立ち会いのもと、文書の箱に封印をする。

■　午前一一時三〇分。料理（仕出し弁当）・ビールが準備され、懇親会がはじまる。

①　竹原区長から会計報告が行われる。来年は、新宿区が当番であることが紹介される。

②　来年の当番である新宿区長から挨拶。下郷のうち、清水町は新宿区と伏見区が交替に当番であり、来年は新宿区であることが述べられる。

③　大堰土地改良区渡辺四郎氏の挨拶。大堰土地改良区が下郷の水を管理していることが述べられ、今年は大場川から取水する今堰の改修が行われたことが報告される。

④　水配長諏訪部勉氏の挨拶。今年の芦ノ湖の水量が説明される。

■　午前一一時四〇分。乾杯。懇親会はじまる。午後一時ごろをめどに、終了。

下郷・竹原の状況　下郷のうち、長泉町竹原における用水利用の実態は次のようなものである。

竹原のあたりは、マサ土で水が田んぼにしみ込みやすい。マサ土とは、茶色っぽい砂地の土である。それで、いくら田んぼに水を入れても、水が溜まらない。水をずいぶん入れたところで、田んぼに水がいっぱいになる。しかし、最近では田んぼをやる衆が減って来て、しかも水路をコンクリートにしたため水が水路でしみ込まないので、水が溢れて困るくらいである。

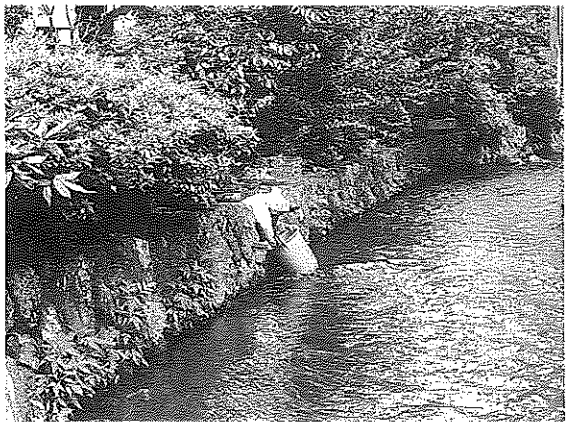
しかし、以前は逆に水がなくて困ることが多かった。水を田んぼに入れても、さっぱり入り込まず、せっかく田植えにオンナシュウ（女衆）を頼んだのに、水が入らず田植えが出来ないというようなこともあった。また、水を少しでも多く入れようとして、堰のところのゴミまで取ったこともある。そんなことで、水がないとひどいときにはドスを抜いて喧嘩になることもあった。

下郷・イッスイとニスイ　下郷では、芦ノ湖から引いた水をイッスイ（一水）、大場川から今堰で取水した水をニスイ（二水）と呼んでいる。

ジスイ　芦ノ湖から引いた以外の水、黄瀬川・ゼナザワ（瀬名沢、佐野川のこと。下郷では佐野川をゼナザワと呼ぶ。）・泉川の水は芦ノ湖の水ではないので、ジスイ（地水）と呼んでいる。

(二)　カワバタ・井戸・湧き水

深良ではたいていどの家でもカワバタを持っている。以前に比べてその生活用水としての重要性は減じているものの、現在でもさまざまな形で利用されている。モヨリ（最寄）によっても、その使用法に若干の相違があるので、以下、モヨリ（最寄）別にカワバタを中心に井戸・湧き水を含めて生活用水としての水利用の事例を記述する。



カワバタ（切久保）

須釜　須釜では深良用水の水を引いて、カワバタに使っていた。須釜では泥の赤土の中からジンダイが出るところでは井戸を掘ることが出来ない。飲み水・洗濯、鍬などの農具を洗ったり、すべてカワバタの水を使っていた。

以前は用水の水門をずっと開けていて、須釜のあたりでは上流なので水が綺麗で水位が減るということもなかった。水を汲むのは手桶で汲んだ。飲み水もお風呂の水も手桶で汲んだ。水を汲むのはお

嫁さんで、お嫁さんは畑もやれば家の中のこともやったので、年寄が子守をしていた。水を汲むのは朝で、そのあと野良とか山へ仕事に出て行った。

お風呂の水は汚れると、畑にこぼす人もいるし、でかい便所の溜めがある人はそこに捨てていた。

水道が引けたのは、昭和八年である。水道びらきがあり、提灯行列でお祝いをした。水道を引いたきっかけは、そのころ、チブスが流行したからである。チブスにかかった人は避病院に隔離され、ムラの中からは割り当てで看病に出かけた。このときチブスで人が死んで、伝染の原因が水であるということで、ユウシ（有志）のイエであり、当時の深良村長小林聿さんが中心になって水道を引いた。水道は現在では御殿場市に入っている神山から水の権利を小林さんが買って使った。須釜にはちょうどこのときに生まれたので、小林通水雄（こばやしとみお）と名前を付けた人がいる。

なお、この水道設置の記念として、小林聿の胸像が裾野市役所深良支所前に立っている。

水道が引けたあとは、飲み水とか御飯に関しては、カワバタの水を利用するということはなくなった。

カワバタには、アカッパラ（ウグイ）・ウナギ・カニとかいろいろいるので、今でもモジリをかけて獲って食べることがある。アカッパラは焼いて甘露煮、ウナギは蒲焼き、ケガニ（毛蟹）はうでて（ゆでて）醤油を入れて食べる。エビやカジカは昔はいたが今はいない。芦ノ湖の湖水から来るのであろう、シジミもいる。これは、味噌汁に入れて食べる。

しかし、このあたりでは魚を獲って商売にする人はいない。

原　原では水はたいてい古川から引いたカワバタの水を利用していた。井戸があるイエもあったが、普通はカワバタを利用していた。

上原　上原では、深良用水の用水路から水を引いて、カワバタを作っていった。カワバタの水は、用水の水なので、調節しながら使ったので、冬でも枯れることはなかった。

上原ではカワバタのほかに、井戸がたいていどのイエにもあった。三メートルも掘れば水が出た。志村家の井戸は深いほうで、それでも六メートルも掘れば水が出て来る。それで、カワバタの水を風呂・洗濯・野菜を洗うのに使い、井戸水を飲み水・御飯の水に使った。

井戸が浅いイエでは、夏になると井戸枯れということがあり、そういうときにはワキ（脇）へ水をもらいに行くということもあった。

震橋　震橋ではほとんどがカワバタの水を使っていたが、大庭幸一さんのイエだけには江戸時代の終わりごろ作られたという井戸があった。飲料水などは、他のイエからも大庭家の井戸へ汲みに来ていた。

遠道原　土屋家はエエナ（家名）がカワバタである。

以前は土屋家では、カワバタで朝早く手桶で水瓶に飲料水を汲み上げていた。野菜を洗ったり、田植えの種籾を浸したり、馬やマンガも洗った。夏は風呂の水も汲んだ。カワバタではカニやウナギも獲った。

町田　町田ではカワバタよりも生活用水としてタンクの水が利用されていた。町田では昔は南堀の養福寺というところ（現在、大庭三郎家がある近く）に山の水が出ていて、そこまで水を汲みに

行った人もいた。それが、昭和八年に村に水道が引かれるまで町田の松井家（現、松井謙一）が、その水を集めてタンクを作り、そこから屋敷まで土管を埋けて水を引いてきた。ちょうど、南堀の現在大庭三郎家がある近くのところにタメ（溜め）と水道の蛇口を作り、町田では二ケ所にタンクを作り、水道の蛇口を設けて水を出すようにした。この二ケ所は町田に上組と下組があるので、それぞれで利用していた。たいてい、朝・晩バケツを持って水を汲みに行った。汲んだ水はイエの瓶に入れておいた。

南堀　南堀では深良用水の水ではなく、泉川の水を引いて、カワバタに利用している。井戸を持っているイエは、二、三軒しかなかった。カワバタの水が増えたり、減ったりすることはほとんどない。鍋とか食器もここで洗ったし、長靴・地下足袋もここで洗っている。洗濯もカワバタでしていた。子供の水浴びをカワバタでさせたこともある。

泉川（南堀）＝大庭三郎氏提供＝

南堀ではちょうど大庭一さん（一九二三年生）が小学校四年生のころ水道が引けた。水道が引けると、飲み水や風呂の水は水道の水を使うようになった。しかし、水道が断水すると朝、水が綺麗なうちにカワバタから水を汲んできていた。飲み水などは、断水したときには湧かして沸騰させてから飲んでいた。

このほか、南堀では町田の松井家が引いたタンクの水を、大庭三郎さんのイエのところの蛇口までもらいに行くこともあった。水道が断水すると、ここへ水を汲みに行っていた。バケツを持って水をもらいに行っていた。

(三)　水車

深良では農業用水としての深良用水、生活用水としてのカワバタ・井戸・タンクの利用のほかに、水車を廻すために水を利用している。

林一義宅の水車（和市）

上丹の勝又正義さん（一九一七年生）のイエでは、親の代に水車小屋を持っていた。水車小屋はイヤ（居屋）と棟続きであった。この水車小屋は明治末年ごろに作られたものであり、昭和一八年に取

り壊した。水車は金を取って営業していた。利用する人は上丹の人が多く、一斗くらい（多いイエで二斗）米を背負子で背負って持って来て、一日かけて米を搗いた。

上丹では勝又家の水車のほかに、バッタンヅキヤ（ばったん搗き家）と呼ばれる共同の水車があった。これは、二、三人で交代で使っていた。しかし、ここでは他人のものを上げてきたり、前に使っていた人のものを持って行ってしまうなどする人が出て、争いごとが絶えなかったという。このバッタンヅキヤは、大正の末年ごろまではあった。

原では、上組と下組にそれぞれ水車があった。上組はちょうど現在勝又俊博家の前、下組は勝又嵩夫家の前にあって、米を搗いていた。人によっては、上丹の勝又家まで持って行って、米を搗いてもらう人もいた。

町田でも上組と下組にそれぞれ水車があって、共同で使っていた。

第三節　箱根山と生活

(一)　深良財産区

深良財産区とモヨリ　箱根山は現在では植林されているところが多いが、以前はだいたい下から順に、サツマ（薩摩芋）、カヤバ（萱場）、ザツボクリン（雑木林）になっていた。深良では近世以来の入会地を、現在でも共有地として管理するために、深良財産区を組織している。深良財産区は現在、深良支所長が管理代行をしている。岩波は入っていない。それぞれのモヨリ（最寄）が持っている共有地はなく、深良財産区からモヨリが土地を借りるという形式でザツボクリン（雑木林）・カヤバ（萱場）・植林などを持っている。

上丹・須釜・新田　上丹と須釜と新田がひとつにまとまって、深良財産区から借りて、共有地を持っている。

以前は山の木が売れたので、七、八月ごろ一年に何回か下刈りがあった。下刈りに行って来ると、かならず世話人のイエに集まりトリ（鶏）をつぶして食べていた。以前はトリをオイバナシ（追い放し）に飼っていたので、それを食べたのである。

原　原では現在、旧戸二〇軒で深良財産区から共有地を借りている。原は、明治末から大正ごろには旧戸は、一二三軒あったという。それがのちに三軒がよそへ転出して共有地の権利を失った。その後、現在まで分家は入れず、旧戸二〇軒のまま共有地を維持している。

上原　上原では深良財産区からモヨリが土地を借りるという形式で、共有地を持っている。上原の場合、全部で三二町歩あり、四二戸が入っている。これらのうち、クヌギ林があるところは、モヨリブン（最寄分）と呼ばれていた。また、もともとはカヤバ（萱場）で、のちに深良小学校の校舎建築のために植林した旧学林・新学林はマカナイブン（賄い分）と呼ばれていた。マカナイブンの植林は、この旧・新学林の木を売り校舎建築の資金にすると同時に、ここの木を建築用材に使い、作られた。現在の裾野市立深良小学校校舎の以前の校舎は、この旧・新学林の木で作られたものだった。このほか、上原では屋根替えの萱を刈ってくる堀切萱場、「紀元二

千六百年」記念で杉・檜（特に、檜）を植林したところなどがある。

切久保・遠道原　切久保と遠藤原は共有地を、「切遠」（きりえん）として、ひとつにまとまって持っている。

震橋・町田　震橋と町田では共有地を「町震」（ちょうしん）として、ひとつにまとまって持っている。明治ごろまでは四七軒が権利を持っていたが、昭和二二年分家のイエの五、六軒がいくらかの金額のお金を払って加入して、終戦後六二軒になった。現在では植林してあるところが多い。「町震」では山の道づくりを六二軒で、七月の最後の日曜日にやっている。やり方は毎年約二〇軒ずつが交替で、道の両側の草を鎌や鉈で刈っている。また、六二軒からお金を集めて、山の道の舗装工事をすこしずつ行っている。

南堀　南堀でも四三町歩の共有地を持っている。南堀ではもともとはザツボクリンやカヤバにしてあったが、「紀元二千六百年」（一九四〇年）の記念行事のときに、それまでザツボクリンであったところに植林をしている。

和市　和市も共有地をまとまって持っている。

(二)　カヤバ

箱根山の共有地のカヤバからは草（萱など）を刈り、馬の飼料にしたり、堆肥にするために馬に踏ませたり、屋根替えに使った。

草刈り　上原の志村正夫さん（一九一八年生）は、上原のカヤバへ草刈りに行っていた。草は萱が多かった。草刈りは五月端午の節句が終わると刈りはじめ、八月いっぱいまで刈っていた。馬を連れて行くので、刈りながら草を馬の飼料にもしていた。カヤバはオオヤケモチ（公持ち、共有地）や自分持ちのところの萱は刈ってきてもよかったが、カヤバのうち、ここの萱を屋根替えに使うというと、そこからは刈ることは出来なかった。

草刈りは朝と夕方に行った。朝飯を日の出くらいには食べて出かけて行ったほうが楽なので、朝草を刈って、一〇時か一一時ごろには帰って来た。天気は朝霞は心配しなくてもよいので、朝天気ならば出かけて行った。馬の小荷駄に六把付けて帰って来ていた。草は六把で一駄であった。そのあと、馬も汗をかいているので、川に連れて行って水をかけてやった。そして、また、二時ごろから山へ出かけて行った。

夏になると、天気のよいときを見はからって、土用干しに何回か出かけて行った。土用干しは弁当持ちで行った。土用干しのときには、萱を刈ったまま置いておいて、それを夕方まとめて持って帰って来た。これはうまくすると馬の冬の間の飼料になった。馬の飼料としては、このほか、藁をやることもあった。土用干しの萱は納屋にいっぱい積んだ。納屋にいっぱい積むとひと冬よかった。

深良の中でも新田・須釜・上丹の人は、大野原へ草刈りに行く人も多かった。深良は財産区が大野原に約二〇町歩草刈り場を持っていて、それを利用したのである。このほか、新田では大野原の中に権利を買って、個人で草刈り場を持っている人もいた。大野原は芝草・ウズラモグが多く、萱は少なかった。箱根山へ草刈りに行くときには駄馬で行くことが多かったが、大野原へは馬力で行った。

また、田んぼの畦の草を刈って来ることもあった。

ヤマヤキ（山焼き）　上原では萱のヤマヤキ（山焼き）を毎年二月中旬ごろやっていた。出ないうちは、日当を出した。日当はそのときそのときで決め直していた。そして、ヤマヤキのあとは、こ

の日当でかならずいっぱい飲んでいた。

厩肥　カヤバから採って来た萱や、冬はザツボクリンからコマンザライでかいてとって来た枯葉を馬に踏ませて、堆肥にしていた。現在では厩肥を作ることは少なくなっている。萱や枯葉を厩に入れて、馬に踏ませて馬の糞尿をしみ込ませて、厩から出し、腐らせた。たいていは、厩と堆肥小屋は続きに作られており、堆肥小屋へ出すのである。堆肥を使うときには、厩から出していきなり使うこともあったが、普通は堆肥小屋から出して使い、足りない場合には厩から直接出して使っていた。

人間の大便・小便を使って草や枯葉を腐らせ、堆肥にすることもあった。外便所がタメ（溜め）になっていたので、残飯でもなんでも捨てていた。それを使った。また、小学校の便所から一週間に二回くらい便所を掻い出しに行っている人もいた。

現在では馬や牛を飼っているイエはほとんどないので、堆肥を作るには、草を刈って来ると、牛を飼っているイエから買ってきた堆肥と混ぜて、堆肥を作っているイエもある。

屋根替え　現在では深良のイエはほとんど瓦屋根になっているが、以前はワラヤネ（萱で葺いた屋根）が多く、ほかに杉皮で葺いた屋根、トタン屋根、瓦屋根があった。

ワラヤネの萱はカヤバから刈って来ていた。

南堀ではワラヤネの葺き替えは、毎年一月一一日のハツジョウカイ（初常会）のときにカヤムジン（萱無尽）といって、その年の屋根替えのイエを決めていた。屋根替えの当番になると、屋根の骨組みに使う竹の用意から縄の用意、竹を結ぶ箱根竹の細いひごまで全部用意しなければならなかった。竹は「九月のヤミダケ（闇竹）」といって、九月にとるのがいちばんいいので、それをカヤムジンではなく、自分のイエだけでとっておいた。萱を刈るのは、一一月から二、三月ころまでの間で、三月にヤマヤキ（山焼き）をやるので、それまでに刈って来ていた。南堀のカヤバから刈って来ていた。

トタン屋根　南堀の大庭三郎さん（一九二五年生）のイエは、大正一三年にトタン屋根にしたので、そのときからカヤムジンを抜けた。大庭家ではこのトタン屋根の下には、杉皮を引いていた。

原では戦後は、イエの新築でワラヤネをやめ、カヤムジンを抜けたとき、抜けたイエはカヤムジンで出る分のお金をお見舞いとして渡すこともあったという。

杉皮屋根　南堀では杉皮屋根のイエも多かった。特に、戦時中から戦後にかけて、昭和二三年ごろまでは、杉皮屋根のイエが多かった。杉皮屋根は七年くらいしか保たない。それで、イセキではなく、分家を出すときにはイエを建ててやらなければならないので、「七年くらいすれば、ゼニコ（銭こ）が出来るら」とかいって、杉皮の屋根でイエを作ってやった。杉皮は自分でとってきたものを使っていたのではなかった。樵は山で木を切っても日当を見てくれないので、切った杉の皮をむき、二尺×一尺の皮を全部で一八枚、つまり一把でたばねて、製材へ売っていた。それが樵の賃金になっていた。杉皮屋根を葺くときには、その杉皮を製材から買ってきて使っていた。杉皮屋根を葺くときには、イイガエ（結い替え）といってイイ（結い）でやった。杉皮で葺いた屋根は傾斜が軽く、地震には杉皮屋根はいいと言われていた。これに対して、ワラヤネは杉皮屋根に比べて傾斜が急で重い屋根であった。

瓦屋根　南堀ではじめて瓦屋根が出来たのは、昭和七年か八年ごろであった。はじめのころの瓦屋根はドブセというやり方であった。ドブセのときには、「瓦千年、手入れ毎年」といって、瓦の下の土から水が漏って来るので、毎年手入れをしなければならなかった。瓦の土はこのあたりではとれないので、そのころは遠州から運んで来ていた。

ワラヤネの消滅　南堀では、ワラヤネがなくなったのは、昭和四〇年ごろであった。矢崎電線・トヨタ・関東自動車などの住宅が南堀に出来て、よその人たちが入ってくるようになってから、生活が変わってきた。最初は、まばらに入って来たが、旧戸の付き合いは出来ないということで、新戸だけの住宅を作ったのである。宅地造成をして、集団で入って来た。南堀と関係の深い人は少なく、最初は関東自動車の関係の人が多かった。ちょうど、このころから南堀でワラヤネがなくなって行ったという。

原でもだいたい昭和四〇年ごろにワラヤネはほとんどなくなったという。

ワラヤネと火事　ワラヤネの時代には、火事での類焼がおこりやすかった。たとえば、切久保では、一九三九年一一月二六日二班で火事があり、一二軒が全焼した。火の回りが早かったことが全焼の原因であるが、ワラヤネであったことも大きな原因であると考えられている。

㈢　ザツボクリン（雑木林）

共有地の中にはザツボクリン（雑木林）になっているところもあった。ザツボクリンはクヌギ林が多かった。ザツボクリンからは冬に枯葉を集め、それをサツマグラへ運んだり、堆肥にするほか、ザツボクを利用して炭焼きを行っていた。

そのために、ザツボクリンは植林やカイコン（開墾）をしないでわざと残したり、あらためて苗木を植えることもあった。

『枯葉をかく』　箱根山は大正時代に植林をしたので、トウヤマ（遠山）の四㎞以上のオキ（沖）へ行かないと、ザツボクがなかった。一二月から二月にかけて、クヌギ林へクヌギの枯葉をかきに行った。コマンザライで枯葉を集めた。集めると、まとめて一把ずつ合計六把にして、馬のコニダ（小荷駄）にして持って帰って来た。家内じゅう三人くらいで行って、一日三回くらいは行った。冬の仕事で、ひと月くらいはやっていた。

上原の志村正夫家では枯葉をかいて来ると、枯葉をサツマグラ（薩摩蔵）へ運んだ。ほかに、志村家では田んぼがえらかった（多い）ので、田んぼにも運んで入れていた。枯葉をサツマグラへ運ぶと、サツマグラの下に敷いて、その上にサツマ（サツマイモ）を置き、芽を発芽させた。発芽すると、五月いっぱい六月上旬ごろへかけて、サツマの芽を畑に挿していた。サツマの芽を挿すと、サツマグラの枯葉はいらなくなるので、これも田んぼに入れた。以前はサクヌキッテ（作を切って）、小麦の間に、サツマジ（薩摩地）を作り、サツマの芽を挿した。サツマジはいちばん下に藁を敷き、その上に堆肥を置き、さらに表土をかぶせて作った。

サツマを作る人は昭和三〇、四〇年ごろから減って行って、今では作る人はほとんどいなくなっている。上原の志村正夫さんは今でもサツマを作っているが、最近では珍しいくらいである。

また、枯葉は馬に踏ませて、堆肥にすることも多かった。

炭焼き　ザツボクリンのザツボクを利用して、炭焼きをすることも多かった。深良ではどのイエでも自家用で、専門にやる人はいなかった。窯も何軒かで共同持ちであった。但し、炭を焼くには技術がいるので、焼くのは特定の人がやっていた。

炭焼きに使う木は、クヌギをはじめとしてナラ・カシなど落葉樹が多かった。だいたい、直径一二～一三㎝くらいの木を切り、大きさをそろえて焼いた。

南堀の大庭三郎家では、昭和四七年までは自家用の炭を焼いていた。専業ではなく自家用なので、秋末から春仕事が始まるまでの間の農閑期に炭焼きをしていた。

現在、深良では町田の松井謙一家がおなじ町田の小沢則親さんに頼んで炭を焼いてもらってるくらいである。松井家では現在でも蔵に炭を貯蔵している。

モシキ（燃し木）　ザツボクリンや植林してあるところからは、枯れ枝であるならば、たとえどのイエのものでも採ってきてよいことになっていて、それをモシキにした。モシキは、たいてい年寄とかオンナシュ（女衆）、子供の仕事で、オトコシュ（男衆）が行くことは少なかった。軒先へ積み込むときにはオトコシュがやってくれた。モシキを三島のほうへ売ることもあった。

しかし、今ではモシキを採る人はほとんどいない。二五年くらい前までは何でもモシキを焚いていたが、新しいイエを作るとモシキを焚くのをやめるのである。古いイエに住んでいる人には今でもモシキで焚いている人もいる。

上原の志村正夫さんは小学校の時分には、小学校から帰って来ると、「飯をくんねぇぞ」と言われて、山へモシキ採りに行っていた。モシキ採りは子供の仕事であった。トオヤマ（遠山）へ行って枯れ枝を採って来ていた。子供は田畑を手伝うのも当たり前で、小学校へ行くにも弟や妹を背負って行っていた。大人になると、馬のコニダ（小荷駄）でモシキを山から採って来た。コニダは三把ずつ馬の背に交互に付けて、一駄六把になった。太い薪だと、四把で一駄になった。そのほかに、二把は自分で背負い、これはワタクシ（私）だから自分のこずかいになるということで、売って来る人がえらかった（多かった）。一把六銭くらいであった。

なお、コニダは戦後馬力が入って来てから、楽になったという。馬力は昭和三〇年ごろから一般農家でも使うようになった。

㈣　アラクオコシ（荒く起こし）とカイコン（開墾）

ヤキバタ（焼畑）　箱根山では共有地のザツボクリンのところをヤキバタにすることもあった。また、町田の松井家や新田の小林家などが山林地主であったので、松井家や小林家が植林してあった木を伐採したあと、そのところを借りて一時的にヤキバタをやることもあった。この場合、地面を綺麗にしてくれるということで、地主の方でも喜んで貸してくれたという。冬にザツボクの木を切るとモシキに採れるのは採って、残りを焼いていた。冬は木を切ると乾燥していてしまりがいいので、ヤキバタの木を切るのは冬の仕事であった。木を切ると三月までに焼いて、種を播くことが出来た。

アラクオコシ（荒く起こし）　ヤキバタはもともとは桑を植えるためのアラクオコシ（荒く起こし）であった。カイコン（開墾）でサツマをやるようになったのは、戦時中から戦後にかけてだいたい昭和三〇年ごろまでで、供出や食料事情が悪くなってからで、そ

れまではカイコンということはなかった。

アラクオコシをすると、最初、大豆か小豆を播いた。ヤキバタは、最初、土壌がアルカリ性になるので、豆類がよいのである。そのあとは、陸稲を作り、さらに長くなると桑を植えていた。粟や稗をやることは少なかった。

秋にヤキバタをやることもあったが、そのときには蕎を作ることもあった。

シシ（猪）　箱根山にはシシ（猪）がずいぶんいて、アラクオコシのところをシシが荒らしてしまうことがよくあった。上原の志村正夫さんはワカイシュウ（若い衆）の時分、夜交替で山の番をして、シシを追って爆竹を鳴らして歩いたことがある。あるいは、ヤキバタにした周囲に一mくらいの穴を掘って雑草か何かをかぶせておいた。シシはそれでも、中に入って来た。最近でもシシはいるがひどい被害があることはない。

カイコン（開墾）　戦時中から戦後昭和三〇年ごろにかけて、カイコン（開墾）が盛んであった。箱根山のうち、自分の地所や深良財産区の土地をカイコンした。深良財産区の地所をカイコンするときには、ザツボクリンとかカヤバをカイコンした。だいたい、サツマと小麦を作ることが多かった。特に、サツマがえらかった。

カイコンをすると、赤土のところはサツマがよく出来た。それで、サツマは「三島甘藷」といって、たくさん大阪へ出荷していた。大阪では、評判であったという。裾野駅から貨車で一日三台も出していたこともある。

第四節　四季の変化と動植物

(一)　風と気象

富士のカサグモ（笠雲）　富士山にカサグモ（笠雲）がかかると雨になるといわれる。しかし、これは風向きによっても違うという。たとえば、風が富士川の方から吹いて来ると、雨になる。沼津の方から吹いて来ると風は強いけれども天気がよくなる。御殿場の方から風が吹くと寒くなるといっていた。

また、この富士山のカサグモはカサが下へ流れると雨が降り、上へ上ると晴れになるともいう。

箱根山からの風　箱根山から風が吹いて来ると天気が悪くなるという。

箱根山から吹く風は風が強くて、萱葺きの屋根が飛ばされることもあった。たとえば、上原の志村正夫家では、イエが前の建物のとき、前がちょうど東（箱根山の方角）を向いていたので、雨戸をふっ飛ばされたことがあった。

また、箱根山の大涌谷の硫黄の匂いがすると、雨が降るという。

ナライ　梅雨どきナライが吹くと特に湿気が強くなる。

朝の地震　朝の地震は、「その日のたてこぼし」といって、雨になる。

山の天気　山へ行くときには、天気が変わりやすいので、たいてい雨具の準備をして行った。

(二) 自然暦

コブシの花　コブシの花が咲く頃になると、穴にしまっておいたイモを出してきて、芽をみる。

芦ノ湖のワカサギ　以前はちょうど桜が咲くころから五月ころになると、箱根山へ登って芦ノ湖へ行き、ワカサギを獲りに行った。ワカサギは子供を産みに波と一緒に水際に打ち寄せられて来るので、浜に打ち上げられ、そのワカサギを獲って遊んでいたのである。

芦ノ湖へ行くと、以前はちょうど芦ノ湖の水門（湖尻水門）のおじさんが、上原から出ていたので、子供たちはおじさんに船に乗せてもらうのが楽しみだった。しかし、芦ノ湖の漁業権は神奈川県のものなので、芦ノ湖で魚を獲ることは出来なかった。

ワラビ　四月ごろになると、山へワラビや蕗を採りに行った。『遊びっこ』といって、弁当持ちで行った。今では植林してある木が大きく育ってしまい、あまり山菜が生えることがなくなって来た。

冷害　六月になって富士山に雪が降るようだと、その年は冷害になるという。

(三) 動植物と魚

漁業　深良のあたりでは、専門に魚を獲る人はいない。好きな人がモジリを竹で編んで魚・どじょう・ズガニを獲るくらいである。

ズガニ　ズガニを捕まえるには、モジリを使う。モジリの中に鮭の頭や鯖の切り身を入れておくと、そこにズガニが入るのである。モジリは夏は下流の方へ口を向け、秋は上流の方へ口を向けておいた。捕ってきたズガニは塩ゆでにして食べた。

現在では浄化槽などを使い、川が汚れているので、ズガニを食べる人はほとんどいないという。

ウナギ・ウグイ　古川にはウナギやウグイがいるのでこれを捕ることもあった。

シシ（猪）　箱根山にはシシ（猪）がずいぶんいる。カイコンの畑や山沿いの畑のサツマをシシがずいぶん荒らしたものであった。植林してある場合でも、根本の方に自生している長芋をシシが掘り出して食べることがある。

また、須釜の駒形神社の前くらいまでは出てきてサツマをみんな食べてしまうことがあった。

最近ではシシによる被害は少なくなっている。

ハクビシン　最近ではハクビシンがえらい（多い）。ここ五、六年くらいハクビシンが出てきては、みんなトウモロコシを食べてしまう。以前はカイコンで山に食物があったが、今では植林で山に食物がないので、下りてくるようになった。御殿場線があるあたりまで出て来る。しかし、ハクビシンは保護動物で捕ることは出来ない。

猿　猿も箱根山の高いところにはいるが、あまり出てくることはない。最近、須釜のあたりでは、出ることもあるという。

ムジナ　ムジナもいる。これもトウモロコシを食べる。

鳥　鳥もトウモロコシや陸稲などを食べてしまう。特に、鮎センター、工業団地が出来てから鳥が増え、陸稲は作ってもやられて

しまうことが多くなった、という人もいる。

キツネ　夜、下和田から駒門へ大野原越しに行った人が、途中暗がりの中で突然提灯を差し出された。やがて、この提灯は消えた。これはキツネに化かされたのだという。

あるいは、道で知らない人にキャラメルをもらったら、それはキツネに化かされたのであるという。

須山の方へ米を運ぶ途中道を間違える人がときどきいた。それはキツネ火の仕業であるといわれる。また、箱根山で行方不明になると、それはキツネ火の仕業であるといわれた。

上原の渡辺勉さん（一九一〇年生）は、しとしと雨のときには、キツネ火が出るから早く寝なさいといわれたという。

バッタ　陸稲をバッタが食い荒らすことがある。

センブリ　カヤバなどに生えているセンブリを採って来て、煎じて、胃の薬として飲むといい。

ドクダミ・ゲンノショウコ　ドクダミやゲンノショウコは、腸にきく。日陰干しにして、煎じて飲むといい。

第五節　災害と大事件

(一)　関東大震災

深良の人々にとって記憶の中に鮮明に残っている最大の災害は、一九二三（大正一二）年九月一日関東大震災である。関東大震災は人によっても経験が異なるので、以下、経験者別に記述する。なお、関東大震災による生態系の変化というようなものについては聞くことが出来なかった。

〈事例1〉　切久保の加藤もんさん（一九〇二年生）のイエでは、地盤の固いところにあったので、中戸が外れた程度で済んだ。しかし、震災のあとは三晩ほどはイエの外へ出て寝た。飯炊きも外でやっていた。

また、関東大震災のときにはレールが曲がったために、御殿場線の汽車が踏み切りの上で止まってしまったという。

〈事例2〉　町田の神戸ちかさん（一九〇五年生）のイエでは瓶の水がこぼれた程度で、たいした被害はなかったが、念のため避難した。松寿院のあたりの田んぼでは、地割れがあったという。

〈事例3〉　現在、南堀に住む大庭敬一さん（一九一四年生）は九月一日、学校が半日で学校から帰って来てから深良神社のでっかい欅の木の下で遊んでいたら、地震がやって来た。大人が、蜘蛛の子を散らすように逃げて行くのが見えた。この日は、ユサユサ揺れ通しで、バンカタ（晩方）四時ごろまた揺れた。このときには、ものすごい音がして、地鳴りがした。

〈事例4〉　深良ではなく、岩波の事例であるが、岩波の井上丹令さんは関東大震災のときには、竹藪の中に寝た。竹を切って下に藁を入れ、小屋を作ってその小屋に寝ていた。ちょうど、小屋に寝ているころ「朝鮮人が来るってよー」といって、デマがとんだことがあった。

岩波では震災のときに、湧き水が出ていたところの水が止まってしまって、天秤棒で水を担いで田んぼに運んだこともあった。

(二) 水害と台風

水害　深良ではときに水害に襲われることもあった。

記憶に残る大きな水害として、大正年間、岩波の方で土手が崩れ、大水があった。田畑には大きな被害はなかったが、このときは切久保からも手伝いに行き、土嚢をせいて石を積んで水を食い止めたという。切久保のあたりでは、それ以後、大水を経験したことはないという。

アイオン台風　昭和二三年アイオン台風のときには、南堀で床下浸水があった。それ以後、それ以前、床下浸水は南堀ではない。

狩野川台風　昭和三三年狩野川台風のときには、深良では被害はほとんどなかった。

富士川台風　昭和三四年富士川台風のときには、電柱が倒れたり、大木が倒れたりしたこともあった。

第六節　御殿場線と生活

(一) 御殿場線と生活の変化

御殿場線　深良はちょうど岩波駅から裾野駅までの間、御殿場線の線路が通るところに位置している。深良の中では北から順に、新田、上原、切久保、震橋に線路が通っている。

御殿場線は旧東海道本線であった。一九三四（昭和九）年熱海駅と函南駅に丹那トンネルが開通し、それが東海道本線になるまでは、御殿場線は複線の東海道本線の本線であった。丹那トンネル開通により、「御殿場線」の名称を持つことになったのである。

複線から単線へ　御殿場線はもともと東海道本線であったために複線であったが、戦時中物資が不足したとき、軍がレールの鉄を利用するために、持って行ってしまい単線にしてしまったのである。以来、現在に到るまで単線のままである。

岩波駅　丹那トンネル開通後の御殿場線の駅は、沼津→下土狩→裾野→御殿場の順番であった。岩波には、信号所があるだけであった。そのため、深良の人々が御殿場線を利用することは不便であったので、岩波に駅を作ってくれという運動があったが実現しなかった。

御殿場線と世間　ところが、このあたりの人が沼津の軍需工場へ徴用で働きに行くために、軍の要請で、戦時中、大岡、岩波、富士岡の駅が新設された。それで、このあたりから沼津まで、約三〇分で行けるようになった。戦後も、御殿場線で沼津方面へ勤めに出やすくなった。

深良のあたりでは戦前はほとんどが専業農家であったが、御殿場線で農閑期には製糸工場へ働きに出るものもいた。しかし、主人が勤めに出るようなことはなかった。

汽車と時刻　御殿場線が東海道本線であった時代には、ここを特急が走っていた。特に、昔は蒸気機関車なので、列車が通るとその音で時間がわかった。「やぁー、『富士』が来たから昼になった」とかいっていた。

また、昔は貨車が多く、多い貨車だと六〇くらいもあるのもあった。それで、御殿場線の線路が通る上原などでは、汽車のためにイエが揺れて、電球がよく痛んだ。また、天気が悪いときには、汽車

の車輪が空転することもあった。

新田のあたりでは、ちょうど一〇〇〇分の二五勾配のところであるため、坂が急でたくさん石炭を焚くところであった。それで特急などが通ると、話をしていてもお互いに聞き取れないということもあった。

線路の草刈り　上原の志村正夫さんは、国鉄にいっぱい持って行って許可を取り、御殿場線の線路の草を刈らしてもらっていたこともある。この草は馬に踏ませて堆肥にした。現在では線路の草を堆肥にすることはないが、郷友会があって、一年に一回奉仕で草刈りをしている。

新田の広瀬義一さんも御殿場線の線路の草を刈っていた。毎年、入札があり、区間を区切って草を刈ることになっていた。特に、田植えのころは忙しくて山まで刈りに行く手間がないので、線路の草を刈るとちょうどよかった。

(二)　御殿場線の事件

脱線転覆事故　ちょうど一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災のあと、九月六日に裾野駅で脱線転覆事故があった。当時はまだ東海道本線の本線で、この線路は御殿場の方から来ると、裾野駅までずっと下りになっている。まだ、岩波駅はなく信号所であった。

この事故のとき、南堀の大庭敬一さん（一九一四年生）はちょうど岩波の信号所のところで遊んでいた。それで、たまたま信号所の所から見ていると、下りの汽車のブレーキがきかなくて、「汽車がはやーぞ、火を吹いてらぁー」と言っているうちに、裾野駅まで走って、構内にそのまま突き刺さって脱線転覆した。怪我人がいっぱい出て、待合室は血の海であった。レールも見ると弓のように曲がっていた。

轢死　まだ、東海道本線のころ、新田の踏み切りで耳の悪い人が轢かれたことがあった。

事件　本線のころには、特急のつばめも通っていて、子供が線路の上で手を広げて、その特急を止めたなどということもあった。

（岩　田　重　則）

第二章　社会と生活

第一節　家と屋敷

(一)　屋敷構えと付属屋

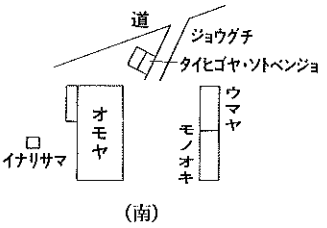
隣の境はのづら石　深良は広範囲にわたっているうえに、建て替えられた家も多いので、現状から一般論を言い切ることはむずかしい。現在見られる家屋敷と聞き取り調査から、何軒かの家と暮らしが浮かび上がってくる、それを述べてみよう。

道路や隣家との境は、特別に生け垣などを設けないのがふつうで、せいぜいのづら石をところどころに置くくらいだった。たまに柿の木やユズなどを植えることがあったが、それできっちり境界線という認識はなかった。

道路から屋敷地への出入り口と、そこから家の出入り口までを、ジョウグチという。道路からの出入り口だけしか呼ばないところもあるが、「ジョウグチが長い、短い」という表現があるので、家まで続くとも考えられる。

オモヤ（母屋）はオオヤとも呼び、多く東向きに建てられ、オモヤの前に農作業のための広い空間がある。その空間を取り囲むように、屋敷地の片隅に寄せて数棟の付属屋が並び、オモヤの出入り口に近いところにソトベンジョ（外便所）、タイヒゴヤ（堆肥小屋）などが配置されている。

付属屋いろいろ　図Ⅱ－1は上須のK家の屋敷構えである。ナガヤクラ（長屋蔵）は、北側がウマヤ（馬舎）で、南側がクラヤ（倉屋）と呼ばれている。ウマヤでは、かつては馬を二頭飼っていた。クラヤは農作業の道具などを入れる物置のようなもので、米を入れる蔵もあったという。南堀では単にナガヤ（長屋）と呼んで、道具や籾や一年分の米をしまうという。ソトベンジョは農作業の足ごしらえを解かずに使えるため、どこの家でもたいていの家ではじめはソトベンジョだけだった。タイヒゴヤはタイヒシャ（堆肥舎）とも呼ばれ、堆肥を作るための建物であった。



図Ⅱ－1　K家屋敷構え略図(上須)

オモヤの裏には石造りのオイナリサン（お稲荷さん）がある。屋敷神としてオイナリサンがある家は少なくない。飼っていた馬が死んで、馬頭観音を建てる家もある。

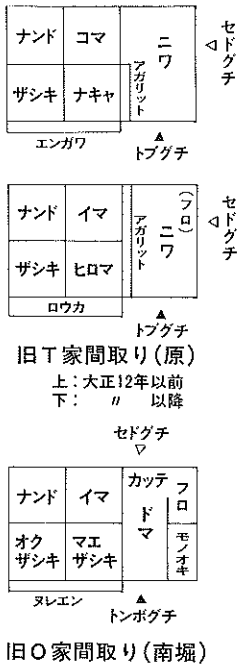
このほかに、別棟のナガヤを建てて年配者などが住むインキョ（隠居）、井戸、屋敷墓、石碑などを屋敷内に見ることができる。

屋敷墓　震橋などには、屋敷のコバ（端）に墓が立っている家がある。須釜でも明治二二年までは屋敷内に墓があった。屋敷に墓がある形が古いと言われ、「屋敷内に墓のある家は財産家」と言われる。分家が本家の墓地に土地を借りて墓をつくったりすることがある。

(二) 間取りと部屋の使い方

間取りと各部屋の名称　基本的には田の字型で、多くは東に面して建つ。調査した家ではニワ（屋内の土間部分）が居住部分の右に位置する家が多かったが、事例が少ないためこれが一般的な形式とは言いがたい。

旧T家は、大正一二年の震災で壊れる前とその後建てた家とでは部屋の呼び名の記憶が違っている。土間部分をニワと呼ぶのはもともとの形であろう。イセキムスメで八八歳になる高橋はなゑさんは、「昔はニワは家の中だったけど、今じゃ外のことになった」と話している。



図II－2　間取り概略と部屋の名称

居住部分の四つの部屋の名称は、今では家によってまちまちだが、古い呼び名を覚えている方がたの記憶から、昭和の初めころまでは、ニワに近い側の奥から、コマ、その左隣がナンド、表側に出てザシキ、右隣がナキャアであったと思われる。このうち、ナキャアはかなり早い時期からヒロマと呼ばれるようになった。御殿場から嫁に来た年配の人が、「こっちはナキャアといわずにヒロマというのかと思った」という。

家への出入口はニワにあり、玄関にあたるところがトブグチ（トンボグチともいう）、裏口にあたるのがセドグチと呼ばれた。トブグチはオオド（大戸）がはまり、コグリ（クグリともいう）という小さな出入口がとりつけられていた。

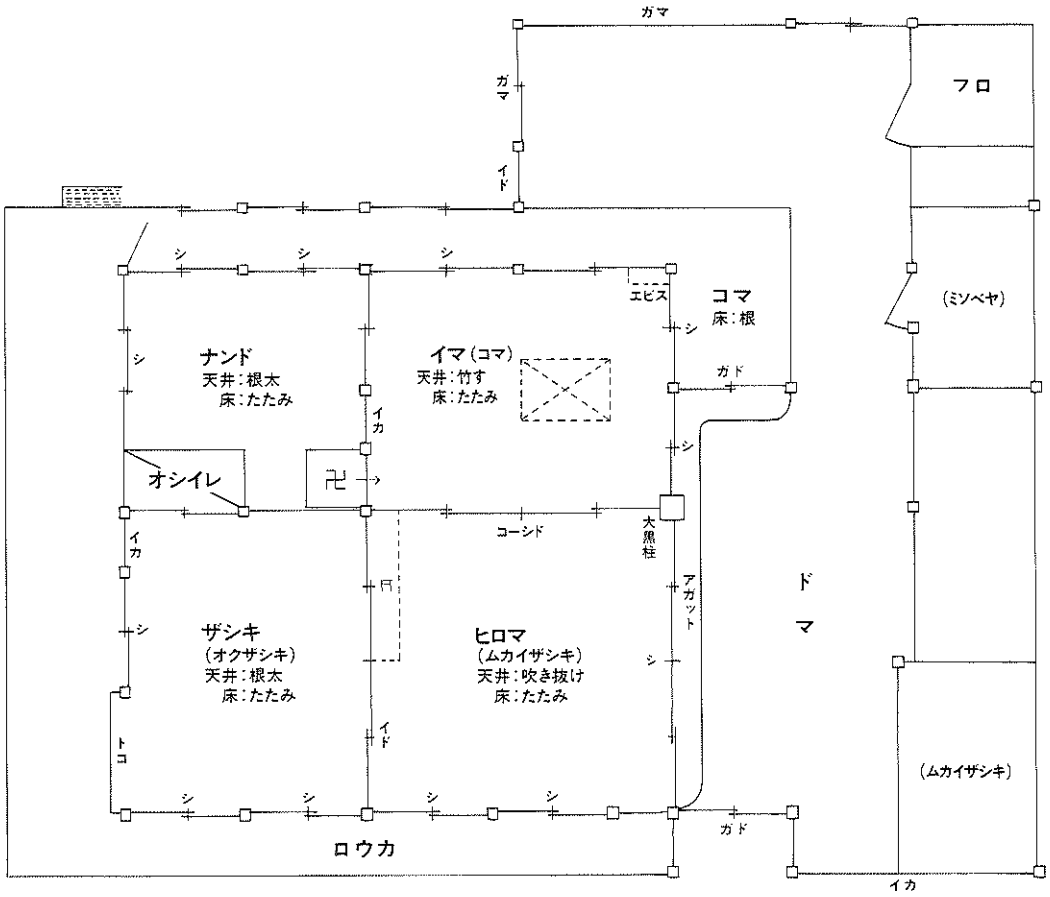
上須のK家間取り　K家は寺の過去帳に「オサキ」と記される家で、深良ジサキに入った一番最初の家といわれる。溶岩の岩盤の上に建てられているため、関東大震災のときも壊れず、多少の手直しはあるが、今ももとの形式をよく残した住宅である。

一見して、柱数が多いことに気づく。ほぼ一間ごとに柱があるのは、建築技術がまだ進んでいないためで、古い民家の特徴である。また、今は物が置かれてよく見えなくなっているが、ニワの柱の中には細かい刃跡の残るチョウナ削りの柱がある。

聞き取りによって、元の形式を追ってみる。昭和の初めにはアガットはなかった。ロウカもあとからつけたもので、ヌレエンもなかったという。ニワ後部やコマ部分などは、よそから建材をもらってきて足した。

ナンドとザシキの外との境は、今は六尺のロウカにつながっているが、もとは土壁だった。ザシキにはニワの方を向いてトコノマ（床の間）があった。

イマはもとはコマと呼び、ヒジロ（イロリ）がある。ヒロマには長さ一間半ほどもあるヒジロが掘られているが、これは養蚕をした



シ:ショウジ
イカ:板カベ
イド:板戸
ガド:ガラス戸
ガマ:ガラス窓
※改装のため
不明箇所あり

一間

図II－3　K家間取り(上須)：改装のため不明確な点あり

ときの名残りで、今は上に畳でふたをしている。ニワにあるムカイザシキは米を置く蔵として使っていた。

広いニワは便利空間　ニワの表側は主に農作業とその道具置き場として使われた。米や俵の貯蔵場所にもなった。ヤギョウ（夜業）の材料を置くこともあった。ヒロマの灯りや手ランプを頼りに、縄ないや籾すりなどをしたという。

ニワの裏側の部分は、主に炊事や食料の貯蔵の場所であった。カマドが据えられ、ごはんの煮炊きや餅米を蒸したりした。後に改造が加えられ、オカッテがつくられたのもニワの部分である。またセドグチに近いところにはミソベヤ（味噌部屋）やコウコベヤが設けられて、ミソやショウユを貯えておいたり、さまざまな漬け物の置き場として利用された。飲料水を貯めておくミズガメ（水甕）が置かれたのもニワである。

このほか、手伝いの男女が暮らすコモノベヤ（小者部屋）がある家もあり、また、天気の悪い日や夜にはニワかヒロマでハタオリもしていたという。祭りや物日に餅をつくのもニワで行う家があった。

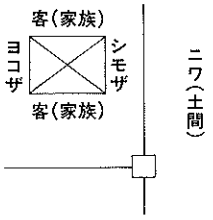
フロもまた、ニワに据えられることが多かった。トボグチに近いところか、ときにはニワの外のヒサシの下に置き風呂して入浴した。後に囲いをしてフロ場をつくり足すときにも、ニワのセドグチに近い部分を改造している家が多い。

外と同じ身仕度で働け、また屋内であるため雨からも守られているニワは、実にさまざまに使われていたのである。

日常生活の中心コマ　コマは、イマまたはオカッテとも呼ばれる。コマの中ほど、ニワ寄りのところにイロリ（ユルリ、またはヒジロ）が切ってあった。家族はこのイロリを中心にして暮らした。モシキ（燃し木）を燃して、湯をわかし、朝のお茶を飲んで仕事に出かけた。味噌汁をつくったり、いろいろなものを煮たり、ごはんを炊く以外の日常の食べ物はイロリで用意した。ふだんの食事は一人一人のお膳を用意して、イロリのまわりですませた。節句や祭りには、テッキ（鉄器）にお餅を乗せて下にオキを入れて焼いて食べたりもした。

ちょっとしたお客さんがあったときや、近所の人が立ち寄ったときも、たいていコマのイロリのそばでもてなした。アガリットですますというのは、「冬は寒いし失礼な気がする」とか、「オカッテ（コマ）にイロリがあるのだから、ロウカですますことはない」という人がいる。

イロリの座順は、図Ⅱ－4のようになっていた。決まっているのはヨコザくらいで、そのほかの席については、あまりうるさく言わないという人が多い。今でもヨコザに対する意識だけは強く、ヨコザに座られるとムッとするという人がいるが、時をさかのぼるほど座順は厳しかったと思われる。若い衆がものを知らないでヨコザに座ったりすると、「あれはニワトリだ。坊主とニワトリは高いとこへ座る」と言われたりした。



図Ⅱ－4　いろりの座順

また、女はイロリに足をあたらせてもらえなかったという話もある。

イロリは、その後掘りゴタツなどに姿をかえて、長い間コマの中心、日常の暮らしの中心にあった。その過渡期の利用法ともいえるカメノコウは生活の知恵として面白い。

カメノコウは木でつくられた簡単なヤグラで、イロリをすっぽり覆う大きさで、亀の甲羅のような形をしていた。それをオキの状態にしたイロリの上にかぶせて、家族が足をのせる。その上からふとんをかぶせると、ヌクヌクとして暖かいコタツのようなものができあがる。食事が終わると、「コタツにでもしな、カメノコウだして」などと言ったものだという。

人寄りととっておきにはザシキとヒロマ　家中で最も日当たりが良く、表に開かれているのはザシキとヒロマである。この二間は、ハレの日の接客の間として使われた。代表的な家の行事である結婚式や葬式、法事などには間の建具を取りはらって二間を通して一つの部屋として使われた。このような場合、トコノマのあるザシキが上座になる。

結婚式では、花婿、花嫁がトコノマに並び、もしくは向かいあって三三九度の盃を交わした。花嫁はオオドについているコグリを通って嫁ぎ先の家へ入り、まずヒロマに座り、手をついてザシキに向かって挨拶をしてからザシキに入った。あるいは、家の中の神仏に手を合わせてからザシキに入ったという。

葬式のときは、僧侶はザシキの前から直接家へ入った。ほかの人がそこから出入りしようとすると、「オッサンじゃあるまいし」とがめられた。棺はザシキに北枕に安置された。

出棺のとき、棺をコマのイロリまで運び、ヨコザでイロリのふちに頭を乗せ、一番身近な人が最後のお茶をあげるという。別の家では、一旦イロリのそばに置き、ヒロマ（マエザシキ）に出したとき、嫁がお茶をくんで供えてから出棺するともいう。

棺の出る場所は、カリモン（仮門）をつけたトボグチからという家が多いが、上須ではザシキから直接外に出した家もある。

このとき、コシアゲの人たちがわらじをはいたまま家の中に上がり、棺をかついでそのまま外に出ることから、「履きものをはいたままで外に出るな」と言われる。

コシアゲの人たちは、帰りに葬式を出した家のジョウグチの入口で履きものをぬぎ、そこへぬぎっぱなしにしておく。亡くなった家へ都合があって遅れて香典を持っていくときなど、「ジョウグチにアシナカがあるで、わかるよ」と目印にした。二、三日はそのままになっていたという。

葬式の行列が出てしまうと、祭壇の前にザルかミカゴを置いて、ころがしながらうち中をはき出して家を浄める。もちろん、ダイジングウサン（大神宮さん）、オエビスサン、コウジンサンには白い紙を貼っておく。

お嫁さんたちの淡島講のときも、ザシキとヒロマを通して使う。レイコウゼンを用意して、トコノマにカケジ（掛軸）をかけ、年のえらい人（年の多い人）から上座に座った。

ザシキはまた、大事なお客さんをもてなす場でもあった。客が泊まるときには、ザシキに寝せた。

お客といえば、蚕の部屋として使われたのもヒロマとザシキが多い。まず、ヒロマの畳をあげてコモをしき、棚を作った。ヒロマには保温のための大きなヒジロを切ってある家もあった。棚はヒジロの両側に二列つくり、そこに一三、四枚カゴを乗せた。ザシキを使うのはジョウゾク（上簇）したときだけ、という家と、二部屋とも使うという家があるのは養蚕の規模による。別棟の物置の二階をカイコベヤ（蚕部屋）にした家もあった。

蚕が家の中を大きく占有しているときは、家族は空いた部屋にゴロ寝をしたり、畳をあげたザシキにムシロを敷いて寝たりした。養蚕は南堀では早くにやめ、昭和の初めころにはしていなかったが、地区によってはずいぶん遅くまで続けていた。

眠る部屋、お産部屋のナンド　ナンドの決まった役割は、まずお産部屋だったことである。お産婆さんやお姑さんなどが手伝って、昔の女性はここで出産した。

田の字型の家は、それぞれの部屋がある程度決まった役割を持ち、同時に夜はそのまま寝室にもなる。図Ⅱ－5にも見るとおり、深良ではナンドが年寄り夫婦もしくは姑の寝室になることが多い。これは、ナンドが暗くて静かなので、寝るのには都合のよい部屋という認識があったためと思われる。

旧O家(南堀)

K家(上須)

旧T家(原)

図Ⅱ－5　眠る部屋の割りふり

(三)　家の手入れと生活環境

屋根替えは冬の仕事　かつて屋根はモヨリごとのカヤバ（茅場）から採ってきたカヤで葺かれていた。南堀のカヤバ（またはカヤカリバ）は箱根山にあった。原も箱根山にあった。上原は堀切カヤバからカヤをとった。

屋根替えはイイガエ（結い替え）といってイイ（結い）が出ての大仕事だったので、農閑期の冬に行われた。冬は乾燥して天気のよい日が多いのも便利だった。

南堀では毎年一月十一日のハツジョウカイ（初常会）のときに、カヤムジン（茅無尽）といって、その年に屋根を替える家を決めていた。替えることに決まると、その家は屋根の骨組みに使う竹や縄の用意から、竹を結ぶハコネダケ（箱根竹）の細いひごまで全部用意した。竹はヤミダケといって九月にとるのが一番いいので、それだけはカヤムジンでなく自分でとっておいたものだった。

屋根を替える家は、自分たちのカヤカリバから馬でカヤを運んだ。六把を一頭の馬に負わせたので、これをヒトウマ、イチダンセといった。原の高橋はなる家のときは、「部落の衆がイチダンセずつくれ、あとは自分で刈れるだけ刈った」という。風の強い日はおおごとで、人も馬もそれはたいへんだった。

屋根全体、または二面ずつ大きく替えるのではなく、ちょっとしたいたみを直すときは、自分でカヤを刈ってきて、御殿場の屋根屋に頼んで直してもらったりした。

モヨリごとのカヤバは、二月中旬から三月ころにヤマヤキ（山焼き）をして手入れをした。上原では二月中旬ごろに全員が出てヤマヤキをした。人が出せない家はニットウ（日当）を出した。ニットウはその場所ごとに決め直した。ヤマヤキのあとに、このニットウで必ず一杯飲んだものだった。

炊事の水と風呂の水　水の苦労が多かった深良は、飲み水、風呂やせんたく水、炊事の水を深良用水に頼るところが多かった。

また、水脈のあるところは屋敷内に井戸を掘って、飲み水に使うようにしていた。

町震の大庭幸一さんの家では、江戸時代の終わりころに掘った井戸があり、昭和の初めころまでは一四軒が飲み水をもらいに来ていたという。大庭家でも水を大事にして、風呂の水は川の水を使っていた。

上須の勝又金作さんの家では、深良用水を水ガメ二つに貯めておき、翌日しずまった水を炊事や飲み水に使ったという。水は針が落ちていても分かるほどきれいだった。

こうした深良にあって、南堀はジスイで灌漑できるといわれ、水に困ったことはなかったという。だが南堀の大庭敬一さんの家では、川が遠いので困るということで、明治初めころに屋敷内に井戸を掘ったところ、近所の人たちが大勢手伝いにきて、「雨のときは川の水が濁るので飲み水だけでもくれ」と頼んだという。

水を大事にするためもあって、風呂は三日くらい同じ湯を使った。そして汚れ水は肥をくみ出す桶に入れて移し、肥料にする家も多かった。

風呂の水を貯めるのは嫁の仕事で、汲むのに何度も通わなくてはならなくて苦労だったうえに、風呂がかつてはニワやトボグチの外におく置き風呂で囲いがなく、出入りが恥ずかしかったと、それも気苦労であった。トボグチの横（外）にあった家では、「お風呂に入っていたら人魂がいくつも文明寺のヤブに入っていくのが見えた」と話してくれた。

深良に水道が来たのは昭和の初めころで、昭和初めと七年とにチフスが流行ったのがきっかけで、水道が引かれたという。原では大正一五年に水道が引かれた。

大そうじに便利なダイミョウダケ　大そうじは家によって同じではないが、暮れの二〇日ころにした。畳をあげて外に出し、天日に干す。ダイミョウダケという細くて先に葉がついている竹を三本結わえて、ほうきの長いようなものをつくり、天井やぐるりのくもの巣やすす、ほこりをはらって歩く。イロリの灰は、「年寄りが朝から晩まであたっていると、肩や頭に灰がたまって真っ白になった」というほどだったので、どうしても天井などが汚れたものだった。

下はほうきではき、雑巾でふいてきれいにした。最後に障子貼りをし、祠も外に出して女がほこりをはらってきれいにした。

大そうじに使ったダイミョウダケは、道祖神へ持っていって小屋作りに使った。

屋根と家の移り変わり　現在の深良を見ると、ほとんどが瓦屋根や新建材の家に変わっているが、それまでにも流行のように家に手が加えられた時期があった。一番大きな変化は草屋根がトタンに変わり、瓦に変わったことであろう。また、戦時中から昭和二三年ころにかけては杉皮屋根の家も多かった。

南堀の大庭三郎さんの家では、大正一三年にトタン屋根に変え、カヤムジンを抜けた。このトタン屋根の下は杉皮にしていた。杉皮屋根は七年しか保たないが、「七年くらいすればゼニコ（銭こ）ができるから」などといって、分家を出すときに杉皮屋根の家をつくってもらったという。

杉皮は自分で共有の山からとってくるのではなく、製材または樵から買った。樵は山で木を切っても日当をもらえないので、切った杉の皮をむき、三尺（九〇センチ）×一尺（三〇センチ）くらいの皮を一把で束ねて製材へ売って、賃金にしていた。杉皮で葺いた屋根は傾斜がゆるく、地震に強いと言われていたという。

南堀で初めて瓦屋根ができたのは、昭和七、八年ころで、初めのころはドブセという方法だった。ドブセの瓦は、「瓦千年、手入れ毎年」といって、瓦の下の土から水が漏ってくるので毎年手入れをしなくてはならなかった。瓦の土はこのあたりでは採れないので、遠州から運んできていた。

茅葺屋根が見られなくなったのは、だいたい昭和四〇年ころだった。トタンや瓦に変わってカヤムジンを抜ける家が増え、ムラ中の協力で手入れをしていた屋根仕事が手に負えなくなったこと、時代の流れで屋根屋がいなくなったり、亡くなったりしたことなどが、茅葺屋根を減らす原因になった。矢崎電線、トヨタ、関東自動車が来て、よそから人が入ってくるようになって生活が変わったことも要因だったろう。

屋根のほかに、住居に見られた改造は、オオドをやめてガラス戸をはめ、ヌレエンをウチエン（エンの外に戸を立てる）にすることであった。南堀の大庭敬一さんの家では、昭和二五、六年くらいから、玄関（オオド部分）とウチエンを直した。ウチエンになって、ロウカと呼ぶようになった。茅葺屋根は昭和三七、八年に屋根だけをトタンにし、さらに瓦にしたという。オオヤ（オモヤ）は昭和四〇年に全部こわして新築した。

このほか、かつては資産家の家だけにあったアガリット（アガット）をつける流行が終戦後にあり、多くの家がアガリットをつけるようになった。

家の中の変化で大きなものは、電気が来たことであろう。それ以前は石油ランプが主で、ニワでの夜なべ仕事などにはカネでできた小さい手ランプを使った。手ランプも石油でともす灯りだった。

石油ランプを使っていたころは、子どもは学校から帰ると毎日エンガワでホヤみがきをさせられたものだった。高橋はなゑさんは、「習字の書き古しなんかでホヤみがきをした。電気がきたのは結婚してからだったが、ホヤをそうじする手間がなくなってよかったと思った。明るくってさ」と振り返る。深良に電気が入ったのは大正になってからだった。

㈣　新築と家うつり

大正一二年の新築の記憶　原の高橋はなゑ家は、関東大震災で家が壊れたのでオモヤを新築した。そのときのようすをかいつまんで語ってくれた。

自分のところの山の木を切って材木をつくった。部落の衆が木を山から降ろすのを手伝ってくれた。原木を製材にかけてから、新田の大工さんが来て、ここで（高橋家の屋敷地で）カンナをかけた。組み立てるときは近所の衆が手伝ってくれた。上棟のときの餅は四角かった。近所の衆がのしにしてくれたのを切ったので四角い餅で、それを四角い桝に入れてまいた。

昭和四五年の新築　南堀の大庭敬一さんの家で昭和四五年にオモヤを新築したときには、ほとんどが業者の手で行われて、いわゆる現在の新築工事であったが、新築の儀式は昔ながらの手順をふん

で行われた。

新しく建てる場所に井戸があったので、使われてはいなかったが井戸のおはらいをした。地まつりをし、オッタテマエ（上棟式）をした。

オッタテマエは、果物、野菜、水、塩、米、こぶ、お神酒の供物を棟梁が持って棟へ上がり、家の主人、娘の亭主、男の孫と親戚、それに大工さんたち二〇人ぐらいが続いてあがった。上には、お供え大一組と中二組、先ほどの供物をかざり、鬼門の方向に竹で弓を立てた。大工さん二、三人がヤウツリガユ（家移り粥）をして、マキモチをした。まいたものは、紅白の丸い餅と四方餅とみかんだった。

フルマイ（食事）をして、大工さん全員が木遣をやっておひらきになった。

家うつりと古い神さまたち　家うつりは日を選んで、いい日に神さま仏さまを一番最初に新しい家に入れる。

大庭家では、年寄二人（ご両親）に先に一晩寝てもらったという。自分たちで建てたといってもおじいさんたちのおかげだからそうしたというが、両親も「最初に寝かしてくれた」と喜んでくれたという。本当の引越はそれからぼちぼち始めた。

ダイジングウサンは新しく買ったが、昔からのダイジングウサンは新しいものの向かって左に置き、箱根神社やほうぼうのお札を納めている。コウジンサン、オエベスサンも台所に並べてまつっている。

(五)　町田・松井謙一家の間取りと屋敷構え

間取り　松井家は、二五〇～二六〇年前に建てられたと言い伝えられている。地主の家の間取りがほぼそのまま残っていて、また使われ方や名称も他の家と違うところが多いので、別に記載することにした。

図Ⅱ－6は、オモヤ一階部分の間取りである。二階へは仏壇の裏にある階段から上がる。二階のほとんどは養蚕のための施設になっていて、現在は使われていない。ザシキ、オクナンドの上にあたる部分だけが畳をしいた部屋になっていて、昔は客間にも使ったという。

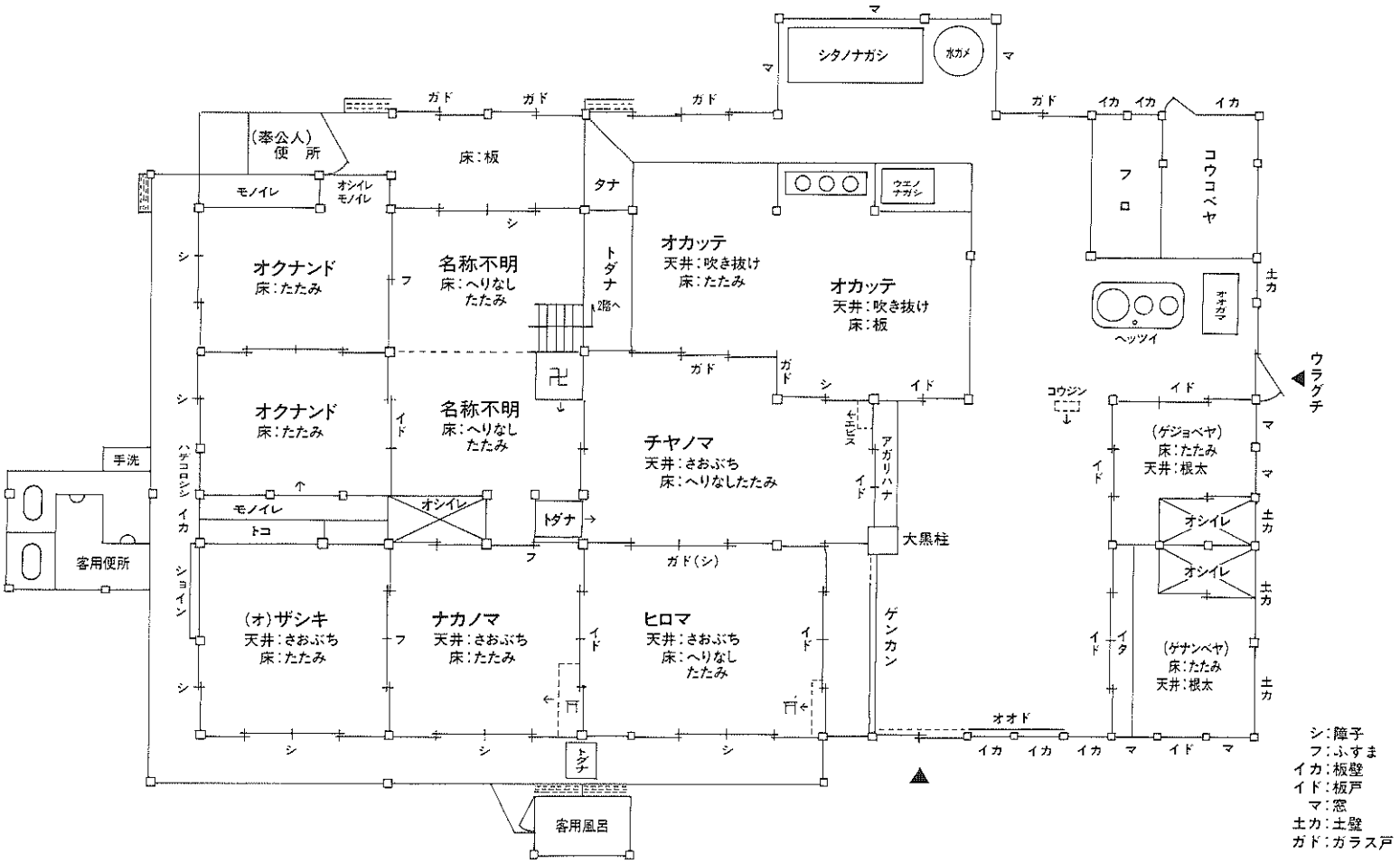
部屋の使い方　ハレの接客の場は、ザシキ、ナカノマ、ヒロマであった。結婚式や葬式ではこの三部屋を通して使った。ザシキに近いほど上座になる。

結婚式は三日三晩、子分やつきあいの人などが集まって続いた。花嫁はハナレで仕度をし、ヒロマに出て挨拶するだけだった。

葬式では、ザシキに仏壇をつくり、お坊さんはゲンカンから入ってもらう。お焼香の人たちは特別の人を除いてはニワ（外の庭）の方からオザシキの方へまわってもらう。忌中ぶるまいは、ザシキ・ナカノマ・ヒロマを間の建具をはずして通して使う。お坊さんと親戚の主な人たちが上座を占める。

盆のかざり棚もザシキの床の間の前につくる。

ケの日常生活の場は、家族と、そのころの下男・下女・子守・女中さんと呼ばれた下働きの人たちの使う所とに分けられる。働いていた人たちの中でも、家の中の用をするバアヤやウエの女中さんと呼ばれた女の人などは奥の方のオクナンドに寝て、外の用をする人



図II－6　松井謙一家間取り(町田)

たちはニワ（土間）にあるゲジョベヤ（下女部屋）ゲナンベヤ（下男部屋）に休んだ。この人たちは食事の場所も家族とは別で、オカッテの板の床の部分で一人ひとり箱膳で食べた。ただし、野良仕事のときは家族も働く人もオカッテのふちに腰かけてすませた。時代によって働いていた人の数も風習も違うので、一概にはいえないが、大まかにはこのように分けた。

家族の寝る場所は、今の主婦、圭子さんが嫁に入ったころは、ナカノマに両親夫婦が寝て、手前のオクナンドにおばあさん、その奥のオクナンドにご主人の妹が寝ていて、若夫婦はインキョ（隠居）で寝たという。両親夫婦が若夫婦で、その両親が健在のときは、やはり若夫婦がインキョで寝起きし、家長夫妻は下男、下女の監視のために（風俗が乱れないように）、チャノマに寝ていたということだ。

ベンジョは、屋内に三つ、屋敷内のタイヒゴヤの中に一つある。タイヒゴヤのベンジョは下男と日中に下女が使った。屋内のオクナンドの奥にあるベンジョは家の中で働く手伝いの人たちや夜下女が使った。家族は、オクナンドとザシキの間のロウカにあるベンジョのうち、裏側（オクナンド側）を使った。ザシキ側はお客さん用のカミベンジョだった。

炊事場所も分かれていて、働いていた人たちの食事はオカッテのヘッツイ、家族の食事はその横の空間にシチリンを並べてつくった。土間にある大きなへっついと大ガマは、人寄りのときに湯をわかしたりお赤飯や餅米を蒸すのに使った。

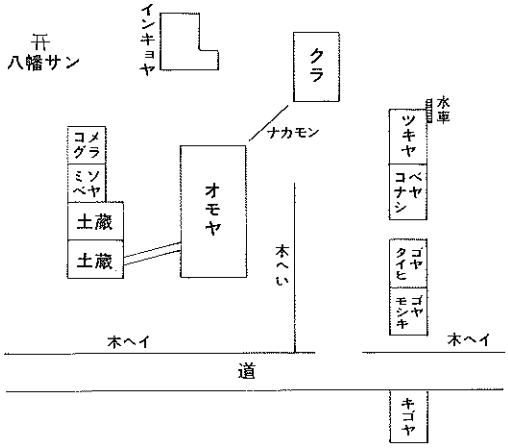
シタのナガシは、大きな鍋や釜、泥のついた野菜などを洗うのに使った。樽や大根を洗ったり、お鍋のすみ（こげすす）をかいたりするような汚れのときは、土倉の後ろに流れている川で洗った。

暖房は四角い長火鉢だった。インキョヤもオモヤも長火鉢で暖をとった。圭子さんが嫁に来た二年後（昭和十一年）にチャノマにホリゴタツをほってもらって、ずい分暖かくなった。家族は畳のあるオカッテで食事をすますと、チャノマにうつってくつろいだ。板の間のオカッテで食事をする人たちの暖房は大きな火鉢だった。それを囲んで暖をとりながら食事をしていたという。

家族の人たちにとっても、ヒロマ、ナカノマ、ザシキは日常の居場所ではなく、オクナンドとチャノマ、オカッテが生活の場だった。

屋敷神のおまつりは欠かさずていねいに行っているが、詳細は信仰の項目を参照してほしい。

屋敷構え　図Ⅱ－7は、現在の松井家の屋敷構えの略図である。現在、門は長屋門ではないが、明治四〇年ころに火事で焼けるまでは長屋門があった。また、門の外、道をはさんですぐのところにキゴヤ（木



図Ⅱ－7　松井家屋敷構え概略

小屋）があり、先代がこの家を建て替えるつもりでいい木があるとこのキゴヤに入れてとっておいた。それらの材木は戦時中に大井川の鉄橋が壊されたときに、兵隊が橋を作るといって持っていってしまったという。

池をはさんで裏にある土倉は、一棟に長持ちなどが入り、もう一棟は漆の食器が納められている。コメグラ（米蔵）の裏に天満宮があり、松井家では何かにつけて頼りにし大切にしている。（信仰参照）

オモヤの前、ナカモン（中門）をへだてたところの蔵は、かつては年貢米を納めたものである。ツキヤの裏に水車がまわっている。川の水を裏門で一旦止めて、土管でひき、石組したところに水をため、地下を通してツキヤの水車まで水をひいて使った。土管や石組は今でも残っているが、ツキヤは使われていない。

家・屋敷に関する禁忌

・ビワの木を屋敷に植えてはいけない。

・ケヤキを屋敷に植えてはいけない。↓人の血を吸う。

終戦後すぐのころ、父親がポクリと死んだとき、ひいおばあさんが、「ケヤキがいけない」と言ったので切った、という。

・屋敷にはモチの木を植えるとよい。↓カネモチ、モノモチといって縁起がよい。

・池はよくない。

・入院するとき、ろうかから出てはいけない。↓棺をろうかから出す。先祖の霊がろうかから出入りする。

・しきいを踏んではいけない。

・オエベスサンはひさしがいい（ひさしの方にまつっておく）。

↓本家に入りたいといってうんと働く。

第二節　家族と親族

嫁と里　深良では、嫁のやりとりは裾野市内を中心に、御殿場から南は沼津あたりまでが多く、嫁の里との行き来が容易だったことが親族同士のつき合い方にもよく表れている。

嫁入りには、嫁方の親族、主に叔母がオコシツギとなって世話役として婚家で一晩過ごしたものだった。また婚礼翌日は、嫁がつくった塩味のおはぎを食べたあと、婿と親戚が一人ついて里帰りした。嫁が臨月になると、嫁の里ではデミマイとして餡を入れた餅を持ってきて近所に配った。

オヤネンブツと位牌分け　親の死後の供養にも娘や分家が平等に負担をする習慣がみられる。亡くなって初七日から三五日、あるいは四九日までの七日ごとの法要は、子どもたちが一回は必ず当番となって自宅で行う。この時は組内の人たちに寄ってもらい、近所の念仏講のおばあさんたちに念仏をあげてもらう。これをオヤネンブツといって、初七日は本家ですることが多いが、そのあとは家を出た子どもたちが順に供養する。そのための位牌は、寺で紙または白木でつくってもらう。この紙または白木の位牌は、オヤネンブツの終了後、供えた団子や線香とともに川に流してしまう。近年は通婚圏の広がりや、遠くへ出ていってしまう子どもが多いのでこうした習慣も維持するのが難しく、上須では一〇年ほど前からやらなくなってしまったという。

タイマツナギと初子相続　イエが絶えることなく子々孫々にまで受け継がれることは、人々の長い間の願いであるとともに、ムラにとっても、ある一定の戸数を保ち続けることは、その組織を維持するための重要な要件であった。そこで、イエを絶やさないための工夫がいろいろとなされてきた。その一つが、葛山地区の報告書にも書いたタイマツナギ（テャーマツナギ）という方法である。

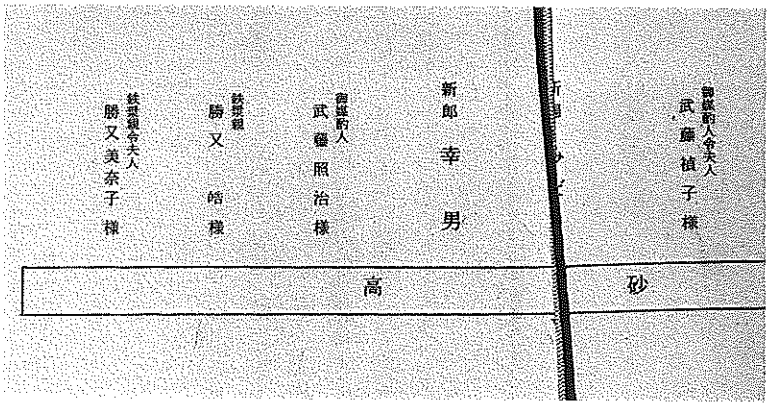
絶間ない継承の意味からタイマ（絶間）ツナギ、あるいは松明の火を絶やさないことをたとえてタイマ（松明）ツナギ、また実質的に農作業の担い手を絶やさないという意味でテャーマ（手間）ツナギなどいろいろに解釈されているが、いずれにしてもイエ永続を期待したものであるといえよう。これは家を継ぐべき長男が女姉妹の末の方に生まれた場合、その子が成長するまでの家督を一時的に姉に婿をとって継がせ、長男が成人したのちに改めてこの長男に継承するという方法で、長男が本家を継ぐと同時に姉夫婦は分家として新しい家をつくる。

また、家を継いだものの跡取りの子ができなかった場合には、一番下の年の離れた弟や妹を戸籍上の養子にして、これに嫁や婿をとって家を継がせる方法もよく行われた。一方、上層の家では必ずしも家が絶えるということではなく、姉に養子をとって継がせる場合も多かった。これは、親が元気なうちに家督を継がせたいという教育的配慮があったものであろう。シタコバヤシと呼ばれる小林完家では、完氏（明治四一年生）の先代僖一（明治八年生）は韮山の江川（分家）家から婿に入った人で、二代前の甚五郎（安政二年生）も水窪の渡辺家から婿に来ている。甚五郎は裾野の郵便局をやっていた渡辺家の長男だったが、渡辺家も長女が婿をとって家を継いでおり、小林家に婿入りした。シタコバヤシの初代の茂重郎（天保元年生）の父親は本家（ウエコバヤシ）の七代目治三郎だったが、この治三郎という人も上湯山（御宿の湯山家）から婿養子に入った人だった。

ハイケ（廃家）の再興　一方、跡取りがなく住む人がついに絶えてしまったような家をハイケ（廃家）といい、こうしたハイケはその家に何らかの縁のある親戚がこれを継いで復興させる場合がある。ハイケの再興にあたっては、苗字はハイケに伝わるものを名乗るのが一般的で、さらに自分の実家をオオヤ（本家）とはいわず、親族の系譜はハイケについたものを受け継ぐ。つまり、家屋のみを受け継いで分家するのではなく、ハイケの屋敷そのものについているイエの歴史全体を継承するのが廃家再興なのである。和市ではハマサンヤシキと呼ばれる高藤久吉家や、カミヤの大庭景申家などがこの廃家再興であるという。大庭景申家は、三代前の柳三郎という人が、大庭家と縁のあった遠道原の甲州街道沿いの菓子屋から廃家再興に入ったという。

イエを永続させることが第一の主眼であって、そのための継承においては必ずしも実子であることを重視せずに、事情に応じた対応をしてきたのがムラの人々の知恵であった。

カネオヤとコブン　大地主のあった深良では、カネオヤ（オヤサンとも呼ぶ）はそうしたダイヤ（大尽の家の意）に頼むことが多かった。町田の松井謙一さんは、これまでに一五、六軒のカネオヤをしているが、この松井家のほか、新田の両小林家、大庭家、渡辺家、吉村家などが多いという。カネオヤをオヤブン（親分）、頼んだ人をコブン（子分）と呼んで、一般には親が頼んだカネオヤと同



「カネオヤ」のいる結婚式の座席表

じ家に代々頼む。カネオヤはコブンの家の経済的な援助を始めとして、生活全般について面倒をみる。文字通り家にとっての オヤという存在である。一方コブンは、オヤの家の冠婚葬祭から農作業に至るまで、人手の必要な時にはいつでもかけつけるものであった。戦前はこのカネオヤ＝コの関係は、地主と小作の関係とも重なっていたのでなおさらその主従色が濃かったといえよう。

松井家でも、かつてはコブンの人たちに畑仕事を頼んだり、コブンのうちでも近い人がカネオヤの棺を担いだりした。仕事の分担はコブンの人同士で相談したりした。カネオヤはもともと結婚式のときに頼むオヤのことで、お歯黒のカネ（鉄漿）から来ている。今では、お歯黒の意味が薄れてハネオヤと呼ぶ人もいるが、現在でも結婚式では上座に座り、コブンに子どもができると、妊娠五ヶ月目に腹帯を、また生まれた時や初節句などにはお祝いを贈る。下小林家でも、昔奉公していた人たちがコブンとなって、暮には餅を届けに来たり、正月のあいさつに訪れたりしたものだった。

もっとも、モヨリ内に特にダイヤといえる家のなかった原などでは、特定の家がカネオヤになるのではなく、むしろ日常でつきあいの深いような家をカネオヤに頼み、より密接な関係を結んだという。また南堀のO家では、カネオヤは、叔母の婚家にあたる千福のI家に頼んで現在も葬式などの往き来は続けているが、同時に南堀のモヨリ内にナコウドシンセキをもっていて、こちらにも盆暮のつけとどけをしていたという。

また地主、小作関係がなくなってから、最近ではカネオヤは選挙などに係わりが強くなってきているという。

第三節　村落の形と組織

(一)　村の範囲と地域区分

語り継がれた歴史　現在の深良地区は、明治二二年の町村合併により、江戸時代からの深良村と岩波村が合併して誕生した旧深良村の伝統をひくものである。旧深良村の裾野町への合併は周辺村落のうちでは最も早く、昭和三一年九月三〇日に行われているが、これは泉・小泉村（新裾野町）との関係が深かったことによるものであろう。江戸時代の岩波村は元禄年間には八〇石に満たない小さな小田原藩の村であった。一方、深良村の方は旗本領、一五〇〇石余りの大村であり、その大きさをして「深良五千石」などといわれたものだったという。

深良地区には二つの語り継がれた歴史がある。一つは深良地区の村々の誕生にまつわる話であり、もう一つはいうまでもなく深良用水建設にまつわる話である。前者については、駿河湾の大津波と箱根山の山津波、富士山の噴火にまつわるものがある。岩波という地名の由来を、「駿河湾の大津波が黄瀬川を登ってきたところを岩波といった」あるいは「富士山が噴火したときに溶岩が、岩の波のようにみえたので岩波となった」と伝えている。また、深良村の南堀は、大昔、箱根山の一部が山津波にあい、大きな谷が埋められて平らになってできたという。泉川沿いの原、南堀、町田、久根の内、公文名にまず人々が住みはじめ、次第に和市、切久保、遠道原が開けたのだともいう。南堀は、切久保の西安寺裏山から興禅寺山に囲まれているために富士山の溶岩は流れてきていないが、『南堀部落雑考』として思い出に残っていることなどをまとめている大庭敬一さん（大正三年生）によれば、「広域農道を造るとき見た溶岩の流れた様子は興禅寺山の南端尾崎より東側松壽院橋の方向斜に溶岩が流れて、其の表面の模様が、波の様に階段状に重なり広くつづいて奇麗でした」とのことである。この溶岩が三島まで流れているので、「富士山の七里岩」といったという。

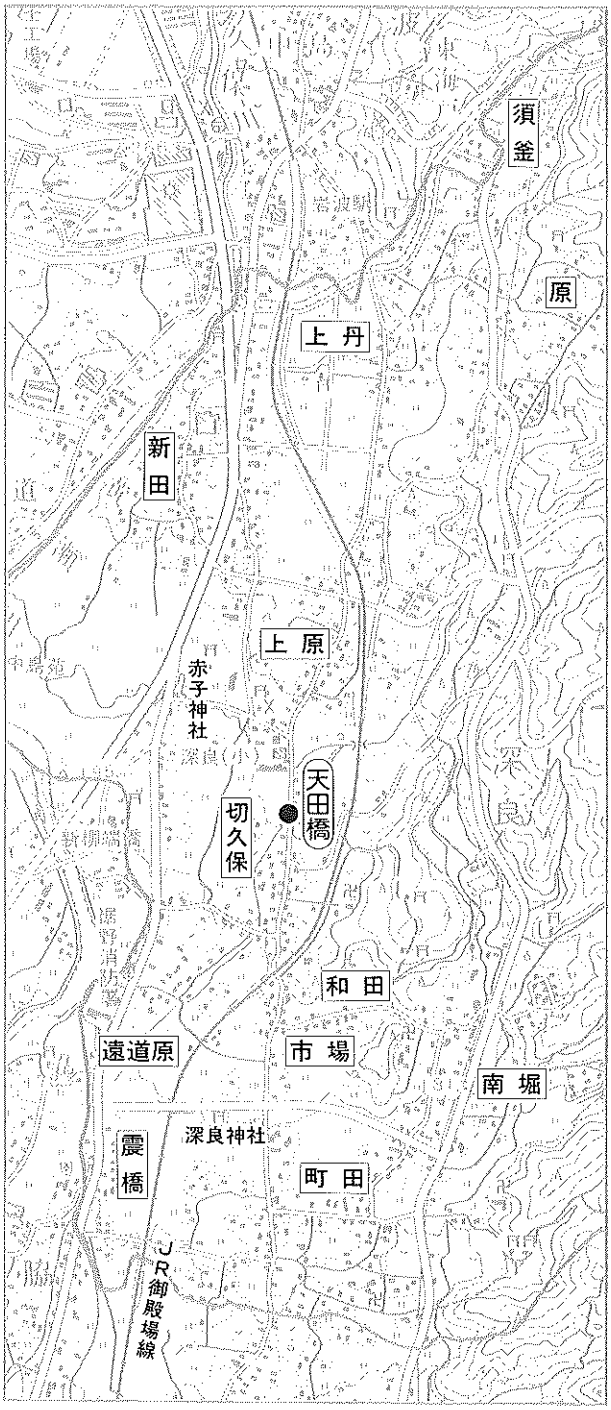
また、神代杉の話もよく聞かれる。箱根の山津波で埋まったという神代杉は須釜あたりまでみられ、明治から昭和の初めくらいまでは銘木として売れたため、村の人達がお金もうけでよく掘ったものだったという。鉄の棒を田の中にさして木がついてきたところを掘った。ある時、柿の実が一緒に出てきたことがあったので、山津波は秋だったのだろうといわれる。時代は富士山の噴火より前のことで、溶岩が流れてしまった久根などでは神代杉は出てこないという。

大庭源之丞の墓

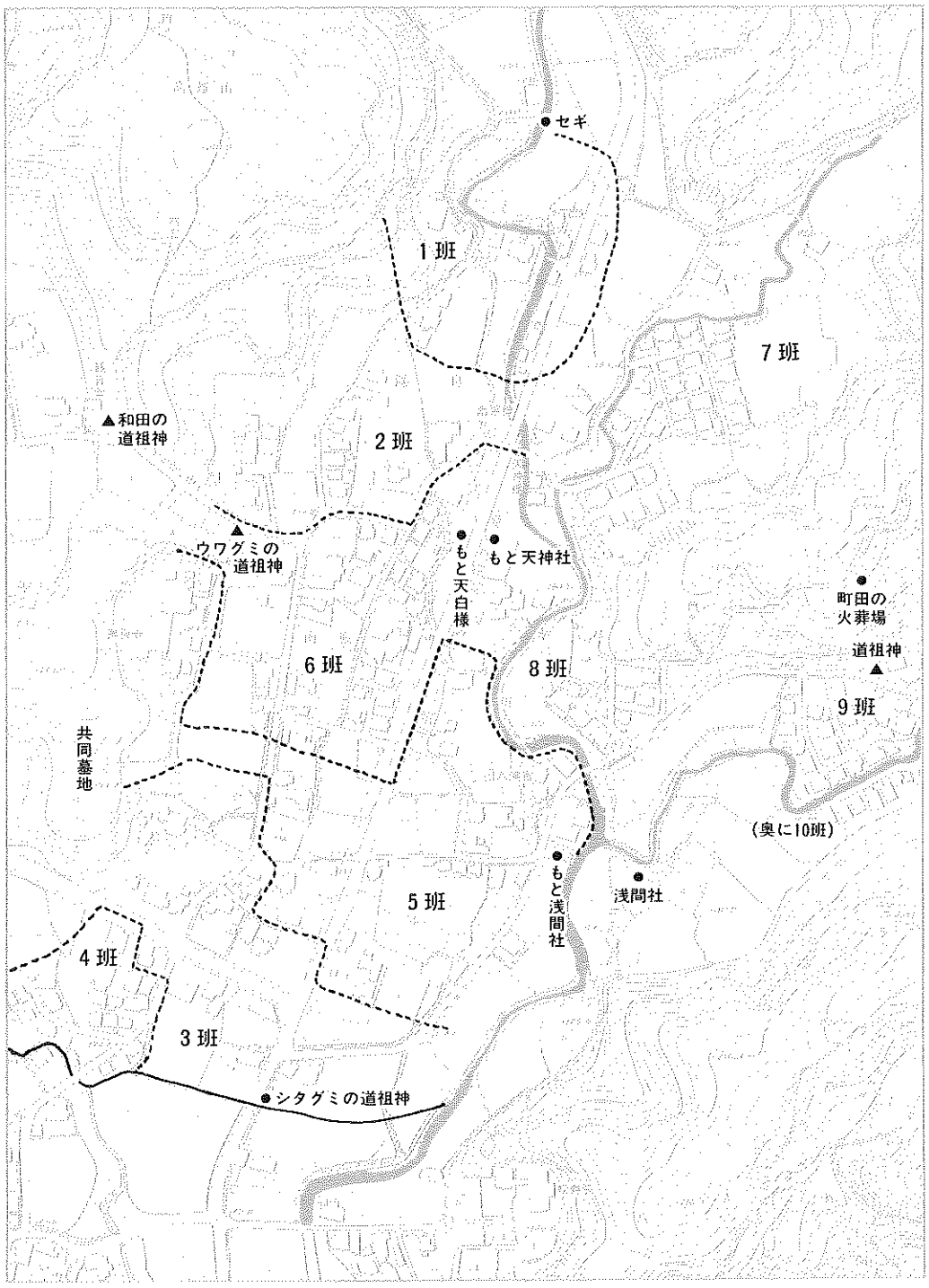
中世の深良は大森氏の居城がつくられ、足柄道の通る交通の要所であったという。「城ヶ尾」「堀之内」「南堀」といった地名がその歴史を今に伝えている。さらに歴史が下ると深良の歴史として映画にまでなった深良用水の開鑿が語られる。登場人物は友野与右衛門と大庭源之丞。大庭源之丞の屋敷は南堀にあり、戦前まで二二、三戸だった南堀では、半数をこえる一二、三戸が大庭姓であった。深良用水の完成は寛文一〇（一六七〇）年のことである。このように地名を媒介に、地形をもとにムラの歴史は語り継がれているのである。

村内区分と行政区　旧深良村の内部は、大きく上と下との二地区に分けられている。切久保と上原の間の天田橋を境に、北側を天田上、南側を天田下と呼び、江戸時代は天田上から助左衛門、天田下から大庭源之丞と二人の名主が出ていたという。この二つの地区は幕府が収穫量を増加させるためによく競争させられたとも伝えられる。

天田上の伝統的な行政区は、上原・新田・原・上須の四区。そし



図II－8　深良地区のモヨリ



図II－9　南堀の村内区分

深良を二分する天田橋

て、天田下には町震・南堀・切久保・遠道原・和市の五区があり、深良地区として市の定めた行政区にはほかに旧岩波村の岩波と、新しくつくられた舞台団地、柳端団地、上原団地が加わる。また行政区としては一つのまとまりになっているが、集落としては二つに分かれるのが、上丹と須釜から成る上須、町田・震橋の町震、そして和田と市場が一つになった和市である。これらは時にそれぞれが別々に神社を祀ったり念仏をしたりしながら、場合によっては一緒になって事を行うことがあり、分けて考えられない存在とされている。

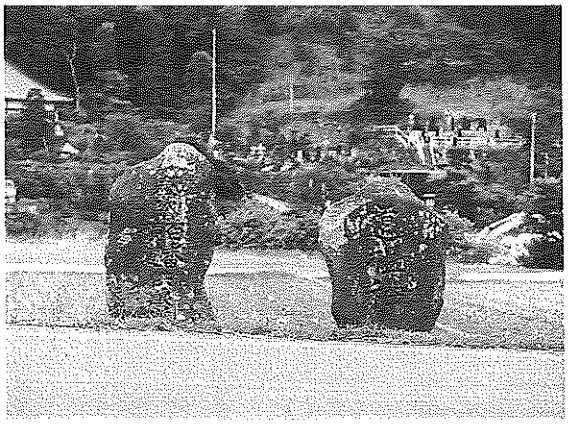
このほか天田下では町震と南堀をあわせた「町震南堀」と、切久保・遠道原・和市を一つにした「切遠和市」という二つのグループをつくることもある。特に切遠和市は共同で一一月三〇日から一二月一日までの穂見神社の祭りを行い、若衆が芝居をしたり、西安寺入口に出る露店の管理をしたものだった。

昭和の初めから深良地区では区長会主催の運動会が毎年九月に深良小学校で開かれている。このときの地区対抗のブロックは六つで、天田上は岩波、新田上原、上須原の三ブロック、天田下が南堀和市、町震、切遠の三ブロックから成っている。

神社の共同祭祀の面からみると、深良神社は天田下のムラムラが氏子となっており、また天田上の赤子神社は上原と新田が世話人を三人ずつ出して交替で当番をつとめている。

クミとモヨリ　行政区とは別に、それぞれの集落を部落あるいはモヨリ（最寄）と呼んでいた。つまり町震は行政区だが町田や震橋はモヨリというわけである。モヨリにはそれぞれに堂や倶楽部といった集会施設があり、また道祖神があってサイトヤキを行っている。

モヨリの内部はさらに組や班に分けられている。班は戸数の増加で組による区分だけでは不便が生じてから編成されるようになったもので、かつての組に対応している場合が多い。南堀では、八幡様の前の道を境に上組と下組とに分かれ、八幡様の当番や葬式手伝いはこの組を単位に行ってきた。また上組は天神坂の登り口、下組は町田境に近い四反田付近にそれぞれのサイノ



南堀下組の道祖神

カミを持っていて、サイトヤキも上下別々に行っている。それぞれのサイノカミは南堀のムラ境にたっている。現在の班は一〇班あり、昔からの家は上組の一・二班と下組の三・四・五班で六班からは新しい家から成っている。現在は葬式手伝いはこの班単位となり、祭りの準備も班から一人ずつ計一〇人の当番があたるようになった。

町田もやはり上組と下組とにわかれていて、上組は現在の三・四ノ一・四ノ二・五・六・七・九ノ一・九ノ二班から、下組は一・二・八班から成っている。もとは上下別々に大山講や秋葉講、万人講をやっており、水汲み場も違っていたという。現在も市役所や農協からの伝達機関としての部農会は上と下とで分けている。ただし、戦前まではほぼ同数だった上と下の戸数は今は上の方が増えてしまっている。

遠道原のサイノカミは観音堂の前に一つだが、切久保は上下一つずつの二か所にある。切久保では一・二班を上組、三・四班を下組として、サイトヤキでは上下別々に小屋がけして上から下へ、下から上へ互いにお飾りを盗み歩いたものだった。上原の現在の班は一班が西組、二・三班が洞組、四班は東組で五班が上組に対応していて、六班のみ役場関係の施設が入っていて新設された班となっている。

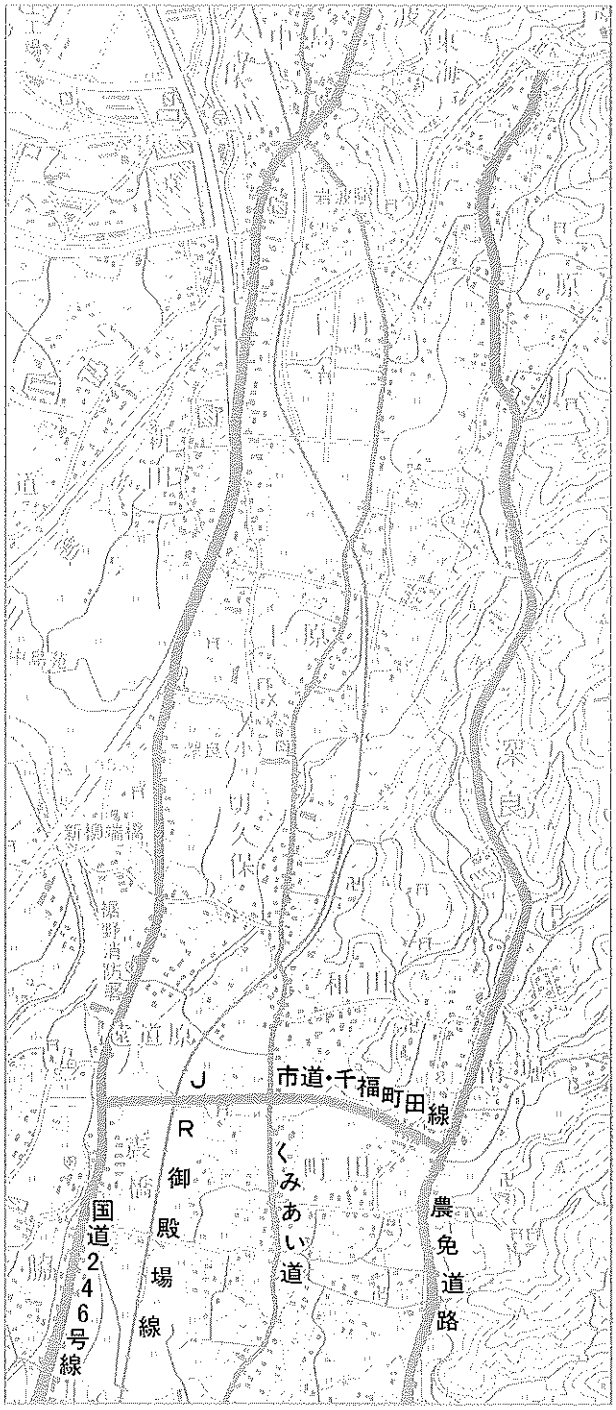
上丹と須釜から成る上須は、戦後の班がそれぞれ、二班がもとの須釜の上組に、三・四班が須釜の下組、八班は昭和四〇年以降に出来た須釜の新戸、さらに五班はかつての上丹の上組、六班は下組という具合に組との対応を明らかにしている。なお七・九班は御殿場市から行政委託を受けている須釜分、一班は当初発電所社宅二、三〇戸の班として設定されたが、発電所のオートメーション化とともに欠班となってしまったものである。

原は新興住宅が非常に多くできたモヨリで、もともとは上組、中組、下組（シモッパラ）の三地区に分かれていたのが、現在はそれぞれ七・六・一班となり、二～五班は新しく原に入ってきた人たちの班になっている。原が七班の構成となったのは昭和五〇年ごろの新興住宅地ができたのがキッカケだったが、新住民の班では、原に入った古い順に班長をつとめるようになっている。

(二) ムラの施設と道・境

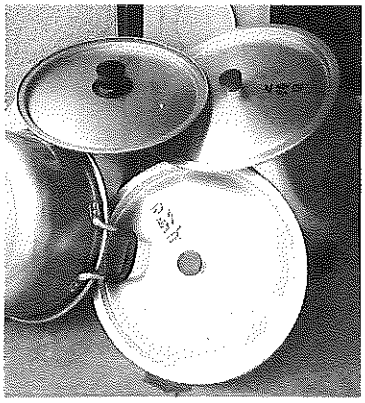
新しい道　大正年間に泉村（現東地区）と深良村との二か村で共同の組合をつくり組合道をつくった。上原から天田橋を通って町田へぬける道である。またこの組合道に交差する新しい道は通称ロッコツ道路といって四、五年前につくられた。南堀から246号線に出られる道である。この道ができる以前、南堀から和市の方へは興禅寺の下の道を通るのが古く、切り通しは大正末までは通らなかったという。

このほか、昭和四七、八年ごろにできた農免道路は、現在は深良の東側を南北に突きぬける主要道路になっているが、もとは細く曲がりくねった道で、荷車のひけないところもあったという。道路の整備と交通量の増加は正比例していった。国道246号線は日米行政協定によって、昭和二七（一九五二）年から二九（一九五四）年にかけてつくられたものである。現在は交通量が増加したため、深良の西側を通るバイパスもできており、上原で本線とバイパスが合流するようになっている。



図II－10　深良の新道

ムラの境　ムラとムラの境は一般的に、川や道で示される場合が多い。深良では、原と須釜の境を古川が流れ、さらに下流ではこの古川が遠道原と切久保を隔てている。市場ではムラの北から東側へ流れる用水が和田との境に、北から西側へ流れる用水が切久保との境となっている。また御殿場線の線路が境となっているムラもある。震橋と町田、上丹と新田がその例である。自然の境としては須釜、すなわち裾野市と御殿場市との境を「箱根山の水こぼれ境」といって、水がこぼれる頂上を境としている。石造物を境の目印にすることもある。和田と南堀の間は切通しになっていて、それぞれの出口に道祖神がたっている。道祖神と道祖神の間には距離があって、ちょうどその中間あたりにある馬頭観音が境なのだというが、境そのものは川や道の場合にもわかるように点や線というよりはむしろ巾あるいは面としてとらえられる。和田と南堀の境も、もとは二つの道祖神の間はどちらでもない巾のある境界だったのが、次第に人通りがひんぱんになって明確な境として馬頭観音の存在を認識するようになったものであろう。



公民館共有のナベ

ムラの集会所　深良には市役所の支所とそれに付属する地区の公的なコミュニティーセンター（通称コミセン）が一か所あるが、こうした深良全体の集会施設というものはもともとは形成されてはいなかった。人々は深良という大きな単位で集まることはなく、集会や通常の交流は小さいモヨリ（最寄）を単位にしていた。モヨリには人々が集まるための施設が必ず一か所は存在している。そうした集会所は、念仏のお堂であったり、神社だったり、あるいは若衆が寝泊りしていた倶楽部や新しくなった公民館だったりするが、いずれも共通しているのは、ムラの人々の共有の財産として持つ、人が集まるための施設であるということである。

改築寄進者名録

須釜の祖始堂

時代的にはお堂の形をとっていたのが最も古い姿といえよう。切久保では唯念上人が建てたといわれ、昔からの住民四七人が観音講中として権利者となっている観音堂が集会所の前身であった。これが昭和七年

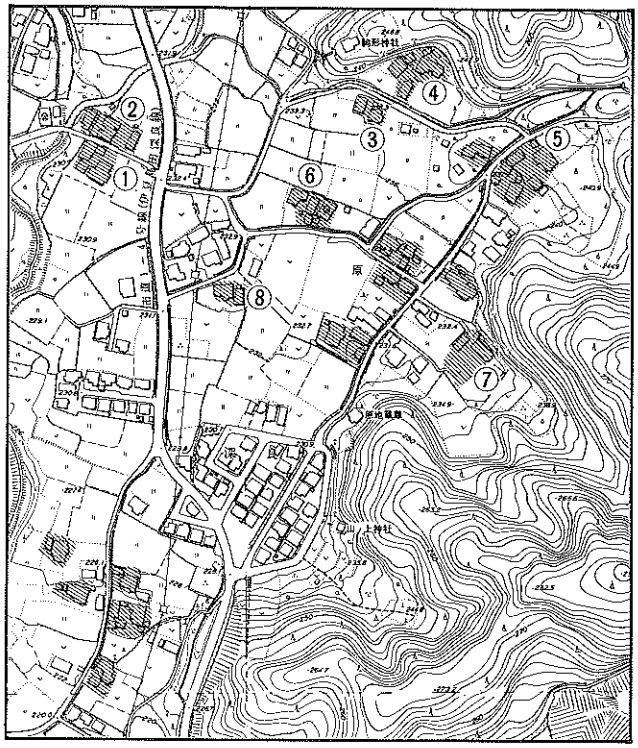
ごろに倶楽部となり、さらに現在のようなコミセンが人々の集会施設としてできて現在に至っている。新田でも、若衆が終戦前まで寝泊まりしていた倶楽部は大正年間に建てられたものだったが、それ以前は観音堂がワカイシュヤドだったという。倶楽部は昭和四六年に、部落の費用と市の補助などによって公民館に建て替えられている。

倶楽部の主である青年団を、ムラの人たちは「部落を守ってくれた」といい、お堂での念仏もまた、部落の無事安全を祈願するものだという。南堀の興禅寺にある村持のお堂では、毎月年寄が一二日と二八日に部落の安全のために念仏を唱えている。お堂や倶楽部はムラを守る拠点でもあった。

お堂であった頃の名残をとどめる公民館も多い。上須公民館の脇には祖師堂があるが、以前は萱葺き屋根で一二、三畳、まん中にイロリが切ってあったお堂を、須釜の二三軒が昭和五八年にお金を出し合って建て直したものだという。もとはこのお堂で若衆が寝泊まりしたが、今は毎月一七日に須釜の年寄りがお題目を唱えている。

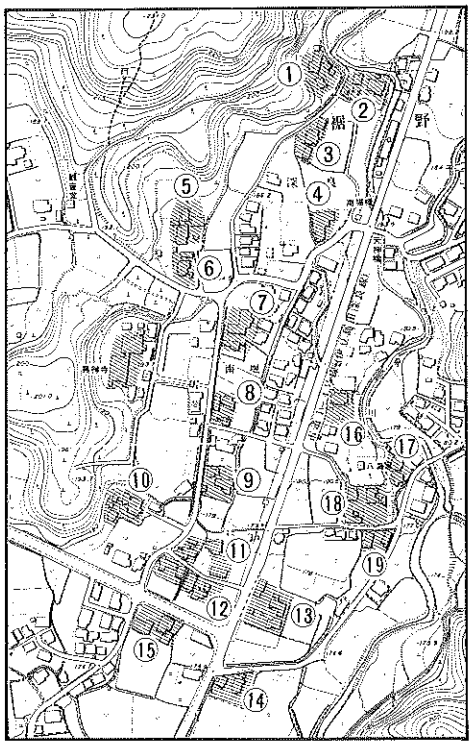
(三) 村の構成員

旧戸と新戸　深良の人々のつきあいの中心をなしていたモヨリ（最寄）は、もともとは戸数も少なく小規模なものであったため、モヨリそのものが生活の単位となっていた。しかし戸数が増えはじめ、モヨリ全体でつきあうことができなくなってくると、内部をクミや班に分割したり、古くからある家と新しい家をつきあいの上で区別したりするようになる。深良では一般に、明治頃までに成立した家を旧戸、それよりも新しく分家したり転入した家をシンコ（新



図II－11－①　旧戸とイエナ〈原〉

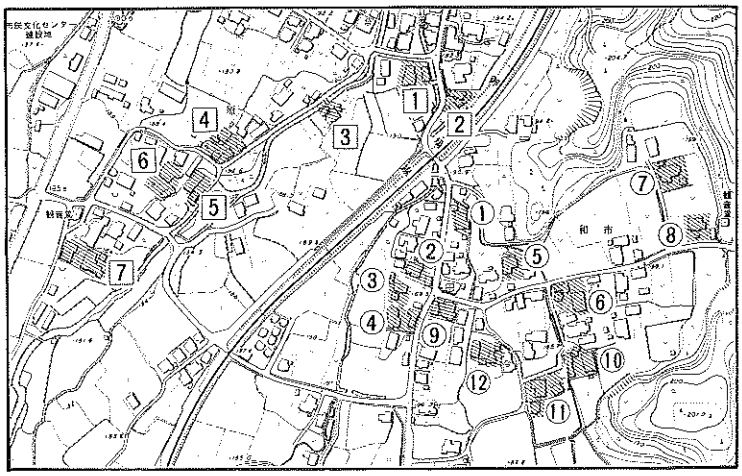
〈原〉▨は旧戸（20軒）
① カワサカ（川坂のオオヤ）
② カワサカ（川坂のニイヤ）
③ ヤッパタ（ヤッ畑）
④ オッコシ（追越）
⑤ ヤマグチ（山口）
⑥ ウエノヤマ（上の山）
⑦ イリ
⑧ コウチナカ（耕地中）



図II－11－②　旧戸とイエナ〈南堀〉

〈南堀〉 ▨は旧戸

① ウワセギ
② シタセギバ
③ サンショーダ（山庄田）
④ ナカミゾ（中溝）
⑤ ウエノホリノウチ（上の堀内）
⑥ シタノホリノウチ（下の堀内）
⑦ ステッキヤ
⑧ ダイモン（大門）
⑨ タナカ（田中）
⑩ ママシタ（アブラヤ）
⑪ オオスギ
⑫ トーフヤ
⑬ オオバサン
⑭ シタンダ（四反田）
⑮ ナガジョウグチ
⑯ シミズ
⑰ ウエノシタガワ（上の下川）
⑱ オオスギ
⑲ シタノシタガワ（下の下川）



〈切久保・遠道原〉

1 アブラヤ（油屋）
2 ツケギヤ（付け木屋）
3 ダタラ（下が溶岩）
4 ツキヤ（搗屋）
5 カワバタ（川端）
6 アブラヤ（油屋）
7 トウフヤ（豆腐屋）

〈和田・市場〉

① トウフヤ（豆腐屋）
② カミヤ（紙屋）
③ カジヤ（鍛冶屋）
④ イザロヤ（ザルヤ）
⑤ ツキヤ（搗屋）
⑥ シモノツキヤ（下の搗屋）
⑦ オキ
⑧ ドウシタ（堂下）
⑨ トナリ
⑩ カワバタ（川端）
⑪ カワバタ（川端）
⑫ シンヤ（新屋）

図II－11－③　旧戸とイエナ
〈切久保・遠道原・和田・市場〉

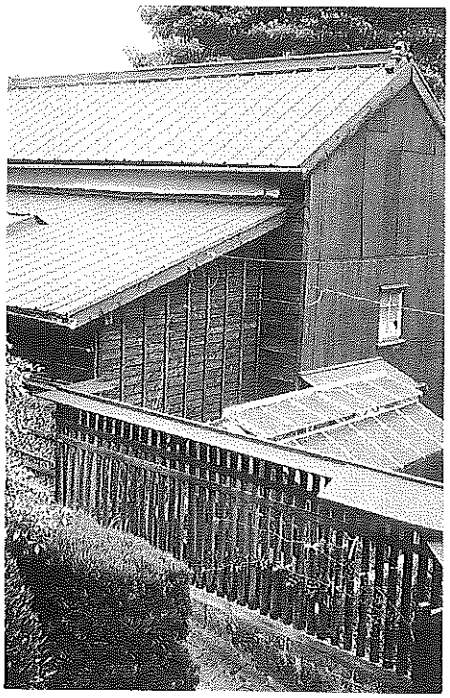
戸）、あるいはニイヤ（新家）と呼んでいる。

旧戸のほとんどの家にはイエナ（エーナ＝家名）があって、旧戸同士では今も長男の結婚式に招待し合う。また、旧戸には稲荷や屋敷墓のある家も多いが、新戸にはない。旧戸と新戸の区別を明確にするようになったキッカケは、共有林の財産区運営と区の財政とを分けるようになったことで、現在、共有林の財産区は旧戸のみの権利となっている。

原では九八戸のうち二〇戸の旧戸から三名、残りの新戸から二名が選考委員を組織して区長の選出を行う。和市の旧戸は二三戸、震橋は昭和初めには一五戸だったが、幕末から明治初期にかけての戸数は、わずかに七戸しかなかったという。

町田　松井家の表門

地主と小作　深良では、町田の松井家、新田のカミ小林（本家）シモ小林（分家）が御三家と呼ばれる大地主であった。戦前は天田上の耕地の半分以上が両小林家によって、また天田下の耕地はその多くが松井家によって所有されていたという。原では戦前、自作農は四軒、小作農が一六軒だったというが、このうちたとえばシモ小林の小作は一反につき七俵の米がとれると三、四俵を小作料として納めていたという。小作料は小林家がカネオヤをしているコブンがとりたてたものだった。また町田の松井家では、一反につき六俵とれてやはり三俵納めるといったように、このあたりの小作料は収穫の半分が目安だった。このような小作料は、古くからの習慣でネング（年貢）と呼ばれ、松井家では小作人が期日までに小作料を全部持ってきた場合は、一俵分を小作人に返したりもしたという。こうした地主は入ってくる小作米で、酒や正油を造ったりしたもので、カミ小林家のイエナはサカヤ、シモ小林家はオション（ユ）ヤといった。小作の家からの分家はあまり出ることはなかったが、分家した場合には水田を借りることができないので、山の開墾で土地を拡げ、麦や小麦、甘藷、トウモロコシなどをつくった。開墾は戦前から昭和三〇年ごろにさかんに行われた。



松井家米の倉

一方、ムラの娘たちはしばしばこれら地主の家へ女中奉公に出た

ものだった。御三家には、御殿場や神山、三島などからも奉公に来ていたが、深良村内の娘が主で、嫁入り前の行儀見習いを兼ねて、掃除や縫いものをしたり、お勝手やノラ仕事にも出ていた。松井家には戦前、下男二人と女中五人の奉公人がいたという。女中の中には、一度嫁に行って子どもができたのちに、夫が亡くなったので再び奉公に入ったという人もあったという。奉公人の中には、家内中で地主の手伝いをする家もあって、そういう人は「昔はほんとに何でも捨てて（何よりも優先して）来てくれた」ものだったという。母と息子と二代にわたって奉公に来ていたという家では、孫の代になった今でも当時のかかわりから「便利に使っている」という。

このような地主家は小作の家々のカネオヤとなり、小作はコブンとしてつかえたものだった。松井家の現当主は一五軒のカネオヤをしたが、コブンはオヤサンを頼り、またオヤサンの家の畑仕事や葬式の手伝いなどはコブン同士が相談してやったものだった。葬式ではコブンの近い人が棺を担ぎ、正月はコブンがそろってオヤブンの家へあいさつにいったり、暮にはコブンからモチを届けたりしたという。

地主の家同士は村政などに関係してつきあいも深いことが多く、互いに盆や中元に届けものをしあった。この時、届けに来た女中に小遣いや手拭いをやったものだった。またムラの行事にはあまり参加しないのが普通で、御三家からは年寄が念仏に出たり、息子が倶楽部に寝泊まりしたということはほとんどない。ただシモ小林のおばあさんのようにオディリ（髪結いや手伝いに来る昔の奉公人など）の人たちがムラの行事について、いつ何があるかを教えにくるので、祝儀を包んだりしたものだった。

上須区総常会決議事項　（昭和６３年度より）

1）協議員は、各組１名選出する。
　正副区長の選出された組にても選出する。
　協議員は任期を２年とする。正副区長を降りた人は顧問とし、任期は１年とする。
2）正副区長は、全区域から選出する。（片寄りでもよい）
3）公民館寄付金は１戸２０，０００円とする。（新規加入者）
　公民館使用料
　　使用料は個人使用の場合のみ２，０００円とする。
　　ガス代金は利用者負担とする。（メータによる）
　　ガス代金は区一般会計に入れる。
4）葬儀委員長は組長が司どる。出来ない場合は組の協議員が司どる。
　上記役員で出来ない時は、前年度組長が代行する。
　正副区長は、一般区民とする。
5）区会計は、会計報告書を作成の時を区会計の年度末とする。
6）公民館の清掃は、当番制として月１回実施する。各当番は４名～５名とする。
　当番は出来るだけ、月の最終日曜日に清掃実施する。
7）山林役員と防災役員は、区役員との兼任を認めない。

ムラの役職（上須）

ムラの役職

明治時代はムラをまとめる長として常設委員と呼ばれる役があったが、これが大正六年ごろから区長となったという。区長は行政区ごとに設定されるので、たとえば上須などのように、上丹と須釜という二つのモヨリから成っているところでは、上丹から区長が出ている時は副区長を須釜から出すというふうに、バランスをとる工夫をしている。上須では区長が行政事務を、副区長が会計納税関係を受けもち、組ごとに区長に招集される協議員が一人ずつ出ている。町震や和市もやはりこの単位で一人の区長を出している。

班ができる前の組だったころは、上須では寄合で組長を決めたものだったが、現在は回覧板の順に班長を出している。南堀には区長が引きつぐ区長箱がある。また区長がまとまって区長会をもつが、その長として区長会長という、かつての深良村の村長にあたる役が設定されている。深良村全体の運動会はこの区長会が主催で開かれ

る。

ムラの寄合　寄合のことをこのあたりではジョウカイ（常会）ということが多く、ムラ中の人が集まる場合を総常会といったりする。原では以前は区長が必要に応じてよく常会を開いたという。当時は百姓が主で、山が稼ぎ場だったので山の道のことなどをよく話し合ったものだった。現在の常会は、区長が市からの連絡事項を伝えるといったことが中心になっていて、総常会は毎年三月下旬の日曜日に開かれる。このときは一年間の事業・会計などの報告、役員改選、新年度の予算や区費の決定などが行われる。会場は現在は原公民館だが、それ以前昭和一〇年から三〇年ごろは倶楽部で、さらにそれより前は区長宅に旧戸二〇戸が集まっていた。役員会は二か月に一回開かれ、区費は毎月二六日に開かれる婦人会で集めている。上須の総会も三月第三日曜日に公民館で開かれ、事務会計の報告や新役員の決定が行われるが、かつてはやはり区長宅に集まったという。

各区とも一月一一日には新年の初常会がひらかれる。この日はオソナエワリの日で、戸主が公民館に集まって、その年の行事予定や役員の選出などをする。また、かつては主婦の初常会も一月に開かれ、田植えの時のイイを組む仲間でその日取りを決めていたという。南堀では、旧戸の山の関係者ばかりの常会が一月の第二日曜日に開かれる。組常会も時々はあるが、ほとんどは班長が集まって区長と話し合って決めてしまう。

こうしたムラの寄合も、もともとは講として集まることから始まった。今のような会議のようになってしまう前は、もっぱらムラうちの親睦をはかるために集まったもので、飲み食いをしながらあれこれ話しているうちに、ムラについてのさまざまなことを決めていったりしたものだった。深良の各モヨリではかつて、バンジン講と呼ばれる講を行っていた。万神講とも万人講ともいい、何の神様かは明確でなく、ご飯の神様と伝えている（上須）ところもあるが、いずれにしても神様と共食することを口実に、ムラの戸主たちが月一回（農繁期を除く）、当番の都合のよい日に集まっては酒をくみ交わしながらおしゃべりをした。万人講とするのはムラ寄合であることをよく表しているともいえる。南堀は戦前まで、上須は一〇年以上前にやめたという。原では二〇年ほど前まで「月並講」といって旧戸が当番の家にあつまる会をしていたというが、「蕃神講」と呼んでいた講は一月と一〇月の一七日の山の神の講だった。

第四節　共有と共同

㈠　山をめぐる共有と共同

深良財産区　大字深良の入会として所有していた共有林は、昭和三二年に財産区制度に移行して深良財産区の管理となった。これに伴なって深良地区全体の財産であった山林が、財産区の成員、つまり山の権利を持つ者だけの入会となった。またこの財産区には岩波は入っていない。現在その管理は深良支所長が代行する形をとり、各区から四年任期の財産区議員が出て三月と九月に支所で会議を開いている。

深良の人々はこの財産区から土地を借りて開墾や植林をしてきたが、これを借りる権利を持っている家を旧戸といって、財産区議員

はこの旧戸が開く山の常会で選出される。原では、明治の末から大正にかけて旧戸が古い分家を含めて二三戸だったが三戸が転出して権利を失ったため現在は二〇戸となっている。財産区の土地は原がモヨリとして一括して借り、これを個人に分けている。終戦後、新田などでは借りている共有林を分割しなおして、それまでの旧戸六〇戸に加え、新しい四〇戸にも分けたので現在山の権利者は百戸になっている。一方、原では終戦後の分家を入れていないので、今も山の権利をもつのは二〇戸と変わっていない。町震は明治ごろまで四七戸だったのが、やはり終戦後の昭和二二年に一定の金額を支払うことで分家を加えたため、現在は六二戸となっている。切久保と遠道原は山については一つのまとまりとなっており、六三戸が窪入の土地を一戸につき三町五反で分けている。上原は四二戸で三二町歩を借りている。南堀で山を持つ人は二七戸、これはモヨリ全体の二割ほどだという。この中から山の委員長、副委員長、書記を各一名選出して山の世話人としている。

山の利用　それぞれのモヨリが借りていた山林をモヨリブン（最寄分）といって、利用の方法はだいたい同じようなものだった。

〈植林〉　植林する木は杉や檜で、三〇年、五〇年で伐採する。個人個人で借りた土地に植林することもあるし、モヨリごとにする場合もある。特に、紀元二千六百年（一九四〇）記念で植林したモヨリは多く、上原でも小日蔭に記念植林をしたという。また櫟を植林して、葉を集めて堆肥を作るのにも利用した。

〈萱場〉　これはモヨリごとにもっていて、萱の屋根を替えるときはそれぞれの萱場からとってきて使った。上原の萱場は堀切といった。

〈開墾〉　南堀では明治以来、昭和三〇年ごろまでザッボクリン（雑木林）の開墾をした。特に終戦後の食糧事情の悪いころは開墾が多かったという。

〈雑木林〉　雑木林では、薪を拾ったり切ったりしたほか、牛馬用の草をとったり、あるいはほとんど自家用であったが雑木を使って炭を焼いたりもしたものだった。

モヨリブンのほかにマカナイブン（賄い分）と呼ばれるところもあった。これは小学校の積み立て金になったり、学林といってもともとカヤバだったところに植林した。この木を深良小学校を作るための資金にすると同時に、学林の木を建築材に使って校舎を作った。箱根竹を切る鑑札を昭和一〇年ごろで五〇銭取り、そのお金で学校の教科書を買ったりもした。その当時、子どもに無料で教科書を配っていた村は、全国的にも非常に珍しかったという。

山の管理　ヤマミチツクリは、それぞれ区を単位に九月の台風が来る前に行うので、ナツミチツクリともいう。町震ではナツミチツクリは七月最終の日曜日に行っている。二〇人ずつ毎年交代で、道の両側の草を鎌や鉈で刈っていく。また旧戸六二人が、一反歩あたり二〇〇円の計算でお金を集めて、毎年少しずつ舗装工事も行っている。新田では「新田山の会」という組織を作って、林道の拡幅舗装は個人からは集金せずに、スカイライン敷地に貸してある土地代や財産区からの交付金などで賄っている。新田では三年交替で六人の山の世話人を出している。

かつてはミチツクリといえば、御殿場から富士山のヤキ砂（川の砂）を馬力でもってきて乾燥させ、これで道を直したものだった。特に馬力を使って木材搬出をしていたころはヤマミチは相当痛んで

いたので、南堀などでは朝七時に出て夕方五時まで、馬を持っている人は二日、持たない人は一日作業に出ていたという。舗装が進んで昔のような大変な仕事ではなくなった最近は、朝は八時から午後は山で弁当を食べて三時ごろには下りてきてしまう。今も出られない場合は出不足金を五〇〇〇円出すことになっているが、山の利用が少なくなり、かつてのように山に行くことのなくなった今、ヤマミチツクリは道普請というよりもむしろ、若い人たちに山を見学させ教えることに意味があるのだという。

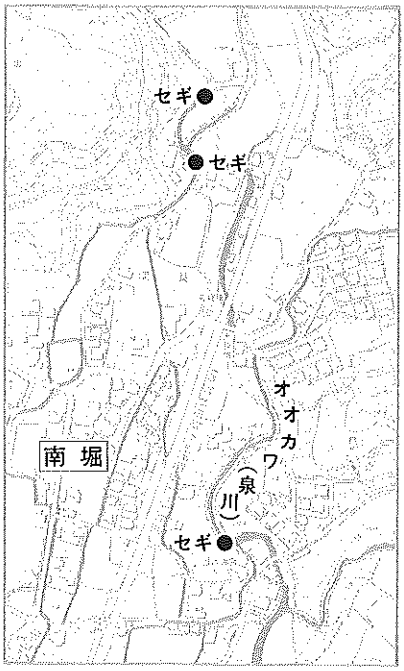
カヤ刈りと草刈り　南堀では、屋根を葺き替える時は、箱根山にあった南堀の萱刈り場から萱を刈ってきていた。毎年一月一一日の初常会で、カヤムジン（萱無尽）といってその年に屋根を葺き替える家を決めた。屋根替えをすることになった家では、縄やヒゴ、ヤミダケ（闇竹）などを用意し、モヨリの人たちは一一月から三月ごろまでの間にモヨリごとのカヤバで萱を刈った。また上原では萱のヤマヤキ（山焼き）を毎年二月中旬ころにモヨリ中が出て行った。ヤマヤキのあとは、出なかった家の出したニットウ（日当）で一杯飲むのが習慣だったという。カヤムジンは原では昭和四〇年ごろまで続いたが、先に瓦葺きになった家は労働力としてのムジン返しができないので、旧戸のつきあいとして一日分の労働を金額に換算し、お見舞いとして渡していた。

牛馬の飼料にするための草刈りも箱根山へ行っていた。夏になると、朝早く出かけて一〇時すぎに戻るまでに六束刈り、午後は二時ごろに出かけて五時ごろに戻ってくるという風だった。以前には御殿場線の草を許可をとって刈っていたこともあるという。こうして刈った草は飼料用ばかりでなく、その大半は堆肥を作るのに使ったものだった。

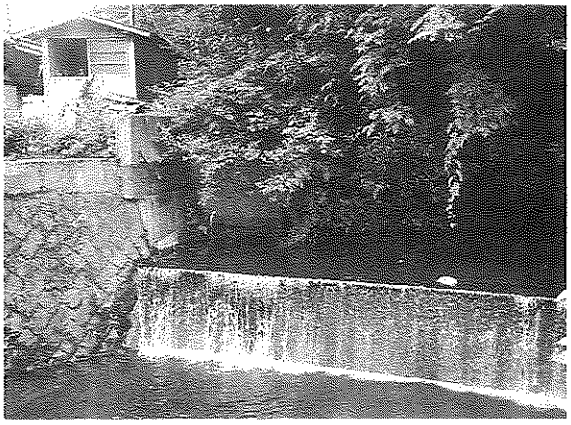
(二)　水をめぐる共有と共同

用水とセギ当番　深良用水の水掛りのムラムラでは、江戸時代から水配人を出して共同でその管理にあたってきたが、深良用水の管理については第一章第二節に詳しいので、ここではムラ内部での用水管理について述べておくことにする。

各ムラではそれぞれ用水を分けるためのセギ（堰）をつくり、当番をたててこれを管理してきた。南堀では旧戸二三戸から、かつては五人ほど、現在は二人をセギ当番として順に選んでいる。セギ当番はセギが木でできているため壊れやすく、年一回これを直したり、五月の川の掃除の時には朝、セギで水をとめたりする。しかし大庭三郎家の裏のセギは、昭和六、七年ごろに田を持っている人が一反いくらの割でお金を出し合ってコンクリートにしたため、管理がとても楽になったという。



図II－12　南堀のセギ



大庭三郎家裏のセギ

南堀のセギは泉川に沿って三か所あり、上から大庭勝也家の裏、広瀬久信家の裏と大庭三郎家の裏にある。セギバン（堰板）は大庭金作家にあって、水が多く流れてくると、水が溢れないようにオオカワ（大川＝泉川）の方へ流すためにセギを立てるが、セギの開け閉めはセギ当番ではなく、セギに近い家々が行っていた。これらの家々をセギバ（堰場）といって、大雨の時などにはセギバの家々はセギの管理が大変だったという。また水の少ない年は、ここから上は昼間水を入れる、あるいはここから上は夜入れるといった具合に調整していた。

生活用水としての川と井戸　深良の家々は川が生活用水であった。家ごとにつくられたカワバタが川や用水におりられるようにできていて、飲み水も風呂の水もすべてこれでまかなうことが多かった。原では井戸のある家もあったが、川の水を使う家の方が多かったという。原や南堀は芦湖の水が滲み出たジスイで灌漑できるため用水にも不自由しなかった。南堀でも二、三軒井戸を掘った家もあったが、かつてはほとんどの家が川の水を使っていた。

一方、震橋では大庭幸一家に江戸時代の終わりごろに掘った井戸があって、昭和の初めごろまではモヨリの一四軒が飲料水としてこれを使っていた。また町田では松井謙一家が家の上のところに山から湧き出てくる水を集めてタンクをつくり、ここから松井家だけでなく近所の家もこの水を貰って使っていたという。

チフスの流行と水道の敷設　「三寸下がれば水も飲み水」といって、上から流れてくる川の水は清められているという了解のもとに何にでも使っていたが、昭和七年にチフスが流行ったのをキッカケに深良にも水道がつくられた。もっともそれでも当時の人たちは、チフスの出た家の前はうつるといって口に手をあてて通るのに、上流で洗濯をしている川の下流ではその水を飲むという状態だった。チフスは猛威をふるい、当時深良にあった避病院に入りきらず、三島の病院にまわされる患者も出るほどの流行となった。当初水道に月六〇銭支払ったが、上丹ではやがて何年かたつとタダになると噂されたという。

水げんか　用水の水を田に引くシロカキのころに水の取り合いが行われた。明日シロカキをするという日は、徹夜で用水を見張ったもので、昭和一〇年頃には上原と遠道原の間に大きな喧嘩があったという。

㈢　農作業のための共有と共同

イイ（ユイ）とヒトデ　農作業には短期間に大量の人手を要することがある。そのような時の人手の確保には二つの方法がとられてきた。イイ（ユイ）といって近所や親戚同士が労働を交換し合う方法と、お金で人を雇う方法である。深良では田植や稲刈、脱穀、

茶摘といった時期に人手を必要とする。イイは部落内の隣近所の家や、部落内外の親戚の家同士が行うが、隣近所の場合にはどの家とイイをするかがほぼ固定していたのに対して、世代によって関係の異なる親戚とのイイは年を経るにつれてどの家とするかは変化した。部落外の家とのイイは忙しい時期がズレるので頼みやすいという利点もあった。

戦後になって出てきたヒトデ（人手）は、深良より田植の早い御殿場にまとめ役の人がいて、そこからヒヨトリ（日傭い）のソートメ（早乙女）などが手伝いに来たものだった。

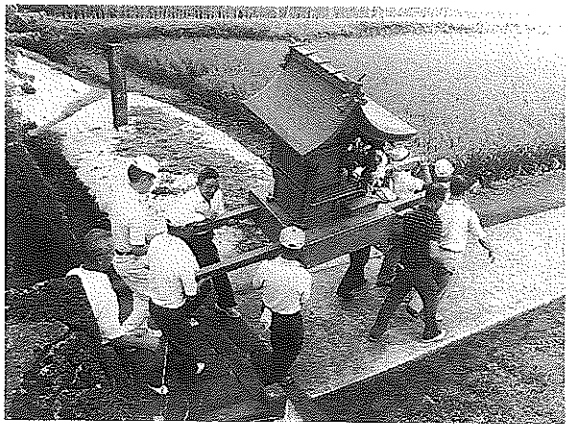
また、原では以前、隣組単位で共同田植をしたこともあるという。農作業の共同には、このような労働交換ばかりでなく、資金面での共同も行われた。同じく原で、牛馬を飼っている家ばかり、旧戸二〇戸ほとんどが昭和三〇年代までやっていたという観音講は、家畜無尽ともいって無尽からお金を借りて牛馬を買ったものだった。

共同作業所と水車小屋　モヨリごとに共同作業所や水車を共有していることが多かった。南堀の作業所は昭和二〇年代まで一か所あり、水車小屋もやはり明治初めごろから昭和二〇年代まで一か所あったという。原の作業所は倶楽部と一緒になっていて、広さが八畳と六畳に土間がついた小屋に、縄綯いや精麦、精米の機械が置いてあった。上丹の共同作業所も二間半×二間半の土間のあるお堂で、今はお題目をしているが、かつては縄綯いの道具などが置いてあったという。こうした共同作業所がムラにつくられたのは昭和七、八年のころ、昭和恐慌で農村に補助金が出たためだった。

また水車は、原では上組、下組にそれぞれクミウチのものがあって利用したが、人によっては上丹にいた専門の人に頼んで米を搗いてもらった人もあった。町田にも上組、下組それぞれに一か所ずつの水車があり、共同で使っていた。

㈣　神社と墓地をめぐる共有と共同

ムラと氏神　ムラの中には、いろいろな単位でこれを祀る神社がある。深良では大きくわけて天田上で祀るのが赤子神社、天田下で祀るのが深良神社であるといわれる。しかし実際には、赤子神社を氏神としているのは神社のある上原と、その隣の新田だけで、原・須釜は駒形神社、上丹は神明神社を氏神としている。一方深良神社の方ももとは町田の神明社があったところに、八幡社、浅間社、天神社などを明治四三年の神社合祀でここに集めたもので、南堀では深良神社のほかに独自の氏神として八幡神社を祀っている。



吉田さんの祭　神明神社へむかう

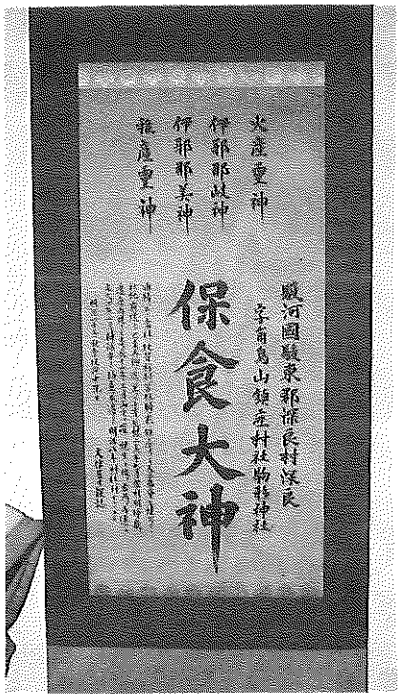
神社を共有し、神祭りを共同で行うことは人々の日常的なつながりの基盤となっている。ゆえに赤子神社は、実体としては上原と新田の氏神でありながらも、天田下の深良

神社に対しては、天田上を代表する神社としてあげられるのである。赤子神社には、永祿年中（一五五八＝七〇年）に二体のご神体がみつかったという言い伝えがあり、その古さが天田上という単位を代表する根拠となっている。しかし一方で、この赤子神社のある上原だけが行うまつりもある。赤子講とカザマツリは上原だけが行うもので、現在は公民館で山の神講と一緒に行うようになった赤子講は、もとは当番宿に集まり掛け軸をかけて飲み食いしたモヨリの講だった。また二百十日のカザマツリはモヨリがこの日の費用を負担して、赤子神社で行われる。こうした集まりには神官は呼ばれずモヨリの人たちのみで行われる。

深良全体が単位となる祭りもある。いずれも明治になってからの祭りで、九月一日の吉田さんの祭りは明治のはじめに伝染病がはやった時に京都の吉田神社から分霊してもらったのが始まりという。天田上は上丹の神明神社、天田下は町田の深良神社のそれぞれのソトミヤへ、一年交代で祠（ウチミヤ）を安置する。神社祭祀ではないが、上原公民館にある庚申堂で明治時代にはじまったという弘法さんの祭りも、毎年三月二一日には町田を除く深良中の人があつまるという。もとは庚申さんの祭りもあったという。

このように深良には、深良全体がかかわるもの、いくつかのモヨリが合同で祭祀するもの、一つのモヨリが氏神として祀るものと、いろいろな単位で祀る神社が存在するが、基本となる単位は常にモヨリであるということができる。

モヨリと氏神　モヨリごとの神社として、新田には稲荷社や山神社があり、新田の旧家が世話人となっている。上丹の神明神社は正月一六日が大祭で、一軒一人は必ず出て直会をする。駒形神社は原と須釜が祀っているが、神社のある原では、モヨリだけで当番の宿をまわして年に一度、一〇月一〇日の前の日曜日ごろに駒形講のお振舞をする。一軒から一人は必ず出て食事や酒を共にする。原ではこの駒形講のほか八月二四日に地蔵祭りをするが、昔は組ごとに出す世話人がお地蔵さんをお祭りするために泊まることもあったという。



駒形講の掛軸（原）

南堀にはかつて、八幡社、天神社、浅間社、社口社、山神社、天白さんといったいくつもの神社があったが、明治三九年（一九〇六）の神社合祀の際に、八幡社、天神社、浅間社は深良神社に合祀されてしまった。このうち天神社や浅間社については、今も深良神社にあるそれぞれの小祠で祭りをしているが、本来南堀のモヨリの鎮守だった八幡社だけは、もとの社殿に戻して祀っている。このいきさつについて、大庭敬一さん（大正三年生）が子どものころに古老から聞いたという興味深い言い伝えが残っている。

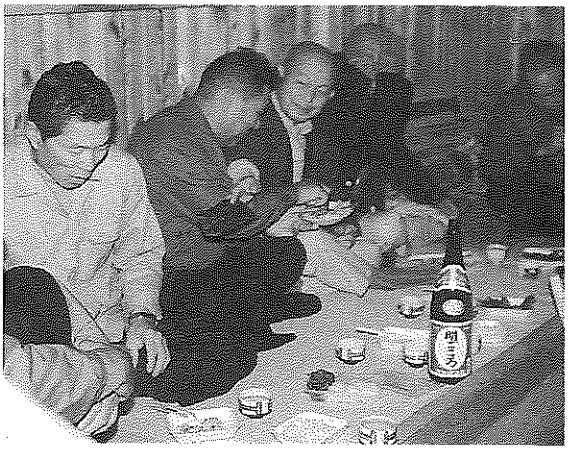
明治三九年八月、八幡社の御霊代を深良神社に合祀するため、御

南堀八幡神社

輿に安置して夜中に南堀から担ぎ出した。ところが南堀と町田との境四反田付近で、どうしたことかこの御霊代が御輿から落ちてしまった。夜中のことで御霊代が深良神社に安置できたのか、八幡社に帰ってしまったのかわからないが、御輿を担いだ人達は間もなく病気になって死んでしまった。

こうした話が伝わっているのは、真偽は別として、八幡社が南堀というムラにとって大切な氏神であって、他へ持ち出して祀ったのでは意味がない神社であることを示している。

また、いくつかのモヨリがあつまって祀る神社もある。切遠和市、すなわち切久保、遠道原、和田、市場という単位では高雄山の穂見神社を祀っている。一一月三〇日から一二月一日までの祭礼ではモヨリ中が出て、かつては若衆が芝居をしたりした。原の秋葉神社は、上原や上丹、須釜も共同で祀っていて、上須・上原・原という単位で順に当番をまわして毎年九月に祭りを行っている。上原の山神社は、もともとは志村守雄家のものだったというが、現在は世襲のカギトリ（鍵取り）をする志村正夫さんのほか二人が氏子総代



穂見神社直会

となり、上原・切久保・遠道原の三つのモヨリで祀っている。上原はまた、箱根山のオキ（沖）に子の神様を祀っていて、四月五月のミチツクリの時に祭りを行っている。上原では、赤子神社・山の神・秋葉神社・吉田さん・庚申さんの祭りとカザマツリ、及び車返しの最復寺のまつりに区から費用を出しているという。

南堀の天白さんは手を守る神様といわれ、九月一六日にモヨリの年寄が祭りをしているが「南堀、町田、和田、市場、遠道原最寄中」とある木札が残っていることから、かつては切久保を除く天田下のモヨリが共同で信仰していたと思われる。

神社の維持・管理　南堀では昭和六一年（一九八六）に、八幡社の改築を区総常会で決定し、その費用については南堀全戸から毎月一〇〇〇円を一年間集め、積立貯金することにした。全戸からということはすなわち、氏子の家は平等にその費用を負担することが義務づけられたわけだが、一方で神社へのかかわりは氏子のすべてに同様ではないことが多い。昭和六三年、八幡社の旧の社殿や拝殿

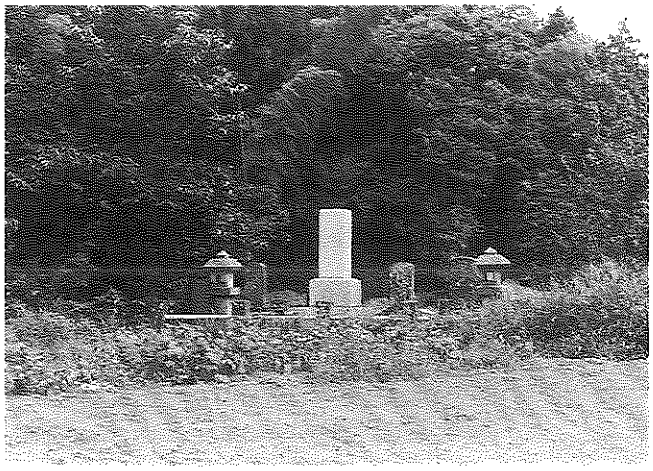
を解体する作業が行われた。この時に労力提供したのは「区長、世話人、旧戸全員」であったという。旧戸であるか新戸であるかが、南堀における八幡社とのかかわりの差にあらわれる。祭祀においては負担が大きいということは、それだけ恩恵（特権）も大きいということであり、家の新旧がこの差の規準となる場合が多い。

裾野市域では氏子総代のうち、世襲で最も重要な役の家をカギトリ（鍵取り）と呼ぶことが多い。赤子神社では新田から三人、上原から二人の氏子総代がいるが、この他に世襲のカギトリを渡辺勉さんがつとめている。また一〇月一〇日の祭礼にあたっては別に、新田と上原が一年交代で当番となる。上原が当番区になった年は、五組から一人ずつ出る祭典委員が中心となって祭礼の準備をしている。このように神社をめぐっては、象徴的存在のカギトリ、対外的に神社を代表する氏子総代、実際の祭礼を運営するための当番という三層の構造ができていて、カギトリが世襲なのに対し、氏子総代は多くの場合再選を防げない任期制、そして当番は年番制であるという傾向をもつ。このような三層の役割分担によりムラの神社は維持・管理されているのである。

なお、深良地区には現在二二人の氏子総代がいる。内訳は、深良神社（町震2、南堀・和市2、切久保・遠道原2）六人、赤子神社（上原2、新田3）五人、大神宮（上丹神明社）三人、駒形神社（原2、須釜2）四人、これに岩波の駒形八幡宮四人の計二二人である。また、これら五社の総代として神社総代会深良分会長が出るが、これは現在は深良神社の総代から大庭満さんがつとめている。大庭さんの前には、赤子神社の氏子総代が会長をつとめていたという。

墓地と火葬場　町田の松井謙一さん（明治四〇年生）の父親が亡くなった時は、深良の火葬場へお弁当やお酒を持っていって、一晩中焼やしながら番をしていたという。謙一さんの母親はやはり昭和四五年ごろに亡くなって火葬をした。謙一さんの祖母は土葬だったが、曽祖母の頃は自分の山の焼き場で火葬し、骨をカメに入れて埋葬したという。

深良では明治時代、コレラが流行って一〇日間のうちに一一人死んだことがあったが、当時はまだ火葬場はなかったという。その後、モヨリごとの焼き場ができてノヤキ（野焼き）をするようになった。切久保と遠道原の火葬場は工業団地地先にあったという。震橋では大正初めまで山の共有地で火葬し、屋敷の墓に埋めていた。深良としての火葬場ができてから村役場でオンボウをたのんだり、共有のリヤカー一式と霊柩車を持つようになったが、火葬が増えたのは昭和三〇年代になってからだという。



山際にある屋敷墓（原）

屋敷の墓は旧家に残っていること

が多く、震橋の旧家七軒は屋敷のコバ（端）に墓地があったが、大正五、六年ごろからそれぞれの檀那寺に新墓地を設けるようになった。一方、原では、旧戸が使う共同墓地があるが、これができた明治三年ごろから火葬が行われるようになったということで、それ以前は屋敷の墓に土葬していたという。共同墓地は明治のはじめに政府の命令でできたもので、上原ではこの時つくったのを旧墓地、戦後新たに山神社の隣につくったのを新墓地と呼んでいる。ちなみに原では、旧戸の使っている共同墓地をシンバカと呼び、現在の組でいうと、一、六、七組がシンバカを使用し、二組から五組の新戸はお寺の墓地を使っている。また七組は須釜との共同墓地になっている。須釜のシンバカは明治二二年につくったもので、それまではやはり屋敷うちに墓があった。土葬は終戦ごろまであったが、昭和二七、八年ごろに火葬になったという。当時の火葬場はモヨリ単位でもっていて、薪を持ち寄り、重油をかけて燃やしていた。

上原の共同墓地（新墓）

第五節　ムラの集団構成

(一)　近隣集団

葬式組　近隣の家々が手伝い合いをする場面として最も典型的なものが葬式である。特に葬儀屋がなく、土葬だった頃には、葬式にはたくさんの人手がいったもので、その手伝いはもっぱら組を単位としていた。上須では、かつては上丹、須釜それぞれに葬式は全戸で手伝ったもので、上丹は家が少なかったので須釜から手伝いに出ることもあったという。葬式を手伝ってもらうため、組の人に知らせることをタチヨリという。土葬当時、須釜では穴掘りが三、四人、輿揚げ（棺担ぎ）が四人のほか、部落総出で二人一組になって他所へ知らせに行った。南堀でもやはり、組ごとに、ギョウズイ（死者の体を清める）二人、穴掘り二人、輿を担ぐ人四人、その他の人は二人一組で知らせに行った。もとは穴掘りをロクシャクといったが、火葬になってからはロクシャクの仕事は火葬場までの棺の運搬にかわった。

南堀の場合は上組と下組が葬式組の単位となっていて、それぞれに穴掘りの帳面ができていた。この組のことを葬式組ともいって、上組に死者が出ると上組が手伝った。しかし火葬になって穴を掘る必要がなくなり、葬儀屋の関与も進んできたため、戦後は葬式手伝いは班単位となった。穴掘り役の手伝いは今はカロウトのふたを開けるだけである。

切久保では、班長が葬儀委員長をつとめ、上組と下組にわかれて手伝っている。一班から死者が出た場合、一班から一人、二班から

二人が出て手伝い、葬儀には一・二班の上組は全戸から夫婦そろって出るが、三・四班の下組からは班長くらいしか来ない。原でも昭和五〇年ごろ、新興住宅地ができたのをキッカケに七つの班をつくって、この班ごとに葬式の手伝いをしようとしたがうまくいかず、一、二年でもとの組にもどってしまったという。現在も旧戸の葬式は、昔の組ごとに手伝っている。班単位で手伝いをするには、その班がかつての組を基礎にしていることが重要で、葬式のようなしきたりを重んじる儀礼の手伝いには日常生活においてそれなりに深いつきあいをしてきているかが問題となっている。震橋でも、現在は班ごとに手伝っているが、大正頃まではクミウチで手伝った。クミウチは江戸時代から続くもので、町田と震橋が入り混じって五人一組くらいでできていたという。

講集団　深良には、近隣集団を単位とした講が、かつてはいくつもあった。新田では終戦直後まで、遠州の秋葉さんへ防火祈念に当番をたてて代参にいっていた。代参が戻るとモヨリ中があつまり、宿でナオライをしてお札を配った。山の神講はモヨリごとに行うことが多かったが、何かにつけて関係の深い切遠（切久保と遠道原）は一緒にやっていた。もっとも、ナオライは別々にしていて、それぞれのモヨリの一軒一軒を宿にしてまわっていた。切久保は山の神講をやめてしまったが、遠道原は今も、講ではなく祭りのみ行っていて、夜のナオライはコミセンでやっている。切遠はほかに観音堂でのオテネンブツやゲートボールなどを一緒にやっている。

昭和三〇年ごろまで、切久保ではモヨリ中の家を一軒ずつまわして振舞いをする万神講を、八月から三月までの毎月やっていたという。万人講という人もあり、町震では上組、下組それぞれの組にわかれて行った。単位になる集団内の家がすべて参加するという意味で、バンジン講なのであろう。町震は講の単位集団がモヨリというより上組と下組となっていて、かつては万神講のほか、大山講や秋葉講も組ごとに行っていた。

葬式組が旧戸はもとの組を単位としている原では、講もやはり同様で、山の神講や駒形講など旧戸のみで行われている。原の旧戸は二〇戸余りで、現在の七班にあたる上組、六班にあたる中組、一班にあたる下組（シモッパラともいう）が単位となって組ごとの輪番制で、当番の家に寄り合っている。山の神講は毎年一月一七日と一〇月一七日、駒形講は毎年一〇月一〇日が祭日で現在もつづいている。駒形講の駒形神社というのは須釜と原の神社で、祭礼は須釜と原が順番に当番となっている。

(二)　年齢集団

若衆と青年団　現在の青年会はその前身を青年団、さらに以前はワカイシュウ（若衆）といった。青年会、青年団というと運動会や敬老会の主催、夜警、夜学会などたいへん健全なイメージが浮かんでくるが、これは国の政策によって組織された集団であったことから来るもので、本来の若衆の活動には祭りや遊びといったことが中心的な位置をしめていた。中でもこの地域で特徴的なのが倶楽部の存在である。倶楽部という名称も青年団と対応したもので、若衆の頃はヤド（宿）といって多くの場合、ムラのお堂があてられていた。青年たちはヤドに寝泊まりしながら、共に遊び、共に労働するという協同の生活を通して、仲間意識を育んでいった。この仲間意識が、のちにそのムラを背負ってたつ世代になってムラ人としての

仲間意識の形成の基盤となる。このため、このあたりでは一般的に、「学校を終えてワカイシュウに入らないと一人前とはいえない」といったものだった。

若衆への仲間入り　若衆へは、小学校高等科二年を出るとすぐに加入するのが一般的だった。大正生まれの上原のSさんは、長男だったので満一六歳の時に仲間入りした。次三男も入らないことはなかったが、たいていは口減しなどで他所へ奉公に出ていたので、ムラの若衆には入らなかった。一方、他所からムラ（モヨリ）へ奉公で来ているような人たちもヤドに寝泊まりしていた。

昭和の初めごろまでは、戸主がうちの息子もナカマに入れてくれといって、仲間入りの酒を持って息子を連れていった。先輩はひきうけると赤飯を炊いて新入りに酒を飲ませた。原では最も多かったのは昭和一八年から二五年ごろで、三〇人ぐらいいたという。脱退は結婚と同時だったが、原では昭和の初めごろは脱退後の三、四〇歳前後の男女の既婚者の組織として農青連という会があったという。

上原では、仲間入りしたばかりの者をコワカイシュウ（小若衆）、結婚前までをワカイシュウ（若衆）、それ以上の者をチュウロウシュウ（中老衆）と呼んだ。中老衆は若衆の上にあって、若衆のころに中老衆に叱られた思い出を持つ人は多い。

若衆のヤド　若衆のヤドは、上原では昭和の初めごろは部落持ちの弘法さんのお堂（今の公民館）だった。夏はこのヤドに泊まって鉦と太鼓でシャギリの練習をしたり、女子青年団が来て踊りの練習をしたものだった。若衆の初寄合も一月一一日に弘法さんに集まった。新田でも昭和初めまではヤドは観音堂だった。上須公民館脇の須釜の祖師堂も、もとは萱葺き屋根で、一二、三畳ほどのお堂には戦前まで須釜の若衆が寝泊まりしていた。

このように若衆がヤドとしていたのはもとは多くの場合ムラ持ちのお堂であったが、昭和の初めごろに建て替えたり、名称だけをかえたりして倶楽部と呼ばれるようになった。和市では明治の初めごろまで、大庭景申家のミソ部屋の二階が若衆のヤドになっていて、いつも一五、六歳の独身の男たちが五、六人は寝泊まりしていたという。原の倶楽部は大正時代にたてたもので、七坪の建坪に倶楽部と作業場が一緒になっていた。木造で老朽化していたので寒かったという。この倶楽部には炉や便所はあったが、煮炊きの施設はなかった。一般に倶楽部はどこも、寝泊まりの施設であって、若衆はそれぞれの家で夕食をすませてから集まってくるものだったから炊事場はつかないのが普通だった。

新田の倶楽部も大正年間に建てられたもので、昭和四六年に公民館をつくるまではここを使っていた。しかし倶楽部に寝泊まりしたのは戦前までのことである。南堀でも、倶楽部に泊まったのは昭和一四、五年までで、スイカを盗んでは倶楽部で食べたりした思い出があるという。

祭りと若衆　倶楽部に寝泊まりした若衆は、祭りの前になるとよくここで芝居の稽古をしたものだった。原では、駒形神社の祭り（日待ち）や敬老会の時に、歌舞伎や地芝居をやったものだった。神社の一〇月一〇日の祭りには境内に木を組んで舞台を造った。昭和三〇年代後半まで行われ、「国定忠治」などの義侠もの、四国遍路、「父帰る」などの演し物が多かったという。神社と若衆との親密な関係は、「奉納　駒形大権現　　原　須釜　若者中」とある天

駒形神社　若者中奉納の燈籠

明六（一七八六）年三月奉納の灯籠にもみることができる。また原の地蔵堂祭典では、近在の力士が来て草相撲を奉納したが、その時の景品を若衆がほうぼうへ寄付してもらいに歩いた。祭りでは、若衆自身が相撲を奉納したり、露店を出したりすることも多かった。

祭りに若衆はつきもので、夏から秋にかけてはあちこちの祭りへヨアソビ（夜遊び）に出ていった。浴衣に下駄っぱきで、上は下和田、南は三島、伊豆佐野、長泉、中土狩、西は葛山の奥の方まで出かけていった。祭りで男女が仲良くなって子供のできることもしばしばで、当時はそのようにして結婚する人も多かった。あの嫁は「ツレッコ（連れ子）があるだってよー」ということはよく耳にしたものだったという。祭りは若衆にとって、恋愛の場でもあった。

祭りばかりでなく、同じムラの娘のいるうちに若衆がヨアソビに行くこともあった。明日行くという具合にしめしあわせて、仲間で行ったもので、親もヨアソビに来てもらうと喜んだものだった。こうしたヨアソビも恋愛から結婚へのキッカケをつくったもので、娘のうちでは、あの若衆は毎晩来て熱心だから婿にしてもよいか、などと結婚を許可することもあった。このようなヨアソビをヨバャーともいった。

青年団の資金集め　上原では若衆がピンポン台や蓄音機、レコードなどの遊び道具を買うために、若衆として協同で山の木を切って焼畑にし、開墾してサツマや陸稲をつくったりと協同作業を行った。資金集めにはこのように協同作業をして稼ぐことが多く、原では植林や林道づくりを請け負って、深良村から日当をもらったりした。

また祭りも、若衆には大切な資金集めの機会となっていた。須釜では、駒形神社の祭りに若衆が興業師をたのんで映画を上映した。この時、招待状を出したザイバツ（財閥＝有力者の家）や天田上の青年団からの御祝儀はすべて青年団のもうけになった。原の若衆も祭りで芝居を上演すると、村長、区長、区の役員や神社の世話人、他の青年団支部などからご祝儀をもらって、これを活動の資金とした。

戦中から現在の青年会　戦争中は、区ごとに青年団はあったが、男子部は長男のみで、次三男は沼津、三島の芝浦製作所や海軍工廠に行っていてムラにはいなかった。また女子も多くは小山町の富士紡績に働きに出ていたが、家にいる女子は、青年団女子部に入っていた。当時はかつての若衆的な組織とは全く異なる存在であり、活動は地域奉仕が主となっていた。林道づくり、食糧生産、運動会、敬老会あるいは軍事教練が青年団の活動だった。組織は青年団長、副団長のもとに、体育部長、総務部長、女子青年部長などがあり、団長には二五～三〇歳くらいの指導力と、行政に太いパイプをもつ人が選ばれたという。

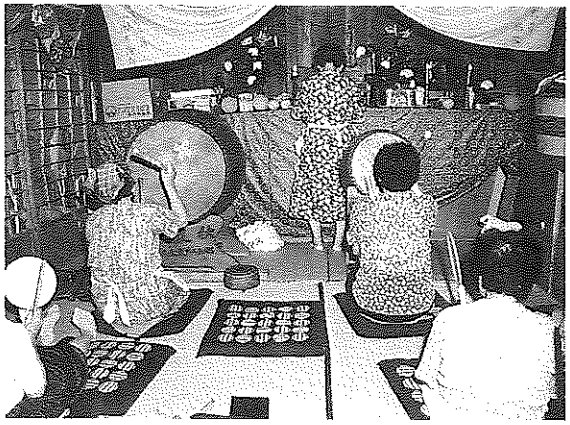
戦争が終わっても、高度経済成長による産業構造の変化やそれに伴うムラの生活の変化は、ムラ（モヨリ）を基盤にしたそれまでの青年の集団を衰退させていった。一九八九年の深良村では、自営農や商店経営者から全体で八人しか青年会に入らなかったという。

青年会の主たる活動である盆踊りの運営も、深良地区の区長会が手伝っており、活発な活動はほとんどみられない。現在は、モヨリごとにチームをつくって深良村を一周する元旦マラソンが体育部を中心に行われるが、こうした深良村全体で一つの青年会という存在は、ムラごとに仲間をつくっていたかつての若衆とは、その性格が大きく違っていることは明らかであろう。

姑の念仏・嫁の淡島・子供の天神　成人男性以外の女や子どもには、昔からそれぞれが所属すべき集団が、モヨリごとに講という形で存在していた。若衆に仲間入りする前の子どものうちは男も女もなく天神講に、嫁になると淡島講で、嫁が来て姑になると念仏講の仲間に入った。同性、同世代の仲間との交流はムラうちの人間関係の形成に役立っている。こうした講はすべてモヨリが単位であることが重要な意味を持つ。人々の生活においては神仏に頼る度合が小さくなってきた近年は、信仰的色彩の濃い講という形式から、次第に老人会、婦人会、子ども会という名称にかわりつつある。しかし、それぞれの活動内容に今なおその原型としての講は名残りをとどめ、伝統は受け継がれている。

姑の念仏講　嫁に身上を渡した姑は念仏講に入った。町田では「七〇歳になったら念仏に入れてもらうべ」などというが、夫が亡くなったりすると淋しいだろうとそれ以前でも誘われる。念仏講の役割の一つに、年寄りの遊び場の意味がある。上丹では三月に唯念さんの祭りの日にあわせて、須釜や原の念仏講の人たちと一緒にオフロ（温泉）に歩くのが恒例となっている。ごちそうを食べる機会の少なかった時代には、モヨリごとの月並念仏で宿に集まり、念仏のあと寿司やら餅やら飲み食いするのが大きな楽しみであった。

主婦としてイエを守ってきた女たちは、新たな主婦が家に入ると、今度は念仏講の仲間に入ることによって、集団でムラを守る役目に変わる。姑たちが守る範囲はモヨリ。その方法が念仏というわけである。念仏にはモヨリごとに行われる特定の神仏のための念仏と、単にモヨリ全体の安全や平和を願う月並の念仏とがある。月並念仏は、今は多くの場合公民館に集まるようになったが、以前は毎月二四日に念仏講に入っている家を順に宿にしたものだった。この月並念仏ではかつてはモヨリの一軒一軒を念仏してまわったもので、町田では五〇年ほど前にやらなくなったが、震橋では今もまわっているという。日連宗の家があるモヨリでは、念仏の人も加わって共にお題目を唱える。上丹で二八日、須釜が一七日、上原は一二日にお題目をするが、ムラを守る意味か



上丹のオテントサンダイモク

らは念仏もお題目も大きな違いはないというわけである。

念仏によって豊作を祈願するのがオテントサン念仏（お天道さん＝太陽）で、モヨリごとに旧暦六月八日（一九九〇年は七月二九日）に行う。原では一軒一人必ず出ることになっているので姑に限らずおじいさんも参加する。太陽が出ている間中、カネの音を絶やしてはならないといわれ、昼も休まず念仏を唱えつづける。念仏講の人たちをねぎらって、モヨリごとに決めた当番が茶を出したりともてなす。また新田、切久保は雨が降り続いた時に観音堂でこのオテントサン念仏を唱えたことがあるという。この観音堂のそばにムシロを敷いて、年一回夜に辻念仏もしている。一年間、モヨリの安全が守られたことに感謝して、原では一二月二三日に地蔵の前でオハタシ（お果たし）の念仏も行ったものだった。

オオダイモクの後の当番の直会（上須）

月並やオテントサンの念仏のほか、モヨリが祭祀するさまざま神仏ごとの念仏、あるいは町田の庚申さんの祭り（旧六月四日）のあとに二か所のサイノカミサンの前での念仏や、原の地蔵祭り（八月二三日）のエイマツリ（宵祭り）のオコモリ（の念仏）など、モヨリの祭りがあるたびに念仏講は登場する。これに、葬式があるとその日から七日ごとに四九日までと以後の法事のたびにホトケマツリのお念仏をあげに行くという具合に、最近は回数が減ってきたとはいえ、念仏講は一年中けっこう忙しいものだったし、これが逆に張りあいでもあったのである。

嫁の淡島講　淡島講はもとは安産祈願のために嫁が集まる講であった。モヨリごとに淡島様の掛軸を持っていて、今もお産の近い人はこの淡島講に出ると、大根の輪切りにヨウジをさし、これにろうそくを立てたものをもらってくることがある。こうした淡島講としての伝統を残しながら、現在は婦人会の総会を兼ねて行ったり、子ども連れで外食に出歩いたりしている。淡島講も本来は、嫁たちの息抜きの日だったのである。

原では、昭和三〇年ごろまでは毎月、順に宿をまわして夕食のお振舞いをしていたが、現在は毎月二六日に婦人会の常会の時に公民館で淡島講をやっている。この時はレイコウ膳という特別な献立の膳を用意する。上丹では年三回、一・三・九月に軒並みに宿をまわした。上原は一・四月の夜、公民館で婦人会の総会を兼ねて行っている。儀礼として、まずおさい銭を入れて淡島様をおがんでから、お神酒とご飯を下げて、一口ずつまわして食べる。あとはお茶をのみながら婦人会の話などをしている。

各家を宿にしていた頃は、家の人の食事の後片付けを終わらせてとんでいったもので、炊き込みご飯や酒を出し、嫁が大手を振って遊べる貴重な日だった。夜遅くなってしかられても、姑から解放されるひとときが楽しくて平気だった（上丹大正八年生）という。

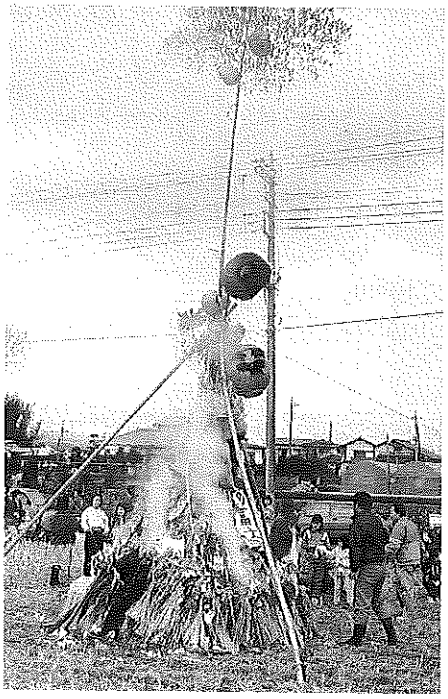
もっとも、念仏講では嫁の悪口を言いあうが、淡島講では姑の悪口を言う人はいなかったというように、嫁はモヨリの内にいる限りやはり嫁という立場であることには変わりはなかった。

子どもの天神講　現在の子ども会にあたるのが天神講である。実際、今は子ども会の行事の一つとして行われる天神講は、幼稚園児から小学校六年生までが参加する。やはりモヨリを単位とした同世代の講であるが、他の集団と異なるのは男女が一緒にかかわっている点である。また集団としても、年一回の天神様の祭日（本来一月二五日。現在はどこも二月二五日前後）にのみ活動する点で、若衆や淡島講、念仏講とは性格を異にしている。

会場は今はどこも公民館になってしまったが、以前は上丹や南堀では六年生の子どもがいる家で、上原や原では養蚕農家など大きい家の人が「こんどはわしらうちで」と声をかけてくれたもので、町田では天神様のある松井家に集まったものだった。

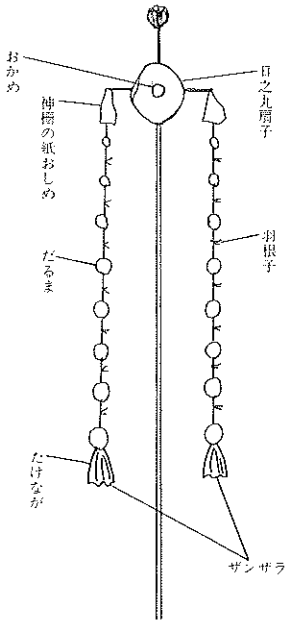
南堀では昭和二二、三年ごろまで行っていたが、男子は朝早く料理に必要な材料を買いに行き、女子は近所の主婦に手伝ってもらって料理をつくった。遊びも男女は別々で、男女一緒の講とはいっても、ここではむしろ男女の役割分担を実体験する訓練の場であった。また天神という神様の性格もあって、ここで練習すると手が上がる（上手になる）といって習字をしたり、夜には学校の先生がまわってきて菅原道真の話をしていった時代もあるなど、きわめて教育的な行事であったということができよう。

サイノカミと子ども　教育的性格の天神講に対し、子どもが集団として信仰的な役割を果たすのがドンドヤキ、サイノカミと呼ばれる小正月の行事である。団子を焼くのでダンゴ焼きともいう。ただし、天神講とちがって、こちらはもともとは男の子が主体の行事であった。南堀の大庭敬一さん（大正三年生）が『南堀部落雑考』に書かれた「正月小供の行事」が往時の様子をよく描いているので次に紹介しよう。



サイトヤキ

一月四日神棚にあげたお供え餅の下にひいた紙と、お金を各家から貰て帳面に付けてをき一月五日頃、裾野駅より汽車で下土狩駅まで行き下土狩駅より三島大社まで歩き、大社の前の縁日店より達磨、羽根子、たけなが、おかめの面、日之丸の扇子をこりに一杯い買って皆で背負てきました。山へは大きな竹を切りに行き皆して担いてきました。一月七日荷車で各家から集めた御飾を運んで道祖神を囲んで家を造ります。又おんびも造ります。その明朝から学校に行くとき皆と一緒におんびを上げて、夕方学校から帰てきて下げます。一月十五日までつづけます。一月十五日には道祖神の家とおんびをこわしてどんどん焼



図II－13　おんび

出典　大庭敬一『南堀部落雑考』一九八八年

でもしてしまいます。「おんび」おんびは山から切てきた大きな竹の先に細い竹で十文字をこしらい、その両側に長い紐に達磨や色々のものを飾って両側に垂らしたものです。一月四日各家からお金を多く貰った順に大きな達磨を、金の少ない家には小の達磨を、部落中の家に配り、女の子のある家には羽根子、たけなが、男の子の家には、おかめの面、日之丸の扇子を配ったのです。小供の正月の行事はなかなか忙しかった。小供の頃をふり返て見ますと懐しい思出であります。（原文のまま）

大庭さんの回想にもある「道祖神の家」はモヨリごとにあるサイノカミを竹や正月のお飾りですっぽり隠してしまう小屋であった。小屋がけはモヨリで一つの場合もあったが、多くは上組と下組などモヨリの中の組ごとに分かれて行った。お飾りは多いほど立派だったから上から下へ、下から上へ、あるいは他のモヨリへと盗み歩く。子どもたちは七日の小屋がけから一週間、盗まれないようにとこの小屋で夜遅くまで番をしたものだった。

子どもだけで小屋に寝泊まりしたり、夜遅くまで起きていたり、あるいは大社へ買い物に行ったり、オンビやお飾りに火をつけて盛大に燃やすなど日常生活では禁じられていることができるこのドンドヤキの行事は、盗み歩くという非日常的行為を含めて、嫁にとっての淡島講と同様、神祭りだから許される特別な日として子どもたちの心を踊らせたものであった。

第六節　世間との交流

ムラに住む人々にとって「世間」とはムラの外のことを意味する。「世間の風は冷たい」という言葉があるが、こんな時に冷たい風が吹きつけるのは、このあたりでいえばモヨリの外であり、旧村の外であろう。しかしその世間の範囲も、時代とともに、特に交通の発達とともに広がっていく。また、ムラの上層の家の世間は、一般のムラ人よりも広いのが普通で、行動する距離にも階層による差が大きかった。この項では、時代的には明治末から大正期に生まれた人々の経験から得られた、大正から昭和初期にかけての深良地区の人たちの世間との交流の記憶を扱っている。なお上層の家の世間については、深良御三家と呼ばれる町田の松井家、新田の小林家の経験で、特に新田の小林家については下小林から下土狩へ嫁いだ鳥田はる江さん（明治三九年生）からの聞き書きとともに、はる江さんがまとめられた文集『ふもとくさ』を参考にさせていただいた。

(一) 交通手段

御殿場線と深良の人々　明治二二（一八八九）年に新橋―神戸間を結んだ東海道本線は、昭和九（一九三四）年に丹那トンネルの開通により、国府津―沼津間が御殿場線となった。御殿場線は、沼津―下土狩―裾野―御殿場を結んだが、裾野まで深良からは三キロ。昭和一九（一九四四）年に岩波駅ができるまでは、深良の人々にとっては利用しにくかったという。裾野駅は開通当初は佐野駅といっていたが、大正四（一九一五）年に「裾野」に変わった。当時、駅のことを「ステンショ」などとハイカラな呼び名で呼んだりしたが、一般の人にとって、はじめのうちは見たこともない大きな黒い蒸気機関車は相当の迫力だったにちがいない。もとより現在の下土狩、かつての三島駅と御殿場駅の位置からすれば、その中間は深良あたりになるはずだが、汽車の便利さなど思いもよらなかった時代、つまり世間の広がりがまださほどでなかった時代のことで、駅ができることに反対運動までしたものだという。大人ですらそんなふうだったので、子どもたちはこわがって近づかなかった。

現ＪＲ御殿場線

一方、次第に慣れてくると今度は毎日決まった時刻に通りすぎる汽車は、農作業で外に出ているムラの人たちにとっては格好の時計がわりとなった。もっともムラの人が汽車を利用するようになるのはかなりあとのことで、三島の明神様のお祭に行く時も、若衆は浴衣に下駄っぱきで行ったものであった。若衆は歩きや自転車で三島へ出たが、かえって子どもたちの方が早くからこの御殿場線を利用した。大正三（一九一四）年生まれの大庭敬一さんは子どものころ、正月五日ごろ三嶋大社へオンビのための買い物に行くのに、子ども同士で裾野から下土狩まで汽車に乗り、そこから歩いて明神さんへ行ったという。また大正一四（一九二五）年生まれの大庭三郎さんも、子ども同士で沼津の千本浜に海水浴に行く時は、裾野まで歩いて御殿場線に乗っていったという。

上層の家の人たちは多少事情が異なっていた。町田の松井たへさん（明治四五年生）は、夫の謙一さんとのお見合いが御殿場線の車内だったという。昭和八年暮のことで、双方の両親と本人とが沼津駅で落ち合って裾野に着くまでが見合いで、翌年二月には結婚した。結婚式も東京の東京会館と地元と二か所で催した。一般のムラの人たちより汽車に乗り慣れていたことをよく示すエピソードだが、たへさん自身、沼津の女学校を卒業してから東京の家政学校へ通っていたことがあり、また夫も大正八年から昭和六年まで東京の学校に行っていたため、汽車に乗る生活は日常的ともいえる状況だったのである。

岩波に駅ができてからは沼津まで三〇分で行けるようになり、汽

車の利用は増えていった。戦争中は軍需工場へ、戦後は農閑期に製糸工場などの勤めに、汽車で沼津へ出るようになった。裾野駅から甘藷出荷組合が大阪市場へ大量に出荷するようになり、さらに昭和三〇年ごろからは世帯主も勤めに出る農家の兼業化が始まった。御殿場線は徐々にムラの人たちの世間を広げていったのである。

自動車の利用　深良では新田の上小林家、小林聿という人が、大正末ごろに東駿自動車という自動車会社をつくりバスを走らせた。神山・深良新田に車庫をおいて一〇年ほど営業したが（収支が）ひきあわないのでやめてしまったという。裾野市教育委員会編の『裾野』（昭和五三年発行）によれば、権利はその後富士山麓電軌鉄道株式会社にうつりバスの大型化、新路線開通が進められたという。

昭和三年に三島から嫁に来たという原のYさん（明治四〇年生）は、裾野駅まで人力車で来て、駅からはハイヤーに乗って婚家についた。昭和一八年に裾野市の堰原から、深良の上原に嫁いできたMさん（大正一一年生）は、木炭自動車に乗って来たそうで、嫁入道具は牛車でひっぱってきたという。花嫁道中は特別な移動であったから、いつもは使わない交通手段を利用した。昭和三年のハイヤーは大いに特別なことであっただろう。

(二)　世間の広がり

買い物　深良の家では、盆暮などの特別な買い物の時だけスソノへ出た。深良の人々は裾野駅付近のことをスソノと呼んでいた。商店の仕入れなどは沼津に出ることが多く、子どもたちは正月の縁起物を三島の明神さんへ買いに行った。上層の家の買い物は一般の家より遠方へ出ていくことが多く、盆暮などの買い物は沼津へ、衣料品など特別のものは東京まで出掛けていった。当時は日本橋の三越が上層の人々のハイカラだった。

活動写真　スソノには、今の「勢力」の下のところに株でやっていた裾野演芸館という映画館が一軒だけあった。青年団の人たちなどは集団で「映画にいくべえ」と声をかけあっては、演し物がかわるたびに深良から歩いて行った。また深良には二人ほど興行師がいてここに頼むと映写技師が来るので、須釜では駒形神社の祭りのときは芝居よりも映画を上映した。当時は『日露戦争と明治天皇』といったものや嵐寛、大友柳太郎のチャンバラ、ヤクザものが多かった。戦後は占領軍がナトコという映写機を貸し出したので、青年団が学校の先生に頼んで祭りに上映してもらったりした。三島からは東海芸能社という興行師も来ていた。昔は映画がかからないとデカイ祭りとはいえないといったものだった。

祭り　祭りを口実にした遊びは、何といっても若衆が主役だった。映画のほかに、若衆の芝居や相撲、露店などが祭りを盛り上げた。芝居に使うかつらや衣装、刀などは沼津の西屋というおもちゃ屋から借りた。原の地蔵祭り（八月二四日）は相撲が有名で、近辺のムラから力自慢の力士が集まっての草相撲が行われた。沼津や静浦、御殿場、小山あたりからも人が来た。青年団は競い合って自転車で沼津や御殿場へ景品集めに行ったもので、商店から反物や雑貨物をもらってきては相撲の賞品にした。ムラの祭りには、ムラ内だけでなく周辺のムラからも遊びに来たり、興行師などが仕事に来たりと、外からムラへ人が寄って来たものだった。出雲からはヤスキ

ブシが来たし、五竜観音前の鰻屋からは小辰丸という人がナニワブシをやりに来た。

一方、ムラの外へ出かけるのも祭りであることが多かった。かつては三島へも、明神様の祭りくらいしか出かけることはなかったといい、三島へは、行きは家から歩いて三嶋大社まで行き、帰りはスソノまでは乗合バスで来て、そこから歩いて深良に帰った。祭りの日は朝出て、夕方帰ったものだったが、そうした祭りで出かけるのがムラの人たちにとっては町場との関係であった。

青年たちは、夏から秋にかけてあちこちで祭りのある頃は盛んにヨアソビに出かけたものだった。沼津の川開き、石脇の天王さん、御宿の八幡さん、深良の赤子さんなどが大きな祭りで、他に下和田、三島、伊豆佐野、長泉、中土狩、葛山の奥の方までも出掛けていった。ヨソのムラの祭りでは、映画や芝居を見たり、女子を紹介し合ったりしていたという。深良の若衆と交流が深かったのは、裾野市内全域と御殿場の若衆だった。

露店商　遠道原のヤオキチさんといえば、市域の六〇代前後の人たちにとっては誰でもなつかしい縁日の露店商であった。「ヤオキチ」は、勝又吉雄さん（明治四〇年生）の八百屋の屋号で、現在でも深良の遠道原で八百屋と酒屋を続けている。露店商は吉雄さんとお母さんの二代でやっており、原あたりへは七、八年ほど前までは行っていたが、吉雄さんが高齢になったため今はやめてしまい、店の商いとしてアメや雑菓子類も売っている。

ヤオキチは吉雄さんの母親が始めた酒屋で、果物や野菜を売るようになったことから露店に出るようになった。吉雄さんの母親は、店での商いでは思うように売れないので、果物や野菜を背負って葛山の瘡守稲荷へ持っていった。この時、おもちゃやアメ、菓子なども仕入れて一緒に売ったのがそもそもの始まりだった。当時はまだ吉雄さんは奉公に出ていたので、母親は震災前くらいまではひとりで深良、富岡、御宿の八幡さんや山の神さんの祭りをまわっていた。吉雄さんが五年ほどの奉公から戻って商売を引き継いだのは二〇歳の時で、奉公給金の八〇〇円のうち三〇〇円をごまかされて残った五〇〇円を元手に、一〇〇円でリヤカーと自転車を買って本格的な露店商売を始めた。酒一升が一円の頃だったという。

ヤオキチが商売をしていた頃、このあたりでは他に、杉山病院裏の「山城」や裾野の「おかめさん」などが同じ商売をしていたという。瘡守稲荷の初午にはお堂の戸を借りて四軒ほどの露店が並んだ。露店の場所は、代表を決めて古参から並び、同じ品物の店が並ばないようにしたもので、「山城」などはよくその采配をしていたという。中にはアイス専門のチンピラやヤクザも店を出したが、ヤオキチは品数が多く安いのでよく売れたものだった。各地区の小学校で開かれる秋の運動会が一番の稼ぎ場だったが、秋は他にもお節句の時期で祭りが多かったから露店は書き入れ時、毎日のように商売に出ていった。七月は二四日の今里の地蔵につづいて二五日が須山、また葛山へは瘡守稲荷の初午のあとは浅間さんの春の祭りと秋の芝居、田場沢の春の運動会、仙年寺のお盆の相撲とずい分通ったものだった。吉雄さんは、商売をやめた今も、瘡守稲荷のお宮の前を通ると、昔さんざんやっかいになったので、自然と頭が下がるという。

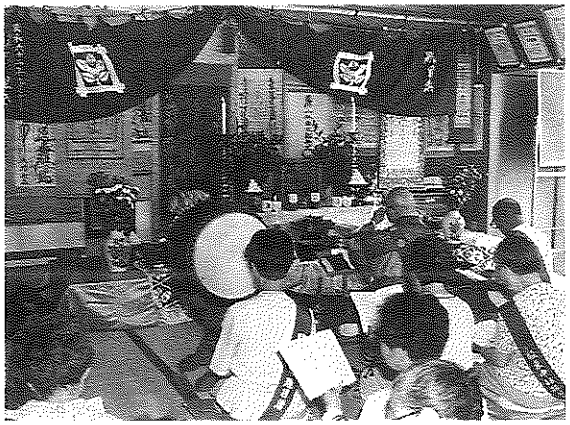
商売に出る時は、リヤカーに鍋、七輪（しまいのころはプロパンになった）、炭、戸板、棹、天張り（テント）などの道具一式をの

せ、リヤカーを引きながら須山まで出ていった。商品は、一、二銭のオモチャ、みかん、一〇～一五銭の鉄砲、ザガシ（雑菓子）、アメ、キャラメル、ニッキ水、ニッキ棒（指くらいの太さのものは高いので、ジャミ＝クズのニッキを赤い紙テープをまいて五、六本を一銭で売った）、フ菓子（五、六〇センチの市販のフ菓子にヤオキチで砂糖をつけて売った。夏はベトベトになるので春まで）、またおでんやイカの煮たものは作りながら売った。仕入れは昔は三島ではなく根方の方へよく行った。根方では茶畑の間にニッキが植えられていたという。イカやおでんは市場の帰りに沼津で仕入れた。オモチャも一〇年ほど前までは、小一時間かけて自転車で沼津まで行って仕入れていた。オモチャ屋は今も清水町にある沼津の西屋で、当時は大門町にあったが今は団地に移って雛人形を扱っている。

お題目講　上原の小林由太郎が明治八（一八七五）年に始めたといわれる中駿大題目は、裾野の東側の地区が合同で題目講をおこなうもので、久根・南堀・町田・平松・上原・新田・原・上須・本茶畑といったモヨリの家々が年一回当番をつとめている。上須では上丹と須釜が交互で当番にあたる。初講は一月二〇日で、次回は次の当番が日程を決める。一九九〇年現在の人数は別表の通り。集まるのは姑になった女衆ばかりだが、会長は男性で本茶畑の勝又武雄さんが一〇年間つとめている。年一回オフロ（温泉）に行ったり、八〇歳になった人には講から座布団を贈ったりとムラを越えて親睦を深める機会にもなっている。

久根	16人
南堀	5人
町田	1人
平松	1人
上原	7人
新田	1人
原	2人
上丹	5人
須釜	7人
ほかに参銭だけ	7人

お題目講人数（1990年）



上須公民館でのオオダイモク（大題目講）

上原には日蓮上人が宿泊したと伝えられる車返しのお堂があり、モヨリの旧戸二五軒が世話人として共同所有し、境内を分けて百姓をしていたというが、現在は上原のモヨリ全体で管理している。山口稔氏の「車返し道場の報告書」によれば、世話人だった二五軒は日蓮宗ではないが「先祖からある年齢に達すると『一代法華』といって、この御堂の守護に当ってきた」という。このお堂のお虫干しには、区（上原）からの補助のほかに県の宗務所や個々のお賽銭などが集まり、上原の組が二年交代で当番をつとめる。お虫干しの日は、県の宗務所長、日蓮宗総長や二五人程の僧侶が来て題目をとなえ、日蓮宗の信者たちがここを参る。信仰によりムラの外へ出て行って世間が広がることは多いが、ムラの中に特殊な施設があった場合には、上原のようにムラの外から人々が集まってくることによって世間とふれることもあった。

（斎藤弘美）
（宮村田鶴子）

第三章　時間と民俗

第一節　生活の時間・生産の時間

(一)　深良の生業

深良は箱根西麓の裾の部分に当たる所に南北に横たわる地域で、その景観は緑豊かな農村そのものを構成している。北から南へかなりの傾斜を有する地形ではあるが、集落周辺及び各集落間には水田が広がり、いく筋かの清冽で、急流をなす用水路が走っている。用水の源流は深良用水である。やはり、この地区の水田開発を考えるに当たって、江戸初期に開鑿された、この深良用水を考慮に入れないわけにはゆかない。

地形から考えても、この地がかつて水田としてはまったくの不適地であったことは想像される。しかし、現在では、深良用水の水は豊富で、深良は裾野の中でも屈指の水田地域と認識され、深良用水トンネル開鑿以前の状況は忘れ去られてしまったようだ。

かつて深良の土地が水田用の土地として不適地だったとされた要因に、江戸宝永年間の「宝永山噴火」に因るとされる伝承がある。「噴火で降った小石だらけの田で、一人前の田にするには金を掛けたものだ」と聞く。このような田をイシワラダ（石原田）と称している。また、ダタラと呼び、地中の浅いところが溶岩による岩盤になっている土地がある。ダタラでは、いくら泥を入れても木は枯れてしまうし、この上では畑は出来なかったそうだ。遠道原にはエエナ（家名＝屋号）がダタラという家もあるほどである。一方、南堀では山の近くにドブッタ（湿田）が多く、町田などに比べると出来が悪かったということも聞く。

こうした土地条件の深良で、人々は水田をとりあえず主なる生業にすえ、畑作、養蚕などにも頼らざるを得なかった。戦前のこの地区の農業を「五反百姓」などと自称し、「百姓だけでは食えなかった」と語る人は多い。このため、深良では、専業農家を止めて兼業に転換するものが多く、その時期も他と比べて早かったようだ。もっとも大きな転換期は終戦後のことのようである。その時期を昭和三〇年代という人が多い。この頃より、世帯主が沼津方面まで働きに出掛けるようになり、農業は片手間になったものだという。戦前のこと、御殿場線の開通の後に（明治二二年以後）農閑期に製糸工場などにカセギ（稼ぎ）に出掛ける人や、深良の発電所に勤める人があったと聞くが、この頃既に兼業農家の芽生えがあったものであろうか。

畑作はカイコン（開墾）で行われた。箱根西麓の山を分けてもらい、これを開いて畑にして、ここにオカボ（陸稲）、ニンジン、サツマ（薩摩芋）、蕎麦、桑などを作っていた。カイコンを起こすことをアラクオコシと称し、その方法はヤッパタ（焼畑）だった。後にカイコンの畑は作らなくなり、山林に変わった。カイコンのほか、自宅近くにも畑を所有し、同じ様にサツマなどを作っていた。

稲作や畑作のほかに、ふるくは養蚕が盛んで、これが現金収入の大きな位置を占めていたと聞くが、養蚕は昭和の初期頃にはすでに下火になってしまったようだ。養蚕に代わって、深良の生活を支え

る仕事として登場したのがツトメ（勤め）であろう。

以下、深良の生業の主なものを取り上げ、生業を基本とした一年の生活を眺めてみたい。

(二) 稲作

五反百姓　ゴタンビャクショウ（五反百姓）と自ら称しているように、深良地域は一戸当たりの水田面積が少ない。従って、前記したように稲作のほか、畑やカイコンの畑作、そして早い時期からの兼業化が進んだが、基本的な生業暦は稲作を柱として回っているようだ。

ネヤアシロ（苗しろ）　四月末になると、苗しろを作る準備にとりかかる。田には未だ麦が刈り取られないままに在ったが、田植えの時期から逆算して種播きの日取りが大体決められているので、苗しろだけは作って置かなければならない。苗しろとされる田には、水の便や日当たりが良く、苗の管理をするために便利な所を選ぶが、ほぼ毎年決まった田が使われた。ネヤアシロとかネヤアバ（苗場）と称していた。苗しろはミズナワシロ。四月初めには、土を盛り、クワで塗り固めて水を張ることの出来るようにアゼヌリをしておいた。種を播く一日か二日前になって、馬にスキドウグ（犂）を引かせ、田を起こし、短冊形に苗床をつくった。水の便が悪い田を所有している家ではオカナワシロを作ったりもしたが、少数だった。

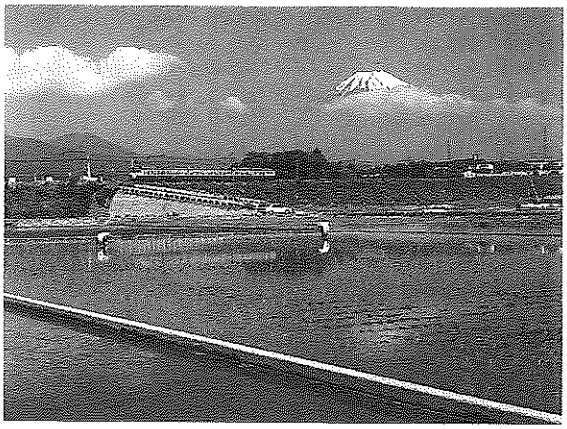
苗しろの準備と平行して種もみの準備も進められる。種もみは、前年の収穫時にマンガを使ってこき、こも俵に入れて鼠や虫に食われないように注意を払って倉に保管しておいたものである。保管するもみの量は、一反について四升の割合だった。これを倉から出してエンスイセン（塩水選）を行う。これは、もみを塩水につけて、もみの良し悪しを判定するもので、浮き上がる軽いものは悪いものとして取り除き、沈んだもの（実のしっかりと入っている）を良いもみとした。選別後、約一〇日間、カマスに入れて川につけておいた。発芽を促進させるためである。

もみ播きは良い日を選んで行っている。六曜の仏滅、十二支の辰の日や丑の日は忌むことがあった。五月五日頃播くことが多かったが、田植の日取りと合わせて決めていたようだ。シジュウクンチナエ（四十九日苗）と称し、播いた日から四十九日目の苗を忌み、日数を数え、この日を避けるようにしている。原の広瀬のぶさん（明治四二年生）によれば、播き終わって後にヤキゴメ（焼き米・余ったもみを炒って作る）を作って神棚に供えたそうである。また、家族もこれを食べたものだという。

田植　ネヤアシロで苗が成長する間に田の準備を行わなければならない。昔は裏作に冬の間、麦を栽培していたので、先ず麦刈りを片付ける必要があった。麦刈りを済まして田おこしをする。馬にスキドウグ（犂）を引かせ、子供や女たちはハナドリ（鼻どり）に付く。ハナザオ（鼻取りの棒）は二間位の長いもののほうが楽だった。それでも、刈ったばかりのムギカラ（麦藁）の株が足に刺さり痛い上に、父親（シンドリ、マンガを押す人）からは怒られながらハナドリをしたものだという。

かつての田植えは、現在と異なりかなり遅い時期に行われている。六月いっぱいくらいが田植えの期間とされ、月末に終われば よしと言われていた。田植えはムラ内の近くの者同士の共同作業で、

イイとかユイと称していた。あるいは田を多く所有する者は御殿場からソートメ衆（早乙女、田植えの手伝い人）を頼んで行なっていた。ソートメには、上り下りの（往復）の足代と四回のメシ（食事）と日当を支払っていた。「一人でアガリザクを七サク持ち、これを繰り返して植えることの出来ることが一人前のソートメ」と言われていた。田植え中のナエクバリ（苗配り）はセシュ（施主）の役割で、また、田植え前のシロコサエ（田ならし）も施主が行った。このシロコサエをする者をトネと称していた。シロコサエをすることをシロカキと称し、田植えの前日に大概は済ましておいた。この時のハナドリも子供が手伝った。掛け声を掛け合いながらシロカキをしたものだという。



田植え（上須）

田の草取りとミズカケ　田植え後は、田の草取りとミズカケ（水を田に入れたり、引いたりすること）が主な田の世話となった。

田の草取りは八月までに三回行った。一番草は手で草を取り、二番草は田転がしを使い、三番草は手や田転がしで草を取っている。

ミズカケは、穂が出るまで行い、穂が茂るときは水を引いている。昔は穂がカシグ（傾く）まで水を掛けながし（トアリミズ）だったという。ミズカケでも深良用水の水とジスイ（地水）は異なった。つまり、深良用水の水は暖かいのでかけ流しでも良かったが、ジスイ（地水）は冷たかったので夜かけて、朝止める必要があった。

稲刈り　稲刈りは深良神社の祭りが済んだ頃から始められた。ワセ（早稲）、ナカ（中）、オクテ（晩生）、モチ（もち）の順序で、一一月の半ばまで続く。

稲刈りの道具はノコギリガマ（鋸鎌）である。歯の部分に鋸状のギザギザが付いているもので、この鎌を株の根の部分にあて引っ張るように刈る。

刈って後、まとめた小束は、かつてはカッポシ（地干し）にしたが、現在ではウシ（牛、あるいはハザ＝竹で作った稲架）に架けて乾燥させている。

ホシモノ　足踏み脱穀機で脱穀した米は、ニワ（おもて）に干して乾燥させた。ムシロの上にモミをひろげ、一日に二回くらい、つまり、ヒル御飯とヨージャの時に広げ直し、乾燥させた。そうすることによって、カラウスがしやすくなり、虫のつかない米になるのである。ホシモノは、三日くらい行った。

カラウス　カラウスは一一月二〇日頃から月末までの間に、業者が来てやってくれた。これによって供出米もでき、稲作の一年は終わる。

㈢　柿渋（カキシブ）の生産

深良で一軒の「シブヤ（渋屋）」　須釜に、柿渋の生産を生業

（副業）としていた農家があった。勝又松男宅である。現在はやめてしまったが、先代の父親文男さんの代まではかなり盛んにやっていた。主生業は稲作であるが、短期間に行う柿渋の生産は勝又家にかなりの収入をもたらしたし、文男さんよりもずっと先代にあたる昔からの生業であった。「カミ（上）」というイエナの他に「シブヤ（渋屋）」と通称されていたことも、当家の柿渋生産の伝統を物語るものである。

深良の農業は基本的には稲作であり、柿渋生産は勝又家の他に深良にはなかった（御宿新田の杉本家、御殿場神山の塩川家は同業者だった）が、それだけに、特異な民俗的な価値があるように思える。因って、ここで一項目として取り上げてみる。

時季　柿渋屋の仕事は、夏から秋にかけての短期間に限られた。柿が大きくなり、かつ熟さない前に終わらせる必要があった。もっとも渋が取れる時期が最盛期である。

勝又秀子さん（大正六年生）は「三島のお明神さん（のお祭り）頃からお彼岸まで」と表現している。つまり、八月一五日頃から九月一五日頃までをいう。「遅くても彼岸には終わっていた」そうである。一カ月勝負の仕事だ。

勝又家では、柿渋の時期以外には水田を作り、カイコンの畑も作っていたので、毎年この時期の前になると、そうした仕事を片付けてから取り掛かりたい一心で、無我夢中で仕事に精を出したものだという。

柿の種類　渋を取るための柿には、渋の多い柿が良いことは言うまでもない。

早い時期に取るのは「ヨツミゾガキ（四つ溝柿）」という柿だった。この柿の欠点は、絞った時にカスが多く出る点だ。質の良いのは「ヤマッカキ（山柿）」であるが、実が小さいことが欠点である。「オオジリカキ（大尻柿）」は良かった。オオジリカキは渋くて、「さらしても食えない」と言われたものだが、柿渋はよく取れた。神山（御殿場市）の大尻（尾尻）で取れたからの名称だと聞く。

柿渋作りの技術

1　柿を取る　柿を取るのは毎年のことだから、柿の木のある家は分かっていて、予め予約をしておくのだが、深良にはあまり良い柿の木がなく、御殿場の神山まで取りに行くことが多かった。

朝は早かった。荷車にタフブクロを積んで出掛ける。柿の木の下に行けば、今年は成り年であるか否かが一目で判断が付いたものだという。まだ青い柿だ。木に登って、鎌を長い柄に付けた道具で枝ごと切り落とす役目は男、女は下で拾ってタフブクロに詰めた。柿取りは午前中いっぱいやって、午後一時頃には、また荷車を引いて帰った。忙しい日には、柿取りのオトコ（男の手伝い人足）を雇ったりもしたという。

2　柿をつぶす　家に持ち帰った柿は臼でつぶす。臼は松の木の臼。柿渋専門の臼だった。柿を八分目ぐらい入れ、杵で、左右二人で交互に約十分ついた。柿汁が出て、「びしょびしょになる」くらいまでついた。このとき、あまりつき過ぎないように注意を払った。カスが多くなり過ぎるからだ。

一日に取ってくる柿の量は、この作業時の十臼分くらいの量である。

3　樽に入れて一晩置く　つぶした柿はすぐ樽に入れ、柿の量

の二倍ほどの水を加え一晩放置する。

4　絞る　翌朝、樽からつぶした柿を掬い、藁製の俵にいれ絞る。ここで、絞られて出る汁が柿渋である。

絞り作業は、汁を取るタライの上に丸太を渡しその上に柿渋の俵を乗せ、さらに俵の上からおもりを付けた板で押さえ付けて絞るという原始的な方法である。

5　出荷用の樽に詰める　絞った柿渋は樽に詰めるが、醗酵の力が強いので、樽には竹の息抜きを必ず付けた。また、柿渋はカナケ（金気）に弱く、金物が混じったりすると黒く変色するのでとくに注意が必要だった。良質の渋は、茶色の物が上等とされた。

6　出荷　出荷は四斗樽で行った。遠道原の大庭さんというバリキヤ（馬力屋）がいて、三島までの運送を頼んでいた。三島では「傘屋」が買い手だった。

三島の傘屋は柿渋をカメに入れて土の中にいけて置いたという。

柿渋の利用　三島は傘の産地だった。明治以後、相当数の傘職人が居た。傘の和紙を雨に濡れても破れないようにするためには柿渋は欠かせないものである。裾野には、勝又家の他、御宿新田にもう一軒の柿渋屋があったという。また、神山にもあったようだ。これらの柿渋屋は、ほとんどが三島の傘屋が販売先だったのである。

柿渋を利用して、ザルの修理、上がりカマチの雨に濡れる部分の補強をしたりという身近な利用の方法もあったと聞いた。

勝又家では、昭和三十四年に、文男さんが亡くなって柿渋屋をやめている。

(四)　生業と衣服

ノラシゴト（農作業）に追われる毎日だから、これに着る衣服が日常の服装である。季節により重ね着の数の増減はあるが、質素であること、丈夫であること、そして作業のしやすいことを旨としていた。

また、男女により、頭に被るもの、下半身の衣服等が異なっていた。

衣服の供給は、古くは布の素材となる麻、綿、絹などを自家で生産し、それを利用して衣服に仕立てていたものであるが、後には次第に呉服商などから購入した、いわゆる既成の衣服を着るようになった。

以下、深良地域で聞いた戦前くらいまでの、生業時に着た衣服について記しておく。

女の仕事着　仕事着を総称してノラギと称し、これを普段着としている。

普段着は普通キモン（着物）だった。膝下までの丈がある長い着物で、これに帯を締めた。田植えの時のように、水に足をつけたり、腰を曲げて作業する場合には、動きやすいように着物の裾を前で割って、後ろで帯に挟み、足の脛がむき出されるような姿をとった。こうすることを、着物をハショルといい、その様をシリッパショリと称していた。

着物の袖が長いのでたすきをかけて袖をまくり上げ作業をした。たすきの色は年寄りは地味なものを用い、若い者は赤い派手な色を好んでつけたものだという。

キモンの素材は木綿で、縞柄や絣のものがあった。特に絣のキモ

ンは「みたとこがよい（見た目が良い）」とされ、女性たちには好まれたという。

キモンの下（下体）にはオコシ（腰巻き）をまいた。オコシは下着で、下半身の冷えるのを防いだ。ネルを素材としたもので、柔らかく、かつ保温性がある布である。ふつうは肌色のものをまいたが、若い嫁などは赤いオコシをまいたものだという。

秋から冬の寒い季節の作業には、ハンテンやポンシンを羽織った。あわせのもの、綿入れのものなどで、丈は身丈の半分ほどで動きやすいようにできていた。特にポンシンは、袖無しに仕立て、手の動きが楽にできた。

頭に被るものは手ぬぐい。前頭部を覆ってから後ろに回して結ぶ、いわゆるアネサンカブリで、風や作業による髪の乱れを防いだ。雨降り時や日照りの日の作業には、アネサンカブリの上からトンボガサをかぶり暑さや雨をしのいだ。

手にはテッコウ（手甲）をはめた。

履物はゾーリ（草履）で、自分の家で作ったワラ製のゾーリだった。しかし、田植えのように、泥の中に入って行う仕事の場合は裸足になった。

戦後、女性の普段着としてモンペが使われるようになった。深良でモンペをはいて早くから作業していた人は、モンペを「三島から買ってきた」と言われている。

またゾーリに代わって地下足袋を履くようになったのも戦後のことのようである。

男の仕事着　男の仕事着も古くはキモンだったが、後には上体には木綿のシャツ、下体にはモモヒキという服装になった。キモンからの変化は、女のそれよりは早かったようだ。

アネサンカブリ

トンボガサ

男も、防寒用にはハンテンを着用した。ハンテンの着用は戦後もしばらく続いたが、後にジャンパーなどの出現により次第に着られなくなった。

頭の被り物は女と同じように手ぬぐいを使用したものだが、被り方は手ぬぐいを頭頂からまいて、あごのところで結ぶホッカブリのスタイルだった。また、帽子等の着用は、早くからあった。雨降りや日照り時の被り物はトンボガサで、女と同じだった。

足の脛にはキャハンをまき、山仕事などにおけるけがを防止した。履物はワラゾーリが主だったが、アシナカと称するワラゾーリを山仕事用にしばしば用いていた。

第二節　一日の生活

(一)　仕事の一日

1　ときを知る

夜明け　戦前までは農業を主体としていたので、多くの人々が、太陽が出てから、山に沈むまでを作業時間としていた。しかし大正の後期から、企業に勤める人が少しずつ増えてきた。それでも農繁期には、星を見てときを知ることも多かったのである。夜明けの明星が、箱根の山から上ると夜明けだった。農家の嫁は、手桶を持ってフルカワ（古川）に下り、まず水を汲んだ。夜明けの一番星はイッショウボシサマ（一升星様）で、一五個くらいの星が集まって見えた。

鳥の鳴き声もときを知る手掛かりであった。スズメやカラスは、夜明けと同時くらいから庭先で鳴き始め、「もう夜が明けたか」などと言いながら、起きて仕事着に着替えたものだった。また自家用の卵をとるために鶏を飼ったが、一番鶏は白けてくる夜明けに鳴き、二番鶏が鳴いて三〇分くらいしてから起き出した。

夕方　スズメが竹藪等に集まってガヤガヤ鳴いているし、カラスもカアカアと鳴きながら山へ帰って行く。田畑で仕事をしている人達も、「ぼつぼつしまあべーか」と、農具を整理して家に帰ったものだった。また秋から冬にかけては、明星のホッサン（星さん）が箱根山の方に上がると仕事を終えて帰った。

一日の挨拶　挨拶もまた、ときの目安になっている。朝は「おはよう」とか、「雨が降りそうだ」などと天気のことを言い合う。昼は「こんちは」、「今日は何してる、あんたっちゃ（あんたたちは）」と言い、夕方仕事をしまう際には「早くしまいなよ」、「みんな帰るべーよ」などと声を掛け合う。しかし、仕事があと少し残っているときは「我慢してやっちまうべーよ」と言って、励まし合ったものだった。また夕方の挨拶は、「こんばんは」と言ったが、神山（御殿場市）を境にして、言い方が変わり、「おばんになりがした」と言っていた。

御殿場線の通過時刻　現在のＪＲ東海御殿場線は、一八八九（明治二二）年国府津―静岡間が東海道線の一部として開通し、一九三四（昭和九）年に丹那トンネルの貫通に伴って三島駅が開設され、国府津―沼津間が御殿場線となった。この東海道線時代には本数も多く、汽車の通過する時刻でときを知ることが出来た。一番列車は午前六時頃、正午の上りが来ると御飯（昼食）を食べ、午後三時と五時にも上りが通るが、午後五時の汽車が上ってくるとじきに仕事をしまう。国府津行きが上りで、沼津行きが下り、上りが通過して四〇分後に下りが来た。

蒸気機関車なので、列車が通るとその音で時間がわかった。「やあ、富士が米たから昼になった」とか言っていた。昔は貨車が多くて、六〇輌くらいあるものもあった。それで汽車のために家が揺れて、電球がよく痛んだ。また天気が悪いときには、汽車の車輪が空転することがよくあった。

関東大震災のとき、踏切で正午の汽車が止まった。これはレールが曲がったためである。このときには、家の中の障子がはずれ、ゲヤの柱がはずれてよろみはじめた。震災の後数日は揺れが続いたため、三晩ほどは家の外で寝た。ダタラで地盤が固い家は中戸がはず

れた程度で済んだが、結局移転した家もあった。

2　仕事の一日

農繁期には、夜が明ける前から夕方暗くなるまで仕事をしていた。天候の関係もあり、雨でも降りそうなときは、夕食を食べた後も稲刈り、麦刈りをしたことがあった。地主がヤテット（雇人）に対して仕事の区切りの時間を言うとき、「コザルが降りたらキャアッテコイ（帰ってこい）」というのがある。コザルとは草の露のことをいい、夕方になると草の根元から葉の先に水分が上がって露が降りるのである。時間としては、ちょうど日の暮れる前、トボトボになる少し前だという。

田植えの一日　田植えの一日のサイクルは、時代によって、イエによって、またブラクによって様々であるが、一般的に食事の回数は四回、食事のしたくは女衆が一日掛かりきりで用意をした。

〈事例一〉 田植えの時の食事は、午前五時頃からシロカキ（代掻き）が始まるので、午前四時半頃朝食をとり、オチャを八時半、オヒルを九時半、オユウジャは午後一時半、夕食は五時半頃となる。家中の者だけでやる作業では昼食が午前一一時から正午、オユウジャが午後二時半頃から三時、夕食は午後六時から六時半だが、遅いときには八時頃になることもある。

〈事例二〉 田植えのときには朝六時に田に入るため、女衆はその前にメシの支度をしなければならない。田植えはイイでやったり、ヤデット（雇人）を頼んだりするので、その人達の分の食事も作って食べてもらう。午前九時にはお茶やお菓子を出し、午前一一時にはオヒルを出す。赤飯にジャガイモ、サバの煮つけなどを出した。午後三時がヨウジャで、ヨウメシには刺身を出したりしてオゴッツォ（お御馳走）した。田植えの日がだいたい決まっていたので、その日に合わせて魚屋が行商に来るが、正月よりも魚が売れたという。また食事は、全部で一五人くらい作らなければならないので、その日一日オバンシ二～三人が掛かりきりでしたくをする。なお、家によってはヨウジャをやらないで午後三時半か四時頃仕事を終わってもらい、家に帰って着替えてきれいになってから、もう一度集まってもらって、改めてユウメシを食べるというやり方をした家もある。田植えは一日で終わるように、ソウトメ（早乙女）のニンク（人工）と馬の数を反別で計算して頼んだ。

〈事例三〉 一五、六年前には田植えのときの食事は一日四回で、アサメシが午前五時、ヒルメシは午前一〇時、ユウジャが午後一時から二時、ユウハンが午後六時過ぎであった。午前六時頃から作業を始めたが、ヒトマチ分苗取りをしてから田植えを一反五、六畝し、ヒルメシを食べてまた苗取り、田植えと作業を繰り返す。

田植え唄は、田植えの際の時間の目安となっていたが、田植えの前に行うシロカキの作業でも、馬の先導をするハナドリと後ろでマンガを持って歩くシロカキの二人の掛け合いで歌われた。昼前には、「もうお昼だからやめようよ」といった内容のものも歌われた。

田植えは御殿場からソウトメを頼んだ。田の広さによって泊まりがけで頼むこともある。昔は現在のように機械ではないので、田植えは重労働だった。御殿場の人達はその場で苗を取って植えるが、この辺りの人達はあまり上手ではないので、前日に苗を取っておき、翌日田に植えた。御殿場のソウトメ組は扱いが悪いと、来年は来ないと言われたもので、田植えもお祭のようにしてやった。

通常の農作業の日は午前七時頃がアサメシで、四時半から五時頃起きて田の水を見に行ったりしてノマワリ（野回り）をする。この仕事をアサメシマエという。午前一〇時に「タバコだよー」、「お茶でも飲むよー」などといって休憩をし、正午にヒルメシを食べ、午後三時頃にヨウジャを、午後六時から七時にかけてユウハンをとる。また夕飯のことをバンゲともいった。

草刈り　五月端午の節句が終わってから、八月いっぱいまで草刈りをした。行くのは朝と夕方で、朝は日の出くらいにアサメシを食べてから馬に乗って出かけ、箱根山に行き、六束刈って午前一〇時か一一時頃には帰ってきた。午後は二時頃から出かけ、五時半頃に帰って来るのが通常であった。

土用干し　夏になると、天気のいいときを見計らって、弁当持ちで土用干しに何回か行った。カヤを刈ったまま置いて干し、それを夕方まとめて持ってきた。これはうまくすると、冬の馬の飼料になった。馬の飼料には、この他に藁をやることもある。土用干しのカヤは、納屋いっぱいに積み、これでだいたいひと冬もった。また、冬には屋根を葺くためのカヤも刈りに行って、収入の一部とした。

また冬になると箱根山に行き、薪切りをする。植林した檜や杉の枯れ枝をカギにかけて折り、それを集めて束にして背負って帰ってくる。あるいは馬で行き、馬が六束、人が一束背負ってくる。

アラクの一日　田を終えてから（稲作を終えてから）サツマ掘りとなるが、部農会が出荷する日に合わせて作業を進める。富岡の方は黒土で澱粉質の多いサツマだが、箱根山は赤土で水はけのいいデロ（泥）なので、ミシマカンショ（三島甘薯）といえば栗を食べるようにおいしいと評判で、大阪方面に盛んに出荷したものだった。

箱根山のアラクに行くときには、遅くとも午前七時には家を出なければならない。もっと早く出る人は、提灯をつけて出る人もいる。それでも帰りは、トボトボの暗い中を帰ったものだった。アラクでは午前一〇時には手を休め、午後三時には子どもを連れてきたようなときに、焚き火をしイモを焼いて食べた。昼はアルミの大きな弁当箱に御飯と煮つけ程度のおかずを詰め、竹で編んだ弁当籠に入れて持って行った。この弁当籠に入れておくとすえないからである。しかし、地面に直接置くとアリが寄ってくるし、木の高いところにつる下げておくとカラスにとられてしまう。木のちょうど良い高さにつる下げておくのである。モウソウダケのツツッポに、キリで穴を開けたものに、水を入れて持って行く。南堀にはシミズ（清水）という一年中水量も水質も水温も変わらない湧き水があって、アラクに行く前にそこで水を汲んで行く。その湧き水は現在でも使っているが、雨降りでも日照りでも関係ないし、秋から冬にかけてはそこから湯気がたちのぼっている。

アラクでサツマを掘っていると、一一月頃はだいたい午後三時で駿河湾の海が光ってくる。そうすると、じきに日が暮れる。早くしないと暗くなってしまい、帰り道は真っ暗な中を歩かなければならない。

夜なべ仕事　かつて内職でステッキをこいだ。ステッキ屋は町田に一軒、南堀に二軒あり、ステッキの材料にする竹をくれるので、それをカンナでこいでからまた持っていく。女衆は昼間から集まって、表で一緒にステッキをこいだ。男衆は夜だけだった。夜なべ仕事を夫婦ですると、一晩に一把四〇〇本がこけた。一把で一二

銭だった。

3　食事と生活

一日の献立　朝は、米に麦を混ぜた麦飯に、豆腐やネギ、菜っ葉を入れたオミオツケを食べる。朝炊いたご飯は一日もたせる。昼はイモ、ニンジン、ゴボウ、コンニャクなどをザコビラに煮る。ユウジャは御飯とか団子などを食べ、ユウハンはたいていうどんとか蕎麦を食べる。夜食は夜なべ仕事のときに食べるが、たいてい残り物で済ませる。

米と麦　深良・泉・小泉村は米どころなので、主食には苦労しなかったが、水田の少ない富岡村方面ではむしろこちらに嫁をくれたがったという。また御殿場方面の水田が無い村を、「印野・北畑、シャバ（娑婆＝この世）での地獄」などと悪口を言ったものだった。

主食として食べるとき、米と麦を混ぜるのであるが、その割合は米七に対して、麦が三という割合であった。麦は大麦を挽き割りにして夜のうちに煮ておき、それを翌朝米と共に炊く。また裸麦を挽き割りにしたこともあるという。オバクといえば、だいたいヒラムギのことをいったようだ。ビール麦も値がいいので作ったことがある。クズマイ（屑米）は粉にしたものを湯でこね、ヨモギを入れたりして団子を作り、ふかしてオヤツに食べた。

蕎麦　ソバは自家用でどこの家でも箱根山のカイコン（開墾）で作っていたが、昔は何かというと打って食べたものだった。カイコンではこの他に、サツマ、陸稲、小豆、モロコシなどを作っていた。モロコシはサヤのまま焼いて食べたが、粉にして団子にするオヤキは作らなかった。

調味料　出汁は鰯の削り節を使った。沼津辺りから行商で昔は担いで、後には自転車で来たもので、二日おきくらいにイワシとかサバ、マスなどの生ものも持ってきた。

醤油は自家製で、小麦に塩を入れて、夏から九月頃にかけて大きな樽にねせる。味噌もやはり自家製で、一一月頃に大豆に米麹を入れて作る。これらはオモヤの裏にある味噌部屋に保存しておく。こんにゃくなども自家製である。

川の恩恵　新川（深良用水）と古川をつなぐ水路には水門があり、田植え時分になるとそれを開けるため、水が自然にきれいになって、ハヤッコやウナギ、カニ、ウグイ、カンジーなどが捕れた。またザルでドジョウも捕まえた。捕ってきたドジョウは豆腐といっしょに煮て食べた。カワニナもよく捕り、味噌汁の具として食べた。農時分には、ズガニもモジリを使って多く捕ったが、塩茹でにして食べた。

昭和の初期には、芦ノ湖にワカサギを捕りにいった。子を産みに波打ち際まで来るのを、ザルいっぱい捕ったものだった。

山菜と薬草採り　四月頃、山にワラビを採りに行った。ドクダミやゲンノショウコは腸に効く。日陰に干しておき、煎じて飲むとよい。センブリは、胃の薬として煎じて飲む。茅場やヒガタ（日向）に生えている。

第三節　一年の生活

(一)　年中行事

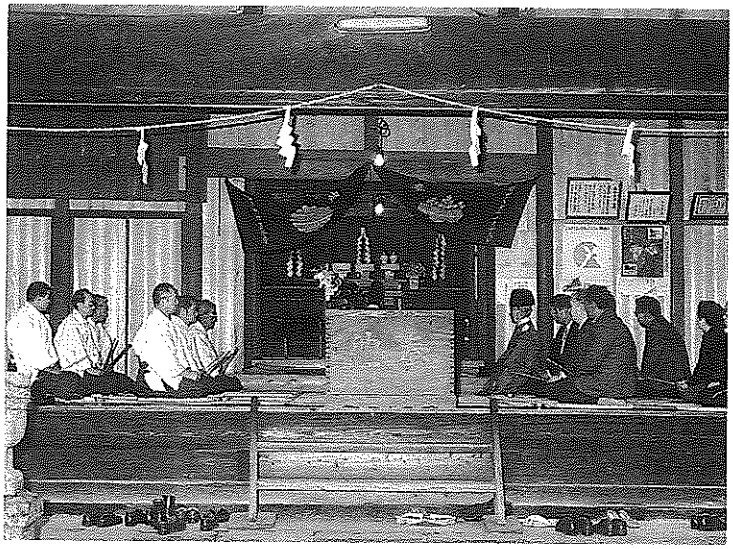
ススハライ　正月を迎える準備は一般の家庭では、ススハライ（大掃除）から始まる。家中の者が総出で、畳を上げ、天井のススを払うなど、大忙しの一日の最後に、各戸では、神棚をきれいに掃除して、歳神様を迎える準備をする。「大掃除済み」の札を玄関に貼るのも、ススハライが済んだ後のことである。遠道原の羽田家では、この時、「奉斎大年神鎮護」と書いた宮司の印の御札を、神棚に納めるという。

上原では、ススハライの日はたいてい天気の良い日を選んで行い、暦を見て日を選ぶことはあまり無かったが、仏滅の日は避けたという。ススハライ終了後、ダンゴジル（団子汁）をこしらえ、中に大根や里芋を入れて食べた。

南堀の大庭敬一さん（大正三年生）宅のススハライは、毎年一二月二〇日頃に行っている。ススダケ（竹）三本を束にして家中を払った。また、家の中の畳や家具調度はオモテ（表、屋外）にムシロを敷いて、その上に全てを出し、埃を払い、虫干しをした。ススハライが済むと、深良村の衛生係が来て検査をし、ススハライ済の札をトンボグチ（玄関）に貼っていったという。

南堀部落では、一二月一日に、氏神社の八幡さんに、各部落の新旧の当番が集まり、元旦祭に神社で燃すためのモシキを集めておく。正月が近くなって、再び寄り合って、お飾りも付ける。

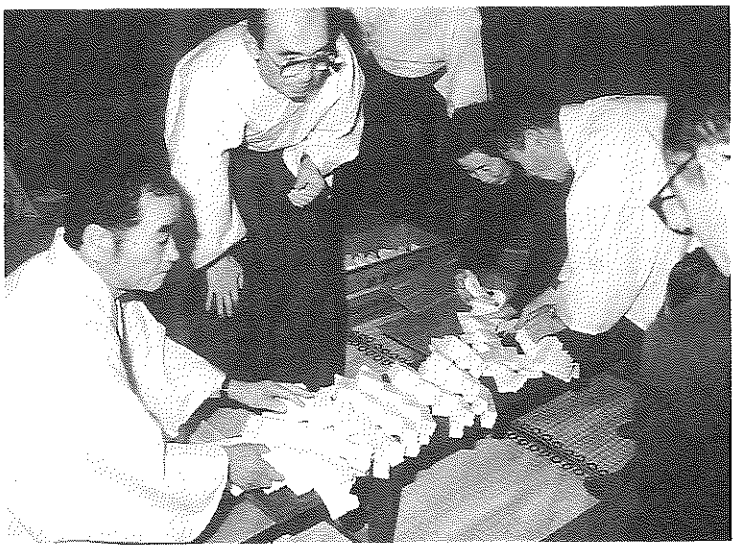
深良神社では、一二月二五日に、オオバライ（大払い、神社の大掃除）を行う。終了後、伊勢の大神宮のヘイソク、荒神のヘイソク、そのほか各種のヘイソクを分け、区長はそれぞれの地区に持ち帰って各戸に分ける。各戸では、ススハライの済んだばかりの神棚に御札を納め、ヘイソクを飾って正月準備を進めるのである。オオバライの日に、古い御札やヘイソクは神社で焼却する。



深良神社のオオバライ

これに参加する地区は、町震（町田、震橋）、南堀、和市、切久保、遠道原、舞台団地、柳畑で、各神社総代と区長が出席することになっている。ただし、舞台団地と柳畑は新興地区のため区長のみである。

このオオバライが神社当番の交替の日となり、次の当番となる地



深良神社のオオバライの日に各地区にヘイソクを分ける

区への引継ぎが行われる。当番は、町震、南堀・和市、切遠（切久保・遠道原）の三分割制。三年に一度当番が回ってくることになる。

オカザリ（お飾り）

お飾りは、新藁で輪飾りを作り、ウラジロ、ダイダイ等を添えて飾る。「歳神さんの飾りだけは自分で作るものだ」という。また、玄関飾りにする藁には、稲穂の付いたものを使用した。南堀の大庭敬一さん宅のお飾りは、輪飾りにユズリハ、ダイダイ、ウラジロ、オシメ（御弊）が基本型だった。ただし、ホカエ（外家、母屋以外の建物で馬屋、納屋、便所など）にはダイダイ、ユズリハは省いた。お飾りにウラジロやダイダイを使用する理由として次のような説があると聞いた。「ウラ（俺すなわち自分のこと）のシロ（城すなわち家）はダイダイ（代々）にユズリハ（譲ることができる、栄えて継続する）」

門松は、黒松と赤松を対にして作った。現在では、商店などでお飾りを売っているため、これを買い求めて飾る家も少なくない。こうした現象は、伝統的なお飾り作りの技術が継承されなくなったことや、稲刈り時にコンバイン等を使用することによって藁が切り刻まれてしまい、お飾り用の藁が少なくなってしまったことに因ると言われる。

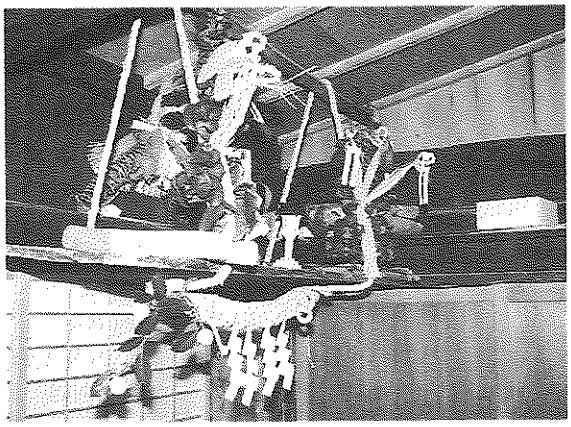
お飾りを飾る日は、たいてい一二月三〇日頃とされる。「一夜飾りはするものではない」と言われ、元旦前日の三一日には飾らない。

モチツキ（餅つき）

餅つきは二八日か三〇日にする家が一般的である。やはり大晦日につく「一夜餅」を嫌う。また二九日はクモチとかクンチモチ（苦餅）と言って、忌む習慣がある。お供え用の餅と雑煮用の餅をついた。

上須の勝又金作さんは、正月用の餅つきは、神棚の方角に向かってついたものだという。

三〇日には、神棚、



上須の勝又宅の神棚

年神、恵比寿に飾るヘイソクを作った。美濃紙を小刀で切ってオシメを作り、竹に挟み、藁を束ねた台に差して立てて飾る。

大晦日　大晦日には蕎麦を打って、年越し蕎麦を食べる。かつてはどこの家でも蕎麦を栽培していたので、自家製の粉を使っていたが、現在では蕎麦粉を買う家が多い。蕎麦つゆは、にんじん、椎茸、鳥肉を入れた醤油汁。

また、この日、前日についた餅を四角に切ってモロバコに入れた。

正月三が日分のお雑煮を作っておく家もある。こうしておけば、三が日の手間が省けるからだった。

女衆は、クチトリ（御節料理）を作った。きんとん、羊羹、オヒラ等、昔は全部が手作りだった。オヒラは煮物で、牛蒡、人参、こんにゃく、里芋、昆布等を煮染めた物であるが、このように中に入れて煮る野菜は必ず奇数の数だけを使用し、偶数は嫌ったという。

子供の着物は大晦日には新調して、子供が寝た後枕元に置いた。下駄、足袋、ももひき、シャツ等で、特に肌着は必ず新調した。子沢山の家は、たくさん買わねばならず、経済的にたいへんだったという。

正月三が日　正月三が日を、二番正月と対照させて、ワカショウガツ（若正月）と称する。

三が日は、お雑煮を「ミャーニチ（毎日）ニーシクニテ（新しく煮て）神棚に供えたものだ」と、原の広瀬のぶさんは言う。三が日間は家族も毎日お雑煮を食べる。お雑煮は醤油汁で、四角い餅と里芋や大根を入れたものだった。やはり原の広瀬家では、いまは守らなくなったが、かつては神棚に供えるお雑煮だけはダシを入れないという習慣があったそうだ。正月の三が日は、男がお燈明をあげる日ともいい、その間は家の男衆が神棚の世話をした。

また、三が日の間に、三島の明神さん（三嶋大社）にも初詣でに出掛けている。

正月五日までを総称して、ゴカンニチ（五か日）正月とも称している。（原）

元旦　「元旦は、朝、暗い内に起きて、霜柱を踏んで氏神様まで初詣でに出掛ける。一番詣でを競ったものだった」と、遠道原の羽田さんは昔を思い出している。家では、神棚にお雑煮を供えた後に、家族同士が「明けましておめでとうございます」の挨拶を交わし、食卓を囲む。

南堀の大庭家の元旦は、氏神神社（八幡神社）への初参りから始まる。六時からは八幡神社で元旦祭が始まり、これには家長が出た。境内では、むらの当番組の人達が去年中に集めておいたモシキ（燃し木）をたいてカガリビとし、その回りで暖を取って待っていた。むらの男衆が集まったところで、神前に祈禱し、挨拶を交わした後にカガリビの回りでスルメをかじりながら御神酒を飲んだ。

また、大庭家では元日には、「福を掃き出すから」といって、掃除は決してしなかったし、風呂にも入らなかった。従って二日の朝は、まず掃除をし、家族の者皆が朝風呂を使ったものだという。

戦前の小学生は、「拝賀式」のために登校して、「君が代」を斉唱し、「教育勅語」を聞き、ラクガンの菓子をもらって帰るのが、毎年の元旦の日課だった。

子供にとって、正月はニイシイ（新しい）下駄に足袋、着物に三尺を締めて、年始に来た親戚に会ったり、お年玉を貰うことが何よりの楽しみであった。

深良村全体では、元旦に箱根神社まで詣でて、オソナエを納めてくるのが習わしだった。村の代表が大きなオソナエを背負い、歩いて峠越えをして初参りした。現在は、そうした当時の苦労話をよく聞く。

二日　二日は年始回りに行ったり来たりする日である。この日に回るところはオヤサン（かねおや）、仲人さん、そして親戚だった。年始には、三つ折りにした年賀半紙に「のし」を書いて、水引を懸けて持って行った。ほかには手拭などが年始に使われた。子供たちは、この日、書き初めをした。

正月三が日の間、男がマメガラを燃して雑煮を作るという一例を聞いた（上原）。また、元旦の若水汲みなどは、あまり聞かれない。

初山　四日は初山と称した。この日、山に入りカツノキやダンゴボク（団子木）にする樹木を切ってくる。持ち帰ったカツノキは神棚に供えておき、二番正月の柿の木はたき（ナリモッソ）の際に使う。ダンゴボクもやはり二番正月に使う木だが、これは根株から切り取って来る。根株からなるべくたくさんの小枝が出ているものがよしとされた。

南堀の子供達は、四日に、二番正月のサイトヤキの準備を始めた。南堀の大庭敬一さんの子供時代の思い出によれば、四日には、各戸から神棚のオソナエ餅の下に敷いた紙とお金を貰い、お金は帳面につけた。五日には、裾野駅より汽車で下土狩まで行き、下土狩からは歩いて三嶋大社に行き、大社の前の縁日の店で達磨、羽根子（羽子板のはね）、たけなが、おかめの面、日の丸の扇子などを行李一杯に買って、背負って帰ったものだったという。また、この日、山へはサイトヤキのオンビ用の竹切りに出掛けている。

やはり、南堀の大庭敬一さんは、「初山には、自分の山の見回りに出掛けた。オソナエ餅に敷いた紙を切り、米を一つまみ紙に入れてひねり、山の入り口の木に結び、米のおひねりを供えてきた。この際、帰りにはカツノキとダンゴボクを切ってきた。ダンゴボクはこならの木で、枝がたくさん出ているものを切った。カツノキは、先を十文字に割って、年神さんに供え、ダンゴボクは軒下あたりに置いた」

四日には坊さんが年始に回ってくる。「オソナエを坊さんに見せるものではない」と言われ、急いで片付けたものだったという。

ゴカンニチ正月　五日には別に変わったことはしなかったが、この日になると、「ひゃあ（もう）ゴカンニチ（五日）か、早いもんだ」など言った。

七草　七草の準備は六日に行う。女衆が野原に行き、七草を摘む。家で七草を刻むのだが、その時キリバン（まないた）を、メグリボウ（すりこぎ）と包丁の刃を逆さにして唱えごとを唄いながらたたく。「ナナクサ　ナズナ、ナッキリボウチョウ　マナイタ、トウドノトリガ　ニホンノトチニ、ワタラヌサキニ、アワセテ　バッタバタ」と、唱える。この文言は、各地区とも、ほとんど似通っている。

七日の朝は七草粥を作る。南堀では餅を入れた。神棚をはじめ、家の中の各所の神様に供えた後、家族が食べる。「七草粥を食べないと、悪い病気になるぞ。」と、親たちから言われながら、必ず一杯は食べたものである。

子供達は、七日に、荷車をひいて部落中を回り、お飾りを集めた。集めたお飾りはサイノカミさんの前に持ち寄り、暮れのススハライ

の竹を切って小屋を組み、その回りに吊るしておいた。二番正月のドンドン焼きに使うためである。

ウナイゾメ　深良全地区ではないがウナイゾメを行っていた伝承も聞ける。原では、一一日、ウナイゾメと称し、クワやマンノウを持って田畑に出掛け、三鍬、四鍬のみ鍬を入れてくるという。（広瀬のぶさん、明治四二年生）

これは、かつて広く行われていたものであろうが、早くにすたれてしまったものであろう。

二番正月　ワカショウガツ（若正月）に対して、一四日、一五日を二番正月と称することが一般的である。また、行事は子供中心に、多彩で、しかも盛大に行われる。

一四日には、子供が中心となってオンビを作って立てる。南堀ではサイノカミさんが二箇所にあったので、倶楽部前で作って、二箇所に持っていって立てた。オンビは、山から切ってきた竹の先を十文字に割って、両側に垂らした長い紐に達磨や色々の物を結び付けたものである。

一四日の晩にはダンゴボクを飾る団子と、ドンドン焼きの団子をこしらえて、用意しておく。団子は紅白のもので、平たく作った。仏壇や年神、大神宮、墓などに飾るダンゴボクは、団子を三個つけただけの小さいものだった。年神棚の下に置くダンゴボクは大きく作った。これは初山の日に用意しておいた、こならの木に、丸いもの、舟、俵、小判、なす、きゅうりなどの野菜の形に作り、枝いっぱいにつけた豪華なものだった。これを臼の上に飾る地域もある。大きな団子を一つ作り竹のウラッポ（先端）に差したものは「風の神さん」と称し、台所に飾る団子だった。そのほか、ドンドン焼きの団子は、丸く三個作り、子供に持たせた。

一四日夕方からドンドン焼きが各地で行われる。オンビの回りには部落の者や子供達が集まり、火を付ける。サイノカミサンの小屋に飾ってあったお飾りやそれぞれが持ち寄った書き初めなどを燃す。この火で、持ってきた団子を焼いて食べる。「団子を食べれば一年間病気をしない」などと言われている。

南堀の大庭敬一さんはドンドン焼きの面白い伝承を語っている。次のようである。「村の氏神さん（八幡様）は、ふだん村人の悪行を記した帳面を持っているのだが、暮れに出雲に出掛ける際、これをサイノカミさんに預けて出掛け、預けたことを忘れてしまうから、ドンドン焼きでドンドン火をたいて帳面を焼いてしまうのだ」

現在、一五日にドンドン焼きを行う地域は多い。町田のドンドン焼きは、平成三年正月一五日、農免道路脇の田んぼ（田）の中で行われた。子供会の役員が世話役となり、盛大に燃える火の周りで、来た大人には甘酒を、子供達にはお菓子を配っていた。かつて、これを行うのは厄年の者だったという。また、ドンドン焼きの場所も、今はサイノカミの広場から田んぼに移った。裏作の麦を作らなくなった現在では、田んぼは、最も広く安全な場所だからである。

一五日の朝はナリモッソで明ける。小豆粥を煮て、これを初山の日から神棚に上げておいたカツノキで掻き回し、粥の付いたカツノキを子供に持たせて、ナリズモク（実の成る樹木、柿の木等）をハタカセル（たたかせる）のだ。近所のあっちこっちから子供達のナリモッソの大声が聞こえてくるので、親は「ほれ、よその家じゃあ始まったぞ。」と子供を急ぎ立てたものだった。ナリモッソの文言も、多少の語句の相違はあるものの、裾野各地区ともに似通ってい

る。「カキノキ　カキノキ　ナルカ　ナンナイカ、ナロウトモウセ、タカイトコヘナルト　カラスガクウゾ、ヒクイトコヘナルトコドモガトルゾ、チュウトコヘ　タアント　ナレナレ」と唱える。

ダンゴボクは一六日まで飾ってから片付けた。「一七日の風に吹かせるものじゃない」と、いつまでも据え置くことを戒められた。

山の神祭　深良各地区共に、おのおの山の神をお祭りしている。一七日は、各地で山の神さんの祭が行われている。南堀では、旧戸（二四戸）がこれを行う。昔は家々が当番を回り持ちして、山の神様への御参りの後、当番の家によってナオライ（直会）を開いたものだったというが、現在は簡略して境内で直会も済ましている。

ハツカショウガツ（二十日正月）　「二十日正月目が覚めた」など言ったが、特別なことはしなかった。

若正月、二番正月と、多忙で里に帰ることの出来なかった嫁が、ようやく里帰りできるのは、この頃だったという。

何かと行事の多かった正月も、この二十日正月でほぼ終わる。

ジロウツイタチ（次郎朔日）　二月一日をジロウツイタチと称して、餅をついたりもしたが、現在は特別の行事は行わない。

マメマキ（豆撒き、節分）　暦では立春の前日を節分としているが、この日をマメマキと称することが一般的である。大豆を炒って、先ず年神さん、大神宮さん、そして墓地やお宮でも撒く。撒く時には「福は内、鬼は外」と言いながら撒く。節分の豆は「年齢の数だけ食うものだ」と言われ、夢中になって数えながら拾ったものだったという。撒く順序や場所は、家によって少しずつ異なっている。マメマキをトシコシ（年越し）とする地域も多い。

節分の豆を炒る理由は、外に撒いた豆が決して芽が出ることがないようにした為である。「鬼は外」は「芽が出るまで鬼は来るな」の意味であるという。

遠道原では、マメマキの晩「鬼が尻に判を押す」と、言われたので、外の便所へは怖くて行けなかったという。

上須の勝又金作さん宅では、節分の豆をヒジロ（囲炉裏）の火で焼いて、その年の天候占いをした。オキビの回りに月の数だけ（一二個）の大豆を右回りに並べ、焼け具合を見る。黒く焦げた場合は、その月は雨が多く、白い豆の月は晴れの日が多く、半分黒い豆の月は晴れたり曇ったりだと占った。

マメマキの日にヤッカガシを行う。竹串に鰯の頭を刺し、唱えごとを言いながら鰯にツバを吐き掛けて焼く。これが言い様のない悪臭を放つのだが、これで魔除けになるという。トンボグチに差して魔除けにしている。唱えごとは次のように言う。「アリンド（蟻）のクチヤキ、ペッ（唾を吐き掛ける）。マムシ（蝮）のクチヤキ、ペッ。ウンカのクチヤキ、ペッ。カラスのクチヤキ、ペッ。スズメのクチヤキ、ペッ。」害虫や害鳥など、農民に害を及ぼす動物がヤッカガシの対象となる。

目一つ小僧　二月八日には「晩方、一つ目小僧が山から下りてきて、人々に不幸をもたらす」（南堀）といい、家では、子供達が履物を縁の下に隠したりした。「一つ目小僧がやってきて、散らかしてある履物に判を押して行く」などと言う地域もあり、この日だけはアガット（座敷への上がり口）の履物の整理整頓をやった。

軒先には、長い竹の棒の先にメカゴ（目籠）をつけて、立て掛けておいた。目籠の目の多さに、一つ目小僧は驚き、逃げ帰るとされる。

現在、こうした行事は廃れ、目一つ小僧の日が二月八日であった

のか、一二月八日だったのかも判然とせず、この日をコトヨウカと称したかも忘れている地域が多い。

初午　深良の初午は、三月一〇日、深良新田のお稲荷様の祭日に合わせて行う。

この日は子供に「奉納　正一位稲荷大明神」のハタ（幟旗）に自分の名前を書いて持たせて、近所で稲荷様を祀ってある家まで行かせた。子供がくれば、その家では用意しておいた赤飯やお菓子などを子供に分け与えた。

稲荷様にはこの日、オコワ（赤飯）、ニシメ（野菜の煮物）、油揚げを供えた。

彼岸　春分の日を挟んで、その前後三日間を春の彼岸という。この日に墓参りをすることが習わしとなっている。まず墓掃除、コウバナを飾って来る。そして彼岸を迎える。第一日目をイリ（入り）と呼び、小豆あんのボタモチを作る。二日目はナカ（中）と呼ぶ。この日には餅をつく。三日目がアケ（明け）である。「アケダンゴ」と呼び、団子を作る日となっている。それぞれの日には、作ったものは仏壇に供える。

オヒナサマ（雛節句）　四月三日がこの地域の雛節句である。女の子の成長を祝う祭りである。地域ではオヒナサマと呼ぶところが多い。長女のオヒナサマは特に盛大に行われる。嫁の実家をはじめ、親戚や近所からも祝いのものが届く。嫁の実家は段飾りを届けて祝う。昔は御殿飾りだったという。親戚からは小型のものや、箱入りの人形だったりする。近所からは、着物を作るようにと反物だったりの場合があった。

お返しにオフルマイが催される。昔は自分の家にヒトヨセをして（人を招いて）御馳走していたが、現在はレストランやミニ結婚式場のような場所を利用する人も多い。帰りにはヒキモノ（お返しの品物）を付けた。

貰ったオヒナサマは座敷に飾り、菱餅を供える。菱餅は草もちと紅白の三種類で、それぞれ二枚ずつを六枚重ねにして、上に短冊に切った餅で「のし」の形を作って乗せ、それを一対にして供えた。祝いの物をくれたカネオヤや嫁の実家や親戚には、四角に切った餅を三枚重ねて届けた。

オヒナサマの日には必ず寿司をツケタ(作った)ものだったという。

花祭り　四月八日はお釈迦様の誕生日で、寺院では甘茶をいれ、来たものに振る舞った。西安寺ではこの日を「般若祭」としていた。

四月に入ると、農家はそろそろナワシロ作りなどの準備に掛かり、忙しくなる。暫くは年中行事も少ない。

端午の節句　八十八夜が過ぎ、五月五日には男子の成長を祝う端午の節句となる。長女のオヒナサマと同じく、男子の場合も長男は初節句を盛大に祝う。

嫁の実家からは「ハタノボリ」や「鯉幟」や「武者人形」が贈られ、座敷には武者人形、表には大きなハタノボリや鯉幟が飾られた。初節句の場合には、棹の先に杉の葉が付けられた。カネオヤ、親戚、近所のものが招かれ、座敷の飾りの前でオフルマイの宴が開かれる。

この日、菖蒲三本とよもぎを軒先に差したり、菖蒲湯を沸かして入る家は多い。

この日だけは「節句働きはひかえろ」といい、野良仕事を休ん

だ。「もしこの日働いたりすると、馬の鞍を背負って山の神に謝りに行かねばならない」などとも言われていた（遠道原）。こういう時に働くものを「ツツナシモンノセックバタラキ（怠け者の節句働き）」ともいっている。

マンガアライ（馬鍬洗い）　田植えが終了したところで一息ついてマンガアライがある。馬鍬洗いの文字どおり、シロカキで酷使したマンガ等の農具を川で洗って収める日である。農休みとも呼ぶ。

昔は田植えの時期が遅く、七月くらいまで延びたこともあったので、マンガアライの日は七月一〇日前後だった。若い衆は区長さんに申し出て休みを貰い、この日は一日中遊んだものだったという。各家庭では、寿司をつけ、小麦饅頭などこしらえて食べたものだったという。

須釜のオテントサンダイモク　祖始堂

現在はマンガアライの休みはない。

オテントウサン念仏

念仏講の婦人たちが、夏の天候の良いことを祈願して、日の出から日の入りまで念仏を唱えるオテントウサン念仏は、旧暦の六月八日ということに決められて行われる。

平成二年七月二九日、須釜祖師堂で、須釜婦人たちによるオテントウサン念仏が行われた。ある婦人は、毎年のように「天気にしてくよう（下さい）」と祈るのだが、「不思議と天気になるものだ」と、念仏の効果のほどを語っていた。

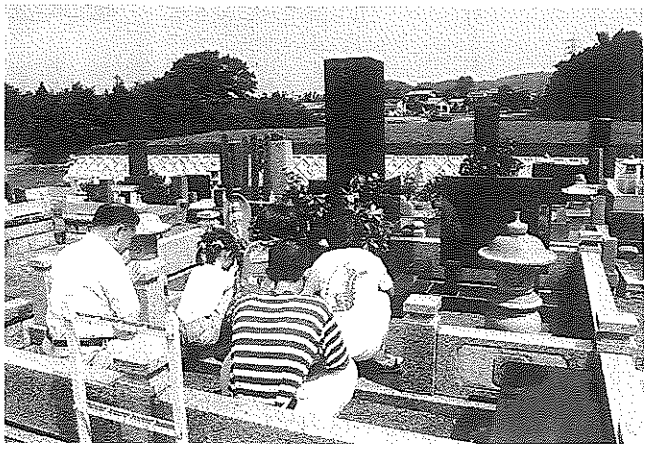
オテントウサン念仏は梅雨明け頃の年中行事である。

七夕　七夕は盆前の七月二七日に行っている。新竹を切って、短冊に「天の川」など星の名前をいろいろ書いて飾った。七夕が済むと、竹は田に持って行き立てた。

田んぼに立つ七夕の笹

盆の行事　南堀の盆は、元七月二四日に行われていたが、現在は八月一日盆となった。この日に盆を行う地域は多い。八月一日を「地獄の釜の蓋の開く日」と、かつて南堀ではいって、「その日には仕事をするもんじゃあない」と戒めたという。

七月三一日は盆の準備。盆棚を作り、仏壇から位牌を出して据え



盆の入り

ニイボンの念仏

迎え火をたく

る。盆棚は、新竹を組んで、両脇の柱竹にイモガラ（里芋）を吊した。下には刈ったばかりの青いチガヤを敷いた。最も奥の中心に位牌を据え、水とお茶を供え、その前に果物や野菜などを供え、キュウリやなすで牛や馬を作って置いた。盆棚の下には無縁仏のためにと、里芋の葉を敷いて、上にうどんや寿司を供えた。表には竹を三本立て、その前にはかまどを築き、ムカエビ（迎え火）をたいた。中央の竹は両脇より高く立て、かまどでは杉の葉をもした。ムカエビは、三一日の夜、一日の朝と晩、二日の朝と晩、三日の朝に、たいている。

八月一日は、寿司を仏壇に供えた。

八月二日は、仏さまが帰りの土産を買いに行く日といい、おにぎりとお金を上げた。

八月三日はアケと呼び、真こもに供え物を包み、団子と線香を持って、川に流しにいった。現在は川が汚れるからと橋の上に置き、後に回収している。南堀では寺山の入り口に置いているようだ。また、この日、お婆さんたちは部落に三か所ある道祖神の前で、念仏を唱える。

地蔵さんの念仏　八月二三日、原では、地蔵さんの念仏が行われる。翌二四日にはツケマツリと称される相撲が行われた。原の地蔵さんの相撲は広く知られており、沼津や御殿場などの遠方からも試合や見物に来たものだったという。家庭では餅をついたり、寿司をつけたりの御馳走だったという。

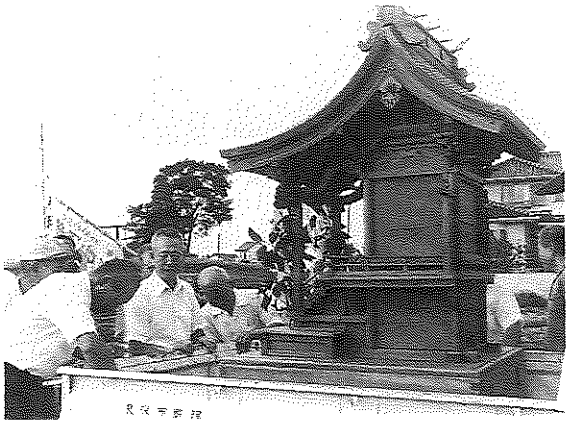
上原では、日蓮の「車返しの道場」のオムシボシ（お虫干し）が行われる。道場近くの上原公民館では、静岡の日蓮宗の本部から来たたくさんのお坊さんたちによってお経があげられる。上原では、この日全員がオムシボシに参加している。

ヨシダサン（吉田さん）　九月一日はヨシダサンの祭。

深良では、旧の全部落が参加して行われる。祭り当番は深良全区を天田上、天田下に二分し、それぞれが一年交替で請け負う形式となっている。更に天田上は新田、原・上須、上原・上原団地、天田下は切久保・遠藤原、和市・南堀、町震と、それぞれが三分割されて祭当番を行う。したがって、各部落の祭当番は六年に一度ということになる。

ヨシダサンは独立した神社を持たず、天田上、天田下共に、深良神社、大神宮神社に合祀という形でお御輿を納めている。

現在の祭は、当番地区となった神社に役員（神社総代と区長）が、午後二時に集まってご祈禱をし、全員でお神酒をいただいた後、軽トラックにお御輿を乗せて次の地区に引き渡しに出発するという簡略なものとなっている。しかし、かつてはお御輿を担いで村内を回り厄払いをして、その後に担いで引き渡しに出掛けていたものであったようだ。



吉田さんの祭　軽トラックに積む

また、かつては、各

家庭ではホウソウマンジュウ（小麦まんじゅうの上に赤い点を付けたもの）を作り神社に供えたりもしていたが、現在ではこれを作る家も少なくなったという。

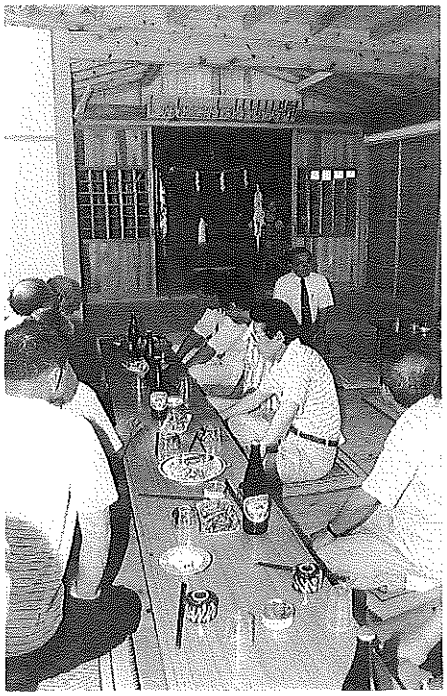
駿東一帯地域におけるヨシダサンは、御殿場市や、裾野市（深良を除く）で、江戸時代から行われている。

裾野市の場合、神山（御殿場市）・岩波、久根、公文名、茶畑、石脇、佐野、平松、二本松、二つ屋、伊豆佐野（三島市）という広範囲の地域で、それぞれが祭当番を順送りにしつつ行っている。この祭の原点は、江戸時代にはやり病が蔓延したため、佐野の医師三好某が代表者と京都におもむき吉田神社を勧請して祈願したことに始まると伝えられている。なお、ヨシダサンを京都よりお迎えする際に、東海道を駿河の国まで同道したと伝えられる打囃子（ガク、オッカケ、ニアガリ、マツバヤシ、ミヤコバヤシ）は、ヨシダサンの祭囃子として保存継承されている。

しかし、前述の裾野各地区がヨシダサンを勧請した当初の時点では、深良地区はこのヨシダサンの共同組織の中に入っておらず、深良が独自にヨシダサンを行うようになったのは、明治時代のころになってからだという。やはり深良でも、その頃にはやり病があり、あわてて他の地区をまねて疫病退散に霊験あらたかなヨシダサンを勧請したものだという。

風祭り（二百十日）　二百十日の風納め。風祭りは九月一日に行っている。南堀では、八幡さんに区長さん以下そろって参拝し、後にナオライ（直会）をする。

この日は深良地区のヨシダサンと同日であるが、当番等で関係する地区を除いては、それぞれの部落の神社で風祭を行っているようだ。また、風祭は部農会員（農家）のみとしている所が一般的である。



南堀八幡宮　カザマツリ

十五夜と十三夜　南堀の場合、九月一五日が八幡さんのお祭りだから、これと兼ねる者が多い。団子を作り、寿司をつけ、すすき、しょうが、薩摩芋などを供えた。昔は若い衆が長い棒を持って部落を回り、縁側に飾ってある供物を取って歩いたものだったという。

かつては、子供相撲が開かれ、出店も出るなどたいへん賑わったようだ。

十三夜には、「片見月は良くない」といわれていたので、必ず行った。この時はドロイモでも良いとされ、ていねいに洗ってない泥の付いたサトイモを供えたものだという。またカイコン（開墾）からススキやオミナエシを取ってきて飾った。

オヒマチ（深良神社祭典天田下）　秋の刈り入れが忙しくなる

前の祭りで、ジュウガツセック（十月節句）とか、オヒマチと称して盛大に行っている。

天田上と、天田下と分かれ、前者は一〇月一〇日、後者は一〇月一六日となっている。

各家では、この日モチをつき、寿司を作って、ほうぼうから来る親戚をもてなしたものだという。この時期、深良各地域ではあっちこっちで秋祭りが催され、親戚間で「いったり、来たり」したものだったという。

エベス講（恵比寿講）　エベス講には、前座敷で、俵を二俵の上に蕎麦ののし板を乗せて台とし、その上に一斗マスを口に正面に向けて置き、中に一升マスを入れ、その中に埃を払って出して恵比須様と大黒様を入れてまつった。

供え物は、みかんなどの新しい農作物、尾頭付きの小鯛、自家で打った蕎麦、お赤飯、徳利になんてんの葉を差したカンスズの酒二本など。

この時、エベスさんに供えたお赤飯は、「子供に食べさせると、嫁に行けなくなるから食わせるものではない」といい、子供には食べさせなかったという。

山の神講　上須では、一一月一七日が山の神講の日である。現在は、神社に三時頃に集まって一杯飲む程度のことしか行っていないというが、かつては、年三回くらいの山の神講があって、マワリコウ（回り講）で当番を担当して行っていたと聞いた。

高尾さん　一二月一日は高尾さんの祭である。町震地区の高尾さんは、かつて裾野のキエイテイという旅館の主人が寄付（勧請）したもので、その時代はいつ頃のことか明らかではないが、それ以来現在地でお祭りされるようになったものだという。

現在、祭は一二月一日の早朝に、地域内の人々が高尾さんに集まり、役員そろっての祈禱の後、ナオライ（直会）を行って帰るという簡素な形式になったが、かつては境内でコマンザライ（熊手）やバケツなどを商ったり、またそれを求めにたくさんの人が参詣に訪れたり、たいへん賑やかな祭だったようだ。

高尾さん祝詞

この日、切久保地区でも高尾さん（西安寺東の山の上）の祭が行われる。また、公文名の祭は、裾野地域内では盛大に行われていることで知られている。

オハタシ念仏　一二月二三日、原では老人が地蔵さんに集まり、一年間の無事を感謝してオハタシ（お果たし）念仏を行う。

第四節　一生の生活

(一)　産育

1　妊娠と出産前

妊娠　月のものが止まって、子どもができたことをハランダといい、三か月目くらいでオシュウトサンにまず告げる。また仲人やオヤサン（カネオヤ）にも告げる。毎月一回、産婆が回診をしてくれ、逆子になったときはなるべく元にもどすようにする。

オビイワイ　妊娠五か月目の戌の日に、カネオヤサンが紅白の晒の腹帯と赤飯をくれて祝ってくれる。このときには家族や仲人、オヤサン、産婆さんをよんで、赤飯、鯛の尾頭付きを用意して腹帯祝いをした。

腹帯はオヤサンが前もって用意してくれるわけだが、このオビイワイの日に産婆さんが来て、白の腹帯の長さ一丈分のうち七尺五寸のところに、縦に七・五・三の割合で赤い糸でコマをつけて（こまどめをして）糸印をつけてくれる。またその反対側の端には「寿」と墨で字を書き、妊婦に帯をしめてくれる。この腹帯はいずれ赤ん坊をおぶう時の、背負い紐となり、赤い帯は使わないでしまっておき、初節句のときに雛壇に敷く敷物となる。

妊婦の禁忌　火事や葬式を見たとき、おなかを撫でると生まれてくる子どもに痣ができるとか、火事を見ると痣ができるから鏡を懐に入れておくようにといわれた。また葬式の際に、夫がアナホリにあたったときはその役を遠慮して、次の人に回してもらうという。

またカマスの上に妊婦が座ると、お産が重いともいう。

安産祈願と淡島講　切久保では氏神の神明さんにお参りに行って、安産祈願をしたという。また、淡島講はお嫁さんの講で子安講ともいい、お産の軽くなるよう安産、子育てを願って行う。深良ではブラクによって現代風にして続けていたり、止めてしまったりと様々である。各ブラクの淡島講は、次の様に行っている。

原では、当番の家が毎月一軒一軒回り、夕飯のオフルマイ（お振る舞い）をした。オフルマイのために、当番が米を三合ずつ集めに歩き、オチャハン（お茶飯）といって漉し袋にお茶を入れて煮出し、その水で米を一升炊いた。おかずはそこの家で作った。カケジ（掛軸）をかけ、霊供膳を供える。一戸につき女衆が一人出てくるが、年のエライ人（年長者）が上座に座る。子どものある嫁さん（妊娠している嫁）は、安産の神様なので必ず出てきたものだった。後には公会堂で年四回、結婚した女の人が集まってやっていたが、今では子どもを連れて、沼津まで行って映画を見に行ったりしている。

上丹では若い嫁さんが入り、一、三、九月に当番の都合のよい日に行い、子どもも連れていく。また南堀ではやめてしまったが、かつては若い女の人たちが三月頃にやっていた。年一回冬季の農閑期に、オヒョウゴにお団子や野菜、果物を供えたりして小さな宴会を催した。

上丹ではお産の近い人は淡島講の時の蠟燭をもらってきて、その蠟燭が短いほど早く生まれるとか、難無く生まれるといって、出産のときにその蠟燭に火を灯したものだという。上原でも、大根の輪切りに楊枝を差した蠟燭立てごと蠟燭をもらってきて、お産のときに灯すが、その蠟燭が短いほどよいという。また蠟燭は、オソッサン（祖師さん）のお題目のときに灯したものももらってくる。

産前　産前にはとくに休まず、「お産が軽くなるから働け」といわれ、前日まであるいは生まれる直前ぎりぎりまで働いた。

昭和一五年九月に長女を産んだ女性は、田の草取りのときが初産の八か月目だったので、とても辛かったという。だから子どもには「アキゴ(秋児)は産みなさんなよ。夏から大変になる」と言ってきた。また二女のときにも稲の収穫期で、刈った稲を天日干しすることをカッポシというが、そのかがんで集める作業が大変だった。妊婦は均衡がとれないので足踏み脱穀機の足だけやったりしたものだという。三女のときには山へ薪取りに行っているときに産気付いた。

臨月になると、デミマイとして嫁の里から人が来て、近所に餡を入れたアンビン餅をメシジュウ（飯重）に入れて配った。

トリアゲバアサン　昔は近所のおばさんに取り上げてもらい、その人をトリアゲバアサン（取り上げ婆さん）といった。

開業の免許を持った産婆は深良に三、四人いたが、上原の広瀬きくさんが昭和一九年に開業する頃には、岩波の井上さん、古田さんのほか、町田に永井さんがいたが、この永井さんが沼津に行くときにその範囲（担当する領域―主に天田下）を譲ってもらったという。また切久保では松井りかさんに取り上げてもらった。原の場合は、岩波の井上さんか、裾野駅の北側の芹沢ちえさんを呼んできた。生まれそうになると、家人が自転車で迎えに行き、それに乗って産婆は駆けつけたという。

産婆は毎月一回検診をし、出産予定日の計算は九か月と七日とする。一晩に二人が出産するということも、二、三回あった。満ち潮のときに生まれるので、産婆は出産間近な人がいると、心がけて新聞の干満潮の欄を見ておいたという。

2　出産

出産　人は潮の満ちるときに生まれ、引くときに死ぬという。潮の満ち引きで産気づくので、暦をみておいたものだった。仕事や体調にもよるが、早く破水してしまうと出産の時間がかかるという。

出産の場所は実家に帰らず、婚家のナンド（納戸）、あるいは新しいところではザシキ（座敷）で産んだ。戦前はナンドで畳をあげてミシロ（荒筵）を敷き、その上に捨ててもいいボッコを敷いて座って産んだ。後にはザシキにサンジョク（産褥）布団を敷き、その上に油紙やビニールのような薄い敷物をかけて寝て産んだ。ヘソの緒は産婆が麻の糸で切り、一センチ幅くらいの麻の布で包んで、それがとれると箱に入れてしまっておいた。

産湯は川の水を沸かし、盥にお湯を入れて産婆さんやオシュウトサンが入れてくれた。

ウブツナさんの御飯　赤ん坊が生まれるとすぐに、御飯を炊いて釜の蓋の上に載せて神さんに供える。この神さんはウブツナさんといい、お産の神様である。供えたのはダイドコ（台所）みたいなところで、御飯は捨てないで産婦が食べた。

後産と産湯の始末　産湯はナンドの床板をあげて縁の下に捨てるか、目立たない所、便所、納屋、堆肥小屋などに捨てる。また産湯はナンテンの木の下に静かにあけるともいう。ガシャッとやると子どもがはくので、静かにあけるという。

エナ（後産）は土葬のときには油紙に包んで、夫が自分の家の墓地に穴を掘って埋けたが、今はカロウト（石室）になってしまったのでできない。あるいは縁の下に埋けたともいう。

流産で水子で亡くなった赤ん坊は、やはり自分の家の墓地に埋けたが、いまでは母子手帳もあるので勝手に始末できなくなった。名前がついていない子どもの場合、多くは石碑も立てず家人が墓地に埋けてしまう。

また出産の汚れ物はトリアゲバアサンが納屋のような日の当たらない所で洗濯してくれ、日陰に竿を渡して干した。

乳付けと産婦の食事　生まれたばかりの赤ん坊には、最初はお砂糖水を口にふくませた。また初乳をやるとカニババが早く出るといって、生まれてまもなく赤ん坊が泣くとやった。産婦は甘いものを食べると乳の出が悪くなるといって、お粥に梅干し、オカカくらいの食事だった。また塩辛いものもいけないといった。

産後と産の忌　産後はだいたい一週間は寝ていたという。しかし、産んでからすぐ次の日には仕事にもどったとか、三〜七日くらいで働き出したという人もいる。一般的に、ハツゴ（初子）だけは大事にしてもらったという。また農閑期には二週間くらい休んだが、アトハラを病んだときには四週間くらい休んでしまったという人もいる。

産褥の期間は「シチジュウゴニチ（七十五日）は泥の海」といって、男の人にも接してはいけないとか、二一日は針仕事をしてはいけないとかいい、三週間経つとオトコアゲ（お床上げ）をした。また湯にも二週間は入らず、入っても腰湯程度で、きちんと入ったとき（オトコアゲの後）は、家人の最後の湯に入った。

子育て祈願　上原では赤ん坊が生まれると、赤子神社に行って赤ん坊の着物を借りてきて着せ、翌年新しい着物を納める。赤子神社の祭神は男と女の神の二神で、力が強く、いい子どもを育てようということらしい。また南堀の場合、赤ん坊が生まれるとウブスナサン（産土さん）の八幡様にお米を半紙に包んでおひねりにして供えた。

初めての子どものことをハツノコ（初の子）といい、生まれるとお祝いとして餅を搗いた。また片親が亡くなった子どもをもらってきて育てると、自分の子が丈夫に育つという。

子どもには「鏡を見せてはいけない」とか、「ザルを被せてはいけない」、「臼に入るな」などといい、そうすると大きくならない、つまり育たないといって忌んだ。

オシチヤと名付け　誕生七日目のことをオシチヤ（お七夜）といい、お赤飯を炊いて尾頭付き、煮しめなどを出し、産婆やカネオヤ、嫁の実家の人達なども呼んで祝う。産婆など慣れた人に産毛を剃ってもらうが、産婆とはだいたいオシチヤまでのお付き合いである。またオシチヤには、近所の子どもを呼んでご馳走し、子どもの仲間入りをさせてもらう。この頃までに近所の人がウブミマイ（産見舞い）といって、オシメなどをくれたりし、嫁の実家からは産着が届く。

名付けはだいたいオシチヤにするが、つける人は様々で、寺の住職、明神さん（三嶋大社）の神主、易者さん、オヤサンがつけるとか、シンセキや知り合いの人の名をもらうなどで、大神宮さんの棚の下にその名前を書いた紙を貼っておく。

ヒャクヒトエとオクイゾメ　誕生から一〇一日目をヒャクヒトエといい、氏神さんにお宮参りに行く。切久保では氏神の神明神社に、洗米・オアシ（お賽銭）をおひねりにしてお参りに行く。須釜ではブラクのお宮さんである駒形神社に、お賽銭を持ってお宮参り

に行く。上原の場合は、赤子神社に参拝する。現在では最初に氏神さんにお参りしてから、三島大社へも行くようになった。子どもは母親が抱いて行き、祝い着物は嫁の実家から届く。この着物にはセモンをつける。鼓とかいろいろな形があり、三つのときのオチャンチャンにもつける。また「子どもが魔物にとりかわったりしないように（取り憑かれないように）」と、外出の際には鍋炭をひたいにつける。

お宮参りから帰ってくると、オヤサン、シンセキ、組の衆だけでなく子ども達も呼んで御馳走したり、赤飯を炊き、魚をつけて配ったりする。この日は赤ん坊が子どもの仲間入りをする日だという。

またオクイゾメといって、赤飯、お汁などを赤ん坊におはしで食べさせる。食べても食べなくても、真似ごとをさせるのである。

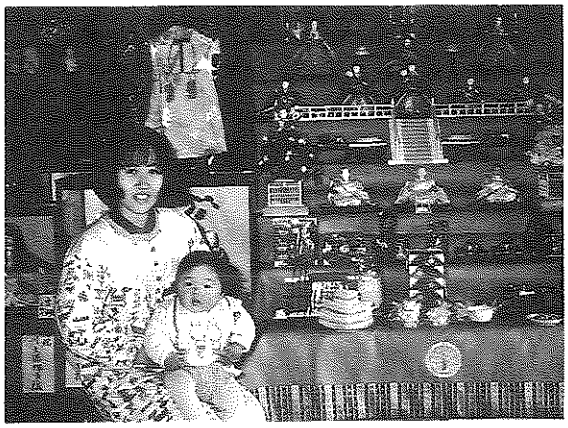
子どもの生まれ年　巳年は金がいい（財産に恵まれる）。申年は馬を使うと、馬がうんと言うことをきくし、金もいい。丙午の女はよくないなどという。また丑年の弟が生まれたときは、そこの家を継ぎたがるからといって、その子を捨てる真似をした。あらかじめ頼んであったシンセキの家の廊下に捨てた。仮親を「おとうさん」「おかあさん」と呼び、成人したときにはいくらか面倒をみてくれたという。

また厄年の三三歳のときには、アトハラで一週間くらい病んだ女性もいる。四人目にできた長男は子か親に悪いことが起こるといったので、今度生まれてくる子が男だったら、どこかに貰ってもらおうかと、貰われ先まで決めておいた。一般に厄年のときに生まれた子どもは、嫁の実家でも兄弟の家でもいいが、あらかじめ頼んでおいてそこの家に置いてくる。つまり、仮に捨てる真似をするのである。その家ではすぐに、その家で作った着物を着せ、改めて子どもを返しに来るか、逆に捨てたほうが出向いて行って子どもを貰って来る。

生後まもなく子どもが死んでしまったときには、その次の子を捨てて他の人に育ててもらい（拾ってもらい）、連れてくると丈夫に育つという。また子どもが下痢気味だったので、オシュウトサンにミズッケのものを置くな、流しでも何でも身ぎれいにしておけ、といわれたものだった。

3　成長過程

初節句　オビタテといって祝言をし、須釜上組では子どもの仲間入りを兼ねる。シンセキ、オヤサン、仲人、実家の両親を呼び、シキモノ（引き出物）としてお盆などを、ウチモノとして鯛などめでたいものを型取ったお菓子を用意する。



初節句の母子

初節句の祝い日は、男が五月五日で女が四月三日であったが、現在では男女とも四月三日と五月五日に行うよ

うになった。家の都合で四月末か五月初めにヒロウ（披露）することもある。初節句をするのは長男、長女くらいだが、第二子くらいまで祝う家もある。男女ともオヒナサン（お雛さん）といって、嫁の実家から半月くらい前に人形が贈られる。かつてオヒナサンは御殿雛で、幟もなかった。現在では男は天神さんや鐘馗さん、金太郎さん、加藤清正などの人形と幟竿の紋入りの鯉のぼりが贈られる。また仲人さんが鐘馗様を贈ったりもする。女の方は五段雛である。オヤサンがくれた紅白の腹帯のうち使わなかった赤の帯は、このとき雛壇に敷物として使う。

ヒロウは、仲人、カネオヤ、嫁の両親や近所の人達をみんな呼ぶ。また産婆が呼ばれることもある。また子どもの仲間入りといって、近所の子ども達を呼んでフルマイをし、子ども仲間の承認を得るのである。祝い膳をしないときは配り膳でもいいからする。またこのときに、男の場合は柏餅を一〇個か一五個用意し、女の場合はお饅頭とかケーキのようなお菓子を用意し、ヒキモノ（引き出物）もした。

お誕生前に歩く子がいると、米一升を背負わせて歩かせたりした。

七五三　一般に男は数えの五歳、女は七歳のとき七五三の祝いをする。三つのときには明神さん（三嶋大社）にお参りにいって、お祓をしてもらってくるともいう。本来なら男女とも七歳で祝う。着物は嫁の実家が用意し、町田ではウブスナサン、神明さんなどにお宮参りに行って村人の仲間入りをする。現在では見物がてら車で明神さん（三嶋大社）に行ってくる。またシンセキ、オヤサン、仲人、近所の人達を呼んでオフルマイをする。産婆が呼ばれることもある。赤飯、蕎麦、おかずなどを出し、花瓶などのシキモノ（引き出物）をして、派手に行う。

大正三年生まれの男性は七歳のとき、小山町にある竹之下のお地蔵さんの八月二三、二四日の祭日に、おじいさんに連れられて、ほうきを持ってお参りにいった。お賽銭をあげ、住職にお祓をしてもらい、掃く場所が決められているので奥に行って、そこをほうきで掃くまねをしてきたという。このお地蔵さんは、子育て祈願の地蔵として有名であるという。

ハツキャク　生まれた赤ん坊が初めて家に来ると、大豆とかトモシラガをあげる。まめで丈夫に育つようにと、それだけはやるのである。また赤ん坊でなくても、子どもが初めて家を訪れたときは、やはり同様のことをしてやったり、おこずかいをあげたりする。これはどの家でもやったものだという。

虫封じ　沼津の出口に子どもの襦袢を持って行って、治してもらう。また赤ん坊のひきつけは、ユキノシタをこすって飲ませる。

ホウソウ　子どもがホウソウ（疱瘡）に罹ると、米の粉で作った餅に紅をポチョとつけたホウソウマンジュウ（疱瘡饅頭）を作り、俵の蓋にするサンダワラに載せて幣束を立て、神棚につるした。病気が治ると、サイノカミさんに持っていくこともある。

子守唄　子どもの仕事には、赤ん坊の子守があるが、明治三五年生まれの男性が覚えていた唄に以下のようなものがある。

お月さん　神さん／いくつになやる／三十三になやる／三十三の年に／赤ちゃん持って／子守を終えて／油買いにやったらば／油屋のセドに／氷が張って／滑って転んで／油一升こべえた／その油どうした／犬なめ申した／その犬どうした／あの山越して／その山越して／奥の山にすっとんだ

前述したが、三三歳といえば女の厄年で、この歳に子どもを産むということはたいへんなことであり、子育てもうまくいかないと信じられていたため「捨て子」という習慣もあった。

子どもの行事　男の子は正月七日に外したお飾りを集めて家々を回り、オンビを作ったり、サイノカミサンをすっぽり隠すようにして小屋を作ったりした。昔はその小屋に泊り込み、いろいろな物を持ち寄って遅くまで遊んだものだった。隣のブラクのドンドンヤキの小屋のところへ行っては、悪さをしたりしたものだった。

天神講は子どもの講で、二月二五日に幼稚園児から小学校六年ぐらいまでの子どもが男女一緒に集まって、現在でもやっている。町田では松井家の天神祭の日に、おもに六年生が中心となり、一軒の家に集まって集めたお金で肉を買って御飯にかけて食べたという。上須では昔は六年生の子の家でお習字を書いたりしたが、現在では公民館でやっている。原では子どものある家だけからお米を集めた。「子どもは共食い」といって家では食べなくても、連れがあると何でも食べるという。

原のお地蔵さんは八月二三～二四日が縁日で、「子どもの神さんだ」といい、竹之下のお地蔵さんと兄弟だともいう。子どもが病気になると願をかけ、二三日の晩にオハタシをする。また二四日には、子ども相撲も行う。町田の松寿院では子育て地蔵を祀っているが、八月二四日の地蔵祭では子ども相撲が行われたこともある。

子どもの遊び　正月には女の子は羽つき、お手玉、まりつき、百人一首をして遊んだ。男の子はベーゴマをポケットに入れておくので、ポケットがよく切れてしまったものだった。冬、田の回りに生えている桑の木に、ホオジロが集まってくる。モチノキの皮を剝いて叩き、水でこして揉むと黒いモチができる。このモチを棒に巻き付けて、桑の木と木の間にかけ、ホオジロをそこへ追い込んでトリモチにくっつけて捕らえた。捕ったホオジロを家に持って帰ると、おばあさんが毛羽を抜いて焼き、それをさいてはらわたを取り、蕎麦の出汁にしてくれたという。また「遊びっこ」といって、田植え前に蕨やふきなどの山菜を採りにいった。夏は黄瀬川の佐野堰のところが淵になっていたので、そこに水遊びに行った。

田植え時分になると、深良用水の水門番が呼んでくれておじいさんと魚を捕りに行った。ウグイがアカッパラになり、投網をしてとった。貝はカタッキャアで足の指で挟んでとった。長い糸に二間おきに釣り糸をつけ、コガネムシを餌にして、岸に出っ張っている枝に糸の端を結びつけて一晩おき、翌朝あげると鰻がかかっていた。

子どもの仕事には養蚕の草掻き、桑の葉摘み、土寄せがあった。また麦播き前に、土を起こしてホウリマンガで土をほうる仕事をしたり、田植え前、牛でのシロカキやハナドリをしたりした。

若い衆入り　満一六歳で仲間入りする。結婚前がワカイシュウ（若い衆）、結婚後はチュウロウシュウ（中老衆）という。女は生理中は神さんも仏さんも触れないし、水もあげられない。女はお注連などにも触れなかった。

ワカイシュウは夜遊び、ヨビャーなどをした。夜遊びで子どもが出来ると親が一緒にさせた。そういう関係で一緒になることは多かった。あの嫁はツレッコ（連れ子）がある、といったものだった。女子青年が個人の家に集まっていると、そこへ青年が遊びにやって来た。

一人前　ケンザイミャア（経済前）といって、家を継げば一人

前、二一歳の兵隊検査に通れば一人前といった。また一人前とは、家をやれる（運営）程度の人、結婚していて生活が少し安定しており、仕事を任せられる程度の人をいった。

(二) 婚姻

1 縁談の成立

通婚圏　深良地区の通婚圏は深良地区内から裾野市内、隣接している御殿場市内などが多いが、三島市や沼津市内からも嫁に来ている。もっともこれは、昭和年代の話なので、古くはブラクあるいは広くても深良地区、御殿場方面にとどまっていたと思われる。

昭和三年に三島から嫁に来た人は、裾野駅まで人力車で、駅からはタクシーに乗って来たという。また昭和一八年二二歳のときに、裾野市堰原から来た人は、木炭自動車に乗り、嫁入り道具は牛車で引っ張ってきたという。

クチキキ　恋愛結婚でない場合は、ほとんどが見合いで一緒になった。昭和一四年に結婚した女性は、南堀に婿に来ていた人が父親と友人だった関係で、この人が仲人をしてくれて、御殿場の山之尻村から嫁に来た。まず御殿場の知り合いの家で見合いをした。このとき女性の出したお茶を相手が飲めば、承諾したということになったという。この結納の日にシュウゲン（祝言）の日取りを決めることもある。

クチキキ（口利き）は、親類や親しい友人が年頃の若い衆や娘の縁談の話を持ってくることで、多くは見合いという形で村外からの嫁取りであった。またこのクチキキをしてくれた人が、仲人をしてくれることが多い。

カネオヤと仲人　縁談が成立すると、もらい方ではカネオヤと仲人に夫婦一組ずつ、くれ方では仲人に夫婦一組を正式に立てる。カネオヤとはオヤサン、オヤブンサン、オヤブン（親分）などと呼び、深良では結婚に際して仲人とは別に、親代りとなって夫婦のめんどうをみてくれる人である。これに対してカネオヤの方は、新婚夫婦をコブン（子分）とかコブンサンなどと呼ぶ。

カネオヤに頼む家は、深良でもブラクによって、イエによって様々であるが、たとえば原では特定の家がカネオヤになるということはなく、お互い入り交じってカネオヤ・カネコとなっていた。原では特別に裕福な家がなかったため、ムラ内の共同体意識を強めることに結びついていたのである。また町田の松井家や新田の小林家、南堀の大庭家のように、旧名主家や経済的に裕福な家に頼むところもある。町田の松井家では一五、六軒のカネオヤをしていた。カネオヤの家は代々決まっており、父親と同じ家の当主に頼む。カネオヤは、コブンの経済的な面倒をみてやれる財力のある家に頼むものだとする考え方も多い。また、シンセキのおもな衆、例えば本家筋に頼むという家もある。

カネオヤとの付き合いは、冠婚葬祭などの忙しい時、コブン達が手伝いに行くほか、田植えや田の草、稲刈りなどの仕事の手伝いをする。また逆にオヤサンが手伝ってくれることもあるようだ。カネオヤとの付き合いは一〇年くらいは盆、暮れ、正月のつけとどけをし、その後も一生続く。子どもが生まれたときや七五三のときにはカネオヤが祝儀をくれ、お祝いにはオヤサンも招く。

カネオヤとはカネツケオヤ（鉄漿つけ親）、つまりお歯黒をつけてくれる親のことで、結婚にはお祝いとして必ずカナダライ（金

盥）をくれたものだった。このほかに化粧品や反物などもくれるが、これらはオシュウゲン（お祝言）の日に床の間に置いてあった。

オヤサンの葬式のときには、コブンは互いに相談して花や提灯を買い、シンセキ並みのことをした。オヤサンが亡くなると、コドモだからといってお金やタオルケットのようなもので「ユズリ」をくれた。

仲人（媒酌人）は、夫婦にする世話をやく人で、カネオヤほどの深い付き合いはしない。七、八年間くらいはお歳暮、お中元を持っていく。仲人との付き合いは、子どもが七つになるまでというが、一生付き合う人もいる。仲人の方からは子どもができたお祝い、初節句、七つの祝いなどをくれる。

アシイレ　アシイレ（足入れ）とは深良の場合アシイレ婚ともいって、ホンシュウゲン（本祝言）前に仮にシュウゲンをあげて、もらい方の一員として家族と生活を共にすることである。つまり経済的に余裕のない場合はホンシュウゲンをあげず、アシイレだけでシュウゲンをすませ、婚姻を成立させてしまうのである。しかしアシイレの後、約半年でホンシュウゲンをあげる場合も少なくない。これは少しでも早く労働力を得たい、女手が欲しいというもらい方の事情もある。アシイレは嫁を試す期間でもある。

昭和一四年六月二九日に、御殿場市山之尻からアシイレした大正七年生まれの女性の場合、夫の両親は夫の幼い兄弟三人を曾祖母に預けて東京に働きに出ていた。ここにアシイレをした日から、嫁はこの小姑たちの世話をしなければならなかった。アシイレ婚は婿の兄弟、シンセキ、婿方の仲人が嫁を迎えに来る。嫁方は嫁、親一人、仲人一人の三人で婿方に行き、サカズキゴト（盃事）をする。メオトサカズキ（夫婦盃）、オヤコサカズキ（親子盃）の後、オモシンセキとのサカズキゴトをして宴会となる。近所のオンナシサン（女衆さん）が来て手伝ってくれ、宴会が終わると嫁がその人達にお茶を出して終わる。翌日は、近所の組内に挨拶回りをし、手拭いに嫁の名前を書いて持って行く。その翌日に、婿、両親がついて里帰りをするが、この日は泊まらずに帰ってきた。しばらくは実家と婚家とを、行ったり来たりの生活が続いたという。アシイレの期間に当時としては珍しく、京都、奈良へと新婚旅行へ行かせてもらった。宇治山田ではリンリキシャ（人力車）に乗ったのを覚えているという。

またアシイレの仮祝言だけだった人は、仲人さんが連れに来てくれ、婚家ではニワの隣のザシキ（座敷）でシュウゲンをやった。自分で織った絹のヨソユキの着物を着て、着物や箪笥などを持って行ったという。アシイレの翌翌日（三日目）は、オカアサンがついて実家に帰るが、またすぐ帰ってくる。家が近いので、里帰りしても泊まってもこれなかったし、近所の挨拶回りも、実家でも嫁ぎ先でも必要なかったのでしなかった。

嫁入り道具　婚礼の準備として、冬の農閑期に糸を染めて機織りをし、自分の着物を一通り拵えた。フトンカワも織ったものだった。嫁入り道具としては和箪笥、夜具、下駄箱、鏡台、整理箪笥などで、シュウゲンの一週間前くらいに運んでおく。着物は江戸褄、留袖、黒の紋付き、普段着などを揃えた。

2　祝言

ムコイリ　結婚式のことをオシュウゲン（お祝言）とよぶ。ま

ずムコイリ（婿入り）といって婿方が嫁の仲人のところに寄ってから、嫁の実家に来る。この時婿方からは婿、仲人一人、オモシンセキが親の父方から一人、母方から一人、タルカツギ（樽担ぎ）といわれるワカイシ（若い衆）が一人の計五人で来る。仲人宅でお昼を食べ、午後一時頃くれ方に来て、サカズキゴトをし、ちょっとしたオフルマイ（お振る舞い）をする。この宴会の間に婿の近所回りがある。一帖分の半紙を縦に折って水引をかけたものに「進上」と書いて、組内一軒一軒を嫁の仲人に連れられて回る。また宴会をやっている最中に、近所の子どもがノゾキに来て、干してあったつるし柿のうち下側のものを食べてしまったこともある。

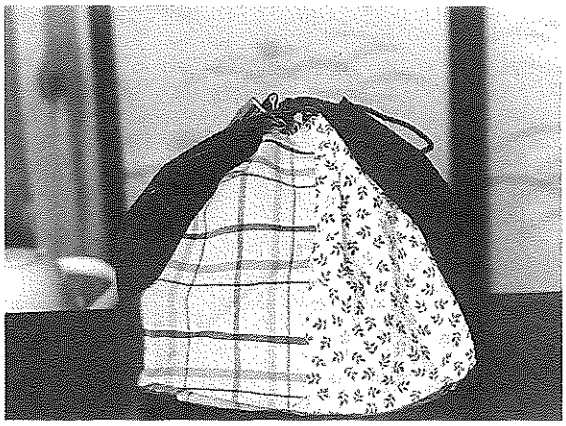
ムコイリの間にもらい方では、マエブルマイ（前振る舞い）と称して嫁方が到着する前に遠いシンセキや友達、近所の人達をよんでフルマイをしている。

嫁入り行列　ムコイリ後、婿方は嫁方より少し早めに出て家に戻る。婿方から五人来たときには嫁方からはそれよりも人数を多くして七人とかの行列にし、夕方近く実家を出発する。この行列には嫁のほか両親、仲人、シンセキ代表とシンセキの中から嫁の世話役としてオコシヅキ（お腰付き）が選ばれ、嫁についていく。オコシヅキはたいてい嫁の叔母に当たる人がなり、婚家で一晩過ごして帰ってくる。

まず嫁方は、婿の仲人さんの家に立ち寄り、お茶をもらう。ここへ婿方が迎えに来ている。また仲人の玄関口に一組の男の子と女の子が、弓張り提灯を持って迎えてくれることもある。その子ども達に連れられて、婚家へ向かったという。

婚家に来ると、玄関のところに提灯をつけて組の衆が待っている。そして花嫁が家に入るときは、門の両側で男の子と女の子とが弓張り提灯を持って待っている。嫁が門を入ると、男の子と女の子とが位置を入れ替わる。これは「門をしめる」という意味である。嫁はオオド（大戸）のコグリ（潜り）から入り、ヒロマ（広間）のザシキ（座敷）の入口にあたる所に座って嫁ぎ先の人達に挨拶をする。あるいは神様、仏様を拝んでから床の間のあるザシキに入り、席につくとまずお茶が出たという人もいる。

嫁入りのときコブクロ（小袋、子袋）にジュウカケ（重掛け）をかけたものを、お盆に載せて持ってくる。コブクロには、二〇〇グラムくらいのお茶を半紙に入れてひねったものが入れてある。コブクロは底は一升枡の底を測って作り（約二〇センチ四方）、深さが二二～二五センチくらいの巾着型で、表は絹、裏は木綿の布を縫い合わせて作り、ジュウカケには赤い絹のもみ（紅絹）に鶴や亀の刺繍をしてある。コブクロは祝儀、不祝儀のときに、お米を入れて持って行くのに使う。コブクロはほとんど嫁の母親の手作りで、「コブクロを持って行かないと、子どもがで



コブクロ

きない」、「子どもができるように（持っていく）」という。

サカズキゴト　オシュウゲンは夜行う。オショウバン（お相伴）という進行係がいて、披露宴まで司会をしてくれる。座のつき方は一般的には、床の間を背にして婿が右、嫁が左に座り、両側にカネオヤのオトウサン、オカアサンが座る。九人、一三人、一五人という奇数の人数で行う。男の子が雄蝶、女の子が雌蝶で夫婦のサカズキ、婿と嫁方の両親、嫁と婿方の両親、婿・嫁とそれぞれの仲人がサカズキを交わし、最後はシンセキにサカズキを回してもらう。婿は紋付き羽織、袴で、嫁は紋付きの裾模様の江戸褄、島田を結って角隠しをし、金銭的に余裕のある人は二度ほどヨソユキに着替えた。シュウゲンが終わると普段着に着替え、丸髷を結った。このシュウゲンの最中に近所の人達がノゾキに来て、障子に穴を空けていたったりする。

オフルマイ　ホンゼン（本膳）はこのままの座で宴会をやるが、婿は席を立って、客の相手をするので、飲めない婿は大変だったという。婿取りの家では足付き膳と二の膳で、鯛や海老などの尾頭付きなどの料理で、二本松の松富から料理人を呼んで作ってもらうこともあった。お膳を全部下げた後、着替えた嫁がひとりひとりにお茶を出しておしまいになる。宴会は夜が明ける午前四時頃まで続いた。

近所のオンナシ（女衆）が手伝ってくれているので、ホンゼンが終わってからオンナシのオフルマイ（お振る舞い）をする。このときは婚家の女衆と嫁が用意する。これも嫁がお茶を出しておしまいになる。また原では、シュウゲン二日目にモヨリの女衆だけを呼んで飲食する。その前に嫁の挨拶回りをすませておく。マエブルマイのうちにはすませるか、あるいは、三日目くらいにワカイシ（若い衆）のフルマイもする。通常、三日間は宴会が続いた。

オチツキボタモチ　シュウゲンの翌朝は、嫁が塩味のオチツキボタモチを作るところから始まる。近所の女衆が手伝って、餡と糯米を用意してくれるので、みんなが見ている前で嫁が最初の一個を作らされる。「ヨメッコが作ったからさあ作ろう」と言って、今度はみんなで作り始める。その日の朝は、まずお茶碗にボタモチを二個ずつ入れて、それをみんなが食べる。それから御飯になったりする。嫁入り道具もみんなに見られる。

カオミセ　ボタモチを食べた後、氏神様である赤子神社に挨拶に行き、シンセキ回りをした。またこの日はカオミセ（顔見せ）といって、嫁の近所回りもし、婿の仲人さんとか、近所のおばあさんとかがついて、手拭いか何かを持って回る。

ミツメ　祝言三日目に里帰りをするが、もらい方の親などがついて赤飯を持って行く。この日は泊まらずに帰ってくる。婿取りの場合は、婿、嫁、嫁方の仲人、嫁の両親の五人くらいで（五人になるようにする）行く。相手方の近所回りをし、名入りの手拭いを組の人達に配った。

新婚への泥投げ　明治四五年生まれの女性が以前年寄から聞いた話として、田植えの際にシュウゲンをあげたばかりの婿と嫁が泥を投げられたり、田の中にフンゴマレたりしたというものがある。

㈢　厄年と年祝い

厄年　厄年は数えで男が二五歳と四二歳、女が一九歳と三三歳で、ヤクオトシ（厄落とし）といってサイトヤキのときに、年の数

だけの菓子の袋を用意して撒く。前厄、後厄を合わせて三年間撒く人もいる。

女の厄年の一九歳のときには、ムラの四辻に一九銭を包んで置いてくるとか、櫛を捨ててくる。このとき決して振り向くなといわれた。それでひとつ年をとってくる。また三三歳の娘に、厄払いとして親がウロコ型の模様の帯をくれたともいう。

深良の和市では、厄年の人は豆撒きのとき、氏神の神明さんや三島大社へ行ってお祓をしてもらう。

年祝い　年祝いはほとんどしないが、内祝程度に子ども達が祝い物をくれる。とくに八八歳の米寿の祝いでは、赤い帽子やチャンチャンコを贈って祝う。和市の林一さんは明治三五年生まれだが、八八の祝いをオバアサン（妻）と一緒に祝ってもらったという。また御殿場線の橋渡しには、三代そろって渡ることができたという。

(四)　葬送と墓

1　臨終から葬式準備まで

死の予兆　カラスは神様の使いだといい、普通は「カアカア」と鳴くが、「ギャアギャア」と鳴くときには、何か不吉なことがあるという。カラス鳴きが悪いのが二、三日続いて誰かが死んだときには、「カラス鳴きが悪かったと思ったら」などといって話題になる。

北枕と枕団子　亡くなるとすぐに、死者を北向きに直して北枕にする。本人のヨソユキの着物を逆さにして体にかけ、魔除けとして鎌などの刃物を布団の下や死者の胸の上に置く。枕元には机を置き、マクラダンゴ（枕団子）と水とイッポンバナ（一本花）を供えた。マクラダンゴはすぐに作るもので、以前はどこの家でも寒の時に米の粉を作って常備してあったものだが、最近では精米屋に行って買ってきたり、御飯をすり鉢でつぶしたりして三個の団子を作る。あるいは近所のオテツダイの女衆が一合の米を水に冷かし、柔らかくなったらすり鉢でついて粉にし、団子を三個作って茹でて供える。また死者に供える花は一本で、普段はイッポンバナは縁起が悪いといって忌む。この後、オチャハン（お茶飯）か白い御飯を故人の飯茶碗に盛り、箸をたてて枕元に置く。オチャハンはお茶を煮立てた汁に塩あじをつけて米を炊くもので、何かというと必ず作る御飯だという。

シニミズ（死に水）は別れ水ともいって、息をひきとった直後に水に綿を湿しておいたものを用意し、シニミマイ（死に見舞い）といってお悔みにきた人達に死者の唇を湿してお別れをしてもらう。また神棚は、笹竹の枝を一本横にして上げたり、半紙を張ったりして隠し、だいたいヒャッカンチ(百か日)までそのままにしておく。

葬式組　組内から死者が出たときには、各戸一人ずつは必ず出て、葬式の手伝いをする。この組に関しては、深良の中でもブラクによって違うが、たとえば原の場合では、旧戸が二〇戸あるので、旧戸の中での葬式は全戸が手伝いに行き、新戸の手伝いは班単位となっていた。また震橋は、大正時代くらいまでは組内で手伝った。この組は江戸時代から続いているもので、五人くらいで一組、町田と入り交じって出来ていた。明治三〇年頃までは、町震（町田と震橋）で四七戸程度であった。現在では班（隣保班）、あるいは二～三班の単位で手伝い合っている。南堀では葬式組は昔は組で、現在は班単位である。

南堀では死者が出ると、まず最初に区長に告げ、区長から班長

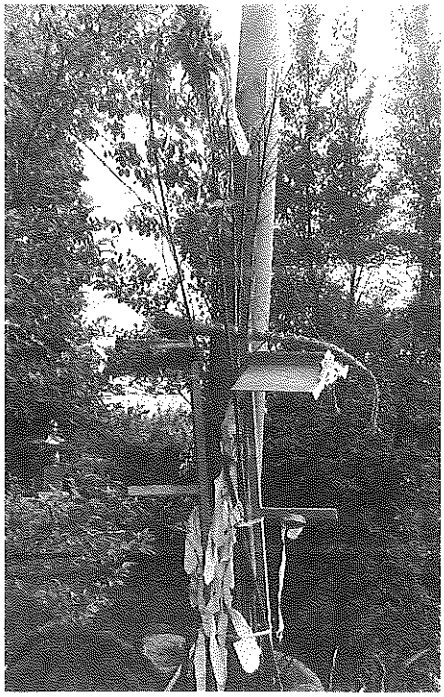
（組長）へ、班長から各戸へとフレ（触れ）が回る。これをタチヨリ（立ち寄り）という。そしてともかく亡くなった家に集まって来る。その場で年をくったシ（衆）、つまり経験が豊富な年寄が残っていろいろな段取りのてはずを整えるのである。

上原では、最初に組長に知らせ、組長から区長や各班長に連絡がいき、班長から個人へとイイツギをする。トブリャーグミ（弔い組）といって現在では五組あるが、かつては二組に分かれていた。このトブリャーグミから各戸夫婦一組が出てきて、トムライの準備をする。組長から「今夜○時から役割を決めるので出てきてくれ」という連絡がくるので、喪家に集まりその一間を借りて相談をする。

まず、組の男が二人一組で、死亡通知に行く。この通知者をヒトとよび、通知をして歩くことを「ヒトニアルク」という。家人に、どこへ通知に行けばよいかを聞き、沼津、御殿場辺りまで自転車で行く。誰もがヒトに行きたがったのは、その他の雑用をしなくてすむことと、御殿場方面へ行けばおもなシンセキは御馳走を出してくれるということからであった。その口上は、「○○さんの家から使いで来ましたけど、○○さんが○時に亡くなりました。明日の○時に葬式なので間に合うように来てください」などという。これは幾組も行ったが、昭和四○年頃から電話で知らせるようになった。現在でも寺や役場へは、必ず男二人で行っている。

具体的な手伝いとしては、死者の体をぬぐって清めるギョウズイ（行水）二名、アナホリ（穴掘り）二名、コシ（輿、棺のこと）を担ぐロクシャク四名などがいる。現在の葬儀の役割は、葬儀委員長一名、司会者一名、受付係三名、会計係一名、進行係二名、火葬場接待係四名、交通係四名、六尺係四名（後述）、立酒係二名（後述）、墓地係二名（かつてのアナホリ）、浜おり係二名（後述）、僧侶送迎係一名となっている（葬具屋が用意する役割表より）。

葬具の準備　トムライの朝、男は八時、女は七時三○分頃に喪家に集まり葬式の準備の手伝いをする。このとき香奠のほかカケゴメといって、コブクロ（嫁入りのとき持参したもの）に一升の米を入れて持っていく。その米は炊いて、手伝いに来てくれた人に食べてもらう。葬具や死装束は、現在では葬具屋がほとんど用意してくれるが、かつては組の人達による手作りであった。コウバナ（香花）を立てる筒二本、提灯二本、リュウ（竜）二本、ハタ（紙旗）四本、カリモン（仮門）二本の計一二本のモウソウダケを伐ってくる。また藁で、ロクシャクが履くアシナカ（足半草履）四足、リュウ（竜）とかジャタイ（蛇体）といわれるもの二体を編んで作る。さらに棺を縛る藁縄は、一一○尋の長さに編む。ハナダンゴ（花団子）の串や、八○歳以上の長寿者が亡くなったときに加わるハナカ



四十九日の後、納められた葬具（松寿院）

ゴ（花籠）二本などもモウソウダケを伐ってきて作る。

カリモンは、トンボグチといわれる玄関口に立てる竹の門である。二本の竹を両側に立て、上の笹葉を縒り合わせて門の形にする。その右横にサトヤとよばれる門牌を立てる。サトヤには、線香とコウバナ立てがつけてある。

ハナダンゴの串の数はブラクによって違い、南堀では二一本ずつ一対で計四二本である。これに、念仏のおばあさん達が、亡くなった日のうちに一升三合の米を水で冷やかし（浸しておき）、臼でこづいて粉にして作った団子を、一本あたり五個ずつ通したものを藁筒状のワラッポに差す。ハナダンゴとは別に三個余分に作り、サトヤの位牌にもそれを供える。また上原では、一本あたり五個ずつ団子を差したものを六本ずつ一対と、麩のようなせんべい六本ずつ一対と合計二四本用意するという。これは現在、家庭葬がすんで火葬に出てから本葬に間に合うように祭壇に供えておくという。これらの団子は、念仏が終わったあと、参会者が持って帰って焼いて食べる。

ハナカゴには、一〇円玉とか五円玉に赤い布や毛糸、現在では赤いビニールテープをつけて入れておくが、かつては財産家が行うくらいで普通の家では金を撒くようなことはしなかった。昔はコテンガイ（小天蓋）といって、屋根のような形のものを棺の上にさしかけて歩くものも作った。長寿者が亡くなったときには、このコテンガイに赤い布に細かく切り込みを入れたものを垂らす。この布をもらってくると長生きをするといって誰もが欲しがり、子ども達の着物の上げの糸のところにつけておいたものだった。かつてガンバコ（棺箱）も手作りで、これらの葬具を作る大工道具は各ブラクで所有していたが、現在では喪家のものを借りて作る。これは野辺送りまでにこしらえておく。

また現在は火葬場へ行くので、女衆がそこでの軽い食事の世話をしに行ったり、キチュウ（忌中）の際の食事の用意をする。

以前は葬式のとき、祭壇を作ったり、遺影を飾ったりはしなかった。それらは昭和四〇年頃に登場した。

アナホリとロクシャク　アナホリあるいはアナッポリ（穴掘り）はほとんどの場合、組で輪番制になっているが、身持ち（妊娠している）の妻がいる夫は遠慮する。葬式の朝、家人と共に墓地に行って、掘る場所を決めておく。穴を掘るときには、以前に埋めた場所が新しい墓でないように考慮するためである。だいたい六尺余り（一メートル八〇センチくらい）掘るが、崩れてしまうので、墓地にある不要になった塔婆を壁面に斜めに差して、土留めをしながら掘り下げる。また掘っていると以前に埋めた骨や酒瓶などが出てくるので、骨は一度掘り出して外気にさらし、掘った穴の底にもう一度埋め戻す。その上に新しいガン（棺）を埋けるのである。掘っているとかなり異臭がするので、「アナッポリ一升」といって、酒と昼飯を墓に持ってきてくれる。現在は火葬で、墓もカロウトになっているので楽になった。

ロクシャク（六尺）は、南堀ではコシアゲ（輿上げ）ともいって棺を担ぐ役で、本来は身内の者がやるが、いないときには血の濃い人、あるいはコブン（子分）やナコウドッコ（仲人子）のような死者と親しかった人がやる。また上原では、ロクシャクは土葬の頃にはコシアゲとアナホリの両方を兼ねていたが、現在では火葬になったためロクシャクの仕事は霊柩車に棺を運び入れるまでの仕事と

なった。この他に墓地係というのがいて、これが以前のアナホリに代わるものである。晒の布を一人六尺分ずつ切って分け、肩から掛けてガンバコを下げるときの補助するものとして使った。現在では使わないが、ロクシャクに晒を切って分ける習慣は残っている。

原では、穴掘り役のことをロクシャクといい、二〇戸のときには四人一組で交代制にしていた。組に分かれてからは、各組の中での交代制にした。火葬になってから、ロクシャクの仕事は火葬場までの棺の運搬になり、コツヒロイ（骨拾い）もした。

2　トムライの儀礼

現在は火葬となっているが、昭和四〇年代頃までは土葬であった。火葬と土葬ではトムライの儀礼が多少異なるが、本来は土葬であった名残が多く取り込まれた形をとっている。また、火葬になってからも当初は深良村の火葬場はコイジにあり、その後裾野市の火葬場に移った経緯から、トムライを二日がかりで行っていたものが一日に集約されている。ここでは、土葬の際のトムライのやり方を中心に、あわせてコイジのヤキバを使っていた頃の火葬を補足して記述することにする。

お通夜　トムライの前日、オツウヤ（お通夜）をする。僧侶の枕経の後、念仏講のおばあさんたちに念仏をあげてもらう。参会者の焼香が済むと、酒と豆腐が振る舞われる。この後、組の人達が残って、ノベオクリ（野辺送り）の行列の役割を決める。

湯灌　湯灌は身内が行う。現在は死者の体をアルコールで拭く。死装束はトムライの前日に、念仏に歩く年寄が、ヘラを使わず（印をつけずに）晒一反を四つに切って、腰位までの丈の袖無しのオイズリなどを縫う。残った布は布巾にして葬式の際に使い、縫った針とか糸は、年寄が持って帰る。現在では葬具屋が、全て用意してくれる。死者の子どもや妻がオイズリ・手甲・脚半をつけて旅支度をさせる。

納棺　トムライの朝、納棺をする。現在は棺はネセガン（寝棺）である。ズダブクロ（頭陀袋）を死者の首に掛け、灰、トウガラシ、コヌカ（小糠）、一銭銅貨六個の六文銭を入れる。現在では火葬なので、お金が焼け残ってしまうのを配慮して葬具屋がプリントした六文銭を入れる。葬具屋は土葬の頃にもあって、石脇辺りにいて道具一式買ってきた。タテカン（竪棺）にするか、ネカン（寝棺）にするかはお墓の広さによって決めた。

トムライ　葬式のことをトムライとかトブライといい、喪家の床の間のある部屋で行う。インキョ（隠居）の葬式もホンヤでやる。またトムライの朝、参会者は受付に香奠と米を出す。米は組内であれば一人五合（夫婦で手伝いに来るので、一戸につき一升となる）、シンセキは一升～三升くらい出す。

僧侶によって、読経のあと引導を渡される。このあと御詠歌となる。いよいよ出棺するというとき、施主の妻が湯飲み茶碗にお茶を入れて、棺の上に置く。このときのお茶は、家を出て別に家を構えていて亡くなった人のトムライをするときも、一度実家にもどって、棺をヨコザ（主人の座）に据えてから同様に進ぜるのである。お茶が置かれるとすぐ、ロクシャクがアシナカ（足半草履）を座敷の中から履いて棺を担ぎ、死者の頭を先にしてカリモンを潜って外に出る。棺が出るとすぐ、家の中の者がザルかメカゴのような物をころころ転がし、念仏のおばあさん達がほうきで掃き出す。

カリモンを出ると、ニワを左回りに三周回る。この最中に、タチザケ(発ち酒)といって役持ちの人達(葬列に加わる人達)と参会者全員に、一杯の酒と賽の目に切った豆腐が振る舞われる。現在では、缶ジュースなどを持ち帰ってもらうようにしている。この後葬列が家の門を出ると、ロクシャクは門の外に草履を脱ぎ捨ててしまうが、本来は埋葬して家に戻ってきたときにジョウグチに脱ぎ捨てる。

また南堀のうち興禅寺の檀家は、寺でトムライを行う。このときには、葬列が家を出ると家のカリモンをはずして先回りして寺にカリモンを持っていき、葬列が寺に着くと再び境内で三周回る。この時寺の門を入ると、僧侶が鐘を叩く。本堂で葬儀を済ませてから、寺の墓地に向かう。

野辺送り　喪家から墓までは葬列を組んで行くが、この道はブラクごと決まっている。参会者の服装は、施主やその家族、シンセキは男が紋付きの羽織、袴で、女が嫁入りのときの着物(現在では黒い喪服が多い)、組の人達は普段着である。

深良にはレイキュウシャ(霊柩車)といって、野辺送りの際、棺を入れてロクシャクが引っ張る車があった。ゴムの輪がついている人力車を改造したようなもので、一回いくらかで借りた。また車が入れないようなところは、輿のような台を担いで行った。

現在葬具屋が用意してくれる葬列順の表によれば、以下のようになる。1銘旗・2提灯(二人)・3花籠(二人)・4竜(二人)・5紙旗(四人)・6花・7施主花(二人)・8六導台(二人)・9棺服台(死者の妻など)・10香炉(施主の姉妹)・11野膳(死者の妻)・12写真(施主)・13位牌堂(施主の兄弟)・14霊柩(施主の兄弟)・15四化花台(死者の兄弟)・16墓日覆(一人)・17仮門(一人)。このうち8～16は身内が、その他の役割は組内が担う。また葬列では、死者の妻がノゼン(野膳)を持つこともある。このノゼンにはマクラダンゴと御飯に箸を立てたものと水が載っている。

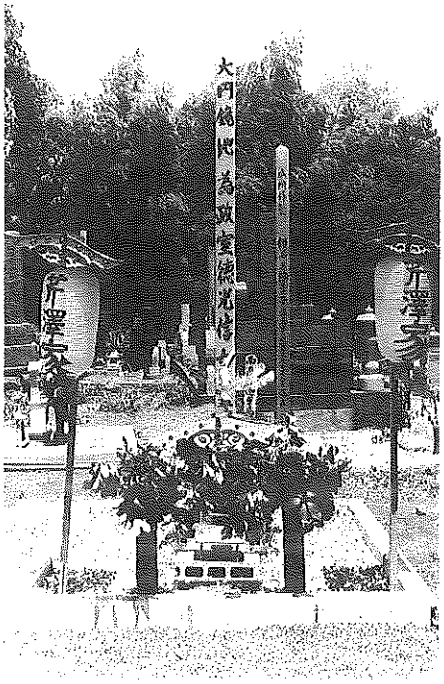
ハナカゴ(花籠)は、家のニワや寺の境内を回っているとき、墓までの道を歩いていて人が待っているジョウグチや辻にさしかかったときに振るが、突き上げるようにドサッドサッと落として籠からすぐこぼれてしまうので、袋にお金や紙に包んだ飴などの菓子を入れてすぐ後ろに付いていき、人がいるところでそれを撒くのである。人々は、長生きにあやかるように、「幸せがよいように(来るように)」と願って拾うという。

上原の場合、カリモン(仮門)は葬列の一番最後になっているが、家を出るとすぐ先回りをして墓地に行き、入口に立てておく。葬列はこのカリモンを潜って墓に至る。

切久保では、野辺送りの際念仏を唱えながら歩くという。

埋葬　縄を棺の上下につけ、ロクシャクの四人でそうっと穴に下ろした。まず主な身内がひとつかみの土をかけ、そのあとはアナホリが土をかけて埋める。やや高めに土を盛って、ヒヨケ(日覆)をし、位牌を真ん中に置いてカンプク(棺服)を置き、ノゼンを供え、線香を立てる。ヒヨケの後ろ側にクサカリガマを立て、年寄の墓には杖も差した。

なお文明寺の檀家の葬式では、ニワや境内で回るときに、シカバナ(四化花)が四隅に立ち、お骨が中心に立って、その他の葬列がお骨の周囲を回るという。シカバナは大役であり、棺の前後に二人ずつついて歩くのは、「ケタモノ(獣)がエラクテ(多くて)」埋葬してからも死体を掘り出してしまうので、それから守る役目があ



町田文明寺　ヒヨケをおいた新しい墓

るからだという。そのため、埋葬した後ヒヨケを被せると、その四隅にシカバナを立てておくという。

ハマオリ　埋葬が済むと、墓地から川原へ行きハマオリ（浜降り）をする。川の中に石を積み、その上に戒名を書いた白木の位牌を置き、団子を三個供えて蠟燭をあげ、土手では線香を焚いて豆腐や菓子を肴に酒を飲む。この後、野辺送りに参列した人が全員で、土手から石を投げて位牌を水に流す。これは早く海に行って、成仏するようにという意味である。この位牌は、葬式のときまでカリモンの脇にあったサトヤの門牌である。

葬式から帰ってくると、玄関先で水と塩で手を清める。

キチュウ　喪家に戻ってきて飲食をすることを、キチュウ（忌中）という。現在では公民館を使うことが多い。また墓まで行かない人もキチュウだけはして帰ってもらう（必ず飲食をして帰ってもらう）という。このときにはシンセキの人による挨拶がある。

上原では、二〇年くらい前まではキチュウは各家で行っていたが、現在では公民館で行う。オチャハン（お茶飯）、しらあえ、刺身、ざく煮、豆腐のつゆなどを出す。シンセキや友人など故人に縁のあった人達が集まる。キチュウをすることで、忌むことを終えて浄化されるという。またオチツキボタモチも、このとき食べる。葬式を終えた日の夕方には、念仏講の人達が念仏をあげてくれる。

深良村のヤキバ　コイジにあった火葬場を使っていた頃は、野辺の送りでヤキバに向かう。喪家から薪を一五把くらい牛車かリヤカーで運び、組の人達六～八人が交代で燃した。ヤキバの炉は、炎がガンバコ（棺箱）の上を回っていくような仕組みになっていた。夕方から夜中まで平均五～七時間かかるが、病人などは八～九時間かけても燃えないことがあった。このヤキバには待合室があり、そこのイロリに火を入れて、酒の澗をつけながら火の番をした。風のないときは、煙が滞って臭いので、酒を飲みながらでないとなかなかできなかったという。翌朝早く行って、炉の扉を開け、コツヒロイの前に骨を出しておく。家のおもな人が来て瓶にお骨を入れ、さらに箱に入れて晒の布で包んで首から下げ、墓とか家に持って行く。従って埋葬は、その家の都合によるという。なおハマオリやキチュウは、野辺送りの後引き続き行われるので、その間に火葬されているわけである。

火葬　土葬は、昭和四〇年頃までやっていたというブラクと、昭和二〇年代には火葬になったというブラクがあり、伝承では様々で火葬に移行していく時期に幅がある。ひとつには、伝染病による死者の火葬が当時多かったことが要因とも考えられる。もうひとつの理由として、各ブラクの共同墓地で行っていたノヤキ（野焼き）

が、やがて深良村全体の火葬場としてコイジ（コエジ）という現在の農道沿いの場所に統括されたという経緯もあげられる。ここでの火葬は、土葬の時代でも病気による死者があると組の人達が薪を持ち寄って焼いたという。

現在では、裾野市の火葬場で焼いているが、葬式の日は火葬場の都合もあるので、その時間までに僧侶に来てもらって読経してもらうという。その後、念仏講の人達にマクラネンブツ（枕念仏）をあげてもらい、火葬場へ行くのである。だいたいの時間の目安としては、1家庭葬　八時、2出棺　八時半、3火葬　九時、4告別式　一三時、5埋葬、6ハマオリ、7キチュウとなっている。トムライにあたるのが、告別式となる。埋葬の仕方も変わり、コツイレ（骨入れ）といって、穴掘りが全部行う。カロウトの蓋は閉めるが、目地はしない。これは家人が四十九日が過ぎてからやるためである。そして石塔にヒヨケをして、参列者にお参りをしてもらう。カロウト（石室）のある墓にするようになったのは、火葬になってからだという。

3　供養と先祖祭祀

墓参り　死後一週間は、墓にお参りに行き、提灯の明かりを灯し団子や線香を上げてくる。四十九日まで、毎日参る家もある。現在では、墓に建っている石灯籠に火を入れてくる。

オヤネンブツと位牌分け　親の供養は、オヤネンブツ（親念仏）を初七日から四十九日の間、七日ごとに故人の子どもがそれぞれ当番であげる。死後六日目の晩、つまり死んだ日から数えて七日目には、喪家（本家）で近所やシンセキの念仏講のおばあさん一〇人くらいに集まってもらい、ヒトナヌカ（ひと七日）の念仏をあげてもらう。念仏のおばあさん達は先に墓参りを済ませて来る。フタナノカ（ふた七日）、ミナノカ（み七日）と、ナナナノカ（なな七日）までの間には家を出た子ども、たいていは嫁に行った娘が、嫁ぎ先で組内の人に来てもらい、僧をよんで経をあげてもらったり、近所のおばあさん達にお念仏をあげてもらう。念仏をする人は一〇〇〇円を持ってきてくれ、家人がご馳走を出し、ヒトオリ持って行ってもらう。家を出た子どもには位牌分けはしないが、オヤネンブツのために檀那寺の住職に頼んで、白木に戒名を書いてもらって別に作り、念仏終了後、川に流すということは、一〇年くらい前までは行っていた。ただし位牌分けをすると、ホトケサンが迷うともいった。

また喪家でも、四十九日が終わるまで毎週念仏講に来てもらったこともあったというが、いつの頃からかヒトナノカでおしまいになった。喪家にはナナホントウバ（七本塔婆）といって、葬式の日に用意した七本の塔婆があり、念仏がすむと一本一本裏返していき、四十九日が終わると墓地へ納めるという。ただし上原では、ナナホントウバは昔はやらなかったという。

原では三十五日に、モヨリ中（二三戸）のテンダッテ（手伝って）もらった人を呼んで、念仏をあげてもらいお昼を食べる。このときはオチャハン（お茶飯）で、シキモノ（引き出物）をし、納骨をしたという。

四十九日　シジュウクニチ（四十九日）まではヤノネ（屋の棟）に魂がいるといい、寺へは四九個の餅を持っていって、お経をあげてもらう。これは早すぎても遅すぎてもいけない。四九日経たないと、ホトケサンになれない。早くやれば、ホトケサンがその餅

を頭の上にのっけている。この餅は新しいホトケサンが、ホトケサンの仲間入りをするときの土産になるという。これは籠に檜の葉を敷いて、餅を四九個載せ、その上にひとつ大きな餅を載せる。この後墓参りをし、オハギ、四十九日塔婆、果物などの供物を供え、火葬になってからはカロウトの蓋の目地をする。上原では、このときヒヨケをとってしまう。

ヒャッカンチ　ヒャッカンチ（百か日）には身内と子どもぐらいが集まって、やはりお念仏をあげてもらい、墓参りに行って、ヒヨケや位牌など葬式で使ったものを全部取り払い、燃やしてしまう。その後夜食を食べる。この時には、小判型の焼き饅頭五個を葬式饅頭として分ける。

この日までは忌中で、近所の人達との接触はなく、神事にも参加しなかった。参加できるようになるのは、ヒャッカンチが過ぎてからである。また忌中の期間を四十九日までとする家もあり、家を出た子どもにも忌がかかり、お宮さんの鳥居はくぐらない、神様には一切手をつけないという。逆に、ヒャッカンチが過ぎれば「ホトケサンの仲間入り」だといい、お宮さんにも入れるというわけである。

また、沼津の千本浜へハマオリに行ったこともかつてはあったが、現在ではほとんど聞かれない。彼岸には、日金山にも行くことがあったようだが、これも行く家とそうでない家があり、現在では全く聞かれない。

ニイボン　ニイボン（新盆）の念仏は、八月一日に順番を決めて回る。原では昼前にお念仏をあげてもらう。念仏講の新盆の家の回り方は、年のエライ人（年長者）から年の少ない人へといく。念仏は以下のようにあげる。

1香偈、2三宝礼、3懺悔文、4般若心経、5舎利礼、6舎利文、7念仏（西国三三、秩父三四、坂東三三）、8十句観音経、9薬師菩薩、10地蔵菩薩、11弘法大師、12光明真言、13十三仏、14善光寺御詠歌

年忌　イッスイキ（一周忌）から三、七、一三、二三（あるいは二五）、三三、五〇回忌まで行い、五〇回忌に五〇年のトリハラエとか「ホトケサンがトリバライ」といって、以後御先祖様として供養する。このときには、杉の木の細い所を切ってきて、上部に葉をつけたまま幹の皮を削り、そこに寺の住職に戒名を書いてもらった塔婆を墓に立ててくる。

また、墓の石塔は一年か二年で建てるが、三回忌とか五回忌のときに建てることもある。夫婦で一基くらいで、イエの分、ヒトの分に応じたものを建てるものである。

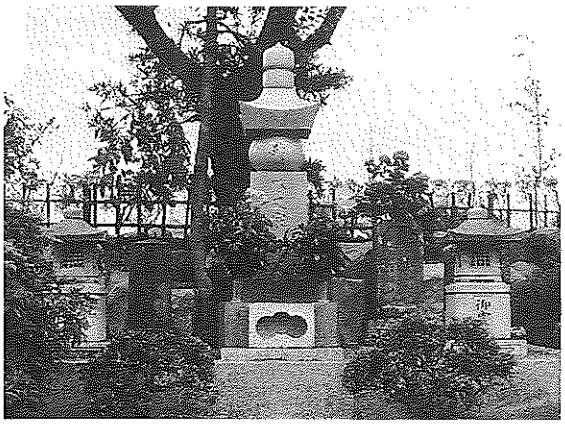
十三回忌と十七回忌の塔婆（文明寺墓地）

盆の送り　深良はもともと二四日盆（七月二四日）だったが、裾野市に合併したときに（昭和三一年九月三〇日）、八月一日盆に変えた。ホトケサンを送った後、つまり八月三日の朝各戸が川へ流しに行った後、南堀では念仏講のおばあさんたちが二か所の道祖神の前で念仏をあげ、お団子やお菓子を供える。上原や上丹でも同様に念仏をする。

原の地蔵　八月二三、二四日が祭日だが、このときの供物はその年に亡くなった初盆の家が供える。年が多く亡くなった人の場合は、オオモリモノといい大きなお供えを作ってあげる。年の少ない人の場合は、コモリモノといって、これは串に団子を差したものをあげる。オオモリモノは大きいときは五升、後には三升の二段重ねのお供え餅である。初盆のない年には、モヨリで作ったり、寄付したりする。かつては四十九日に、四九の餅を供えていたが、現在は菓子屋で買ってくる。

4　墓制

墓地　深良にある最も古い墓地は各家のヤシキ（屋敷）にあるもので、家屋が建っている土地に接していたり、それに近い田畑の中、あるいは所有している山のヘリにある。またヤシキ内に墓のある家は、財産家であったともいう。ところが、あまり人家の近くに埋めるのはよくない、ということで各ブラクごとに共同墓地を作った。各共同墓地には、伝染病などで亡くなった人を焼く火葬場があったという。



ヤシキ墓

天田上　須釜では、明治二二年にシンバカ（新墓）を作った。それまではヤシキ（屋敷）に墓があった。最近の新しい墓は火葬になったので、カロウト（石室）のあるものにしている。

原では、共同墓地のことをシンバカ（新墓）とよんでいる。シンバカを使っている家は、もとから原に住んでいる人達であり、現在の組分けのうち一組と六組と七組の一部の人達がそうである。七組の人達は、須釜の人達との共同墓地を使っている。なお、二～五組の人達は新戸なので、墓はお寺にある。高橋花ゑ家の墓はオハカといわれる旧墓地があり、一時山の神さんの下辺りの当家の所有地の墓地に移したが、現在はまた旧墓地に埋葬している。そこには大正時代に、花ゑさんのヒネのおばあさんを埋けたという。

上原では、昔は墓はヤシキの中にあった。そして明治の初めに政府の命令で、墓を集めて作ったのが旧墓地である。山神社の隣の墓地は、戦後になって人が増えてきたので、新しく墓地を作って個々に区画した。この墓地の隣には、新田の共同墓地がある。

天田下　震橋の昔の七軒は、それぞれヤシキのコバ（端）に墓地があった。大正の初めまでは、山の共有地で火葬して、ヤシキの墓に埋めた。大正五、六年頃から、それぞれの家の檀那寺（震橋の場合、町田の松寿院・文明寺、南堀の興禅寺）に新墓地を設けた。

南堀のテラヤマ（興禅寺旧墓地）には、興禅寺の檀家だけではな

く、天田下の人達の墓が多い。もっと以前は自分が住んでいるヤシキや、元住んでいたモトヤシキといって現在は田畑になっているところに墓があった。そこには稲荷が祀ってあったり、椎の木が植わってあったりする。テラヤマの旧墓地も明治の末期に新たに区画整理をして広げ（明治三〇年の墓石がある）、「先祖代々の墓」を建てて、明治以降の墓石は前に並べて整理した。それ以前の墓は、同じテラヤマの元の場所にまとまってある。南堀の野際栄一家の墓は、文明寺に寛永期の墓があったが、昭和四五年頃に興禅寺の墓をそちらに移した。墓を一つにしたのは、何箇所もあると掃除が大変だからである。文明寺の檀家は、南堀では三戸だけである。

テラヤマの新墓地（南堀）

水子の墓　名前をつける前に子どもが死んでしまったときには、ほとんどの場合、親が墓地に行って埋けてしまい、葬式はしなかった。

第五節　元小学校教員が見た大正・昭和時代の深良

1　ライフヒストリー

須山から深良へ　藤森進さんは、一九〇四（明治三七）年一〇月二五日に、須山村馬場（現裾野市須山）の渡辺家（現戸主和敏氏）で生まれた。一二人兄弟の四男であった。須山尋常高等小学校を卒業してから、御殿場にあった教員養成所に行き、一九歳で卒業した。須山小学校で教鞭をとっていたが、二一歳のときに深良村上原の藤森家と養子縁組をした。その経緯というのは、当時深良村の助役をしていた武井忠作が仲立ちをし、学校の転勤は深良村村長の松井謙保が郡役所に掛け合って、藤森家のまつ子さんの婿となった。シュウゲンは一九二四（大正一三）年四月のことで、学校の転勤は五月になった。

しかしまつ子さんも実は養女で、神奈川県横須賀の入山津の生まれで、両親を早くに亡くした人だった。その家の跡取り娘だったのを廃して、祖父である当時泉村村長の芹沢倉次郎に一時預けられていたが、武井助役の尽力で藤森周作を仲人親に頼み、子どものない藤森吉蔵、かつ夫婦の養女となった。まつ子さんが二歳頃のときだった。

進さんは当初深良小学校に勤めたが、そのときの校長は大庭寛であった。一九三〇（昭和五）年、進さんが二六歳のとき富士岡小学校の中山本校へと転出した。そのときの富士岡小学校長が、かつて須山小学校長をしていた御宿秀実であった。しかし中山の本校は現在の御殿場市中山で、御殿場線を使って通勤するので大変であっ

た。そこで義理の祖父である泉村村長から富士岡村村長の勝又公胤を介して富士岡小学校長に働き掛けてもらい、深良に隣接している神山分教場に移ることが出来た。そのため通勤は自転車で通うことが出来た。しかしこの頃小学校一年生の教科書が変わり、「ハタ」「コマ」と単語だけの内容から、「サイタ　サイタ」という文章のある内容になったため、富士岡小学校長から「中山の本校に来て教えて欲しい」と言われ、再度本校に移った。こういうことが二度ほどあった。分教場時代に、訓導の資格をとった。一九五五（昭和三〇）年、五〇歳で退職したときは富士岡小学校神山分教場にいた。

夜学で教える　深良小学校時代から昼間小学校で教鞭をとる傍ら、夜学でも教えていた。青年学校ともいっていたが、太平洋戦争中は青年訓練所となり、深良も富士岡の本校も神山も学校の校舎を借りてやった。訓練所は普通科と教練があり、深良では主任は軍曹や曹長が、助手は除隊した上等兵が、富士岡では主任は曹長がやっていた。進さんは普通科で、小学校を出た後の補充の勉強を教えていた。生徒は、小学校、高等小学校、または実業学校を卒業している兵役検査前の青年で、毎日午後七時から九時までの授業であった。女子青年は、昼間裁縫の先生のところに裁縫を習いに行く程度だった。

村会議員は損会議員　教員を辞めた理由は、ひとつには家業であった農業を兼業するのがたいへんだったためだが、それよりも昭和二〇年前後、教員を務めながらいろいろな役を任されるようになったためでもある。終戦後四民平等となり、モヨリで推されて県の資格検査を受け、許可されて戦後最初の村会議員を一期務めた。当時深良村の村会議員の定員は一六名で、任期は四年であった。しかし教育委員会法が昭和二三年に成立し、教員が教育委員会の管轄となったため、富士岡小学校の教員を務めながら深良村の村会議員をすることは、教育公務員特例法の政治行為の制限があって一期で辞めた。またこの他にも深良学務委員や中学校建設委員、深良ＰＴＡ創立委員、選挙管理委員などや副区長も頼まれてやった。村会議員は損会議員で、こういう役をやっても交通費ぐらいしか出ないので、ほとんど手弁当でやったものだという。

退職後は、小学校・中学校ＰＴＡ会長や国民年金会長・県東部会計監査委員、福祉関係では民生委員総務（県理事を兼任）、手をつなぐ親の会の東部副会長・県常任委員など多くを歴任して、昭和五五年には厚生大臣園田直の表彰も受けた。上原区長のときには深良区長会長もやり、有線放送の敷設にも尽力した。小林秀也からは「助役になれ」と言われたが、それは断った。進さんはこれらの役職を自ら「捨て役」と言っている。しかし、福祉に尽力したことが実って、民生委員の次に任された手をつなぐ親の会会長のとき身障者の小規模授産所の建設をし、平成三年には一〇周年を迎えることができた。金儲けのためではなく生活のために作った施設として、現在でもその家族を含めて喜んで利用されており、引退したあとも進さんを慕って自宅を訪れる人が絶えない。

まもなく九〇の祝い　藤森家は西安寺の檀家であるが、進さんはその檀家総代を二七、八年間続けてやってきた。浄土宗の東駿部会の檀信徒の副会長でもあり、監査委員も兼ねていた。西安寺の護持会の会長でもあったが、平成三年でこれらの役も下りた。

子供は二四歳のとき長男が生まれ、三男四女に恵まれた。長男は分家して同じ上原におり、次男が後を継いで、沼津市岡宮から嫁を

もらった。三男は富士市に住んでいる。長女は神奈川県横須賀市、次女は市内の久根、三女は田方郡戸田村、四女は韮山町原木へと嫁いだ。金婚式も無事済んだが、妻のまつ子さんは昭和五六年、七四歳で亡くなった。平成四年二月現在、内孫三人でひとりは結婚し、子どもが二人いる。進さんにとっては曾孫にあたるわけだが、孫の総数は一五人、曾孫は三人である。

2　須山と深良の生活

深良の生活　須山で生まれて青年期までを過ごした進さんは、深良での生活の違いをいろいろな面で経験した。相対的に見て、山村で水田のない須山の方が深良よりも生活が楽であるという。須山は水の田の米は食べられないけれども自作農であるのに比べて、深良は大地主がほとんどの土地を所有していたので小作農が多く、一反で八俵取れる田では半分以上（半分のことをオリという）を小作料にとられる分暮らしは悪く、皆食うに困っていたのである。「一年中食いつなげるようなのは、家の持ち分があって（自作の田を所有していて）、足し前を小作する」といい、「そうでないようなのは、一年中食えない」のである。昭和三年の不況のときには、寒中に学校へ足袋だけで登校した子がいた。これは着物に羽織、下駄か藁草履の時代のことである。

須山での食べ物　食生活にしぼって深良と須山を比べてみると、基本的に主食の違いがある。まず須山では、米がとれないので主食はトウモロコシなどの雑穀で、それも粉に挽き割って麦などに混ぜて炊いて食べた。またキリコミといって、うどんや藁麦のような麺類を短く切って、茹でずに汁の中に入れて煮込み、どろどろとしたつゆになったものを食べた。トウモロコシの粉を練って囲炉裏の熱灰で焙り、大きく熱い団子を作って醤油をつけて食べた。同様に、トウモロコシの粉を団子にして茹で、鉄灸で焼いたものはオヤキといった。その他の食べ物といえば、サツマ（サツマイモ）とイモ（サトイモ）であった。サツマは、相模の山北で作った苗を買ってきて植えた。須山には馬力がいて、須山から木炭やモロコシを持っていき、御殿場で米に変えたものだった。またツキヤ（搗き屋）がなかったので、御殿場で陸稲を精米したり、富岡で製粉したりした。

しかしサツマは、深良のほうがおいしく、ホクル（ほくほくする）という。深良では、クラという温床で苗を作り、箱根山の開墾畑に植えた。三島甘薯といって、おいしいことで有名である。また魚もサバや塩鱒、イルカの味噌煮などを食べた。粉食では藁麦が多いが、小麦を挽いた粉を湯で練って団子にし、囲炉裏の灰の中に入れて焙って食べたりもした。

飲み水の苦労　飲料水では、深良より須山のほうがずっと苦労した。須山は富士山と愛鷹山の狭間にあって火山の砂礫層の上に位置しているため、山の村でありながら水はすべて地下にしみこんで伏流水となってしまうのである。須山は大きく分けて、上村と田向村の二つの集落に分かれている。田向にはそれでも愛鷹山の水源から引く飲み水があるが、進さんの生まれた馬場は上村にあって、富士山山麓の水ヶ塚という水源から土管を繋いで飲み水を確保しなければならなかった。村の近くまで土管で引いてきて、分水をするときには真竹でミズミチを作った。冬になると、凍って水がこなくなる。水不足がひどいときには、一か所のミズタメに溜めて各家から

汲みに行った。また田向まで、水をもらいに行ったこともある。風呂は幾晩でも同じ水で沸かしたので、垢がいっぱい浮いていて、湯に入って出るときには体を振るって垢がつかないようにして出た。同じ上村の久保には共同井戸があったが、水量が減ると桶を上向きにして汲もうとしても水が入らないので、横向きにして水を汲んだものだった。須山でも最も水が少ない十里木では、頼朝の井戸という一四戸の共同井戸しかなく、旅館に泊まったときには男衆が毎朝霜柱を踏んで井戸に汲みに行っていたのを覚えている。この井戸はいくら汲んでも涸れることはないという。

その点、深良は昔から水の心配は全くない。深良隧道（用水）は水田だけでなく、生活用水としても利用した。どこの家も、川が前を通るようにしてある。しかし、この川の水を使って赤痢が流行ったこともあり、そのときにはかなりの人が死んだ。それで当時村長であった小林聿が水道を引いた。これがこの辺りで、水道を引いた初めとなった。

3　教員時代の経験

学校での思い出　富士岡小学校の中では神山が、教育熱心だった。沼津中学校（現沼津東高校）へは、ほとんど神山校から行った。神山からは鉄道の駅がなかったので、歩いて裾野駅まで行き、そこから列車に乗って通った。佐野実業学校を出ている者は、相当優秀であった。

昔の生徒は、素直で叱る必要もなかったので、殴ることがなかった。出来の悪いのは、放課後残した。学校を卒業したら、せめて手紙を書けるか、出せるか、回覧板を読めるかくらいは出来るようにさせたい、と思っていた。残り勉強をさせていたら、他の子も残りたがって困ったこともある。残した子どもが帰るときには、頭をなでて「きょうはよくやった。家へ帰ってこれだけやって来い」とほめて帰した。当時は残しても親は悪く言わなかったし、言ってきても説明すれば納得してくれた。

子ども達の昼食は、家に食べに帰る子が多かった。弁当のときにはムギメシ（白米に混ぜる）か、サツマベントウを持って来るので、大勢で食べるとみっともない（恥ずかしい）から米の多い部分を弁当に詰めて持って来た。おかずは梅干しとコウコ（新香）くらいで、金持ちの子が鯖や塩鱒などの魚を入れてきた。

神代杉のこと　この辺り一帯からは、土地の人がジンダイとよぶ神代杉が出た。ジンダイは何千年か前の埋もれ木で、「神代屋」という元締めまでいて、掘った木を売買する商売を上原の通称クマサンと呼ばれた室伏熊次郎がやっていた。ジンダイは深良コミュニティセンター近くの武井喜征家の屋敷内、二丈（五メートルくらい）の深さから一〇本くらい出た。その穴を埋め立てて、現在の家を建てた。また南堀の公益道路からも一本出たし、藤森家の屋敷でも出たらしく、現在の井戸は神代杉を掘っていて出たものである。

天田橋から下は地質が岩盤で、井戸を掘ることができないが、天田上は埋もれ木があり、その下が岩盤になっているようである。ジンダイを掘るときにはまず鉄の棒でつつき、岩盤か木かを判断する。木があれば、サイマという穴を一定間隔で開け、稲藁一本を二つ折りにしたものを差し込み、埋もれ木の大きさを計った。

普通の木立の単位は一尺四方であるが、神代杉の場合は一サイといって、一寸四方が単位で取引された。それほど価値のあるものな

ので、一時は景気が良かったし、他に現金収入を得るところはなかった。須山でも神代杉はたくさん出たが、質はあまりいいものではない。

移民のこと　深良から南米のチリやメキシコ辺りへ行った人もあったというが、戦争が始まってしまったこともあって、あまり成功しなかったらしい。進さんの目を通して見たかつての深良は、あまり豊かなものではなかったようである。それは小学生の弁当の中身にも象徴されるものであった。そういう人達が一攫千金を夢見て、神代杉を掘ったり、海を渡って他国で商売を試みたりしたのである。深良で教員をし、多くの役職を歴任した進さんは、「いつも他人に決められた」人生を歩んできたという。しかし、そういう「捨て役」をしてくれる人が深良には必要であったのである。

（杉　村　　斉）
（松　田　香代子）
（岩　﨑　信　夫）

第四章　信　仰

第一節　神社と小祠

(一)　氏　神

氏神と氏子総代　深良地区には、岩波も含めて現在五社の氏神がまつられている。それは、

深良神社　町震、南堀、和市、切久保、遠道原の氏神
赤子神社　上原、新田の氏神
神明神社　上丹の氏神
駒形神社　原、須釜の氏神
駒形八幡宮　岩波の氏神

である。

氏子総代は、深良神社に六名（町震から二名、南堀と和市から二名、切久保と遠道原から二名）、赤子神社に四名（上原から二名、新田から二名）、神明神社に三名、駒形神社に四名（原から二名、須釜から二名）、駒形八幡宮に四名がそれぞれ選出されている。任期はだいたい三年で、三年もしくは六年を単位として交代する。そしてさらにその中からこの深良地区五社の総代として神社総代会深良分会長が一名選出されている。現在は深良神社の総代の一人である町震の大庭満氏がつとめている。大庭氏の前任者は赤子神社の総代であった人がつとめていたが、とくにまわりもちというようなきまりはない。

当番区　神社のことを世話する当番を当番区といい、たとえば深良神社の場合、町震、南堀と和市、切久保と遠道原の三区にわけて一年ずつ交代で担当している。

深良神社の祭礼は、次のとおりである。

一月一日　歳旦祭（初詣）　二月二五日　祈年祭
七月一六日　月次祭　九月一日　吉田神社の祭り
一〇月一六日　例大祭（秋祭り）
一一月二三日　新穀感謝祭　一二月二五日　大祓祭（大掃除）

町震、南堀と和市、切久保と遠道原の三つの当番区が交替で三年に一回担当する。当番区の仕事は次のとおりである。

一月一日の歳旦祭　鏡餅のお供えを二重ねと赤飯二升と御神酒一升を用意する。前夜の一二時から準備にはいる。元旦の午前七時から祭典がはじまり、神主の伊藤さんが祝詞をあげ、祭典が終わると氏子総代六人と区長、神主と当番区の人たちで直会をする。

二月二五日の祈年祭　餅のお供えを二重ねと赤飯一升と御神酒一升を用意する。

七月一六日の月次祭　餅のお供えを二重ねと赤飯一升と御神酒一升を用意する。

九月一日の吉田神社の祭り　赤飯一升を用意する。

一〇月一六日の例大祭　餅のお供え四重ねと赤飯二升と御神酒一升を用意する。戦前は花火をあげ旅芝居の一座を呼んだり、映画や青年相撲をやったりしてにぎやかだったという。現在は、子供みこしが当番の地区をまわっている。

一二月二五日の大祓祭　大掃除をし、古いお札を焼く。

吉田神社の祭礼　九月一日の吉田神社のまつりというのは、明治のはじめころから行われるようになり、今日にいたっているものである。明治のはじめ伝染病がはやったとき、京都の吉田神社へ行って分霊を勧請してまつった祠を、天田上と下とで一年交代でうけ渡しをするものである。天田上では上丹の神明神社に、天田下では町田の深良神社にそれぞれ納める。運ぶのは祠つまり内宮で両神社にはそれを入れる外宮がある。午後三時ころにはじめる。太鼓をたたく人、奉納吉田神社と書かれた七本の旗をかつぐ人、祠をかつぐ人と数十人の人で深良神社と神明神社の間を年ごとに移動する。

祠のみこしは総けやき造りで重いもので、大人一〇人でかついでも重く感じられるという。むかしは六時間も七時間もかかり、途中、庭へ招いて酒や茶などでもてなす家もあった。昭和四〇年ころからはトラックに積んで運ぶようになり、三〇分くらいで着くようになった。今ではその途中、深良支所で送る側と迎える側とが中継式を行い、ひと休みしてから出発する。なお、途中で集まった祝儀もここで引き渡される。おでましの式とおむかえの式とでそれぞれ神主の祝詞があげられる。

神社合祀　深良神社には天田下に散在していた神社を明治のころすべて集めて合祀したという。もともとこの地には神明社があり、そこへ八幡宮と浅間社と天神宮とを合祀したと言い伝えており、境内の石碑にもその旨が記されている。碑文によると、明治三九年の政府からの神社合祀の指示により、明治四三年にこれを実施し、大正二年に完了して深良神社と名づけたと記している。

赤子神社の祭礼　赤子神社の祭礼は、上原と新田とで一年交代で担当する。たとえば上原が当番の場合、上原の中の五つの組から一人ずつ祭典委員が出て、だしものや費用などについて相談する。

祭りは、一月一〇日、八月一〇日、一〇月一〇日の三回あり、このうち一〇月一〇日のものを大祭と呼んだ。神主を呼ぶのもこのときだけである。現在ではこの一〇月一〇日の祭りだけを行うようになっている。二〇年くらい前からそうなった。

二〇年くらい前までは、区が神社費として、一戸あたり年間一〇円～一〇〇円くらい集め、区長を中心としてその使いみちを決めていた。祭典委員というのはいなかった。現在では、祭典費として一戸あたり一〇〇〇円ずつ集め、祭典委員がその使いみちを決め、花火や子供の金魚すくい、わたあめなどの代金にあてられる。

むかしは、子供相撲、芝居、映画、ソフトボール大会、花火などをした。今はテレビなど娯楽も多いためか、花火大会を行う程度である。子供みこしは一〇年以上前から行われている。いちばん先にはじめたのは上原で、新田がそれに続き、最近では上原団地も行うようになった。家々をまわりお賽銭をもらう。

この赤子神社についての言い伝えによると、むかし、毎夜、この地に光が出て、道行く人が不思議に思って近づいてみると、神さまの像が二体ほどみつかったという。永禄年中に甲斐の武田信玄が攻めてきたときに、その御神体がなくなったが、安永六年に再びみつかったという。赤子神社の神さまは、手力雄命と高照先姫命という男女二体の神さまで、一社に二体というのはめずらしいそうだが、力が強く、良い子供を育てようということらしいという。

神明社の祭礼　神明神社の祭礼は、上丹だけで一月一六日に大祭を行っている。神主の伊藤氏が来て祝詞をあげる。一戸に一人ずつ出て、お宮世話人がかざりものをする。米、塩、野菜、スルメ、

昆布などを供え、また、つまみをこしらえて御神酒を飲んで直会をする。

駒形神社の祭礼　駒形神社は、原と須釜の氏神で、一〇月一〇日が大祭である。神主の伊藤氏が来て、祝詞をあげてくれる。むかしは、芝居や映画が催されてにぎわったという。境内の石灯籠に、「奉納　正八幡宮、須釜　原　若者中　天明六丙午三月吉日」の銘文がみられる。

次に、氏神以外の神さまについてみてみよう。

(二)　山の神その他の小祠

町田の山の神　松寿院の南方にまつられている。一月一七日と七月一七日、一〇月一七日とが祭日で午後一時より山海の珍味をもってまいり、あとでさげてみんなで食べる。組ごとに順番に当番になる。新しく引っ越してきた人も組に加わる。このようなものには、金比羅さま、山の神、高雄山がある。むかしはみんなが参加するものだったが、今は暇な人だけが行く。山の神の祠を掃除し、酒や菓子を用意して行く。むかしは当番がにんじんやごぼう、里芋などの煮物を用意していたが最近は簡単なものになった。

南堀の山の神　南堀三九四四―八の奥を入ったところにある。一月一七日、二月一七日、一〇月一七日におまつりが行われる。山をもつ人たちでまつっている。現在、南堀で山をもつ人は二七人で順番で当番をつとめる。当番の仕事は、御神酒や料理の準備である。山の世話人も委員長一人、副委員長一人、書記一人が選ばれており、山道の維持、管理、清掃、工事などにあたっている。

上原の山の神　上原、切久保、遠道原でまつっている。この山の神はもともと志村守雄氏の家のものであったという。志村正夫氏の家が代々のカギトリをつとめている。世話人は世襲の志村正夫氏のほか、各地区から出て計七名いる。まつりは一月一七日と一〇月一七日で、献立は志村正夫家で用意する。御神酒、野菜、魚、水などである。

和市の山の神　観音堂東北の方向にある。祭りは、一月一七日・七月一七日・一〇月一七日の年三回行われ、当日は祠の掃除をして参拝し、用意してきた酒や菓子などで直会を行う。

新田の山の神　深良川と黄瀬川の合流する南方にあり、一月一七日が祭日である。祠を掃除し、参拝をしてから直会を行う。

原の山の神　原地蔵尊の南側にある。祭りは、一月一七日・一〇月一七日に行われ、祠の掃除と参拝のあと直会を行っている。

秋葉神社　原にある。原、須釜、上丹、上原、新田でいっしょにまつっている。

高雄山　切久保にある。組で順番に当番をして酒やつまみなど供えものをあげる。

耳石神社　新田にあり、祭典は一〇月一五日である。当日は神主に祝詞をあげてもらい、その後で直会を行う。

八幡宮　南堀にあり、祭典は九月一五日である。南堀の氏子が二組ずつ当番となり、前日に掃除をすませ、当日は午後一時から祭典が行われる。終戦直後まで映画や相撲をやったが、最近はモヨリの役員たちが模擬店を出している。

第二節　寺院と堂

深良にある寺には次のようなものがある。

町田の曹洞宗文明寺、町田の浄土宗松寿院、南堀の曹洞宗興禅寺切久保の浄土宗西安寺である。このうち文明寺は興禅寺の隠居寺であるという。檀家は深良全体にわかれている。地区ごとにまとまって一ケ寺の檀家だけで占めるということはない。

松寿院　浄土宗　年中行事としては次のようなものがある。

一月一日　修正会　　一月二五日　御忌会
二月一〇日　涅槃会　　三月春分の日　彼岸会
五月五日　花祭り　　八月二日　施餓鬼会
八月二四日　地蔵会・浄焚式
九月秋分の日　彼岸会　　一一月二三日　十夜法要

松寿院の延命子育地蔵尊

八月二四日の地蔵会がにぎわう。この日が縁日で二時ころから子育地蔵の前で念仏があげられる。大勢の人たちが集まり、浄焚式つまりおたきあげも行われ、献灯やそうめん流しなどが夕方から行われる。戦前には子供相撲もやっていたという。むかしは、子供の死亡率も高く子育てに苦労したので、そのためにつくられた地蔵だという。また夭死した子供の守り本尊でもあるという。

興禅寺　曹洞宗　南堀の人は興禅寺の檀家が多いが、松寿院、文明寺、西安寺の檀家もある。檀家は三〇〇～四〇〇戸くらいある。神山にあった寺や岩波の尾尻の寺などがつぶれて興禅寺の檀家となったのでふえたという。年に一度、施餓鬼が行われる。以前は四月の第二日曜日あたりに行ったが、現在は四月一〇日に行う。檀家がいくらかのお金を持ち寄る。和尚さんがお経を読み寺から寿司、菓子などが用意される。二〇年くらい前までは酒が出された。また、現在家によって戒名のランク付けがなされているが、それはもともと、戦時中のころ寺にお金が集まらなくなり、これではつぶれてしまうと心配した寺と檀家の人たちとで、葬式や盆、暮れ、正月にはつけとどけとして、いくらか払うことに決めてからのことだという。三回つけとどけを出さないと、戒名のランクを下げることとしたという。

原の地蔵さま　高橋花ゑ氏の家の近くの小高い丘の上にある。八月二四日がおまつりの日である。二三日の晩に年寄りが寄ってごはんを供えて念仏をあげ、お地蔵さんの御詠歌を唱える。男衆が出て掃除をし、ゴザを敷いて用意をする。むかしは各組の世話人が一晩泊まった。世話人は組内で交代する。二四日には相撲をする。むかしは大人相撲でいまは子供相撲をする。近所の相撲ずきな人が集

まってやった。むかしは花火をしたり踊りをやったり歌ったり、出店が出たりしてにぎやかだったという。お地蔵さんは子供の神さんだとか、相撲が大好きだという。相撲以外の余興をしたらだめだという。むかし一度相撲をやめて映画をやったら流行病がはやったことがあるという。

子供が病気になったらお地蔵さんにまいるとよいという。なおれば、八月二三日の晩にお金でおはたしをする。新仏のある家では、お地蔵さんの祭りのとき大きなお供えをあげる。新仏のうち、年の多い人の方はオオモリモノ(大盛り物)といって餅のお供えをあげ、年の少ない人はコモリモノ(小盛り物)といって串に団子をさしたものをあげる。新仏のない年はもよりの家々で作ってあげる。むかしは五升の餅をあげていたのがのちには三升になった。五年くらい前から菓子屋さんで作ってもらったりお金で出すようになった。

第三節　講その他

地区ごとに各種の講がつくられている。

町田　念仏講、万神講、淡島講、秋葉講、天神講がある。万神講は戦前まであった。

念仏講　現在一四名で、月に一回、月並講として町震コミュニティーセンターに集まって念仏をあげている。かつては家ごとにヤドをしてまわっていた。オヤカタは大庭松枝氏が選ばれている。

十三仏さん　戦死者の名前を書いたものと、お標語の掛け軸をかけて念仏をあげる。午後二時ころから一時間くらい念仏をあげてお茶菓子を食べてから解散する。四時ころには帰る。お茶菓子の費用は、おてんとうさん念仏のときに気持ちのある人が寄付したお金をためておくなどしてそれを使う。月並みの念仏は町田の上と下と一緒に一四名でやるが、法事の念仏は上と下とは別々にする。葬式の日の夕方、初七日、三十五日、四十九日、百箇日、一周忌、三年、七年と法事のたびにその家に行って念仏をあげてあげる。新盆の家にも行って念仏をあげる。また、おてんとうさん念仏といって旧暦六月一〇日に、いまは新暦なので毎年、暦をみて決め、一九九〇年には七月二九日だったが、朝、太陽があがるときから夕方沈むまで鉦の音を絶やさぬように念仏をあげる。

天神講　松井たゑ家に天神さまがまつられている。学問の神さまということで、学年の移りかわりに子供たち、主に六年生が中心となり一月二五日ころ集まって天神講をした。まず神社の境内で習字をしてそれを天神さまにあげてから松井家からごちそうなど出してもらってみんなで食べたり学芸会のようなことをした。

秋葉講　終戦ころまではきっちりやっていた。一～一三班までにわかれており宿が順番にまわってきた。米だけを集めた。清水市の秋葉さんに四人くらいの代参の人が行ってお札をもらってきた。現在では宿はせず、新年会に集まる程度だという。代参だけは今でも行っている。つぶれずに残っているのは、秋葉さまが火伏せの神さまなので、誰も火事だけはこわいので、講をするのに文句をいえないからだろうという。

遠道原　観音堂で毎年、念仏講の人たちがおてんとさん念仏をあげる。観音堂は、むかしお金をたくさん持った人がこの近くで行き倒れになり、みんなで丁重に葬った。そしてその人の持っていた

お金を生かすために観音堂を建てて以後念仏を唱えて供養をすることとしたのだという。

和市　念仏講の人たちが旧暦六月八日、一九九〇年は新暦で七月二九日だったが、天気がよいようにと日の出から日の入りまで、昼食の時間もなく、念仏をする。

南堀　戦前まで、万神講や天神講、念仏講（月並念仏）、淡島講、山の神講、秋葉講、観音講があった。

万神講　日にちは当番の人の都合で決める。神さまの掛け軸をかけてまつり雑談をしたり酒を飲んだりした。みんなの親睦をはかるものだった。戦前まで行っていたが、戦後は、戦争に負けたのだからまつりごとはやめようということで話し合いの結果、行われなくなった。

天神講　二月二五日、子供会のリーダーである小学六年生の家に子供たちが集まった。会費のほか米や野菜などを持ち寄り、宿となった家では煮物やごはん、味噌汁などを出してくれた。会食するほか、習字をして壁にはったりした。戦争の影響でやめてしまった。

上原　念仏講、題目講、淡島講、天神講、駒形講、赤子講などがある。

念仏講　メンバーは現在八人で題目講と同じメンバーである。世話人は広瀬きく氏で世話人の仕事は主に会計である。毎月一二日に念仏と題目を唱えている。おてんとさん念仏は一九九〇年には七月二九日に老人クラブでやった。

題目講　念仏講と同じメンバーだが、この上原には日蓮車返しの霊場があり題目がさかんである。日蓮車返しというのはそのむかし日蓮が立ち寄ったといわれるお堂のことで、明治以前は住職がいたが長い間朽ちはてていたのを、小林えつ子氏の家の四代前の先祖が明治二、三〇年ころに再興し現在に至っているという。

オテントサン念仏（上原）

日蓮上人が立ち寄ったといわれる旧暦八月一三日、新暦で八月二五日におむしぼしの行事が行われる。一一時ごろからはじまる。年寄り七、八人が各々題目の書かれたうちわ太鼓をでんでんと叩きながら題目を唱え小林家へと向かう。小林家から南無妙法蓮華経の旗、紫・白・黄・青・茶の各色のと、曼荼羅をもってお堂へ行く。毎年、静岡宗務所長と日蓮宗総長が訪れ、総長を中心に堂に会した二五人ほどの坊さんが題目を唱える。日蓮宗の信者が大勢おまいりに来る。題目がすむと上原公民館で会食をする。会食の準備は八時ころからはじめて三時ころまでかかる。小林えつ子氏が段取りをして題目講の婦人約一〇人ほどが行う。当番は二年交代で一～五組を順番にまわる。経費は区からの補助金一万円くらい、県宗務所からの一〇万円、個人のお賽銭などでまかなわれる。

一一月にはお会式が行われる。おむしぼしの時のように各自うちわ太鼓を叩きながら歩くが曼荼羅や旗はもって行かない。一一時こ

ろから会食がある。その準備は当番がする。

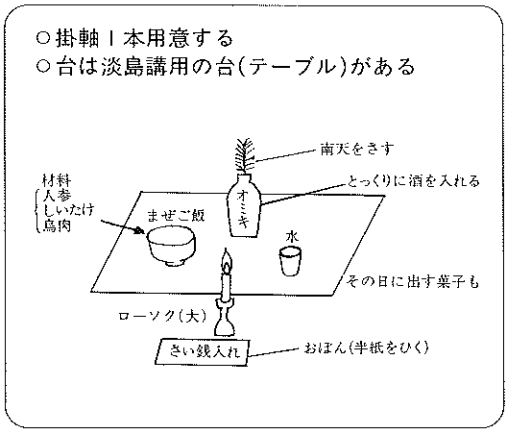
淡島講　一月と四月に婦人会の総会もかねて公民館に集まる。お賽銭をあげて掛け軸をおがんでから席につく。二六、七年前までは順に家をまわり、たきこみごはんやおかずを作り酒も出していた。今では三〇〇円ほどお金を出しあって菓子や茶を用意する。もちまわりで掛け軸を保管する。婦人中心の講で、お産の近い人は大根の輪切りに楊枝をさし、ろうそくを立てたものをもらってくる。当番のところに下図のようなメモが保管されている。

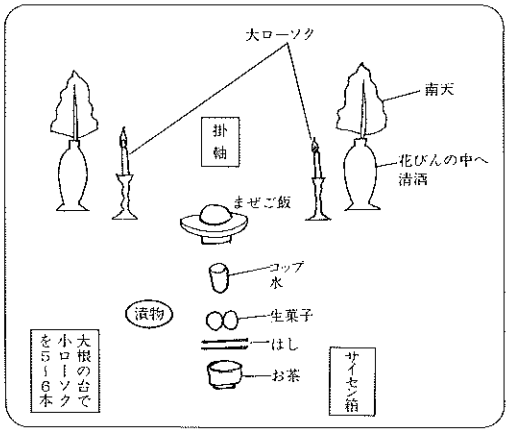
題目講のうちわ太鼓（上原）

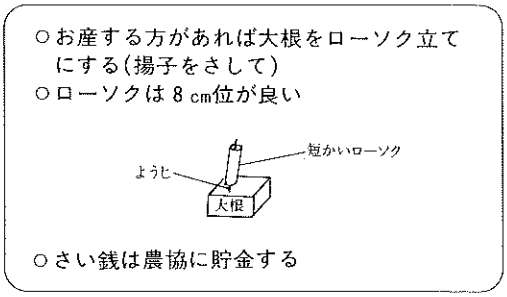
天神講　一年に一回、二月ころにやっていた。ほんとうは一月二四日だが、二月二四日ころにやっていた。今では公民館で二月の土曜・日曜にやっている。小学生が中心で男女ともに上原全体の子供が集まった。むかしは、養蚕をやっていて家も広かったのでそんな広い家や財産のある家でやっていた。

上丹　念仏講、題目講、淡島講、天神講などがある。

念仏講　毎月一〇日に月並みに行っている。題目講とメンバーはほぼ同じ。







図Ⅳ－１　アワシマコウ
当番所有のメモの写し

お題目講（上須）

題目講　毎月二八日に祖師堂に集まり題目をあげている。上丹には日蓮宗の家は二戸しかないが、念仏講の人も一緒で約一〇人くらいでやっている。日蓮さんをまつり家内安全や村の無事安全を祈る。

淡島講　子安講ともいう。お産の神さまでもある。一年に三回、一月、三月、九月、講をする家の都合のいい日を決めて、「あしたやります」といういいつぎを出す。二二戸を軒並みにまわる。掛け軸を床の間に飾り、夕食のごちそうをつくって供え、みんなもそれと同じものを食べる。献立は決まっておらず、その家で用意されたものを食べる。一〇年くらい前までは三合ずつ米を持ち寄っていた。小さい子供はつれていく。夕方から夜一〇時ころまで飲食したり話をしたりで、姑から解放されて楽しかった。

念仏講のときには嫁のアラをいうこともよくあったが、淡島講では姑のアラをいうことはなかったという。今はみんなで一年に一回温泉に行ったり夕食会を開いたりしている。

須釜　念仏講と題目講、天神講がある。

題目講　祖師堂で毎月一七日に須釜だけの題目講をしている。月の一日にサイノカミと祖師堂のまわりと、馬頭さんの掃除をする。お題目のとき、子供がよく育つようにと鬼子母神もまつる。おはたしのときは赤ちゃんの肌着を納める。それをまた他の人が借りていくと丈夫に育つという。題目講の人数は、久根一六人、南堀五人、町田一人、平松一人、上原七人、新田一人、原二人、上丹五人、須釜七人、他に参銭だけを納める人七人でこの地域では現在五二人である。

なお、一九九〇年には七月二八日に裾野市の東半分の一帯の題目講が行われた。明治八年からはじめられたという。裾野の東側の衆が年に一回講の当番をする。久根、南堀、町田、平松、上原、新田、原、上須、茶畑などで年に一回ずつする。上丹と須釜が上須で一緒だから上丹と須釜は交代で当番をつとめる。次の当番が日取りを決める。初講は一月二〇日である。会長は茶畑の勝又武雄氏がやっているが、集まるのは女性が主で、姑になった人が多い。一九九〇年は須釜が当番であった。当番にあたった人は七時半ころから準備のために出てくる。飾りつけ、供え物、直会の準備、お弁当の用意、煮物や団子作りに忙しい。講の人がお金を出す。今回は二五〇〇〇円あった。また、お金をためておいて題目講では年に一回みんなで温泉へ行く。題目が終わると直会をする。直会が終わると、次の当番の人が道具や掛け軸をきまった箱におさめて自分たちのところへ運ぶ。むかしは箱を背負って行列を作って次のところへ持っていったが、今はトラックで運ぶ。八十歳になった人には祝いをする。講からざぶとんを贈る。

天神講　二月二五日に子供たちが集まって習字をしたり飲食を

している。

山の神講　一一月一七日に、上丹と須釜一緒でやっている。神社に午後三時ころに集まり一杯飲む。むかしは年に二、三回あり、まわり講で各家を順番にまわった。夜に集まりごはんを食べたりした。

新田　年に一回、つじ念仏をする。場所は御堂のそばで、むしろを敷いて夜に念仏を唱える。切久保の人たちと一緒にやることもある。また、おてんとうさん念仏といって、雨が降りつづいたときなど年寄りが観音堂に集まって晴れるように念仏を唱えた。これは切久保の人たちと一緒にやっていた。

原　念仏講、淡島講、天神講、駒形講、山の神講などがある。蕃神講は昭和三〇年ころになくなった。

念仏講　身上を嫁にわたした年寄りたちが毎月一四日に集まって念仏を唱える。以前は家々をまわって宿にしていたが、現在は公民館を利用している。一〇種類ほどの念仏を書いた表があってそれを見ながらみんなで唱える。かつては寿司をつくったりお餅を焼いたりして盛大だったが、今はお茶に菓子、つけもの、くだものなどを持ち寄って食べる程度になった。もとは二一戸がみんな講に入っていたが、四戸がお題目の家になって、一七戸になっている。葬式のときにもずっと四十九日の法事まで喪家に行って念仏をあげる。

おてんとうさん念仏は旧暦六月八日、一九九〇年は七月二九日だったが、その日に行う。太陽が出ている間、ずっと念仏をあげる。三〇年くらい前までは早朝四時ころから鉦を叩いて念仏をあげた。高橋花彡氏の家の近くの地蔵さんのところでする。一戸から一人ずつ出る。女に限らずおじいさんも出る。ござを敷いてざぶとんの上にすわり、ご詠歌やお地蔵さんの念仏を唱える。むかしはごはんをかわるがわる食べて、昼ごはんの時間にも鉦をやめることなく休みなく叩いた。今はお昼に休憩して昼ごはんをみんなで食べている。昼ごはんは五〇〇円ずつ出して弁当をとっている。上、中、下の三組が交代で当番になりお茶を出す。おてんとうさんが西に入ったらその西の方向を向いて南無阿弥陀仏を唱えて終わりとする。

淡島講　念仏講がお婆さんの講であるのに対し淡島講はお嫁さんの講である。二一戸の主婦が参加している。昭和三〇年ころまでは毎月やっていたが今は年に四回程度で夕飯のふるまいをする。日にちは宿をする家の都合で決める。米を一戸につき三合ずつ集めた。お米集めがくる、というような言い方をした。宿になった家では淡島さんの掛け軸を床の間にかけておく。集まった人たちはそれを拍手をうっておがんでから席につく。年長者が上座に座る。ザシキとヒロマを使って夕食を食べる。レイコウ膳といって、おつぼ（こんにゃくとにんじんをとうふと落花生であえる）、おつけ（とうふのおみおつけ）、おさら（大根とにんじんの酢の物、またはこんにゃくのみそあえ）、ごはん（お茶飯―出したお茶の水でご飯を炊く。少し塩あじをつける。淡島さんのときは、こしぶくろにお茶の葉を入れて水の中にいれて出し、ふくろを取り出してから炊く）、おひら（こんぶとがんもどき、がんもどきは裏表がないから良いという）である。

天神講　子供の講で、むかしは、「じゃあ、こんどはわしらうちでやってやるよ」と大きい家の人が順に言ってくれて、その家でやった。今は公会堂でする。二一戸のうち、子供のいる家からお米を集めた。天神さんの掛け軸をかけ、まぜごはんとふつうのごはん

と、にんじんとごぼうの煮たものを用意する。「子供はとも食い」といって、家ではきらいだといって食べないものでも友だちが一緒だとまねをして何でも食べた。学校の先生が来てくれて話をしてくれたりした。

駒形講　一年に一度、一〇月一〇日の駒形神社の祭礼の前の一〇月五日から八日のうちの都合のよい日に、宿にあたった家に二一戸の氏子が集まって夕食をともにする。宿が自分の組の家の場合には夕食をそろえる手伝いに行く。お茶飯におひら、お酒三升と決まっている。おひらは七種類ぐらい用意する。にんじん、油揚げ、大根、きのこ、ごぼう、里芋、昆布などである。昆布はよろこぶに通じるといってめでたいことにはいつも昆布を使う。

山の神講　古くから住んでいて山に権利をもっている二一戸が年に二回、一月一七日と一〇月一七日に集まる。箱根山の中腹と里に二つの山の神をまつっている。上、中、下の三つの組のうちで家々を順番に宿にして山の神へ赤飯と酒を持参してまいったあとで飲み食いをする。

第四節　路傍の神仏

町田　庚申さんの森と呼ばれるところがあり、そこに庚申塚がある。まつりは八月の庚申の日で、念仏講の人たちが行く。旧暦で六月四日、今は八月二三日をあてることが多い。庚申さんの前を掃除してござを敷いてから座って念仏を唱える。一本の線香が終わるまで、「こうしんべい　こうしんべい　まいたり　まいたり　そわか」と唱える。区長から掃除したりする費用をあずかっている近所の家の人がお茶や菓子のさし入れをしてくれる。庚申さんは泥棒よけの神さまだといい、泥棒に入られたら二度と入られないように注連縄を持って行っておいておくとよいという。庚申さんの日に庚申さんのところで念仏を唱えるとそれにつづいて町田の二ケ所のサイノカミさんのところへも念仏をあげに行く。サイノカミさんの前にござを敷いて座って鉦を叩いて念仏を唱える。

サイノカミ　深良二四三七のあたりと深良二四九五のあたりと二ケ所にある。八月二三日の庚申さんのまつりの日に、庚申さんのまつりのあとでサイノカミさんのまつりを行う。二ケ所のサイノカミをまわり、その前で南無阿弥陀仏の念仏を唱える。近所の人がお茶や菓子のさし入れをしてくれる。だいたい三時ころ解散となる。

かつては一月一五日のドンドン焼きをこの深良二四九五のあたりのサイノカミのある場所で行っていた。正月のお飾りを集めてサイノカミを囲って燃やし、その火で団子を焼いて食べると無病息災だといった。そばを食べたりもした。今では農道わきの田んぼで行う。サイノカミは燃やさない。ドンドン焼きが近づくとサイノカミさん

の前へ人形などを捨てに来る人も少なくない。近所の人はそれを快く思ってはいない。子ども会や役所の人がそれらをドンドン焼きの行われる田んぼの方へもって行って焼いている。

観音さん　町震遊園地むかいの馬頭観音のまつりは八月二〇日前後の日曜日に行われる。近所の人が観音さんをきれいにしてかざる。観音さんの前で念仏が唱えられる。念仏の人たちへ近所の家からさし入れがある。遊園地では朝からバレーボール大会が開かれ、昼ごろからはおでんや焼きとり、かき氷、焼きそばなどの店が出る。町田と震橋一緒で班が十数班あるが、二班ごとに一店を出す。日暮れから九時ころまでは盆踊り大会がある。このような形式になって七、八年たつ。二五年くらい前ころには映画の上映や子供相撲が行われ親戚中が集まるなどしてにぎわったという。

南堀　モヨリの上と下及び五十嵐勝家の西の三差路のところに道祖神がある。五十嵐勝家のところの道祖神は山の入り口にあたるところでもある。古くは丸い石が二体ならんでいたが、昭和になって林道を広げるためにつぶしたので現在のようなかたちとなった。大正から昭和初期の生まれの人たちが子供のころには、子供たちが正月七日に正月のお飾りを集めてこの道祖神を囲むようなかたちで小屋を作った。そして、オンベをその近くに立てていた。それが、やがてオンベのかわりに旗を立てるようにと変わった。小屋には子供たちが泊まることもあった。泊まらなくても、お飾りを盗まれるからといって小屋に夜遅くまでいたものだという。

上原　上原公民館のあたりはむかし庚申堂のあったところであるが、庚申堂をつぶして公民館が建てられたので、庚中さんの本尊の青面金剛は現在は公民館の中にまつられている。むかし、その庚申堂のあたりの土地は、藤森進氏の家の所有であったが、不幸があったため、神だのみで手放し、明治ころ官地になったという。それを昭和三年ごろ払い下げて民地になったという。そのため庚申さんのまつりには、藤森進氏の家が関係してきている。世話人は五人で二年に一回入れ替えがある。三、四期続けてやった家もあるが、今ではみんな二年で入れかわる。藤森進氏が世話人の中心となっている。毎年三月以降の初庚申がまつりで、まつりの日世話人は朝九時ごろからしたくをはじめる。昭和四、五年ころから、弘法さんのまつりと一緒に行うようになった。西安寺の住職の念仏があり、ちょうどその日は彼岸にもあたるので、都合をあわせて、一一時ころからはじめる。そのあと施飯の用意をする。施飯にはむかしは藤森氏の家に集まり、米を一斗二升ほど炊き、野菜を煮て団子をつくるなどしたが、今ではお弁当をとって里芋の煮付け、こんにゃく、ちくわ、ほうれんそうのごまあえを出している。経費は今では区からの一万円の補助と各人千円くらいずつのお賽銭からまかなっている。むかしは補助金がなくみんなで物や金を持ち寄った。集めた金は砂糖、塩、茶、酢、醤油、れんこんなどを買うのにあてた。お賽銭は使用した額だけうけとり、余りのないようにした。米ののこりなどはいりようの人に売ったり貸したりした。

弘法さんのまつり　明治のころ、現在上原公民館のある場所にあった庚申堂に弘法さんをまつったのがはじまりで、三月二一日に行われる。近所の人が米一升、餅米、お金などを持ち寄る。昼食をともにする。

忠魂塔のまつり　盆と彼岸に戦死者の供養をする。深良中まとめて行う。神主が来ておまつりをする。

上須　深良一五六八の小林正夫氏の家の近くに庚申さんと観音さん、サイノカミが少しずつ離れてある。庚申さんは泥棒に入られたときにそれを縄でしばると盗まれたものがみつかるという。早く泥棒がつかまるともいう。観音さんは八月三日とお盆の三日めの仏さんが帰る日の午後に念仏をあげる。サイノカミはお正月のお飾りを集めておいて小屋がけして正月一〇日に焼く。そうすると病気にならないという。焼いた竹や木の燃えさしで箸を作って食べると虫歯にならないともいう。

原　庚申塔が地蔵さんのところにある。庚申さんは地蔵さんと同じ日だからそのときごはんをあげる。何かなくなったときには庚申さんに頼むと出てくるという。

第五節　家ごとの神々

町田の松井たゑ氏の家の例と上丹の勝又金作氏の家の例とをあげておく。

町田の松井家の例　屋内にまつられているのは、伊勢皇太神宮さまの神棚（ナカノマ）、八百万の神さま（山の神さま・秋葉さま・箱根神社が入っている。ヒロマ）、恵比寿さま（チャノマ）、荒神（ドマ）、ほかにオオドの入り口のところに、秋葉さまの札がたくさん入っている箱がある。神棚と八百万の神さまはおおよそ南向きで恵比須さまと荒神さまはおおよそ東向きとなるものだという。屋外にまつられているのは、八幡さまと天神さまで、八幡さまは屋敷内に、天神さまは屋敷からはなれて町田公民館のそばにまつられている。

神さまに供え物をする日は次のとおりである。正月（一二月三一日～一月三日）、五月節句（五月五日）、お盆（七月三一日～八月一日）、八幡さんのおまつり（九月一五日）、秋の節句（一〇月一五日～一六日）、以上はすべての神さまに供え物をあげる。おえべすさん（一一月二三日）、これは恵比須さまだけにあげる。むかしはキノエネサンなど、神さまの日には必ずあげていたが、最近だんだん減ったという。

いろいろのまつりのときに松井家の屋内神すべてに御神酒や赤飯などを供えるので、そのために神さま用の器、お盆と皿と御神酒徳利がそろっている。神棚の器は決まったものがある。ふきんやざるも神さま用に決めてあって他のときには使わない。

暮れのお祓いは一二月二五日にする。それまでに近所の人にたのんで大掃除をしておく。大掃除の日にはおしるこをつくる。ふつうのおしるこではなくて、お雑煮の餅のかわりに米の団子を入れたもの。いちょう切りの大根と里芋を白みそ仕立てにしたものを大鍋にいっぱいつくる。それを家の全部の神さまにあげる。神さま用の器に入れその日一日だけ供える。一二月二五日には深良神社の宮司の伊藤政秋氏に来てもらって神さまみんなをお祓いしていく。そのときに正月の注連を切ったものを持って来てくれる。

正月にも家の神さますべてに供え物をする。大晦日の三一日に御神酒とごはんを神さま用の器に入れて一対ずつ供える。元旦から三ケ日はお雑煮を供える。終戦後までは下男のうち一人年男を決めて神様にあげたりさげたりさせたという。年男は下男のうち若い方がなる。その年男が一年すべての神さまへの供え物をした。今は嫁がする。昭和一五年生まれの現在の奥さんが嫁に来た昭和四〇年ころ

にはすでに嫁の仕事になっていた。お注連を飾るのは二九日か三〇日で、七日の風に合わすなといって六日にはさげる。

五月の節句は、餅のお供えに御神酒とごはんを家のすべての神さまにあげる。三月の節句には供え物はしない。

八幡さまのまつりは九月一五日でごはんと御神酒を供える。八幡さまは松井家のウヂガミさんだといい、いちばん大事な神さまだという。今でも家族は何かあるごとに、たとえば子供の受験や発表のときなどもおまいりする。

天神さまは、丸い自然石が御神体で絹の布の中に入れておさめてある。二月二五日がまつりの日で、おのっぺい汁、餅のお供え二重ね、赤飯を供えて午前中に神主さんにお祓いをしてもらう。近所の人がお赤飯をもらいにくる。少しずつ家へもって帰って子供に食べさせる。食べると頭が良くなるといっている。お祓いが終わると神主さんを家へ招いてお昼をさしあげる。献立はお赤飯、おのっぺい汁、おぬたに決まっている。これがいつもつきもので他にえびフライなどいろいろつくる。まつりの日の松井家の夕飯はおのっぺい汁と決まっている。他の日にはおのっぺい汁はつくらない。おのっぺい汁とは、おでんをこまかく切っておつゆで煮たもの。大豆、昆布、しいたけ、にんじん、ごぼう、里芋、丸と角の揚げはんぺん、焼きどうふ、油揚げ、ちくわをおつゆで煮て片栗粉でどろりとさせたもの。

秋のお節句は、一〇月一五、六日で日にちは深良神社のおまつりに合わせたものではないかと思うとのことである。餅をついてお供えにしてすべての神さまにあげる。

おえべすさんは、一一月二三日の新嘗祭のときにおまつりをする。えべすさんにおひらを煮る。恵比須さまの祭壇の横に大根を一本立てかける。両はじにりんごなどの果物を一対ずつ供える。その真ん中にカケノウオ（掛けの魚）をあげる。カケノウオはおなかを合わせるようにならべる。その両側に御神酒、そのまた両側に赤飯を供える。おえべすさんの日におひらや供え物をするのは恵比須さまだけで他の神さまにはしない。むかしこの日は下男、下女に赤飯とおひらでごちそうをふるまったという。おひらは、油揚げ、れんこん（ななめに大きく切る）、にんじん（たてに半分に切る）、里芋、こんにゃく、昆布、紅白のかまぼこ、ごぼう（丸のまま一五センチくらいの長さにぶつ切り）、これらをうま煮にして皿に盛る。

上丹の勝又家の例　屋内にまつられているのは、ダイジンサン（ヒロマ）、エビスサン（イマ）、コウジンサン（ドマ）で、屋外の屋敷地にまつられているのがイナリサンである。これらすべての神さまへのお供えとして次のようにしている。まず、花を月に一回かえる。

勝又家・お稲荷さん（上須）

そして以下のようなモノビには餅をついて供える。お正月(丸餅)、一五日正月（丸餅）、三月一〇日（イナリサンのまつり、切り餅）、四月四日（オセック、切り餅）、五月三日（オセック、切り餅）、お盆（切り餅）、一〇月一〇日（鎮守の駒形神社の祭礼、切り餅）。また、新しく野菜ができたときには初物としてダイジンサンと仏さまに供える。西瓜、トマト、サツマイモ、大根などである。米も同じ。お彼岸にはぼたもちを一つずつ神さまと仏さまに供える。

暮れの二五、六日ころ、家の大掃除が終わると、ダイジンサンにお茶をあげる。昔はすすはき団子を作ったらしいが今はやっていない。三一日に家のすべての神さまに丸餅のお供えをあげ、夜はおそばをあげる。正月には丸餅が中心である。元旦にはすべての神さまにお雑煮をあげる。夜はごはんをあげる。夜といっても四時をすぎては遅いくらいで、はやくあげるものだといっている。三ケ日は男が世話をする。灯明もすべての神さまに三日間はあげる。七日の七草粥は女が世話をしてすべての神さまにあげる。七草といってもねぎや大根、ほうれん草などをあげる。木鉢を庖丁やしゃくしで叩いてうまく切れれば陽気がいいという。「ななくさなずな　とうとのとりとにほうのとりと　とびたつまえに　あわせりやばたくたせ」と歌いながらする。

一五日正月のことを二バイショウガツともいう。一四日に小豆粥を女が作る。ドマに臼をおいて臼の上に俵を一俵おき樫の木をさす。この枝に団子をさして飾っておく。この日、丸餅をすべての神さまにあげる。一五日の朝には小豆粥をつくり、かつの木でかきまぜてその年の陽気などを占う。そのあとで柿の木を叩いて実がなるようにと唱え言をする。

節分はトシコシともいって豆をいって一升桝に入れてダイジンさんにあげる。

彼岸は春と秋、ぼたもちを作ってひとつずつすべての神さまと仏さまにあげる。

節句は四月三日のひなまつりと五月五日と、いずれも切り餅を作ってすべての神さまと仏さまにあげる。

エビスサンのまつりは一一月二〇日で、ヒロマに俵を二俵おき、その上にのし板をのせてみかん、りんご、大根二本、赤飯、野菜(里芋、大根ほかいろいろ）の煮物、汁物などを供える。エビスさんは北にかざるものだという。エビスサンの日には他の神さまには何もあげない。

また、一般的に家に関する禁忌として次のようなことがいわれている。家をなおすときにはまわりの四かど、四周を全部一度に改造するものではない。必ずどこか一方を残しておくものだという。そうしないと四方改めに遭うという。柱も四方攻めにすると子供がおいだちしない、成人しないといわれる。柱の四方攻めとは柱の四方全部を建具や壁でふさいでしまうこと。また、屋敷にはビワを植えてはいけない。ケヤキも植えてはいけない、人の血を吸うという。池をつくるのもよくない。また家の出入りは僧侶は廊下からする。入院するとき廊下から出ていってはいけない。家の中で敷居を踏んではいけない。

（新谷尚紀）

付録一　『駿河記』駿東郡深良村

（著者・桑原藤泰　昭和七年九月一四日発行）

【深良】或大森郷父母良とも書く　寛永改高九百三拾石五斗九升　外高拾四石五斗　興禅寺領　高拾石六斗　西安寺領　至二沼津一凡四里　田額千四百七拾三石壱斗五升九合　稲葉紀伊守　主水卜云

知行所　外御朱印地十四石五斗　興禅寺領十石六斗　西安寺領

○赤兒明神社　祭神手力雄命也　除地田四畝歩　神主益田和泉

摂社　両皇太神宮　駒形明神社白和龍王　除地田四畝歩　左鵲王　右鵲王

当社に建久元年正月十日祭文連名の古書あり。其人々の名前に云、

堀内源内左衛門貞治　大場三郎左衛門包綱　志村助右衛門定元　久根幸蔵吉治　土屋徳右衛門宗直　須鎌市之進是政　上原惣兵衛高国　渡邊半右衛門清　向原清左衛門正元　大場三五郎包治　各花押

又表書の名前　花押同

武藤内記家形　勝又兵部国元　鳴海越中守藤原高重

新田義興朝臣義兵を起す時、大森葛山両氏属せり。此両氏は近村土着の士なり。依て左兵衛佐義興武運長久祈願の為に当社へ永五貫文寄附ありしと云。

○神明八幡若宮三社　除地田七畝歩　○山神社

○八王子社　○第六天社　○稲荷社

○金山社　○天神社

○霊亀山興禅寺　洞家　定輪寺末　御朱印寺領拾四石五斗

開山夢想正覚国師　観応年中建之

中興開山楊天宗蟠和尚　文禄十二巳巳天五月廿五日寂

開基奇栖庵日升明照居士　明応三年甲寅八月廿六日歿　大森式部少輔顕隆

○大森山西安寺　浄土宗　江戸芝増上寺末　御朱印寺領拾石六斗

開山中興方蓮社西誉休山和尚　天正十年三月八日寂

古開基天律院殿覚応宗真大居士（寺二頁）　律或は津、真或は貞に作る。重而可レ考。

寺伝云、天律院殿は大森信濃守氏頼とす。若くは誤か。一書云大森氏。藤原姓。駿河守惟康。法名天律院覚翁宗真。於二駿州鮎沢庄一築二墳墓一。称二大森天神一と見えたり。又云桃園貞純親王の後孫なるよし。定輪寺に系譜を載す。按に大森氏は世々駿東郡に住し、後代上杉扇谷朝良の幕下となり、小田城に在。明応四年北條早雲入道韮山より不意に小田原城を攻し時、大森式部少輔実頼退き去て此に住す。

○月光山松寿院　同宗　同末　昔は源空寺といひしが、祖師の諱故不レ唱と云。

開山相蓮社伝誉深碩和尚　明応五年七月十一日寂　開基寄栖庵なり。

○深良山文明寺　洞家　興禅寺末　開山須翁栄心和尚
○上原山西福寺　浄土宗　西安寺末　○定泉寺　○養福寺　真言　二院共今廃　○遠藤山日光院　当山派
○庚申堂　○地蔵堂　○観音堂二　○揺橋（ユルギバシ）
○湖水堀貫穴　深良より二里奥山筥根山下を堀通す。
　寛文十一年辛亥五月四日より水少し下る。筥山下長七百二十間、高壱丈弐尺、幅壱丈、湖水を引取、深良より新宿伏見に至迄二十九箇村水田に灌く。奇異の穴なり。漑田甚広し。同十二年壬子五月廿八日より大水下る。領主稲葉美濃守内小山源兵衛と云者、茶畑村に居て普請す。仍て今も小田原領主水支配するなり。
○大森山　村落の上なり。　○岩水山　○宇とう山
　応永二十三年鎌倉の公方足利持氏朝臣、禅秀入道が為に鎌倉を落ちて大森山に至ると云。則この里なり。
　此村より千石原関所へ越る山路あり。
【岩波】　寛永改高七拾五石六斗壱升三合　至二沼津一凡四里半
　田額百三拾九石弐斗　小田原領
　此地巌石多く、波の形ある故に村名に負ふ。
○八幡宮　○駒形神社　○宝蔵院　当山派
○大期庵　薬師　除地五斗六升

付録二　松井謙一家文書

文久二年
伊賀婚礼ニ付諸入用覚帳
戌四月十日

祝義受納覚
結納分
帯代として金五両入
一納戸縮緬小袖　壱ツ
手前ニ而参求之但はつかけ留袖
一小紋縮緬小袖　壱ツ
〃　但　前同断
一古帯　壱筋
但小どんす也
一白足(袋)　壱足
一雪駄　壱足
一末広　壱対
一志ら賀　壱束
一御茶　二袋
一御樽　壱荷
一御肴　二尾
代金弐朱也
〃十品　九品包之事
右結納之請として四月
二日被遣候事
仲人
新七
磯右衛門
供壱人
右供為祝義金壱朱
半紙壱状相添差出候
四月二日　丹
一金壱朱也　磯右衛門
半紙壱状添
なこや
一本天帯　壱　木内氏
代金五両也
他ニ扇子延紙相添
四月二日　新
一金百疋　庄兵衛
蔵半紙添
四月三日　久
一金五十疋　平七
半紙添

同　新
一金弐分　茂十郎
半紙添
同　一色
一金弐両也　杉山氏
延紙壱状添
四月四日　ゆ
一さかな三本　儀兵衛
同　町
一青銅三十疋　惣七
半紙添
同　わ
一同　廿疋　伝右衛門
半紙添
同　久年
一同　廿疋　源蔵
半紙添
午旁少々添
町
一青銅廿疋　茂兵衛
半紙添
同
一同　廿疋　権右衛門
半紙添
同

一同　廿疋　清二郎
半紙添
同
一同　廿疋　清右衛門
半紙添
同
一同　廿疋　忠蔵
半紙添
同
一同　廿疋　定兵衛
半紙添
ゆ
一同　三十疋　茂兵衛
半紙添
町
一同　廿疋　甚右衛門
半紙添
同
一同　廿疋　仙助
半紙添
町
一同　廿疋　佐右衛門
同
一同　拾疋　林助
半紙添

同
一金五十疋　勝右衛門
半紙添
同
一青銅三十疋　宗八
同
一金五十疋　源蔵
半紙添
同
一金五十疋　平右衛門
半紙添
同
一青銅廿疋　弥助
一同　廿疋　佐助
一同　廿疋　由蔵
半紙添
前はら
一同　廿疋　柏木
すは
半紙添
松山
一青銅三十疋　新四郎
半紙添
新
一金五十疋　佐平

半紙添
ミしく
一扇子壱対　永助
料理人
半紙添
さの
一金五十疋　岩崎氏
町
一青銅十疋　由左衛門
半紙添
同
一同　廿疋　伝蔵
半紙添
同
一同　廿疋　源助
半紙添
一金百疋　新七
延紙壱状添
町
一青銅廿疋　善吉
半紙添
同
一同　拾疋　藤蔵
半紙添
同

一金壱朱　平八
半紙添
一同壱朱　ミ　権左衛門
半紙添
一青銅廿疋　町　良助
半紙添
一半紙十状　仕立や　吉兵衛
一金弐百疋　井口氏
延紙添
一青銅廿疋　上　八左衛門
半紙添
一青銅廿疋　わ　辰右衛門
半紙添
一免しか壱本　大庭氏
勝又氏
一金五十疋　興禅寺
延紙壱状添
一青銅廿疋　文明寺
菓子壱箱添
ゆ

一同　廿疋　庄助
半紙添
一同　廿疋　同　平左衛門
半紙添
一同　廿疋　同　儀右衛門
半紙添
一同　廿疋　日光院
半紙添
一同　廿疋　切　平八
半紙添
一同四十疋　わ　大和
山伴
半紙添
一同　廿疋　祐左衛門
蔵半紙添
ゆ
一金壱朱　庄兵衛
半紙添
一青銅三十疋　西安寺
半紙添
一青銅三十疋　松寿院

半紙添

上

一青銅廿疋　源左衛門
半紙添

切

一青銅廿疋　万蔵
半紙添

久年

一青銅廿疋　甚七
半紙添

ゆ

一青銅廿疋　惣吉
半紙添

町

一青銅廿疋　徳右衛門
半紙添

醤油や

一半襟壱掛　隠居
半紙添

同家

一前かけ　おひさ
半紙添

ミ

一金壱朱　仙右衛門
半紙添

わ

一同壱朱　林蔵
半紙添

神山

一同壱朱　忠二郎
蔵半紙壱状

くわし壱箱添

一金壱朱　弥兵衛
くわし壱箱添

円

一青銅廿疋　式蔵
半紙添

久

一青銅廿疋　徳右衛門
同

一同弐拾疋　勝右衛門
ミ

一同　廿疋　惣吉
玉子十五添

ぬまつ魚町

一下駄壱足　いづや
磯吉

はなをびろうと
ぬり下駄也

久年

一きす魚七本　善蔵
杉山
一金五十疋　本家
延紙壱状添
外ニ竹之子三本
なこや
一金五十疋　七郎兵衛
半紙添
同
一同五十疋　善助
半紙添
新
一青銅廿疋　善右衛門
半紙添
茶畑
一金五十疋　久右衛門
ミ
一青銅廿疋　吉五郎母
ゆ
一鯛壱枚　定七
絹や
一結足袋壱足　作兵衛
五郎服腰帯壱筋添

前振舞招請人覚
四月七日
さの
興禅寺　岩崎氏
ゆ
文明寺　庄兵衛
町
西安寺　源蔵
ミ
松寿院　権左衛門
わ
大庭氏　伝右衛門
切
勝又氏　平八
円
○増田氏　祐左衛門
上
日光院　源左衛門
く
○吉右衛門
〆拾七人○弐人不参也
四月八日
ミ　新
新七　○庄兵衛

く　わ
弥兵衛　林蔵
く　同
平七　○大和山
わ　ミ
伊太郎　仙右衛門
新　町
茂十郎　新助
勝右衛門　弥助
平右衛門・佐助
良助　・宗七
ゆ
平八　茂兵衛
同
○辰右衛門　儀兵衛
町
八右衛門○清右衛門
〆廿弐人
内四人○不参也
弐人・不居候事

四月七日八日
前振舞献立
御　茶
口取菓子

御吸物　切身
硯りふた　蓮こん
七品　竹之子
かまほこ
とりかひ
くわひ
あわひ
玉　子

二
御吸物　ミそ
ほら
ひらめ
めじか
う　と
わさひ
差身　た　て
し　そ
大根ん

さら
す
はせう
いか

三
御吸物　ひらめ
三ツもの
青身
大平　ぼら
れんこん
ミつば
丼　めじか
う　と
皿　黒鯛
又
大皿　海苔すし
本膳
猪口
赤おろし
皿　白おろし
わさひ
の　り
ね　き　そば
引物
焼物　めしか
きじ焼

但七日六分切八日四分切
菓子
但七日八日同断
六十四文ツヽ
四月十日
献　立
御着座
三方　長のし
煙草盆
御　茶
御焼米
御雑煮　嚙　珍
附ケ　里　いも
大　根
青　味
花松魚
小皿しら賀
御盆　三ツ組
御銚子　冷酒
御取肴　するめ
引替
一ノ
口さんしょう

御吸物
ひれ
御燗酒
かまぼこ
蓮　根
竹之子
御硯ふた　玉　子
七品　くわえ
い　か
きし焼き

二
御吸物　口茗が
いなた切身
た　ひ
かつほ
差身　た　て
七品　う　と
わさひ
茗　荷

三
御吸物　口うと
鯛こくしほ
二ツもの
海老すし
たひめん

四ノ
御吸物　口ふき
小海老
三ツもの
大皿　煮さかな
あほ身
丼　ひらめ
う　ど
竹之子
大平　た　ひ
あを身

五ノ
御吸物　口焼ねき
むつ
浜焼　鯛

本　膳
しょう
岩たけ
う　と
皿　大こん　汁　青身
つミ入
青　身
しょう賀
さかな

手塩　なら漬
きんなん
壺　魚　巻　飯
しゝたけ

二ノ膳
千代口　さんしょうあひ
はしょういか
初鴈
二ノ汁　切身
青身
半へむ
平　椎たけ
竹之子
引もの
茶碗　干かひ
七品　青　身
かんひう
人　参
ちくわ
椎茸
つくね
小角　たこ
〆九品　玉　子
ようかん

ばしょう
かまほこ
ゑ　ひ
竹之子
蓮　根
てしめ
松魚節
焼物
御湯
御茶
御菓子
千秋萬歳
立振舞
献立
御吸物　切身
硯りふた　蓮　根
竹之子
かまほこ
干かひ
こふまき
差身　めじか
ぬっぺひ
大平
竹之子
つくね
はしよう
いか

わかめ
皿しょうか　汁　青身
さかな　つミ入
手塩　猪口
香之物　からしあひ
竹之子
坪　味噌
さかな　飯
焼物　あぢ
かまほこ
しいだけ
大平　午　旁
人しん
青　板
氷こん
里いも

右料理人
四月六日より　永助殿（ミしく）
一　七人
同十二日まて

同六日より　新田　佐平殿
一　五人
同十日迄

一手伝　さかなや
ゆ定七
右之通ニ御座候
事
四月十三日
留之

当日聟入土産之品
一長熨斗　壱
一末広　壱
一しら賀　壱
一結城機　二反
一茶　二袋
一掛魚　二尾
一御酒　二樽
〆七品
外ニ　ミしく
扇子　壱対　宮内左衛門殿
半紙添　新宿
同断　治三郎殿
同断
又外
家僕十人
銭弐貫文　与三郎
友吉

但壱包　伊八
弐百文ツヽ十佐右衛門
半紙添　佐助
熊蔵
きく　つま
はし　かつ
又料理方へ
ミしく
見舞として　永助
新
金壱分也　佐平
右之品受納致候
事

四月十日
又立之節
金壱朱宛祝義
半紙添　差出候
〆四人前也
右同日為客罷出候
人数左之通り
一　木内七之進
挾箱持供壱人
一　杉山格平
挾箱持供壱人
一　松井昇太郎
挾箱持供壱人与三郎
〆男客三人也
いしき
一　杉山氏母
いが
小性附としていし
下女　きく
〆四人
一女挾箱持　平八
一樽　持　熊蔵
伊八
一駕人足　佐右衛門
佐助
一単　子　宗七
平蔵
一長　持　弥助
一両　掛　友吉
雨天ニ付
一駕　萬蔵
借用之外
〆人足十三人（借用人外壱人）
惣人数
〆廿四人

覚

一唐木綿小紋　壱反
　代廿弐匁五分

一の　し

一茶　　壱袋

一おかじ　三把

一御酒　　壱樽

〆五品

右先方仲人ニ付

上丹磯右衛門殿方へ持参

差出候事

但右同人より祝義として

　金弐朱也惣人数

　十三人江被差出候事

一先方へ土産之品

貫候前之品不残包を

直し持参致候事

　但先方家僕〆八人ニ付

　　弐百文ツヽ〆壱貫六百文

　　半紙添差出候事

又金百疋半紙添

料理方へ見舞として

差遣候事

又金壱朱ツヽ半紙添

〆女供迄拾四人前

被差出受納候事

四月十二日三ツ目ニ付

　来客覚

儀一郎　両仲人弐人

伊与　　女男

　　供　　弐人

小性附壱人　案内壱人

土産として強飯壱駄

持参候事但ニ飯台也

　　馬士　壱人

〆九人

　座敷六人

　下座敷三人

右吸物壱ツ肴三ツ

そは差出候事

供座敷同断之事

一弐百文　　壱人

半紙添

　　前同断

一百文　　女中へ

半紙添

なこやより参候男へ

いしきより参候男へ

一弐百文
半紙添

去ル十日新田へ参候節

一弐百文　南堀之子守へ遣
半紙添

四月十二日切分

宮之前

一弐百文　番人
白米壱升
右ハ祝義として草履弐足持参一日手伝

四月六日より十二日迄

ミしく

一金百疋　永助殿
七日分謝物也
外ニ強飯壱重並勝手　見舞之
目録添
又外小角焼物菓子都合
三品去ル十一日差遣候事

四月六日より十日迄　新

一白米壱斗　佐兵衛
但五日分
為代金三朱銀壱匁渡
又外焼物くわし又勝手見舞
之品も差遣候事

ゆ

一金弐朱也　定七
右祝義として差遣候
さかなやニ付如斯也

中澤

一白米壱升　喜左衛門
右ハ祝義として草履弐足持
参リニ付如此遣候よし又百文も遣し
可然候

覚

一長熨斗　壱
一しら賀　弐わ
一茶　壱袋
小紋
一　唐金巾　壱反
代廿三匁五分
一御酒　壱樽
〆五品
右仲人新七殿方へ
為謝義差遣候事

四月十五日　但使之者へ為祝義
百文半紙添被遣候事

江戸京橋金六町
住吉や

酉九月買
一白木桐重単子　壱ツ
代金壱両三分也
同
一紫縮緬振袖　壱
同
一黒しゅす同断　壱
きぬや
〆二ツ古物　作兵衛
代金四両弐分也
一番木地色　ミしま
一はり箱　壱ツ　佐原屋
代銀拾壱匁
一四十八文　弐尺さし壱
壱尺さし壱
一百七十弐文　はさみ壱
一銀八匁五分　□鏡九寸
黒ぬり也
一同弐匁八分　まくら二ツ
一同五匁　唐綾襟壱掛
紫縮緬
一同五匁
襟壱掛
一同三拾五匁　金巾紺紋壱反
一壱貫文　真綿
三十匁
唐天
はゝ壱尺五寸
一銀七匁弐分
打ひも
一七十弐文　三尺
一四百文　花染六尺
一百文　洗粉十一
一百文　元結四わ
一百文　水引四わ
広機
一八匁　風呂敷壱ツ
一弐百廿四文　丈長二ツ
一百文　初冠七本
手拭地
一八匁六分　壱反
新七殿へ遣候分
一廿三匁五分　鼠小紋
金巾壱反
〆銀百十八匁六分
銭弐貫三百廿四文
為金弐両一分ト
五百廿文
右　ミしま
佐原屋払

郡内
絹屋作兵衛分
二月十一日
一弐百五十匁　御召縮緬
同　弐反
一六十七匁五分　同断
同　壱反
一七十一匁五分　紅壱疋
同
一廿弐匁五分　唐さらさ
同　壱丈五寸
一八拾六匁弐分　小鈍子
同　壱丈
五厘
同　磯右ヱ門殿方へ遣候分
一廿弐匁五分　小紋
唐金巾壱反
同
一拾六匁五分　黒繻子
襟袖口
同
一六匁四分　前掛二ツ

メ
二月廿七日
一四拾六匁　御納戸
ちりめん壱丈
同
一三匁七分五厘　紫袖
弐尺五寸
同
一三匁弐分　紋代五ツ
同
一百三十五匁　八掛ちりめん
同
一百廿匁　小紋八掛
同
一百十五匁五分　御召縮緬
壱反
同
一六十匁　同半反
〃
三月十七日　（繻）
黒銖子
一拾五匁　七尺三寸
同
一廿弐匁五分　秩父
壱丈弐尺七寸

同
一六十匁　小鈍子
九寸帯壱丈
同
一四匁四分　糸代
同
一三十匁　五郎服
重掛
同
一拾弐匁七分　紫唐金巾
帯地八尺五寸
同
一廿壱匁　糸入唐金巾
壱丈弐尺五寸
同
一三匁弐分　ほうし
同
一六匁五分　袋綿
壱ツ
同
一弐百八匁　紺ちりめん
壱疋
内四十八匁九分　壱丈壱尺三寸
返却分引
同
一弐百拾七匁五分　紋入山まゆ
ふり袖
同
一百八十匁　本紅
壱疋
内拾七匁壱分　五尺七寸代
返却分引
同
一拾三匁　袋綿
二ツ
同
一拾六匁　白綸子
四尺
同
一三十四匁　同断
八尺五寸
同
一六匁　びろうと
えり
同
一廿弐匁五分　ひちりめん
有切レ
同
一五匁五分　同断
きれ

同
一拾三匁　袋綿　二ツ
同
一四匁五分　まわた
同
一五拾七匁五分　紅二ツ　四丈四尺
同
一六匁　黒銖子（繻）　袖口
同
一百八十匁　白むく　二疋
内拾九匁五分　壱丈三尺　返分代引
同
一七拾五匁　紅壱疋
同
一五匁五分　紋代
三月十九日
一三拾七匁五分　絞りはなし　ひちりめん帯
同　縮緬絞り

一拾三匁　えり二掛
同
一廿壱匁　山まゆ縮緬五尺
同
一拾五匁　紫ちりめん　四尺
同
一三匁七分五厘　紫五郎　切
同
一拾匁五分　白ちりめん　弐尺
同
一廿三匁五分　御納戸縮緬三尺
同
一七匁八分　五日市　弐尺八寸
同
一廿八匁　紅壱反
同
一拾四匁五分　かいき　八尺

引
〆弐貫四百廿匁四分五厘
弐貫三百三十四匁九分五厘
此内
金拾両也　三月五日
内渡シ
同五両也　同日
新庄兵衛より渡
但是ハ結納金也
同拾四両也　四月十三日
相渡ス
〆金廿九両也
差引金九両三分弐朱ト
銀弐匁四分五厘
一壱貫三百三十弐文　折詰
菓子十
但壱ツ百三十弐文ツヽ
一弐貫三百三十弐文　盛菓子
三十五
但壱ツ六十四文ツヽ
一弐百六十四文　白砂糖
壱斤
一弐百文　上喜撰
茶代
〆四貫百三十弐文

みしま
四月三日
尾張屋
払
一百七十八文　氷こん
弐わ
一四十八文　うと
壱升
一三十弐文　大根
四本
一三百八十文　くわゐ
五十
一百五十六文　大松茸
五本
一八十八文　わさひ
四本
一八十八文　白はし
五十
一三十弐文　岩たけ
一六十四文　ミしまのり
弐わ
一四十八文　粉からし
一六十四文　久助弐合
一百文　とり貝

一三十六文　銀なん
　　弐合
一三百文　蓮根
　　大四本
一六十四文　香たけ代
〆壱貫七百四文
　　秡所
四月四日　糀屋払

一六百文　下駄壱足
一弐百文　同　壱足
一百五十文　そうり代
〆九百五十文
右四月四日　越前や
　　払

一百文　白粉箱二ツ
　　丁子香
一百文　たとう紙
　　壱ツ
一五十文　白粉猪口
　　壱ツ
一百文　ひん附油
　　代
一百文　水油代

一五十文　あらゐ粉
　　代
〆五百文
右四月四日　木宰払

一弐百文　わかめ
一百六十四文　青板
　　三十枚
一八十八文　はす
　　壱本
一弐百四十八文　浅草のり
　　弐わ
一百文　干かひ
一三十弐文　□りも
一六十四文　わさひ
　　四本
一百十弐文　白角天
　　四本
一六十文　するめ
　　弐枚
一弐百文　白みそ
　　四百匁
一四百四十八文　味淋
　　壱升代

一四百三十六文　小角籠
十五代
〆弐貫百六十四文
此處金壱分一朱也遣ス
差引
銭百四文　不足分
一百文　酢壱升
一六十四文　うと
一百六十四文　黒砂糖
壱斤
一拾八文　大根
壱わ
惣引
〆四百五十四文
右四月十二日　糀屋払
相済

一壱貫文　盛くわし
十五
但　六十四文ツヽ
一弐百文　落鴈
弐袋
一弐百文　塩かま
四ツ
〆壱貫四百文
右四月九日　尾張屋払

柳屋
一壱貫弐百五十文　すき油
四十
一四百文　三浦絞
弐掛
一廿八文　黒元結
弐わ
一五十六文　つはん勝山
壱ツ
〆壱貫七百三十六文
右四月十日　木宰払

一金壱分也　長持金具
上物一式代
右四月十三日丸忠へ
相払済

ゆるきばし
さかなや定七方
六日七日両日分
一弐貫百五十文　めしか
五本
同
一六百文　ひらめ
壱本

同
一七百五十文　ほら　六本
同
一壱貫百文　はしよう　いか七ツ
同
一弐百五十文　小いか　代
〆四貫八百五十文
外二
銭四百八拾四文　壱割　口銭
九日入分
一六百文　ゑひ　十二
同
一壱貫五十文　はしよう　いか八ツ
同
一百八十四文　むつ　廿
同
あじ

一弐百文　四十
同
一壱貫八百七十弐文　めしか　三本代
同
一　本鯛　大小四枚
同
一　黒たい　壱枚
同
一　いなた　壱枚
三口
〆三貫百文
同
一弐貫三百三十二文　なまりふし　廿本代
〆九貫三百四十四文
外二
七百四十六文　八分　口銭
六日七日分

一五百文　かまほこ
九日分　五本代
一四百文　同断
同　四本
一壱貫三百文　同大弐本
同
一百六十四文　ちくわ
〆弐貫三百六十四文　弐本
外二
百八拾六文　八分
惣〆拾七貫九百八拾四文　口銭
内金壱両弐分　四月九日
残金壱両ト　〇六六　渡
壱貫四百八十四文
右四月十三日相渡済
外二
本鯛壱枚　定七より
祝義入
大庭氏

めしか壱本　勝又氏
凡五百文
きす七本　善蔵
凡　より
黒鯛　小三本　義兵衛
凡弐百文
めしか半本貫入
代弐百五十文
かまほこ弐本同断
代弐百文
玉子　壱束
代
一（印割）酒弐斤　仙助
代米三升
一（同　同弐斤　茂兵衛
同　断
一（同　同弐斤　権右衛門
同　断
一（同　同弐斤　清二郎
同　断

一（同　同弐斤　由蔵
同　断
一（同　同弐斤　佐右衛門
同　断
一（同　同弐斤　甚右衛門
同　断
一（同　同弐斤　源助
同　断
一（印割　同弐斤　定兵衛
同　断
一（同　同弐斤　徳右衛門
同　断
一（同　同弐斤　忠蔵
同　断
一（同　同弐斤　伝蔵
一酒弐斤　林助
代米三升
一同弐斤　由左衛門
同　断
一同弐斤　藤蔵
同　断
一同弐斤　弥左衛門
同　断
一同弐斤　ゆ惣吉

同　断
一同弐斤　ゆ儀右衛門
同　断
一同弐斤　ゆ平左衛門
同　断
一同弐斤　ゆ庄助
同　断
ミしく
一同弐斤　富蔵
同　断
一同弐斤　同利兵衛
後家
同　断
四月九日改
〆金壱両三分一朱ト
九貫九百文

元治元年

いよ婚礼ニ付献立書並雑費入用覚

十一月十九日

献立

御着座

三方長のし

煙草ほん

御茶　御菓子

かちん

さといも

御雑煮　大こん

あほみ

花松魚

附小皿　しら賀

御盆　三ツ組

御銚子　冷酒

御取肴　するめ

引替ニ　九年

御吸物　尾ひれ

御燗酒

蓮こん

かまぼこ

碗ふた　九年

車ゑひ

くわゐ

たま子

三ノ

御吸物　人参

さし身　大根

うと

わさひ

四ノ

御吸物　うと

あんこう

三ツもの

大皿　煮さかな

大平　鯛めん

あんこう

丼　きもあひ

五ノ
御吸物　うしほ
　たゐ
浜焼鯛
本膳
皿　さしみ　青身
　汁　つミ入
いはたけ
大根
人しん
うと
青味
うふ
ミしま
壺　手塩　なら漬
　飯
二ノ膳
千代口　からしあひ
　たこ
二ノ汁　生ぶ
　うと
平　青味
はんぺん
人参

引物
とり
えひ
茶碗　かんひう
あほ味
くはゐ
しいたけ
玉子
ゑひ
小角　はす
かまほこ
たこ
焼物　たひ
御湯
御茶
御菓子
千秋萬歳
右隠居座敷へ招待
来客四人仲人弐人
請伴小林氏〃七人
供方六人請伴勝右衛門
〃七人本宅へ招待候事
但膳部数同断之事

立振舞

御吸物
二ツもの
本膳　一汁三才
焼物引落し
上五人
下供拾人

十一月廿三日五ツ目
来客献立
一夜止宿　（聟直市郎
廿四日ニ帰ル　川村半左衛門）
同日帰ル　供壱人
金壱朱ツヽ　馬方壱人
半紙相添
為祝義差
出候事
吸物二ツ　口取肴壱ツ
広ふた三ツもの
本膳飯壱汁三才
但上下四人二座也

廿日先方へ罷出候節馳走之趣
上座ハ此方同断
下座吸物二度本膳ニ切候よし
祝義金壱朱ツヽ外焼物料
として㊟壱朱ツヽ差出候由

結納之品左之通り
一熨斗　壱
一しら賀　壱
一末広　壱
一小袖　壱
一足袋　壱
一下駄　壱
一和合鯛　一対
一寿留免　壱
一家内喜多留　一対
以上

土産之品左之通
一末広　壱
一白紬　一疋
一白足袋　一足
一麻裏草履
以上

家来並出入之者へ
土産
一金壱朱ツヽ　二包
一青銅弐拾疋ツヽ廿包
右いつれも半紙壱状ツヽ添

此配分方

一金壱朱ツヽ　惣吉　並いしき
　　婆々

一弐百文ツヽ紙添利右衛門忠助
伝蔵　きく　かつ　平八
まさ　とみ　つな　佐平母
惣七　市右衛門　よし　まき

一手拭壱筋ツヽ勝右衛門平右衛門
弥助
料理方へ見舞
　　新
一金百五十疋　庄兵衛殿へ
　　渡
右之通持参受納致候事

一扇子壱対　井口俊助
　唐紗更風呂敷添
一同断　二品　川村半左衛門
一扇子壱対　石井誠齋
一同断　室伏
右之通土産受納候事

又先方へ持参之品
一熨斗　壱
一しら賀　壱

一白紬　壱疋
一白足袋　壱足
一紺足袋二品二足
一末広　壱
一和合鯛　一対
一家内喜多留一対
以上
　　番頭へ
一金壱朱ツヽ　二ツ
　半紙添　家来中へ
一青銅廿疋ツヽ　十
　半紙添　出入之者へ
一手拭壱筋ツヽ　十二
〃
右之通為土産持参候事

一唐更紗風呂敷小林茂十郎
扇子壱対添
一同断　杉山格平
一扇子壱対　仲人
　杉山良平
右之通持参候事

一金百五十疋
右料理方へ為見舞
差遣候事

米客披露
一花半紙壱状　興禅寺
一同断　　新七殿
右之通罷出候事
一蔵半紙壱状　小林氏
一並半紙壱状ツヽ茂十郎
庄平佐平井口権左衛門
勝右衛門伝蔵弥助佐助
惣七惣八源蔵平右衛門
良助平八まさ
右ハ雨天ニ付言譯いたし
不参
追而為持差遣候事
魚類注文
ゆるきはし
定七
一焼物たい　十六枚
一小　鯛　廿四枚
一束　鯛　大八ツ
一同断　小十
一浜焼鯛　三枚
一煮さかな　三ツ
一車ゑび　六十
一さ　ば　弐本
一ふり　壱本

一あんこう　大小二ツ
一小もの　壱篭
〆十一品
代拾弐貫八百六拾八文
一いか　四十弐本
代壱貫九百八文
一かまほこ　大壱本
一同断　並七本
〆代弐貫百六十文
三口〆拾六貫九百四十文
外壱貫七百文　壱割
口銭
合拾八貫六百四十文
内銭九貫文　渡し置
残金壱両一分三朱也
右十一月廿二日定七へ渡
相済　祝義なし

十一月十五日
一金三朱ト　こたいたこ
百文　かまほこ
右ハ注文之外前日買入
ミしま秡所
糀屋利兵衛

一四百文　大蓮こん　三本
一弐百文　もやし
一百文　うど
一百文　かんひう
一百文　きり
一百文　こんぶ
一百文　白はし　四十前
一六十四文　ミつば　四わ
一百文　白角天　三本
一百拾弐文　大わさび　三本
一廿四文　猩々
一六十文　小くわゐ　十五
一八十八文　大くわゐ　十一
一百文　くす
一弐拾四文　岩たけ
一八文　けし
一百文　青板　九枚

一四十八文　青粉
一四十八文　あられ
一九十弐文　するめ　二枚
一三十弐文　からし
一百文　ほう風
一六十文　生麸
一弐百文　九年　十七
一弐百文　上みかん　五十二
一八拾四文　みしまぶ　三袋
一四十八文　きんなん　弐合
〆弐貫五百廿文

いせ吉払分
一四匁五分　白砂糖　壱斤
一弐百五十文　黒砂糖　壱斤
一十六文　茶袋　二枚

一百十六文　祝義
□分ニ
乃し
壱枚
一壱匁
半紙
一壱貫文
五十状
一拾弐匁三分　ろうそく
五匁掛壱箱
一弐百弐十四文　同
廿匁掛三丁
〆　銀拾七匁八分
銭壱貫六百八文
此金弐分ト
○弐百四十四文

明神前
尾張屋直兵衛分
弐匁五分ツヽ
一廿五匁　折詰引菓子
十
壱匁五分ツヽ
一拾弐匁　同断
八ツ
一弐匁　口取くわし
代

〆銀三拾九匁也
此金弐分弐朱ト
弐百文

一のり入紙五十枚　庄兵衛
代　ゆ
一水引　庄兵衛
代弐百文　新
一きじ壱わ　勇助
代七百文
一わらし六足　永吉
代弐百四十八文
一小角篭十五　茂吉
代四百文　町
一山芋　惣七
代

長持くしらさし
長四尺弐寸五分
巾壱尺八寸
高壱尺九寸
〆
簞子くしらさし
長弐尺五寸五分

巾壱尺壱寸五分
高弐尺七寸五分

あとがき

民俗調査の報告書としては、第二冊目になる「深良の民俗」をお届けします。

まだ、夏の暑さの残る平成二年九月中旬から福田アジオ、杉村斉両先生を中心に深良地域の民俗調査が実施されました。「民俗」は、私たちが住む町のくらしぶりであり、しきたりや、ならわし、伝承・習俗です。いまはもう存続しない年中行事や信仰なども記述されておりなつかしくご覧いただけるものと思います。

本誌を校正中にふと、昭和九年発行の『郷土読本』の一節を思い浮かべました。

一　春　夏　秋　冬

東西三里。南北二里、箱根愛鷹の裾合を南に長く擴がる平地。そこが僕等の村である。日は山から出でて山に入ると云ふ草深い田舎住だが、四季それぞれに樂しみが多く、從つて生活にゆとりがあつて、僕等には美しい搖籃である。

一年中の數々の行事は僕等を喜ばせる爲めにある様なものである。松飾、おんべ竹、左義長、初山、正月が夢の間に過ぎると初午、㈠追儺が前後してくる。

野燒、山燒が了る。若草が萠える。麥が二三寸にのびれば、㈡彼岸詣。桃の花も見頃と云ふ頃は、夜は雲雀の歌に明けて、霞が山々の裾を包むのである。

四月三日の神武さまは何處の家でも㈢雛人形を飾つて節句を祝ふ。櫻、菜の花が散つて、五月雨に近い頃は、春蠶のあがり、麥の刈入れ、田植の仕度と村は遽に忙しくなる。

蛙が鳴く。雨が續く。そして田植が始る。……

（中　略）

葉鷄頭の葉が一朝毎に霜枯れて垣根に咲いた黄菊の色が目に立つ頃になれば、世は落葉の音と共に冬に入るのである。

田に霜柱が立つ。山が雪で木枯が吹いて㈣ゑびす講も昨日となれば、僕等はもう指を折つて正月の近きを數へるのである。

（註）㈠豆まき　㈡春季皇靈祭　㈢この地方では三月三日の雛祭をこの日に行ふ。　㈣陰暦十月二十日

―『郷土読本』より―　小泉村佐野実業学校内　中駿校長会編

裾野の町のようす等約七十頁に渡る郷土誌です。その最初の章の紹介ですが、いまから約六十年以前の「すその」の一年が、まるでよその地方の紹介であるかのような錯覚を覚えます。文章表現ももちろん素晴らしいものですが、なつかしさと郷愁を感じさせるものがあります。

今このような語句で当市を語り、表現出来るでしょうか。時代の流れとは言え、少々寂しい気もします。普段の生活のなかで何の気もなしにあたり前に行っているすべてのことに「始まりと経過（歴史）と意味」があります。日進月歩、良き習慣や伝承等がやむを得ず失われていくことが多くなっていますが、出来るだけ工夫と努力で存続をしていきたいものです。

今回は、地元深良地区の、各区長、老人クラブ、婦人会の皆様をはじめ、市史編さんの地区協力員の方々には大変お世話になりありがとうございました。民俗調査ということから、内容は聞き取りによるものをまとめたものであり、調査期間などの関係上十分でない点もあるかと存じますが、本書が深良地域は勿論、市の歴史の参考の一端としてご活用していただければ幸いです。ご意見・ご感想をお待ちしています。

平成四年三月

裾野市教育委員会
市史編さん室長　長谷川　博

裾野市史編さん関係者

市史編さん専門委員

代表　有光　友學　横浜国立大学教育学部教授
高橋　敏　国立歴史民俗博物館教授
中野　國雄　日本考古学協会会員
福田アジオ　国立歴史民俗博物館教授
安田　常雄　電気通信大学教授
四方　一瀾　国士舘大学教授

市史編さん調査委員

井口　俊靖　加藤学園暁秀中学校教諭
石田　義明　静岡県立韮山高等学校教諭
岩崎　信夫　都立目黒高等学校教諭
岩田　重則　早稲田大学大学院文学研究科博士課程
菊池　邦彦　都立航空工業高等専門学校助教授
斎藤　弘美　日本民俗学会会員
坂本　紀子　早稲田大学大学院文学研究科修士課程
柴　雅房　静岡県立長泉高等学校教諭
新谷　尚紀　山村女子短期大学国際文化科助教授
杉村　斉　三島市教育委員会三島市郷土館学芸員
関根　省治　静岡県立沼津東高等学校教諭
仁藤　敦史　国立歴史民俗博物館歴史研究部助手
東島　誠　東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程
前田　耕司　国士舘大学文学部講師
松崎　真吾　神奈川県立平塚江南高等学校常勤講師
松田香代子　日本民俗学会会員
湯川　郁子　一橋大学社会学部助手
渡瀬　治　裾野市立西小学校教諭

旧調査委員　脇野　博　（平成三年六月退任）

地区協力委員

西地区　植松甲子男　（旧村名）石脇村
同　杉山　光正　佐野村
同　加藤　信雄　大畑村
同　水口　清文　二ツ屋新田
同　歌崎　久作　定輪寺村
同　田口　勝夫　富沢村
同　水口　忠栄　伊豆島田村

同　関野　政雄　水窪村
同　中西　保男　二本松新田
東地区　杉山　寛美　茶畑村
同　杉山　繁雄　久根村
同　藤原　善次　稲荷村
同　渡辺　香　公文名村
同　清水　四郎　茶畑村
同　飯塚　政高　麦塚村
同　星野　直司　平松新田
深良地区　井上　丹令　岩波村
同　大庭　三郎　深良村
同　倉沢　秀雄　同
同　小林　秀年　同
同　高橋　利治　同
同　一之瀬和雄　同
同　長田　稔　同
同　藤森　茂良　同
同　増田　一男　同
富岡地区　杉本　隆彦　今里村
同　西島　秀雄　千福村
同　土屋　誠吾　御宿村
同　勝又　茂美　同
同　勝又　秋男　同
同　勝又　常一　葛山村
同　芹沢　正巳　同
同　柏木　仁　上ケ田村
同　小野　春隆　金沢村
同　真田　林蔵　下和田村
須山地区　土屋　貞彦　須山村
同　杉山　末雄　同

市史編さん関係職員

長谷川　博　市史編さん室長
中野　鈴子　主査
今関　浩子　主事
濵田　明　事務職員
永野　武信　事務職員
野村美穂子　事務職員
栗原以有子　事務職員
永島　愛治　写真撮影

裾野市史調査報告書第二集

深良の民俗

平成四年三月二十五日

編集　裾野市史専門委員会
発行　裾野市教育委員会市史編さん室
裾野市茶畑399
電話〇五五九―九三―七一七〇

印刷　みどり美術印刷株式会社

題字　裾野市史編さん委員会副委員長　勝又壽

ワカショウガツ（若正月）
……85, 87, 88
ワキ（脇）……16
ワタクシ（私）……22
ワラゾーリ……78
ワラヤネ ……20, 21

ホンゼン（本膳）……104
盆棚……90
盆のかざり棚……36
ホンヤ …… 108

〈ま〉
マエブルマイ（前振る舞い）
……103
マカナイブン（賄い分）
……18, 54
マキモチ……36
マクラダンゴ（枕団子）
……105, 109
マクラネンブツ（枕念仏）…111
マサ土……15
マス……94
町田の山の神 …… 121
マメガラ……86
マメマキ……88
丸髷 …… 104
マンガ……74
マンガアライ……90
曼荼羅 …… 124
マンノウ……87

〈み〉
見合い …… 101
ミカゴ……32
三島甘藷……23, 116
三嶋大社 …… 105
ミズカケ……75
ミズガメ（水甕）……31, 34
水げんか……56
ミズタメ …… 116
ミズナワシロ……74
水番……12
ミズミチ …… 116
ミソベヤ（味噌部屋）……31
ミチツクリ …… 54, 59
ミチブシン（道普請）……55
ミツメ …… 104
南堀の山の神 …… 121
明神様 …… 69, 71
明神さん（三嶋大社）……70, 97

〈む〉
ムカイザシキ……31
ムカエビ……92
昔奉行……41
ムコイリ（婿入り）……103
虫封じ……99
虫干会……14
ムラの境……48
ムラ寄合……53

〈め〉
メグリボウ……86
メシジュウ（飯重）……96
目一つ小僧……88

〈も〉
モシキ（燃し木）……22, 31
モジリ……24
餅 …… 86, 88
モチツキ……84
モトヤシキ …… 114
もみ播き……74
モモヒキ……78
モヨリ（最寄）…15, 18, 33, 41, 45, 49, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 62, 63, 65, 66, 68, 72, 111, 113, 115
モヨリブン（最寄分）……54
モロバコ……85
モンペ……78
文明寺 …… 113

〈や〉
家うつり……35
ヤウツリガユ（家移り粥）…36
夜学 …… 115
ヤキゴメ……74
ヤキバ …… 108, 110
ヤキバタ（焼畑）……22, 64
ヤギョウ（夜業）……31
ヤクオトシ（厄落とし）……104
厄払い……92
ヤシキ（屋敷）…28, 36, 38, 113
屋敷構え……38
屋敷神 …… 28, 51
屋敷墓……60
ヤッパタ……73
ヤド（宿）……62
屋根替え……33
ヤノネ（屋の棟）……111
山神社 …… 58, 59
ヤマッカキ……76
山の神講……58, 62, 94, 127, 128
山の神祭……88
ヤマミチツクリ……54
ヤマヤキ（山焼き）…19, 33, 55
ヤミダケ（闇竹）……33, 55

〈ゆ〉
ユイ……75
唯念さんの祭り……65
ユウシ（有志）……16
ユズリ …… 102

〈よ〉
ヨアソビ（夜遊び）……64, 71
ヨージャ……75
ヨコザ……31, 108
ヨシダサン（吉田さん）
……59, 92, 93
吉田さんの祭り …… 58, 93
吉田神社……58, 120
吉田神社の祭り……58, 119
ヨソイキ …… 104
ヨツミゾガキ……76
ヨバャー……64, 100
嫁入道具……70
嫁のアラ …… 126
嫁の近所回り …… 104
寄合……52

〈り〉
立春……88

〈れ〉
レイキュウシャ（霊柩車）
……60, 109
レイコウゼン …… 32, 66, 127
例大祭（秋祭り）……119

〈ろ〉
ロウカ …… 29, 35
ロクシャク（六尺）
……61, 106, 107, 108, 109
六曜……74
ロッコツ道路……46
露店……64, 70, 71
露店商……71

〈わ〉
ワカイシュウ（若衆）
……45, 48, 59, 62, 63, 65, 67, 69, 70, 71, 90, 100
ワカイシュヤド……49
ワカサギ……24

ナンド（納戸）……29, 33, 96

〈に〉
ニイボン（新盆）……112
ニイヤ（新家）……51
ニスイ（二水）……15
日蓮車返しの霊場 …… 124
ニットウ（日当）……33
ニバイショウガツ …… 132
二番正月 …… 85, 86, 87, 88
二百十日……93
ニワ……29

〈ぬ〉
沼津の千本浜 …… 112
ヌレエン……29

〈ね〉
ネカン（寝棺）……108
ネセガン（寝棺）……108
ネヤアシロ……74
ネヤアバ……74
年貢米……39
年始回り……86
年中行事……83
念仏 …… 49, 92
念仏講…39, 65, 67, 90, 108, 110, 111, 113, 123, 124, 125, 127, 128
念仏のおばあさん達 … 108, 111

〈の〉
農青連……63
農免道路……46
ノコギリガマ……75
ノゼン（野膳）……109
ノゾキ …… 103, 104
のづら石……28
ノベオクリ（野辺送り）……108, 109
ノヤキ（野焼き）……60, 110
ノラギ……77
ノラシゴト……77

〈は〉
ハイケの再興……40
墓参り……89
履物……78
ハクビシン……24
箱膳……38
箱根神社 …… 12, 36
箱根神社講社祭……12
ハコネダケ（箱根竹）……33, 54
箱根山 …… 7, 8, 9, 33
ハタオリ（機織り）……31, 102
ハタノボリ……89
八十八夜……89
八幡さま …… 120, 131
八幡神社……57
八幡社 …… 57, 58
初午 …… 71, 89
ハツカショウガツ……88
ハツキャク……99
ハツゴ（初子）……97
初庚申 …… 129
初子相続……40
ハツジョウカイ（初常会）……20, 33, 53
初節句 …… 41, 89
バッタンヅキヤ（ばったん搗き家）…18
ハツノコ（初の子）……97
初詣……85
初山 …… 86, 87
馬頭観音 …… 28, 48
ハナカゴ（花籠）……106, 109
ハナザオ……74
ハナダンゴ（花団子）…106, 107
ハナドリ……74, 100
花祭り……89
ハナレ……36
ハネオヤ……41
ハマオリ（浜降り）……110, 112
原のお地蔵さん … 100, 113, 122
バリキヤ……77
ハレ……32
バンジン講（蕃神講）……53, 62
万人講 …… 46, 53
万神講 …… 53, 62, 124
ハンテン……78

〈ひ〉
日金山 …… 112
彼岸 …… 76, 89
ヒキモノ……89
菱餅……89
ヒジロ……88
ヒト …… 106
ヒトウマ……33
ヒトデ（人手）……57
ヒトニアルク …… 106
ヒトヨセ……89
ヒャクヒトエ……97
ヒャッカンチ（百か日）……105, 112
ヒヨケ（日覆）……109, 110, 112
ヒヨトリ（日傭い）……57
ヒロウ（披露）……99
ヒロマ……29, 32, 38

〈ふ〉
深良川…… 9
深良五千石……41
深良神社……45, 57, 58, 60, 119, 120, 130, 131
深良水門……9, 11
深良隧道（用水）……117
深良用水…… 7, 9, 34, 42, 55
富士山の七里岩……42
付属屋……28
普段着 …… 77, 78
仏壇……90
仏滅……74
フルマイ（食事）……36, 99
フレ（触れ）……106
分家……28

〈へ〉
米寿 …… 105
ヘイソク……83
ヘッツイ……38
ベンジョ……38

〈ほ〉
奉公 …… 53, 63
法事……32
ホウソウ……99
ホウソウマンジュウ（疱瘡饅頭）……93, 99
ホウリマンガ …… 100
ホカエ……84
ホシモノ……75
ホッカムリ……78
ホトケマツリ……66
穂見神社 …… 45, 59
ホヤみがき……35
ホラ（洞）…… 8
ホリゴタツ……38
盆……90
ホンシュウゲン（本祝言）…102
ポンシン……78

セドグチ …… 29, 31
ゼナザワ（瀬名沢）……15
ゼニコ（銭こ）……34
施飯 …… 129
浅間社……57, 120
仙石原……13
センブリ……25

〈そ〉
葬儀屋……61
葬式……32
葬式組……61
総常会……53
ソートメ（早乙女）……57, 75
ゾーリ……78
祖師堂 …… 49, 63, 126
ソトベンジョ（外便所）……28
蕎麦 …… 85, 94

〈た〉
大神宮……60
ダイジングウサン(大神宮さん)
……32, 36
ダイジンサン …… 131, 132
タイヒゴヤ（堆肥小屋）……28
タイヒシャ（堆肥舎）……28
タイマツナギ(チャーマツナギ)
……40
ダイミョウダケ……34
題目講……72, 124, 126
田植え …… 74, 90
高尾さん……94
高雄山 …… 121
竹之下のお地蔵さん……99, 100
ダタラ……73
タチザケ（発ち酒）……109
タチヨリ（立ち寄り）…61, 106
タテカン（竪棺）……108
七夕……90
種もみ……74
田の草取り……75
田の字型 …… 29, 33
タフブクロ……76
タメ（溜め）……20
樽……76
タルカツギ（樽担ぎ）……103
タンク……16
団子……87, 92, 93
ダンゴジル……83
端午の節句……89
ダンゴボク……86
ダンゴ焼き……67
丹那トンネル……7, 26

〈ち〉
チガヤ……92
チフス……56
チャノマ……38
忠魂塔 …… 129
中駿大題目……72
チュウロウシュウ(中老衆)
……63, 100
町村合併……41

〈つ〉
月並講……53
月並念仏……65, 123
ツキヤ……39
ツケマツリ……92
辻念仏……66
梅雨明け……90
ツレッコ（連れ子）……64

〈て〉
テッキ（鉄器）……31
テッコウ（手甲）……78, 108
出不足金……55
デミマイ …… 39, 96
テラヤマ …… 114
手ランプ……35
天候占い……88
天神講……65, 67, 100, 123, 124,
125, 126, 127
天神さま …… 131
天神社……57
天白さん …… 58, 59
天満宮……39, 120

〈と〉
トアリミズ……75
東海道本線……7, 26
道祖神 …… 34, 45, 48, 92, 113
道祖神の家……68
東電……8
当番……60
当番区……60, 119
当番宿……58
トウモロコシ …… 116
トウヤマ（遠山）……21, 22
トコノマ（床の間）……29
年神……85
歳神様 …… 83, 84
年神棚……87
トシコシ……88, 132
土葬……60
土倉 …… 38, 39
トタン……34
戸抜きの行事……11
トブグチ（トンボグチ）
……29, 83, 88, 107
ドブセ …… 21, 35
ドブッタ……73
トブライ …… 108
トブリャーグミ（弔い組）…106
トボグチ……32
トムライ …… 106, 108, 109
友野与右衛門…… 9
トリアゲバアサン
（取り上げ婆さん）…96
トリバライ …… 112
トリハラエ …… 112
トリモチ …… 100
ドンドン焼き … 67, 87, 100, 128
トンボガサ……78

〈な〉
ナエクバリ……75
ナオライ
…58, 62, 88, 93, 94, 119, 126
ナカノマ …… 36, 38
長火鉢……38
ナカモン（中門）……39
ナガヤ（長屋）……28
ナガヤクラ（長屋蔵）……28
長屋門……38
ナキャア……29
仲人 …… 86, 99, 101, 102
ナコウドッコ（仲人子）……107
ナコウドシンセキ……41
名付け……97
ナツミチツクリ……54
七草……86
七草粥……86
ナナホントウバ(七本塔婆)
……111
鍋炭……98
ナライ……23
ナリズモク……87
ナリモッソ……87
ナワシロ作り……89

コグリ（クグリ）……29
小作……51
コシ（輿）……106
コシアゲ(輿揚げ・棺担ぎ)
……32,61,107
小正月……67
五反百姓 …… 73,74
コツヒロイ（骨拾い）…108,110
コテンガイ（小天蓋）……107
御殿場線……7,26,48,69
子供相撲……93,100
子どもの仲間入り …… 97,99
コニダ（小荷駄）……21,22
子の神様……59
ごはん …… 127
コブクロ（小袋・子袋）
……103,106
コブン（子分）
……36,40,51,52,101,107
コブンサン …… 101
コマ …… 29,31
駒形講 …… 58,62,128
駒形神社
……57,60,63,64,70,97,121
コマンザライ……20,21,94
小麦饅頭……90
コメグラ（米蔵）……39
コモノベヤ（小者部屋）……31
コモリモノ（小盛り物）
……113,123
子安講 …… 126
小屋作り……34
コレラ……60
コワカイシュウ（小若衆）…63
金比羅さま …… 121

〈さ〉
財産区……53
歳旦祭（初詣）……119
サイトヤキ……45,104
サイノカミ
…45,67,86,87,99,126,128,130
サイノカミサン……66
逆川 …… 11,13
サカズキゴト（盃事）…102,104
ザシキ（座敷）……29,32,38,96
座順……31
ザツボク……22
ザツボクリン（雑木林）
……18,20,21,54
サツマ（薩摩芋）……93,116
サツマグラ（薩摩蔵）……21
サトイモ（里芋）……92,93
里帰り……88
サトヤ …… 107,110
晒 …… 108
ザル……77
三が日……85
産婆 …… 97,99

〈し〉
シカバナ（四化花）……109
シキモノ（引き出物）…98,111
地芝居……63
シジュウクニチ(四十九日)
……111,112,113
シジュウクンチナエ……74
ジスイ（地水）……15,34,56,75
地蔵祭り……58,66,70
シタのナガシ……38
七五三……99
七十五日は泥の海……97
シチリン……38
シニミズ（死に水）……105
シニミマイ（死に見舞い）…105
シブヤ……75
四方餅……36
地まつり……36
下郷文書……13
シャギリ……63
社口社……58
集会所……48
ジュウカケ（重掛け）……103
ジュウガツセック……94
シュウゲン（祝言）……101
春分……89
十三仏さん …… 123
姑のアラ …… 126
十二支……74
松寿院……53,113,122
ジョウカイ（常会）……53
正月……83
正月三が日……85
正月の初登山……11
ジョウグチ …… 28,32,109
ジョウゾク（上簇）……32
上棟……35
菖蒲……89
菖蒲湯……89
浄焚式 …… 122
女子青年 …… 100
女子青年団……63
シリッパショリ……77
ジロウツイタチ……88
シロカキ……56,75,90,100
シロコサエ……75
新川……9
シンコ（新戸）……49,61
新穀感謝祭 …… 119
神社合祀……58,120
ジンダイ（神代）……8,15,117
神代杉……41
シンドリ……74
シンバカ（新墓）……61,113
新墓地……61
神明神社 …… 57,95
神明社……58,120

〈す〉
水車……8,17,39,57
水田……73
水道……34
隧道点検……11
水配長 …… 10,13
水配人（すいはいにん）
……10,12,13
ズガニ……24
杉皮屋根……34
スキドウグ……74
ススダケ……83
ススハライ …… 83,86
ズダブクロ（頭陀袋）……108
捨て子 …… 100
相撲……64,70,92

〈せ〉
生業……73
青年会 …… 62,65
青年学校 …… 115
青年訓練所 …… 115
青年団 …… 49,62,64,70
青年団女子部……64
セギ（堰）……55
セギ当番……55
セギバ（堰場）……56
セギバン（堰板）……56
石油ランプ……35
世間……68,70,72
節句働き……89
節分……88

オビタテ……98
オヒナサマ……89
オヒナサン（お雛さん）……99
オヒマチ……93
おひら……127,131
オフルマイ（お振舞い）
……66,89,95,99,103,104
オムシボシ（お虫干し）
……72,92,124
オモシンセキ……103
オモヤ（母屋）……28
オヤカタ……123
オヤキ……116
オヤサン（カネオヤ）
……40,86,95,98,101,111
オヤネンブツ（親念仏）……39
オヤブン（親分）……40,101
オヤブンサン……101
オンナシ（女衆）……104
オンナシサン（女衆さん）…102
女の仕事着……77
オンビ……67,69,87,100
オンベ……129
オンボウ……60

〈か〉
蚕……32
カイコベヤ（蚕部屋）……32
カイコン(開墾)……21,22,24,
51,53,54,64,73,74,76,93
カオミセ（顔見せ）……104
柿渋……75,76,77
カギトリ（鍵取り）……59,60
鍵の受け渡し……11
学林……54
カケゴメ……106
カケジ（掛軸）……32
カケノウオ（掛けの魚）……131
カゴ……32
カサグモ（笠雲）……23
カザマツリ（風祭り）
……58,59,93
瘡守稲荷……71
カセギ……73
風の神さん……87
火葬……60
火葬場……60,61
片見月……93
家畜無尽……57
カツノキ……86,87
カッポシ……75,96
カナダライ（金盥）……101
カネオヤ……40,51,52
カネコ……101
カネツケオヤ(鉄漿つけ親)
……101
歌舞伎……63
カマド……31,92
上郷・中郷・下郷……10
神棚……83
カミベンジョ……38
紙または白木の位牌……39
カメノコウ……32
カヤカリバ（萱刈り場）…33,55
カヤバ（萱場）……18,19,33,54
カヤムジン（萱無尽）
……20,33,34,55
カラウス……75
カラス鳴き……105
カリモン（仮門）
……32,106,107,108,109
カロウト（石室）…61,111,113
カワバタ（川端）
……7，9，15,17,56
瓦屋根……34
元旦……85
元旦祭……83
関東大震災……25,27,29,35
観音講……57
観音さん……129
観音堂……46,48,63,66,123
カンバコ（棺箱）……107,110

〈き〉
キゴヤ（木小屋）……38
樵……35
鬼子母神……126
黄瀬川……9
北枕……105
キチュウ（忌中）……107,110
忌中ぶるまい……36
祈年祭……119
キノエネサン……130
キモン（着物）……77,78
鬼門……36
キャハン（脚半）……78,108
旧戸……49,53,60,61,62
旧墓地……61
ギョウズイ（行水）……61,106
共同作業所……57
共同田植……57
共同墓地……61,113
共有林の財産区……51
キリコミ……116
近所の挨拶回り……102

〈く〉
クサリガマ……109
クチキキ（口利き）……101
クチトリ……85
区長……51,52
区費……53
組……45
組合道……46
クラ……116
倶楽部……48,49,53,57,62,63
クラヤ（倉屋）……28
車返し……59
車返しのお堂……72
クワ……74,87
クンチモチ……84

〈け〉
ゲジョベヤ（下女部屋）……38
結婚式……32
月次祭……119
ゲナンベヤ（下男部屋）……38
ゲンカン……36
ケンザイミャア（経済前）…100

〈こ〉
コイジ（コエジ）…108,110,111
コウバナ……89
コウコベヤ……31
コウシンサン（庚申さん）
……32,36,131
庚申さんの祭り……59,66
庚申塚……128
庚申堂……58,129
興禅寺……118,123
興禅寺旧墓地……113
弘法さん……63,129
弘法さんのお堂……63
弘法さんの祭り……58
公民館……48,110
甲羅伏……13
御詠歌……108
五月五日……89
ゴカンニチ（五か日）正月
……85,86

〈あ〉
赤子講……58
赤子神社…45, 57, 59, 60, 97, 120
アカマサ（赤まさ）……8, 9
上がりカマチ……77
アガリザク……75
アガリット（アガット）
……31, 35, 88
秋葉講……46, 62, 66, 123
秋葉神社……59, 121
アケダンゴ……89
アシイレ（足入れ）……102
足柄道……41
アシナカ（足半草履）
……32, 78, 106, 108
芦ノ湖……13
芦湖水利組合 …… 10, 12
小豆粥……87
アゼヌリ……74
後産……96
アトハラ……97
アナッポリ（穴掘り）……107
アナホリ（穴掘り）
……61, 95, 106, 107, 108
アネサンカブリ……78
天田上 …… 120
天田下 …… 120
天田橋……42, 117
アラクオコシ(荒く起こし)
……22, 73
淡島講…65, 68, 95, 125, 126, 127
アンビン餅……96

〈い〉
イイ（結い）……33, 53, 56, 75
イイガエ（結い替え）……20, 33
イイツギ …… 106
イエナ（エーナ・家名）
……51, 76
イシワラダ……73
イセキ……20
イセキムスメ……29
イチダンセ……33
一人前 …… 100
イッショウボシサマ……79
イッスイ（一水）……15
イッスイキ（一周忌）……112
イッポンバナ（一本花）……105
井戸 …… 28, 34
稲作……74
稲荷……51
イナリサマ……89, 131
稲荷社……58
稲刈り……75
位牌……90
位牌分け……39, 111
衣服……77
イモ（サトイモ）……116
イモガラ……92
入会……53
イルカの味噌煮 …… 116
イロリ（ユルリ・ヒジロ）
……31, 110
インキョ（隠居）……28, 38, 108

〈う〉
上原の山の神 …… 121
ウグイ …… 100
ウシ……75
氏子総代 …… 59, 60, 119
臼……76
ウチエン……35
うちわ太鼓 …… 124
ウナイゾメ……87
ウブスナさん …… 97, 99
ウブツナさん……96
ウブミアイ（産見舞い）……97
産湯……96
ウマヤ（馬舎）……28

〈え〉
エエナ（家名）……16, 73
江戸褄 …… 102
エビスサン …… 131, 132
エベス講……94
エンスイセン……74

〈お〉
オイナリサン(お稲荷さん)…28
オエビスサン……32
オエベスサン … 36, 39, 130, 131
大地主……51
オオジリカキ……76
大そうじ……34
オオド（大戸）
……29, 35, 103, 130
大庭源之丞…… 9
オオバライ……83
大祓祭（大掃除）……119
大晦日……85
大森氏……41
オオモリモノ（大盛り物）
……113, 123
オオヤ（オモヤ・本家）
……28, 35, 40
オオヤケモチ(公持ち・共有地)
……19
大山講 …… 46, 62
オカザリ……84
オカッテ …… 31, 38
オカナワシロ……74
オキ（沖）……21
オキブロ（置き風呂）……31, 34
オクイゾメ……98
オクナンド …… 36, 38
オコシ（御輿）……78
オコシツギ……39, 103
オコシヅキ（お腰付き）
……39, 103
おさら …… 127
お産部屋……33
オシチヤ（お七夜）……97
オシュウゲン（お祝言）……102
オショウバン（お相伴）……104
お膳……31
お雑煮 …… 84, 85
オソッサン（祖師さん）……95
オソナエ……86
オソナエワリ……53
お題目 …… 49, 65
オチツキボタモチ …… 104, 110
オチャハン（お茶飯）
……95, 105, 110, 111
オツウヤ（お通夜）……108
おつけ …… 127
オッタテマエ（上棟式）……36
おつぼ …… 127
オデイリ……52
オテネンブツ……62
オテントサン……66
オテントサン念仏
……66, 90, 123, 127
オトコ……76
オトコアゲ（お床上げ）……97
男の仕事着……78
お年玉……85
おのっぺい汁 …… 131
オハタシ（お果たし）……94
オハタシ念仏 …… 66, 94
オビイワイ……95

索　　引